



# 東海地域縄文時代後晩期の

## ベンケイガイ製貝輪

● 川添和暁

東海地域、縄文時代後晩期のベンケイガイ製貝輪について、「加工の状態および程度」・「計測」・「形態」の諸属性について総合的な分析を行った。その結果、「腕輪」としての主たる機能・用途のみでは説明しきれない事象をいくつか提示し、その意義付けを若干行うことができた。II期前半(後期中葉～後葉)・II期後半(晩期初頭～前葉)・III期(晩期中葉～晩期末)と時期が変遷するにしたがい、加工・法量・形態に幅が見られるようになった一方で、ある特定の志向に基づく貝輪製作も垣間見られた。

### 1 はじめに

東海地域では、縄文時代・弥生時代を通じて、貝輪の出土が知られている。貝種・出土数・出土状況・各貝種における加工の状態および程度などを検討すると、これらは決して一様ではない。「前稿」(註1)では以上のことを整理して、I期(縄文早期後半～縄文後期前葉)・II期(縄文後期中葉～縄文晩期前葉)・III期(縄文晩期中葉～縄文晩期末)・IV期(弥生前期～弥生中期後葉?)と段階設定を行い、特にII期・III期において、加工の状態・程度に「差」が顕著であることを指摘した。

以上のことを受けて、本稿は特に縄文時代後晩期(II期・III期)のベンケイガイ製貝輪について詳細に検討するものである。分析対象地域は、東海地域(愛知・岐阜・三重・静岡の遠江地域)を中心とする。ベンケイガイ製貝輪を取上げる理由は、東海地域において当該時期に資料数が多くなり各貝輪群構成の主体となっていることが多いこと、かつ他貝種の貝輪に比べ加工の状態・程度に差がより顕著に見られることなどである。ベンケイガイ製貝輪に関する「製作+使用遺跡」「使用遺跡」の様相を整理し、各遺跡の貝輪群について腕輪としての機能・用途とは別の、製作上の志向について中心に考察していく。

ここで述べる「貝輪」とは、貝殻の中央に大

きめの孔を開け、環状あるいは半環状に加工する(もしくは加工しようとする)意図の見られるもの、と定義をする。加工・形状を第一義とするため、必ずしも用途としての「腕輪」とは同義ではない。また、ここで「ベンケイガイ製貝輪」と称している貝輪素材には「ベンケイガイ」と「タマキガイ」の両者を含んでいることを断っておく。

なお、貝輪に関する研究小史については前稿に若干まとめたので、これを参考願いたい。また、貝輪の部位名称などは図1に提示する。

### ベンケイガイ製貝輪の出土状況

出土遺跡 図2・表1は縄文時代後期以降、弥生時代までの貝輪出土遺跡を示している。このうち、縄文時代後期前葉までのI期に属する資料は咲畑貝塚例のみで、かつIV期に属するのは朝日遺跡・瓜郷遺跡・白浜遺跡のみである。その他はII・III期のいずれかに属する。

II期は縄文後期末までの前半と縄文晩期初頭からの後半に分けられる。II期前半は、衣浦湾周辺では築地貝塚、矢作川下流域では八王子貝塚、三河湾入口の神明社貝塚、吉胡貝塚・伊川津貝塚・川地貝塚などの渥美半島、蛄塚貝塚・西貝塚などの遠江地域に見られ、内陸部では根方第二岩陰でも出土している。神明社・吉胡・伊川津・保美の各貝塚は後期後葉以降から晩期にかけての営みを中心であり、II期後半に所属

する資料がより多いと考えられる。II期後半も雷貝塚などの名古屋台地、石浜貝塚・寺屋敷東貝塚・本刈谷貝塚などの衣浦湾周辺、三河湾入口の神明社貝塚、吉胡貝塚・伊川津貝塚・保美貝塚の渥美半島、などが中心となる。なお、内陸部では榎原遺跡でも出土している。III期では掛斐川下流域の羽沢貝塚、名古屋台地の古沢町遺跡、矢作川下流域の新御堂貝塚、吉胡貝塚・伊川津貝塚・保美貝塚・川地貝塚の渥美半島、三河湾入口の神明社貝塚などがあるが、さらに三河湾奥部の平井稻荷山貝塚・五貫森貝塚・水神第二貝塚・大西貝塚、伊勢湾入口の大築海貝塚、英虞湾先端の阿津里貝塚でも資料が存在するようになることが大きな特徴である(註2)。

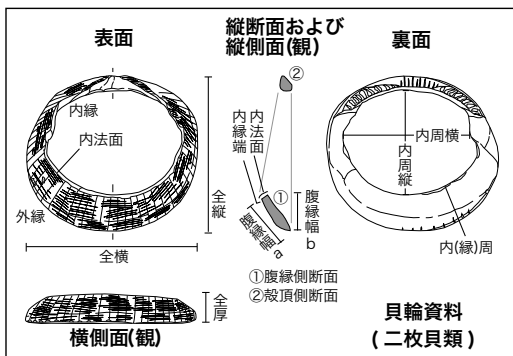
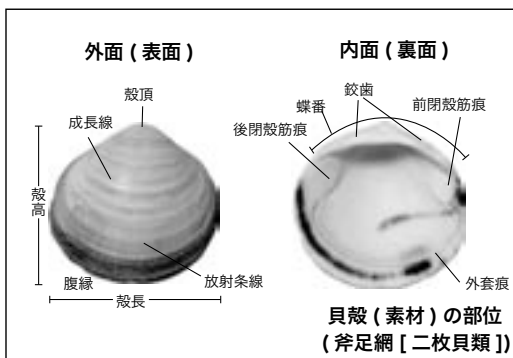
### 遺跡内の出土数および点数比

「前稿」で指摘したように、II期は「出土遺跡数の増加」と「一遺跡からの出土点数の増加」と「貝種の増加」の三つの意味で出土点数が増加する時期である。またIII期はベンケイガイ製が他貝種に比べ圧倒的多数になっていく時期である。このことを以下さらに詳細に検討して

いく。なお、各遺跡の貝輪群の中でII期・III期にわたって存在しているものが多く、厳密に区分することができない場合もある(註3)。

はじめに、出土点数について概観する。現在、管見の及ぶ範囲で、東海地域において一遺跡から最も多く出土している遺跡は、伊川津貝塚の330点である。しかし、その中で1992年調査地点はIII期に所属すると考えられ、その他はII期を中心に一部III期に及ぶものがあると考えられることから、142点はIII期に、それ以外の188点はII期中心とすることができる。その他一遺跡で100点以上になると思われる遺跡には吉胡貝塚がある。

貝輪群内の点数比では、ベンケイガイを中心にする、(1)ベンケイガイ製のみの貝輪群、(2)ベンケイガイ製が(圧倒的)多数を占める貝輪群、(3)ベンケイガイ製以外の貝種が多数を占める貝輪群、(4)ベンケイガイ製以外の貝種のみの貝輪群、に分類できる。(4)は各時期に散発的に存在しているのみである。(3)はII期の、特にII期後半に顕著になる傾向がある。本刈谷貝塚・枯木宮貝塚ではフネガイ科(註4)が最も多く、伊川津貝塚84年調査ではイタボガキ



### 加工の状態・程度による分類

#### 敲打

部分 有無・程度		内縁(内法面) a	外縁 b
		有	初回のみ a1
有	複数回 an		
無		a0	b0

#### 研磨

部分 有無	表面 c	内法面 d	内縁端 e	外縁 f	裏面 g
有	cn	dn	en	fn	gn
無	c0	d0	e0	f0	g0

例 表面からの敲打による1回目の穿孔で終了しているものを加工(a1・b0・c0・d0・e0・f0・g0)と示す

### 計測による分類

- 計測1・・・全縦×全横
- 計測2・・・内周縦×内周横、あるいは内縁周
- 計測3・・・腹縁幅、または全縦に対する腹縁幅比

図1 貝輪の部位説明・計測部位、および資料分類方法

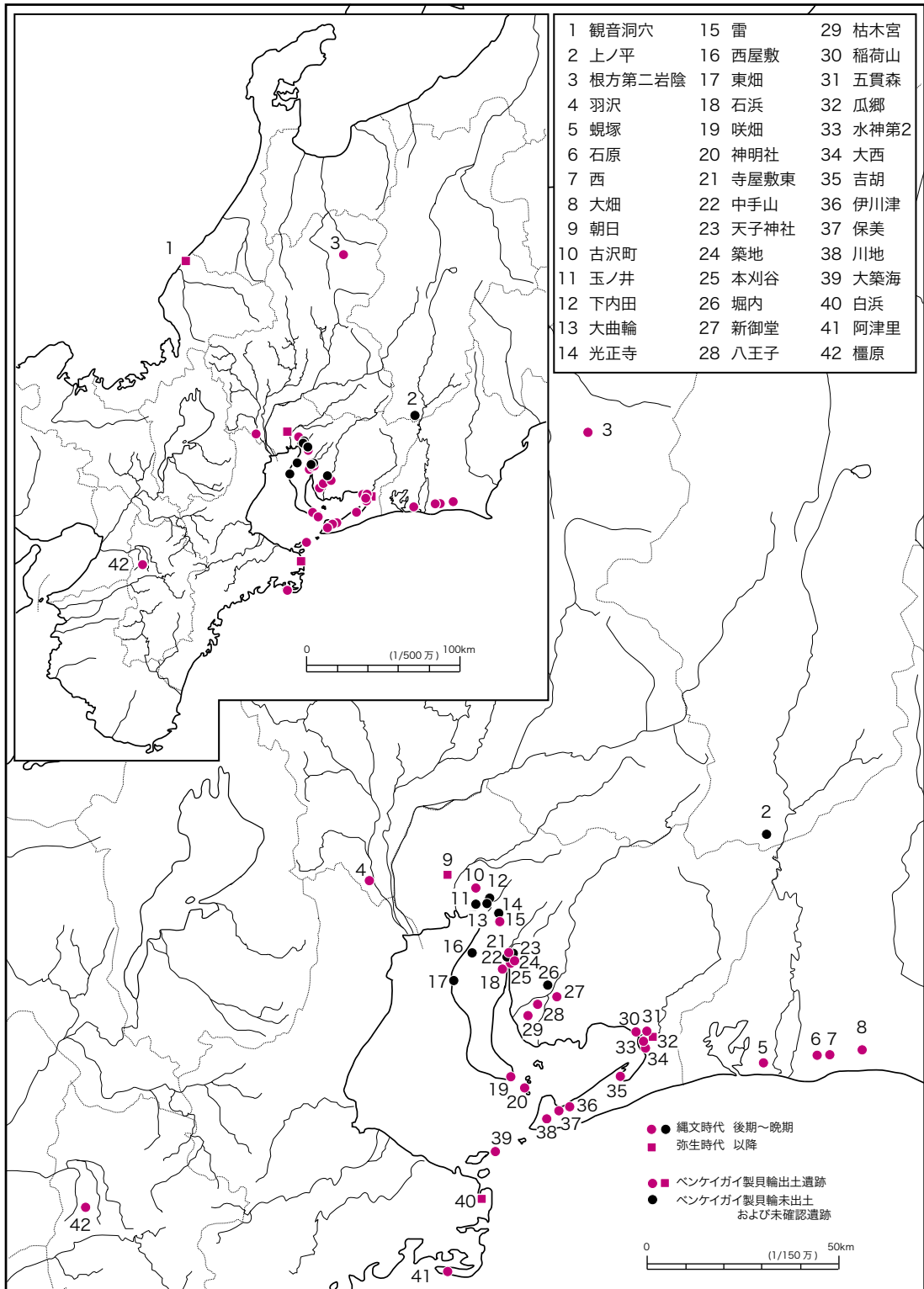


図2 縄文時代後晩期および弥生時代貝輪出土遺跡

科が計 89 点と最も多くなっている。(1)・(2)は II 期・III 期通じて見られるものの、特に III 期に属する平井稲荷山貝塚・五貫森貝塚・大西貝塚・大築海貝塚・阿津里貝塚でこの傾向が強く現れている。II 期で(1)・(2)を示す遺跡では貝輪出土資料数自体が少ない傾向にある。

## 資料の検討

総合的な貝輪の検討・考察を行う上で、一側面に立脚した分類で表出するのは困難を伴う。「貝種」以外の手続きとしては「加工の状態・程度」・「計測」・「形状」の 3 項目に分けての検討が必要と考える。ここでは前稿では提示しなかった内容を含めて、項目別に「加工の状態・

程度」・「計測」・「形状」の各内容により、遺跡ごとの貝輪群の様相を整理する(図 1)。

なお、検討の前提として、資料の出土状況について言及する。多くの資料は、貝層および遺物包含層から個別に出土している。また、完形を保っている資料も少なく、多くは破片・細片の状態出土する機会が多い。その中でも、人骨着装および付近から出土している例も若干数知られており、「腕輪」としての貝輪の法量的分析を行う際に、先学においても基礎資料に位置づけられている。東海地域でもペンケイガイ製貝輪についてこのような事例は根方第二岩陰(1~5)(註 5)・稲荷山貝塚(39)・吉胡貝塚・伊川津貝塚(61・62)・保美貝塚で知られている。

番号	遺跡名	所在地	詳細時期	時期の段階設定			ペンケイガイ	フネガイ科	イタボカキ科	イタボカキ科	イタボカキ科	チョウセンハマグリ?	アカニシ	オオツタノハ	イモガイ科	その他(不明)	備考	文献		
				I 期	II 期	III 期														
3	根方第二岩陰	岐阜県大野郡丹生川村	縄文後期	?			6											藤本・野村・渡辺1995		
4	羽沢貝塚	岐阜県海津郡南濃町	縄文後期～晩期	●			1											小川1933		
			縄文晩期後葉	●			1												渡辺編2000	
5	蛸塚貝塚	静岡県浜松市	縄文後期～晩期初	●			2		1									後藤ほか1957		
			縄文後期～晩期初	●			1		6		1					3	その他の2点はハマグリ製	後藤ほか1958		
			縄文後期～晩期初	●			1		14		6								後藤ほか1960	
6	石原貝塚	静岡県磐田市	堀之内II式中心	?	?		5	3										後藤ほか1961		
7	西貝塚	静岡県磐田市	堀之内式～宮造式主体(樞王式)	●	○		4							1				市原1967		
			堀之内式～宮造式主体(樞王式)	●	○		5	2											麻生1961	
8	大畑貝塚	静岡県袋井市	後期前葉以降	●			1	1										清野1969		
9	朝日遺跡	愛知県西春日井郡清洲町	弥生前期			●												伊藤ほか1972		
			弥生中期中葉			●													愛知県教育委員会1982	
10	古沢町遺跡	名古屋市中区	縄文晩期末～弥生前期			●			1	1								宮藤編1992		
11	玉ノ井遺跡	名古屋市中区	縄文晩期末～中葉	●	○													吉田・和田1971		
12	下内田貝塚	名古屋市瑞穂区	縄文後期	●														磯編2003		
13	大曲輪貝塚	名古屋市瑞穂区	縄文晩期	●	○													1		
14	光正寺貝塚	名古屋市緑区	縄文中期または晩期	?														伊藤・川合1993		
15	雷貝塚	名古屋市緑区	縄文晩期	●	○		1	1										森(刊行年不詳)		
16	西屋敷貝塚	愛知県知多市	縄文晩期	●	○													伊藤・川合1993		
17	東畑貝塚	愛知県知多市	縄文晩期	●	○													杉崎ほか1958		
18	石浜貝塚	愛知県知多郡東浦町	縄文後期末～晩期	●	○		2											紅村1963		
19	既畑貝塚	愛知県知多郡南知多町	縄文後期初葉～前葉	●			1											福岡・井原・杉崎・久永1960		
20	神明社貝塚	愛知県知多郡南知多町	縄文後期初葉～前葉	●	●		42	7	1		2	2						山下編1989		
21	寺屋敷貝塚	愛知県刈谷市	縄文後期～晩期	●	○		1	1										磯編2003		
22	中手山貝塚	愛知県刈谷市	縄文晩期	?	?													大参・加藤・山田・川合1989		
23	天子神社貝塚	愛知県刈谷市	縄文後期～晩期	●														大参・加藤・山田・川合1989		
24	築地貝塚	愛知県刈谷市	縄文後期中葉中心	●			2											久永・杉浦1998		
25	本刈谷貝塚	愛知県刈谷市	縄文晩期	●	○		5	17				4?						大参・加藤・山田・川合1989		
26	堀内貝塚	愛知県安城市	縄文晩期中葉・弥生前期	●	●		1											斎藤2004		
27	新御堂貝塚	愛知県西尾市	縄文後期～晩期	●	●		3											鈴木1995		
28	八王子貝塚	愛知県西尾市	縄文後期	●			8	3	1				1					鈴木2003		
29	枯木宮貝塚	愛知県西尾市	縄文後期後葉～晩期中葉	●	○		17	22	1		13							牧ほか1983		
30	平井稲荷山貝塚	愛知県宝飯郡小坂井町	縄文晩期中葉	●																
			縄文晩期中葉・弥生前期	●			12	1						1				杉原・外山1964		
31	五貫森貝塚	愛知県豊橋市	縄文晩期中葉・弥生前期	●						1										
			縄文晩期後葉～弥生前期	●			13												中村・出口1992	
32	瓜郷遺跡	愛知県豊橋市	弥生前期	●			9											清野1969		
33	水神(第二)貝塚	愛知県豊橋市	縄文後期後葉～弥生前期前半	●	●		9	3		2								杉原・外山1964		
34	大西貝塚	愛知県豊橋市	縄文後期後葉	●			20	1		1										
			縄文晩期後葉	●			1							1					後藤ほか1963	
35	吉胡貝塚	愛知県瀬美郡田原町	縄文後期～晩期末	●	○		51	14	4	13			3	1				岩瀬編1998		
			縄文後期～晩期末	●	○		41	16	2	3			6	2				岩瀬編1996		
			縄文後期～晩期	●	○		1	1										清野1969		
36	伊川津貝塚	愛知県瀬美郡瀬美町	縄文後期～晩期前葉	●	○		49	14	1									文化財保護委員会1952		
			縄文後期～晩期前葉	●	○		39	39	24	65			3	7				増山2003		
			晩期後葉	●	●		142	20	1	4			10	1					久永ほか1972	
37	保美貝塚	愛知県瀬美郡瀬美町	晩期前葉～後葉	?	?		2													
			晩期前葉～後葉	?	?		1	2											小野田・芳賀・安井1995	
			晩期前葉～後葉	?	?		1	1											大山1923	
38	川地貝塚	愛知県瀬美郡瀬美町	縄文後期中葉中心	●	○		9		1	2										
			縄文後期中葉中心	●	○		1													小林・高平・長谷部・早川1966
			縄文後期中葉中心	●	○		1													小野田・安井ほか1993
39	大築海貝塚	三重県鳥羽市	縄文晩期式	●														原田編1995		
40	白浜遺跡	三重県鳥羽市	弥生前期後葉以降	●			7											立教大学博物館学講座1966		
41	阿津里貝塚	三重県志摩郡志摩町	縄文後期以降?	●			7											鈴木ほか1990		
				●			7											鈴木1951・三重県教委1954		

※遺跡番号は図2と一致。地名は「平成の大合併」以前のものである。

表 1 縄文時代後晩期および弥生時代貝輪出土点数

### 1 加工の状態・程度による分類

貝輪の「製品」「未製品」の概念は、我々の感覚では判断が難しいところが多く、一旦この区別は用いない。貝輪製作の方法は大きく「敲打」と「研磨」とに分けられる。ここでは貝輪の各部位に対する加工の状態・程度を分類し、各遺跡での貝輪群内での様相を整理していく。その表現方法として図1で示したような記号を用いる(註6)。「前稿」でも指摘したように、II期・III期では、同一遺跡内の貝輪群で資料間に差が顕著にみられるのみならず、遺跡間(貝輪群の総体)同士でもその差が見られるようになる時期である。ここでは、その点についてさらに詳細に検討する。

まず、分類項目を提示する。中央に穿孔を一度行った状態のもの【(a1・b0)(c0・d0・e0・f0・g0)】、および複数回の敲打により内縁を広げているもの【(an・b0)(c0・d0・e0・f0・g0)および(an・bn)(c0・d0・e0・f0・g0)】は、蜷塚貝塚・西貝塚・神明社貝塚・枯木宮貝塚・平井稻荷山貝塚・五貫森貝塚・水神第二貝塚・大西貝塚・吉胡貝塚・伊川津貝塚・川地貝塚・大築海貝塚・阿津里貝塚などで見られるものの、その他の遺跡ではこの状態の貝輪は見られない。また、上記遺跡の中でも、蜷塚

貝塚・西貝塚・枯木宮貝塚では【(a1・b0)(c0・d0・e0・f0・g0)】が見られないことで、他の遺跡とは様相が異なる。また、未加工のベンケイガイ貝殻(素材貝)も神明社貝塚・川地貝塚・大築海貝塚・阿津里貝塚でわずかながら存在する。一方、敲打と研磨を両方行っている資料は、上記の遺跡を含めて、広く見られる。

以上から、ベンケイガイ製貝輪群を、以下のような三群に分けることができる。

**ベンケイガイ製貝輪群(I)** (a1・b0)(c0・d0・e0・f0・g0)、(an・b0)(c0・d0・e0・f0・g0)、(an・bn)(c0・d0・e0・f0・g0) および「敲打+研磨」の各種別が存在する貝輪群

**ベンケイガイ製貝輪群(II)** (an・b0)(c0・d0・e0・f0・g0)、(an・bn)(c0・d0・e0・f0・g0) および「敲打+研磨」の各種別が存在する貝輪群

**ベンケイガイ製貝輪群(III)** 「敲打+研磨」の各種別のみが存在する貝輪群

貝輪群(III)を示す遺跡は、加工の状態・程度が平均化されていることなどから、その貝輪の「使用遺跡」と想定することができよう。一方、貝輪群(I)を示す遺跡は、加工の状態・程度の格差が認められ、製作が行われている遺跡と考えられる(註7)。しかし、吉胡貝塚・伊川津貝塚のように埋葬人骨に装着あるいは接した状

段階設定における中心時期		I期					II期前半					II期後半					III期					IV期					
加工分類		蜷塚	西貝塚	根方第二古墳	築地	八王子	雷	本列谷	枯木宮	吉胡	伊川津B4	神明社	川地	羽沢	古沢町	新御堂	平井稻荷山	五貫森	水神第二	大西	伊川津B2	大築海	阿津里	朝日	瓜郷	白浜	
未加工	(a0・b0)(c0・d0・e0・f0・g0)																										
敲打のみ	(a1・b0)(c0・d0・e0・f0・g0)									●	●																
敲打のみ	(an・b0)(c0・d0・e0・f0・g0)	○	○						○	●	●	●															
敲打+研磨	(an・b0)(cn・d0・e0・f0・g0)								●		●						●	●	●								
敲打+研磨	(an・b0)(cn・d0・en・f0・g0)		●	●			●				●															●	
敲打+研磨	(an・b0)(c0・dn・e0・f0・g0)		●				●			○		○															
敲打+研磨	(an・b0)(c0・dn・e0・fn・g0)															●											
敲打+研磨	(an・b0)(c0・d0・en・f0・g0)																					●					
敲打+研磨	(an・b0)(cn・dn・e0・f0・g0)	○	●	●	●	●	●	●	●		●			○		●				●	●						
敲打+研磨	(an・b0)(cn・dn・en・f0・g0)		●						○	●	○	●										○					
敲打+研磨	(an・b0)(cn・dn・e0・fn・g0)		●		○			●	●		●													○		○	
敲打+研磨	(an・b0)(cn・dn・en・f0・g0)																										
敲打+研磨	(an・b0)(cn・dn・en・fn・g0)									●		○	○														
敲打のみ	(an・bn)(c0・d0・e0・f0・g0)	○	○							●		●	●				●	●	●	●	●						
敲打+研磨	(an・bn)(c0・dn・e0・f0・g0)																		●								
敲打+研磨	(an・bn)(cn・d0・e0・f0・g0)																				●						
敲打+研磨	(an・bn)(cn・dn・e0・f0・g0)																●	●	●	●	●			●			
敲打+研磨	(an・bn)(cn・dn・e0・fn・g0)																										
敲打+研磨	(an・bn)(cn・d0・e0・fn・g0)																						○				
検討資料数		1	8	9	5	2	10	4	7	17	51	39	42	12	1	1	3	25	7	9	21	142	7	5	2	3	1
ベンケイガイ製貝輪群分類		III	II	II	III	III	III	III	III	II	I	I	I	I	III	III	III	I	I	I	I	I	I	III	III	III	

表2 ベンケイガイ製貝輪遺跡別加工分類表

態で出土しており、使用も行われている。したがって製作のみならず、「製作+使用遺跡」と位置づけることができる。貝輪群(II)は、【(a1・b0) (c0・d0・e0・f0・g0)】が見られない以外は貝輪群(Ⅰ)に近い様相を呈する。「製作+使用遺跡」と考えられるが、その製作がより加工の加わった状態から始まっている可能性がある。

上記のことを整理すると、大きくは貝輪群(Ⅰ)(Ⅱ)の「製作+使用遺跡」と貝輪群(Ⅲ)の「使用遺跡」に分けられる。以下、時期別に貝輪群の様相をさらに検討していく(表2)。

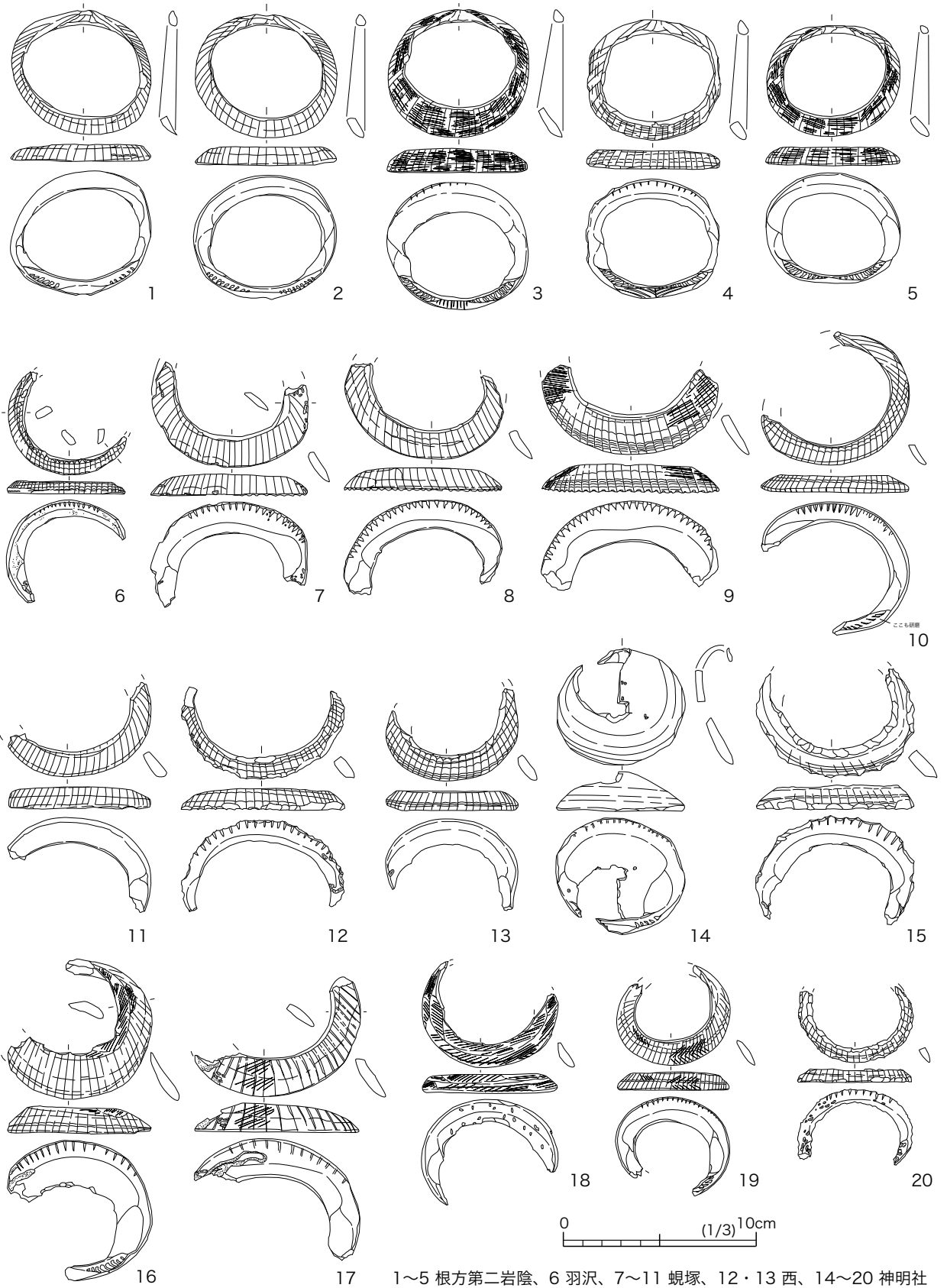
**Ⅱ期前半** 貝輪群(Ⅱ)を示すのは蜆塚貝塚・西貝塚などの例である。ここでは内縁敲打の資料と、そのうち表面および内法面を研磨している資料が主体となっている。西例では、1点内縁端を研磨している例が存在しているが、貝素材の殻頂部付近を中心に行われているもので、内縁端全体に及ぶものではない。また両遺跡ともに、外縁部敲打調整を施している可能性がある資料も若干数存在する(12など)。一方、貝輪群(Ⅲ)を示すのは根方第二岩陰・築地貝塚・八王子貝塚例などである。根方第二岩陰例では内縁敲打ののち表面と内法面を研磨したものの(1・2・5)と表面・内縁端を研磨した例(3・4)が存在する(註8)。この内縁端研磨例も貝素材の殻頂部付近を中心に行われているもので、内縁端全体に及ぶものではない(3など)。図3の3・4では内法面に対して強い研磨を施しておらず、この状態であっても使用されたことを示す好例といえよう。築地例は表面・内縁・外縁に研磨が施されたもので、内縁は研磨の前に敲打調整が行われた可能性が考えられるものである(23)。八王子例は表面と内法面に研磨が施された資料のみであり、これも内縁は研磨の前に敲打が施されたものと考えられる(29～32)。

**Ⅱ期後半** 貝輪群(Ⅰ)を示すのに吉胡貝塚・伊川津貝塚(84年調査)などの例がある。ともに内縁加工を初回敲打で終了しているものと、複数回敲打で終了しているものがある。研磨が施してあるものでは、吉胡例では表面・内法面の研磨(58・59)、表面・内法面・内縁端の研磨が多く見られ、一方、伊川津84例では表面の研磨(63)、表面・内法面・外縁(61・62・

64)の研磨が多く見られる。吉胡例では内縁および外縁に敲打調整を施した状態で終了しているものもいくつか報告されている(田邊2002、および56)。貝輪群(Ⅱ)を示すのに枯木宮貝塚例がある。ここでは内縁部に対して初回の敲打で終了しているものがなく、また内縁敲打で終了している資料も少ない。研磨が施されているものでは表面の研磨、表面・内法面の研磨、表面・内法面・外縁(33・35)の研磨がそれぞれある一定量存在する。貝輪群(Ⅲ)を示すのに雷貝塚・本刈谷貝塚例などがある。本刈谷例に関して詳細に述べると、すべてに研磨が見られ、表面・内法面の研磨(24)もしくは表面・内法面・外縁の研磨(25・26)に集約されている。

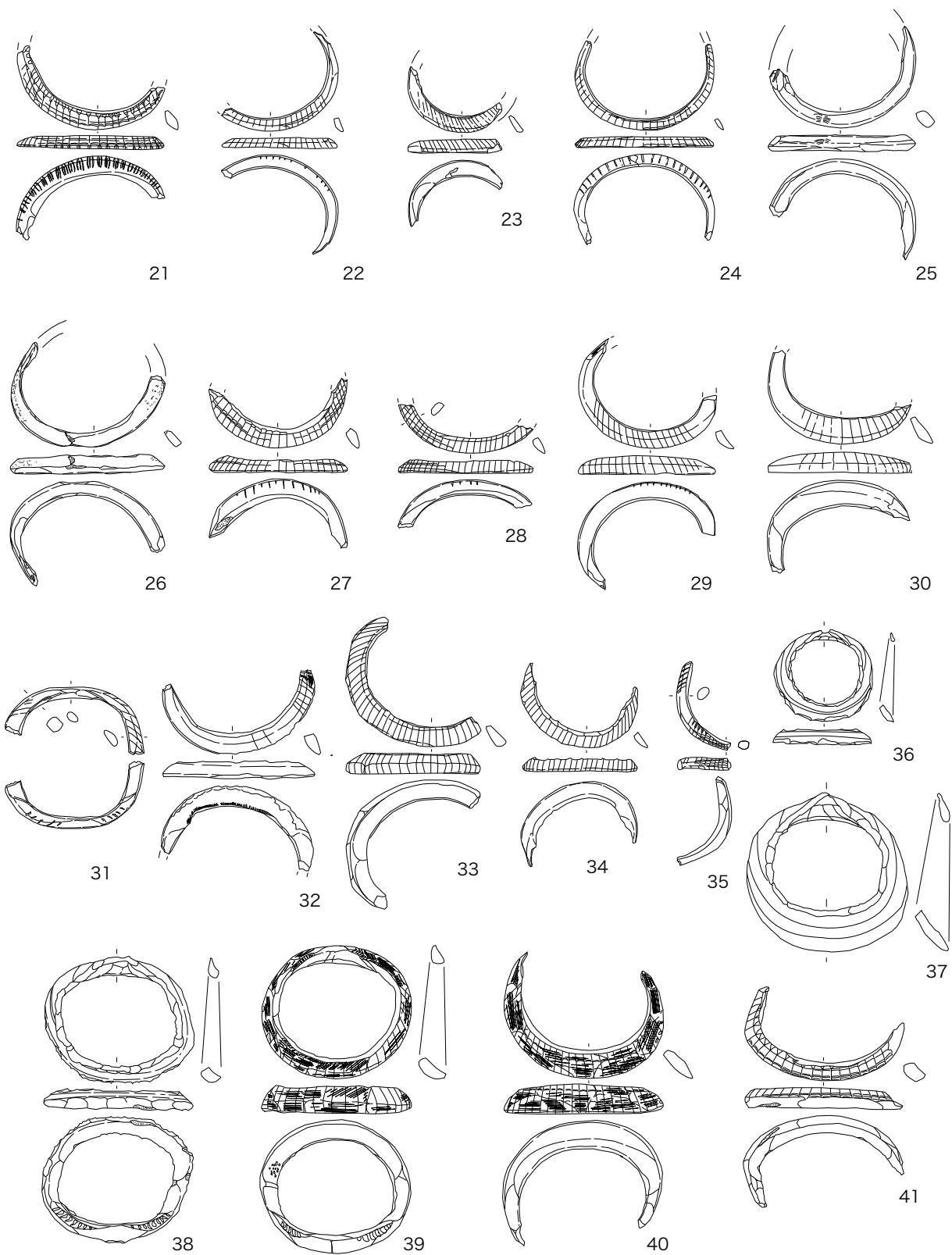
**Ⅲ期** 貝輪群(Ⅰ)を示す遺跡が多く出現する。平井稲荷山貝塚・五貫森貝塚・水神第二貝塚・大西貝塚・伊川津貝塚(92年調査分)・大築海貝塚・阿津里貝塚例がある。平井稲荷山例・五貫森例・水神第二例・伊川津92例では内縁のみならず外縁に対して敲打調整を施している資料がある一定量存在しており(36・38・41・42・43・50・68など)、その上で内縁は研磨を施しながらも外縁には顕著な研磨を施していない資料もこれらの貝輪群では存在する。また、伊川津92例では内縁端の研磨が著しく内法面が稜線状になるものも若干数存在する(70)。大築海例は内縁敲打調整のみの資料および、内縁・外縁敲打ののち外縁に研磨を施している例が存在する(75)。また、内縁端の研磨が著しく、内法面が稜線状になるものが存在する(79)。貝輪群(Ⅲ)を示す遺跡では羽沢貝塚・古沢町遺跡・新御堂貝塚などがある。羽沢例のうち実見しえた資料は、内縁敲打調整の上で、表面・内法面・内縁端・外縁を研磨したものである(6)。新御堂例は内縁敲打ののち、表面の研磨(27)、表面・内法面の研磨(28)が見られる。

また、Ⅱ期からⅢ期の複数期にわたる資料が共存する可能性の高い貝輪群には、神明社貝塚と川地貝塚の貝輪群がある。ともに貝輪群(Ⅰ)を示す遺跡である。神明社例では内縁に対して初回の敲打で終了している例が多く見られ(14)、研磨調整に関しては、内法面に対して施しているものも存在する(17)一方で、内縁端への研磨が著しく内法面が稜線状になるものが



1～5 根方第二岩陰、6 羽沢、7～11 蜆塚、12・13 西、14～20 神明社

図3 東海地域のベンケイガイ製貝輪 1

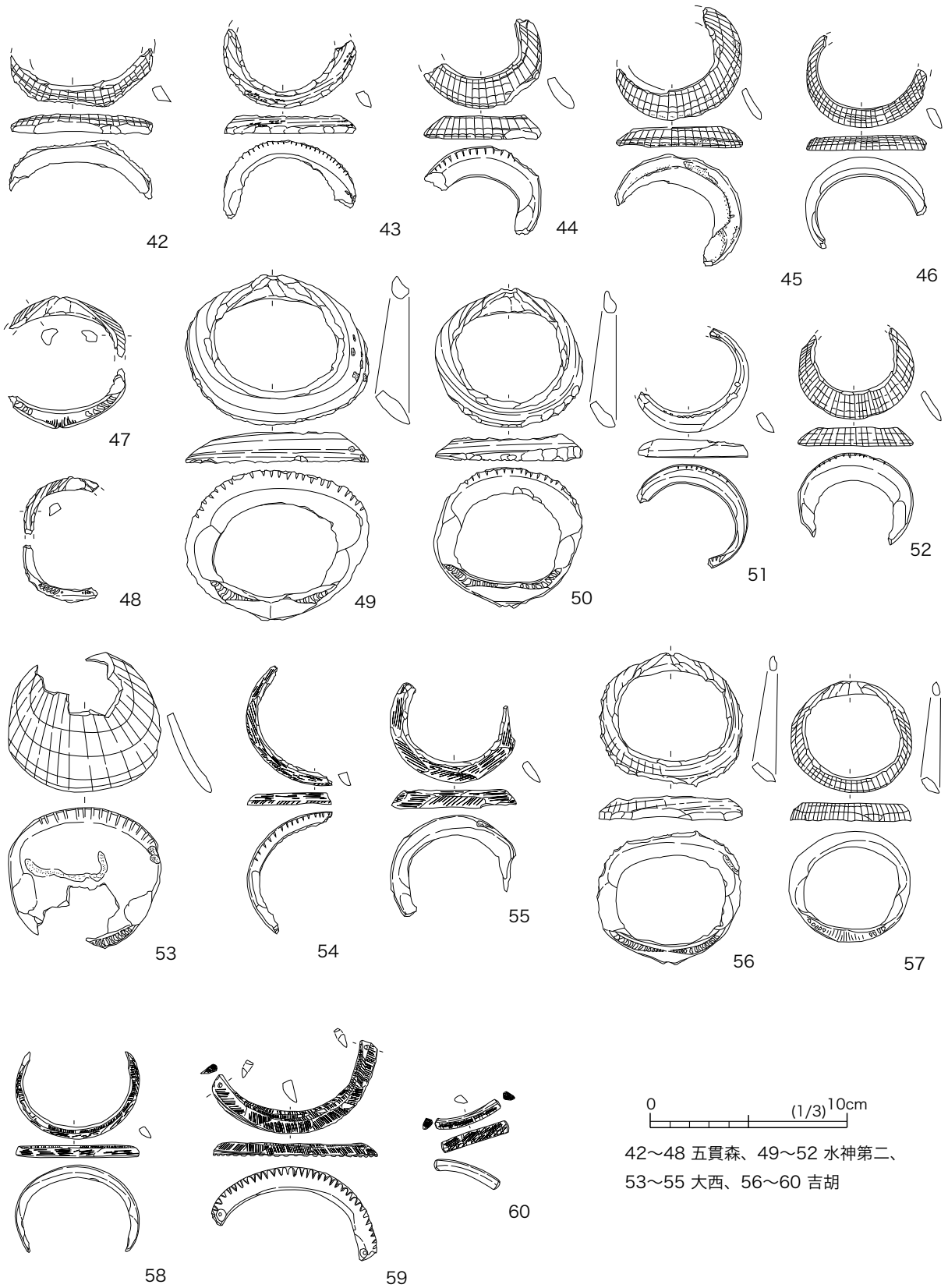


21・22 神社、23 築地、24～26 本刈谷、27・28 新御堂、  
29～32 八王子、33～35 枯木宮、36～41 平井稻荷山

0 (1/3) 10cm

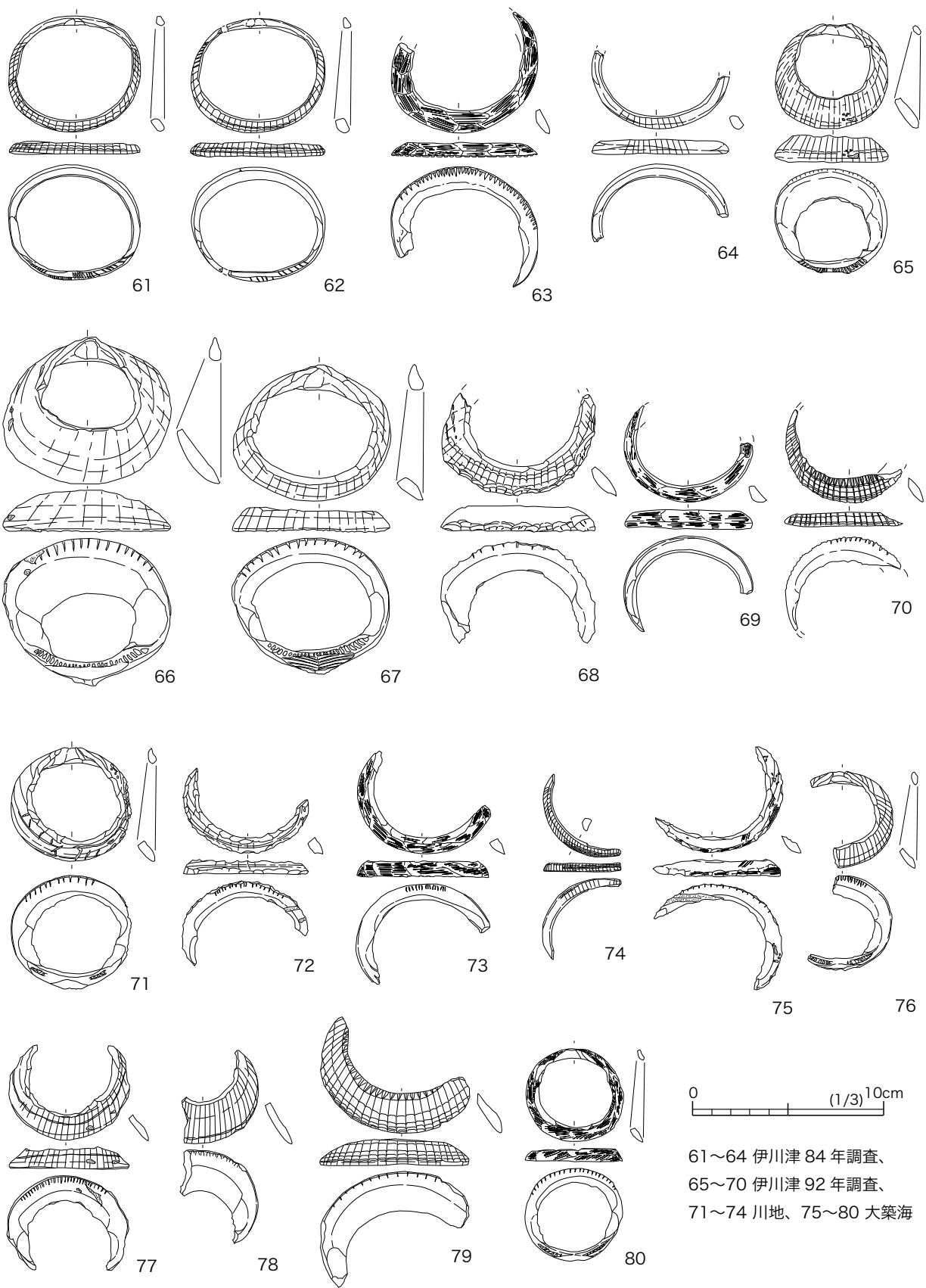
図4 東海地域のベンケイガイ製貝輪2





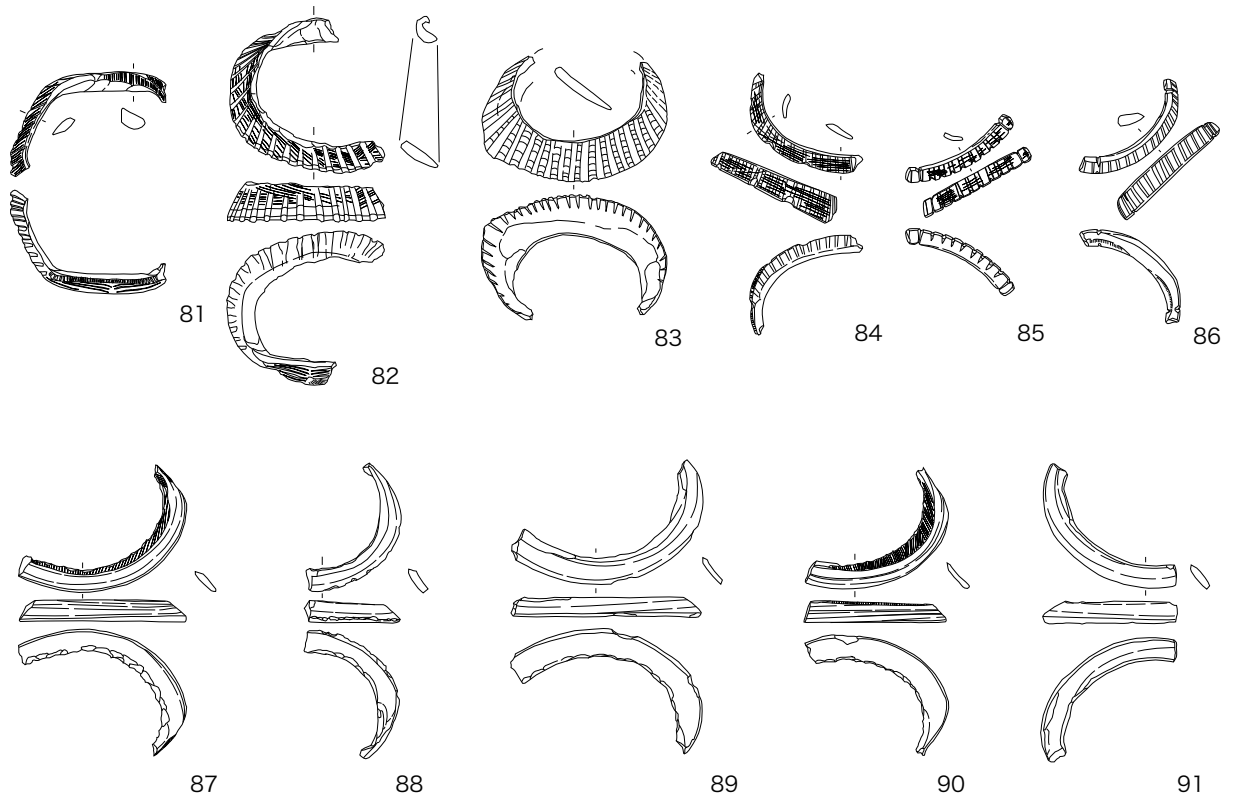
42～48 五貫森、49～52 水神第二、  
53～55 大西、56～60 吉胡

図5 東海地域のペンケイガイ製貝輪3



61~64 伊川津 84 年調査、  
 65~70 伊川津 92 年調査、  
 71~74 川地、75~80 大築海

図6 東海地域のベンケイガイ製貝輪4

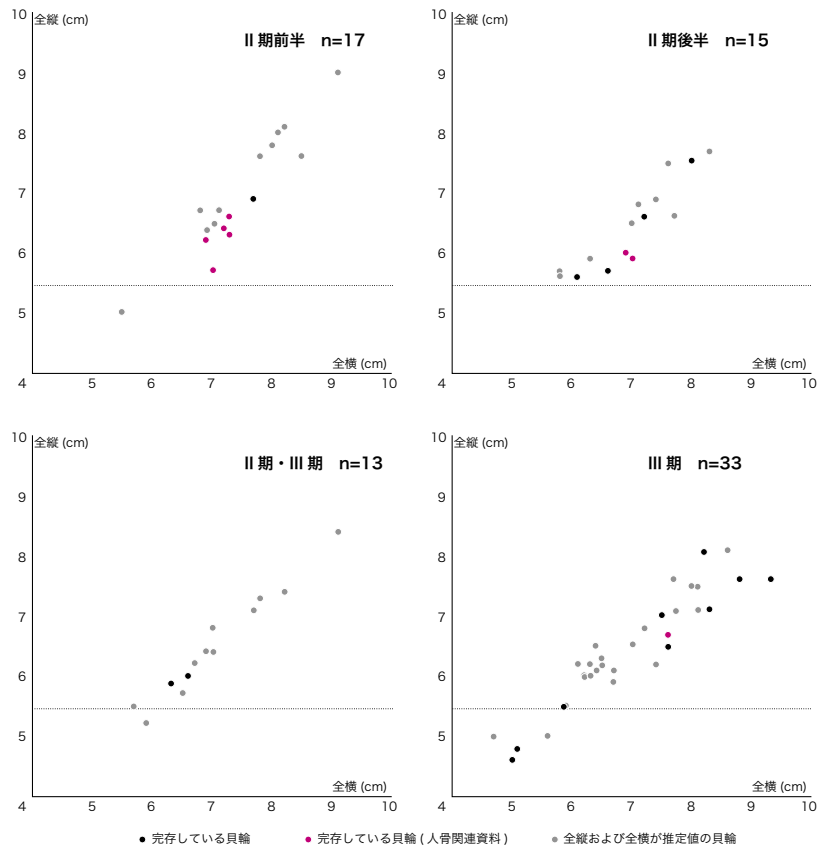


81~86 フネガイ科、87~91 チョウセンハマグリ？

81・82・87・88 神明社、83 天子神社、84・89~91 枯木宮、85・86 吉胡

0 (1/3) 10cm

図7 東海地域のフネガイ科およびチョウセンハマグリ製？貝輪



● 完存している貝輪 ● 完存している貝輪 (人骨関連資料) ● 全縦および全横が推定値の貝輪

図8 貝輪計測散布図1 (全縦・全横)

多く存在する(16・18・19)。また、内縁・外縁に敲打調整を施しているものも一定量見られる(15・20)。川地例では内縁敲打調整のもの(71)が多く存在するなか、内縁・内法面研磨(73)、内縁・内法面・内縁端・外縁研磨の例(74)も存在する。また、内縁・外縁敲打調整の事例(72)も存在する。

以上のことから、各時期および遺跡ごとで加工の特徴が窺えられる。特に注目すべき点は、「内法面と内縁端との関係」、および「外縁の処理」についてである。「内法面と内縁端との関係」については、内縁端への研磨が行われているものの表面研磨の一部としての志向が強く内法面が一定幅残されている場合と、内縁端への研磨が著しく内法面が稜線状になる場合とが存在する。前者はⅡ期前半・Ⅱ期後半・Ⅲ期を通して存在する一方で、後者はⅡ～Ⅲ期の神明社例にまとまって存在し、Ⅲ期の大築海例にも存在し、Ⅲ期の伊川津92例にも若干数見られる。後者はⅢ期を中心に出現するようであり、かつ渥美半島から三河湾入口・伊勢湾入口という範囲が中心のようである。また、「外縁の処理」について、著しく行われるようになるのはⅡ期後半からⅢ期にかけてである。特に、Ⅲ期の貝輪群(Ⅰ)を示す遺跡で見られる、外縁敲打調整が極めて特徴的である。外縁敲打が行われている例で、明らかにその後外縁に研磨を施している例は大築海例(75)などごくわずかである。このことに関して、外縁に調整を加える場合は敲打が主体であり研磨は行う志向にはなかった可能性と、外縁敲打を行ったものはほぼすべて「入念に」研磨を行ったため、敲打痕が残存していない可能性の二者が考えられる。一方、Ⅱ期後半で外縁に調整が行われているものに関しては、研磨しか窺えられない資料が主体であり、敲打で終了している資料は少ない。吉胡例ではみられるものの、これはⅢ期の一部にまで帰属時期が拡大する可能性のある資料群である。Ⅱ期後半でも外縁敲打調整のうちに研磨を行っている場合も存在したかもしれないが、敲打調整で終了している資料がⅢ期ほど顕著ではない。

## 2 計測による分類

貝輪の計測には、以下の3種が必要である。

### 計測1(全縦×全横)

### 計測2(内周縦×内周横、あるいは内縁周)

### 計測3(腹縁幅、または全縦に対する腹縁幅比)

以下、各項目について分析・検討を加える。なお、貝輪は破片および破損した状態で出土する 경우가ほとんどであり、これが計測による統計的検討の障害となっている場合がある。ここでは、現生の貝殻を用いて貝素材の法量復元を試みる。このことにより「計測1」をかなりの程度補足でき、「計測2」「計測3」に関してもある程度補足できるものと考えられる。

**計測1** 全体的な法量を決定するもので、必要とされた貝素材の大きさを推測するものである(図8)。どの時期もおおむね全縦が5.5cm以上8ないし9cm未満が多い。Ⅱ期では築地例(23)、Ⅱ期～Ⅲ期の神明社例(19・20)、Ⅲ期の稲荷山貝塚例(36)・五貫森例(48)・大築海例(80)でそれ以下の「小型」の例も存在する。時期別の傾向では特に分布の中心がみられない。しかし、遺跡ごとの貝輪群では、Ⅱ期前半では根方第二岩陰例(1～5)・八王子例(29～32)、Ⅱ期後半では本刈谷例(24～26)、Ⅲ期では新御堂例(27・28)などベンケイガイ製貝輪群(Ⅲ)を示す貝輪群では、法量がほぼ近いもののみでまとまっている場合もある。一方、貝輪群(Ⅰ)を示す遺跡では、各遺跡での貝輪群全体で法量により幅があることが指摘できる。

**計測2** 内縁の大きさを示すものである。腕輪としての使用の可否を推測するために先学の研究でも特に注意が払われており、この値の算出にはいくつかの方法が提示されている。今回は、伊川津貝塚の報告で提示された安川氏の計測方法を参考に「内縁周」を算出した(註9)。図9は今回調査した資料の中で「全縦」「全横」「内縁周」のすべてが算出可能なもののみについて提示したものである。多く資料は内縁周10cm以上で、内縁周に対する全縦には資料間に差がみられるようである。しかしある内縁周値を保持するために最低とされる法量として、図9中の破線が想定される。なお、埋葬人骨に装着および関係した状態で出土したものは、全縦に

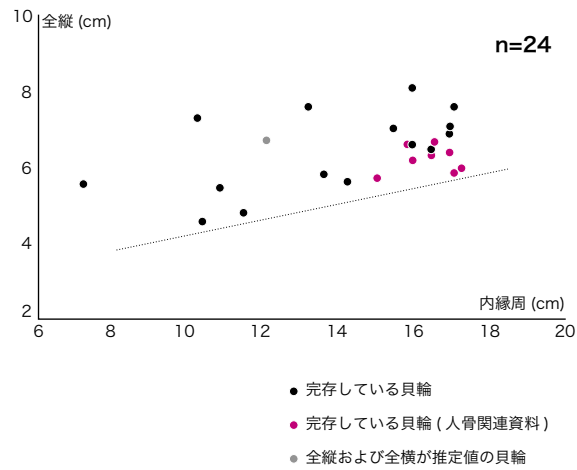


図9 貝輪計測散布図

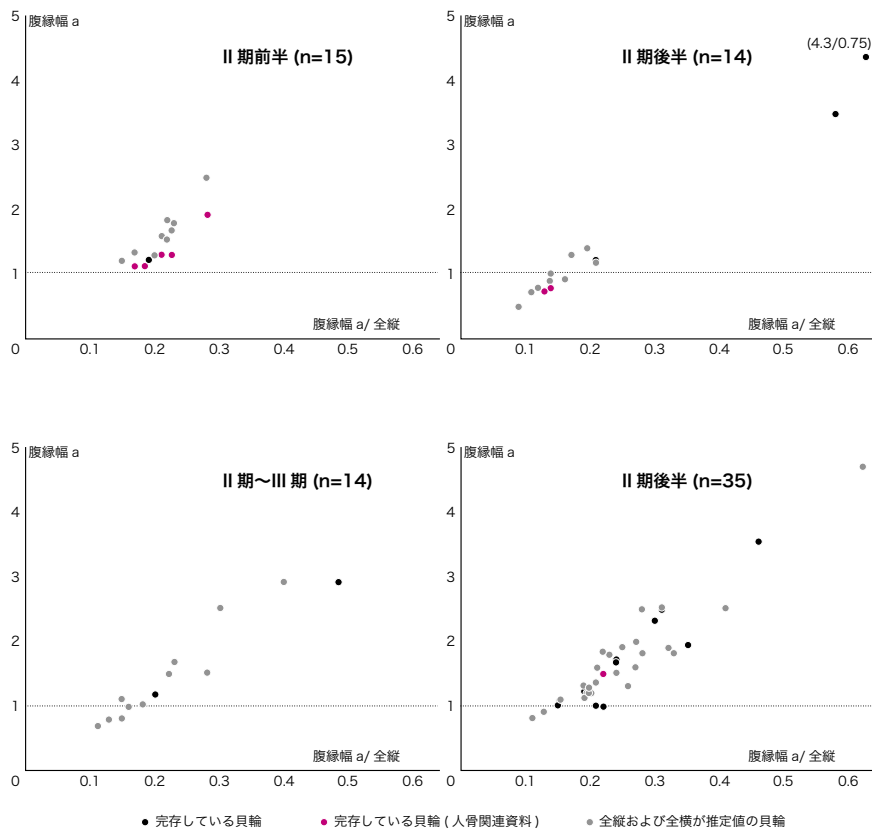


図10 貝輪計測散布図3 (腹縁幅 a)

関わらず内縁周 15cm 以上を示している。

**計測 3** 内縁の大きさに関連するものの、外縁の処理を含めて貝輪の形態的特徴を示すものでもある。ここでは図 1 で提示した「腹縁幅 a」および「腹縁幅 b」の両者について、全縦との関係を示した(図 10・11)。「腹縁幅 a」については 1cm 未満、「腹縁幅 b」については 0.8cm 未満の資料は II 期前半には見られないことが大きな特徴である。

### 3 形状による分類

ここでは「腹縁側断面」について特に検討する。断面形状の特徴としては、敲打調整時に形成された内法面の幅が保持されているもの、内法面幅が保持されている上に外縁部に調整が加えられているもの、内法面が稜線状になるもの、の三種類に分類できる。また、腹縁幅と腹縁の厚さとの関係について見る上で、「腹縁幅 b」と「全厚」との関係が参考になる(註 10)。「腹縁幅 b」より「全厚」が大きいもので外縁部調整が加えられているものでは、断面が四角形状を呈するものと断面が台形状を呈するものがある。かつ、「内法面が稜線状」を形成し「腹縁幅<全厚」を示す資料は現在のところ見つかっていない。以上のことから、「腹縁側断面」を A～F の 6 種類に分類できる(図 12)。

「腹縁側断面 A・B」を示す貝輪は、II 期・III 期を通じて存在するようである。その中でも「腹縁側断面 A」では、II 期前半に腹縁幅がより保持される資料が多いことが指摘でき、これは上述した「計測 3」の結果に関連する。「腹縁側断面 B」は II 期後半から III 期にかけてより多く存在する。「腹縁側断面 C・D」は外縁研磨を行ったものである。「腹縁側断面 C」は蜆塚貝塚でも確認でき(11 など)、II 期・III 期通じて存在する。「腹縁側断面 D」は外縁研磨調整のため裏面側にまで稜線が形成されるものである。研磨調整のみもしくは敲打調整の痕跡が消去されるほど研磨調整を行ったもの(25・26・35・61・62・64 など)が主体で、II 期後半に多く見られる。また敲打調整のみでこの形状を呈するものも若干存在する(38)。「腹縁側断面 E」は外縁敲打調整のみの資料である。どの資料も「腹縁幅 b」と「全厚」が同じもし

くは「全厚」が大きい資料のみで、「腹縁幅 b」が顕著に大きい例は現在のところ存在しない。一方、「腹縁側断面 F」は内縁端研磨が著しく、内法面が稜線状になるものである。この断面形状を示す資料で「腹縁幅 b」より「全厚」が大きい資料は見られないことは上述した通りである。東海地域では、「腹縁側断面 E・F」を示す貝輪で、人骨着装例は現在までのところ知られていない。また、出土も III 期を主体とする遺跡からが中心であることから、神明社例・川地例の中で「腹縁側断面 E・F」を示す貝輪は、この時期のもの可能性がある。

### 総合的考察

以上の分析から、時期ごとに東海地域のベンケイガイ製貝輪について若干の考察を行う(図 13)。

**II 期前半**(後期中葉～後期末) 内縁を敲打、もしくは敲打ののち研磨を施して終了している資料が主体を占める。腹縁幅が太目のものが多く、「腹縁幅 a」で 1cm 以上、「腹縁幅 b」で 0.8cm 以上を保持する。「腹縁側断面」A および C を呈するものが目立つ。

**II 期後半**(晩期初頭～前葉) 腹縁幅が太目のものに加え、「腹縁幅 a」で 1cm 未満、「腹縁幅 b」で 0.8cm 未満の細目のものが加わる。このことに関連して「腹縁側断面 A・B・C・D」を示す資料が出現する。その中でも「腹縁側断面 D」は外縁部への調整が顕著なもので、明確な敲打調整を示す例がなく、研磨調整を主体として形成されたものと考えられる。「腹縁側断面 D」は「腹縁幅 b」を「全厚」より小さくすることで、長方形もしくは隅丸方形に加工する意図が見られる。他貝種の貝輪の中で腹縁部を加工しているものとして、チョウセンハマグリ製?の貝輪がある(87～91)。枯木宮貝塚では、この貝種の貝輪が 13 点と、ベンケイガイ製に匹敵する程度にとままとって出土しており、当貝塚では両者の相互関係を考慮することができるであろう(註 11)。

**III 期**(晩期中葉～晩期末) ベンケイガイ製が貝輪貝種の主体となる。この時期は、出土遺跡数が顕著に増加するが、多くは貝輪群(1)を示

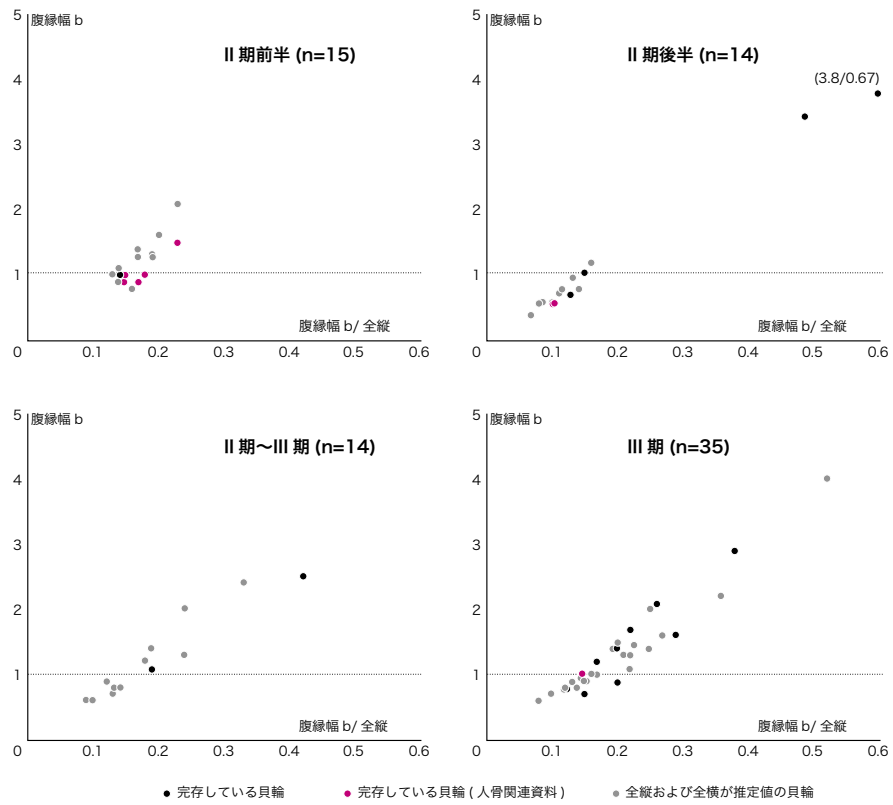


図 11 貝輪計測散布図 3 (腹縁幅 b)

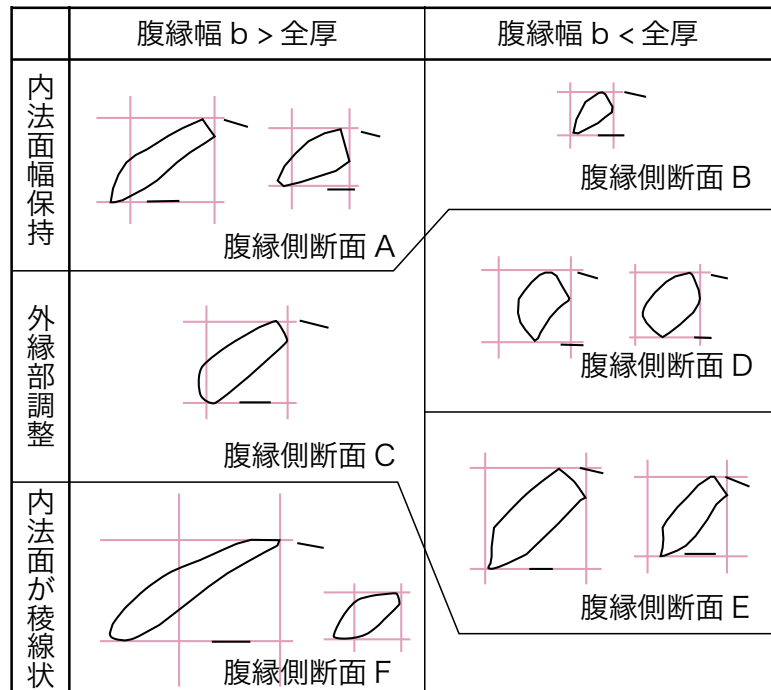


図 12 腹縁側断面形態分類図

す。これまでの貝素材よりも小型のものも出現も顕著になり、全縦 5.5cm 以下のものも出現する。II 期後半同様に腹縁幅太目のものと細目のものが共存し、「腹縁側断面」では A・B・C・D に加え、新たに E・F が見られるようになる。外縁部の調整では、敲打調整が顕著化する傾向にある。これらの一群は「腹縁側断面 E」を示す。「腹縁側断面 E」を示す資料は、「腹縁幅 b」が「全厚」より小さく、いわば相対数値的に腹縁幅が広い例は存在しない。一方、内縁端研磨を著しく行ない、内法面が稜線化する資料が出現する。これらは「腹縁側断面 F」を示す。この資料は「腹縁幅 b」が「全厚」より大きく、「腹縁側断面 E」とは対照的に相対数値的に腹縁幅が小さい例は存在しない。「腹縁側断面 E・F」を示す資料は、貝素材の大きさに関わらず見られることから、これらは内縁周の大きさという機能・用途的な要因によるものではなく、いわば形態的な志向によるものと推定することができる。特に「腹縁側断面 E」は「腹縁側断面 B」と同様の効果を敲打調整によって行ったものとも推測できる。

各時期とも、貝輪群 (I)(II) を示す資料では、さまざまな加工の状態や程度・法量・形態を包括している一方で、貝輪群 (III) を示す資料では、これらが「ある一定の幅」に収斂されていく傾向がある。まず、貝輪群 (I)(II) に関して言及すると、II 期前半から II 期後半そして III 期となるにつれて、遺跡ごとの各貝輪群内では以前まであった志向に加えて新しい志向が加わり、結果として複数の志向が共存する様相となる。特に、II 期後半・III 期では、志向別の数量的差は存在するものの、ほぼすべてが同一の志向に基づきいわば「一方向」に製作されていた強い意図は窺えられない。また貝輪群 (III) については、遺跡に持ち込まれた状態が問題となる。II 期前半・II 期後半では、貝輪群 (III) を示す資料の類例が貝輪群 (I)(II) を示す資料の中にもみることができ、貝輪群 (III) は搬入された状態のまま使用された可能性がある。一方、III 期の場合は、特に外縁敲打調整の見られる資料の存在について、貝輪群 (I) と貝輪群 (III) とでは、明らかに差が生じている。貝輪群 (III) の中で外縁研磨調整の施されているものの中に

は、その前に敲打調整を施されているものが含まれていることは想定されるものの、貝輪群 (I) の資料を含めても上述したように現在その明確な事例はごくわずかである。外縁調整としての敲打調整は、すべてが研磨調整を行うための前段階とは捉えず、また反対に外縁敲打調整のみの資料も単純に「未製品」とは考えられない(註 12)。貝輪群 (I) に対し貝輪群 (III) の資料が少ないものの、現段階では外縁敲打調整の見られる資料は貝輪群 (III) を示す遺跡にはもたらされていないといえよう。

図 13 は以上のことをまとめたものである。II 期後半と III 期では製作の志向に地域的差が生じている。II 期後半の「腹縁側断面 D」に関しては、貝輪群 (I) を示す伊川津貝塚、貝輪群 (II) を示す枯木宮貝塚、貝輪群 (III) を示す本刈谷貝塚に見られ、特に枯木宮例と本刈谷例とはより近い関係にあったことが想定される。また、III 期では外縁敲打調整の例が三河湾奥部—渥美半島—伊勢湾・三河湾口—志摩半島にわたって広がっている一方で、内法面稜線化の例が渥美半島先端から伊勢湾・三河湾口に限定して分布している。これらはすべて貝輪群 (I) を示す遺跡であるのが大きな特徴である。

貝輪は機能・用途としては腕輪を主体としていたと考えられる遺物である。今回の分析を通じて、同一の機能・用途のものも、その時期により素材貝の法量をはじめ、製作される志向および「製作+使用遺跡」の様相など、それが製作・使用される社会的背景が同一ではない可能性を指摘した。特に、III 期の貝輪群 (I) を示す遺跡群の増加は示唆的であり、この歴史的意義の解明は今後の課題である。

#### 謝辞

この小論をまとめるにあたり、以下の方および諸機関から、ご教示およびご配慮を賜った。文末ながら厚くお礼申し上げる次第である。

伊藤秀紀・伊藤正人・岩田 崇・鵜飼堅証・坂野俊哉・増山禎之・松井直樹・山崎 健・愛知県埋蔵文化財センターの諸氏

愛知県教育委員会・渥美町郷土資料館・磐田市埋蔵文化財センター・刈谷市郷土資料館・天理大学天理参考館・豊橋市美術博物館・南濃町教育委



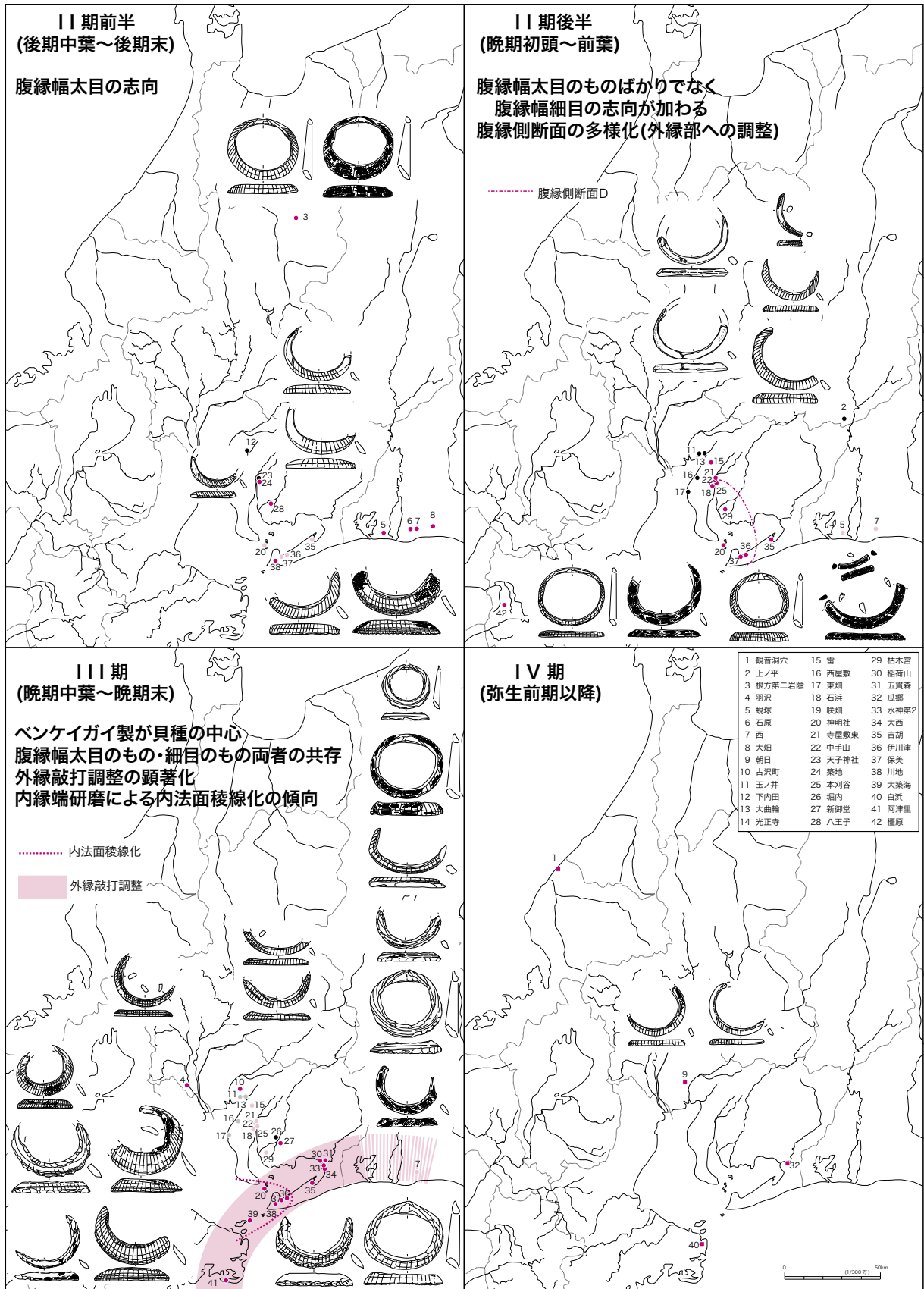


図 13 ベンケイガイ製貝輪の時期別変遷図

## 註

- 1) 筆者は先に東海地域の貝輪についてその概要と研究の展望についてまとめた(川添 2005b)。これを「前稿」と称す。以下同じ。
- 2) 阿津里貝塚および川地貝塚出土貝輪群の所属時期について、若干の所見を示す。阿津里貝塚に関して、この貝塚調査に先鞭をつけられ、貝輪を発見された鈴木敏雄氏は、「弥生期」(弥生時代後期を示しているか)以降の遺物が多いとしながらも、縄文土器・石鏃・貝輪などの出土から「三重県下唯一の縄文貝塚」とされ、その歴史的意義を強調されている(鈴木 1951)。縄文土器は前期・中期・後期のものがあり、これらの時期から遺跡の営みが始まったと考えられているようである。その一方、貝層の北端を中心に調査された立教大学博物館学講座の調査所見ではあくまで貝層は古式土師器の時期が主体であり、「砂丘上に立地するため、より古い遺物の混入することが、他の遺跡の場合より多かつただけであろう」とされている(立教大学博物館学講座 1966)。阿津里貝塚全体を覆っている貝層の時期は弥生時代後期以降が主体でありつつ、層の状態は不良ながらもその下層には地点的に縄文時代の貝層あるいは包含層が存在していた可能性は十分にある。鈴木氏は立教大学調査時より、良好な状態でかつ広範囲に渡り調査しえたようであるにも関わらず、縄文時代の層を明確に特定しえなかったようであるが、これは遺跡の状態に起因している可能性がある。しかし筆者が注目するのは、貝輪の出土と同時にサヌカイト製石鏃および剥片の出土が報告されている点である。石鏃・剥片の出土は貝輪の出土がなかった立教大学調査時には皆無である。かつ、この石鏃には『三重考古図録』には5点掲載されており、そのうち2点は有茎鏃である。三重県下有茎鏃が顕著になるのは晩期中葉以降のことから(川添 2005a)、土器の出土は知られていないものの当時期以降、かつ石器使用が終了する弥生時代中期末までの活動が営まれていた可能性が考えられる。ここではこの状況を重視し、阿津里貝塚の貝輪群をIII期に考える次第である。また、川地貝塚資料についても、1993年の調査で縄文時代晩期後葉～壱王式期までの遺物も若干出土している(原田 1995)。このことから、貝輪群の一部はこの時期のものである可能性を指摘しておく。
- 3) II期後半を主体とする遺跡の多くは稲荷山式までは続く遺跡が多く、III期を主体とする遺跡の一部には稲荷山式から始まる遺跡がある。したがって、一遺跡の貝輪群内で稲荷山式を境とした厳密な区別は難しい場合が多いのも事実である。本稿では、便宜的に稲荷山式の時期のものを含むものもII期後半を主体とする資料群を一括してII期後半に含んでいる。なお、吉胡貝塚資料は、ここではII期後半で一括しているが、今後突帯文・条痕紋期まで含めたIII期の資料が分類できるかもしれない。
- 4) 前稿同様に、「フネガイ科」はアカガイ・サトウガイ・サルボウを含んでいる。
- 5) ( )内の算用数字は図3～7の遺物番号を示す。
- 6) 「前稿」では「g」の項目は設けなかった。東海地域の資料では、裏面研磨の事例は明確ではないものの、柏子所貝塚例など他地域では若干数存在する。東海地域の資料でも今後このような資料が出土することを考え、一項目設けることとした。
- 7) ここで「製作遺跡」「使用遺跡」と称しているのは、最終結果としてその状態が窺えられる遺跡という意味である。現位置で「製作」「使用」としているということに限定している訳ではないことを付記しておく。
- 8) 内法面研磨には手持ち砥石が必要と考えられる。表面・内縁端研磨には手持ち砥石・置き砥石の両者が可能と考えられるが、特に、内法面が稜線状になる程度に内縁端を研磨する場合など、置き砥石が有効である場合もあろう。つまり、内法面とそれ以外の部分の研磨とは加工時の身体動作が異なる可能性がある。
- 9) 人骨着装資料などとの比較により、貝輪が実際に「腕輪」としての用途が想定されうる内縁の大きさを提示するには、「内周縦」と「内周横」との散布図による検討が必要十分である(渡辺 1974 など)。しかし、ここでは「計測3」との比較検討を行う目的から、「内周縦」と「内周横」の値から「内縁周」を算出し、それと貝輪法量との関係を提示する。
- 10) ほぼすべての資料で、「全厚」が腹縁部で計測されるため、このような表現をした。
- 11) 「腹縁側断面D」を行う根本的意図は、貝輪の中のみ求められない可能性もある。貝素材以外の腕輪とされているものについても合わせて検討が必要であろう。
- 12) 外縁敲打調整について若干補足をする。田邊氏は吉胡貝塚(山内清男資料)の整理を通じて、次のように述べられている。「吉胡貝塚では、仕上がりの大きさが内径6cm前後に統一されるなど、貝輪の規格が厳密に行われていたようである。貝が小型の場合は貝殻内側に見られる外縁線より外側で、大型の場合は内側で輪を作られる。このため大型の貝は(途中省略)貝殻周縁が打ち欠かれる」(田邊 2002)。確かに、現在のところ吉胡貝塚例は「仕上がりの大きさが内径6cm前後」が多いの像であるが、その機能・用途の色彩の強い「内径6cm前後」と腹縁側断面など形態的特徴に強く反映する外縁敲打調整とは同一の事情での説明はできない。田邊氏も述べられているようにこの吉胡貝塚例は「晩期の古・中段階(大宮式・稲荷山式に相当)のものが多い」とされており、本論でいうところのII期後半からIII期の初めにわたって見られる資料と位置づけられる。時期幅を含めて、これらの資料群を同一の工程上に配置して製作工程を説明するには、さらに分析・検討が必要であろう。

## 参考文献

- 上野修一 1990 『縄文時代の腕飾り』『月刊文化財』326、35～39頁、文化庁。
- 大和久震平ほか 1966 『柏子所貝塚—第2次・第3次発掘調査報告書—』秋田県教育委員会・能代市教育委員会。
- 忍沢成視 2000 『縄文時代における貝製装身具の実態』『貝塚博物館紀要』27、1～24頁、千葉県立加曽利貝塚博物館。
- 忍沢成視 2001 『縄文時代における主要貝輪素材ベンケイガイの研究—千葉県成田市荒海貝塚産資料と千葉県天津小湊町浜波海岸採集の現生打ち上げ貝の検討から—』『史館』31、17～48頁、史館同人。
- 忍沢成視 2005 『貝輪素材として選択された貝輪の流行の背景—フネガイ科の貝輪素材の分析を中心として—』『動物考古学』22、37～63頁、動物考古学研究会。
- 片岡由美 1983 『貝輪』『縄文文化の研究』9、231～241頁、東京 雄山閣出版。
- 金子浩昌・忍沢成視 1986 『骨角器の研究 縄文篇 I・II』東京 慶友社。

- 川口徳治朗 1989『縄文時代貝塚出土の貝製品に関する用途的研究』昭和63年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書。
- 川添和暁 2005a「東海地域における縄文時代後晩期の石鏃について」『関西縄文論集2』1～12頁、関西縄文文化研究会。
- 川添和暁 2005b「東海地域における貝輪について—その製作・消費・廃棄の流れ—」『考古学フォーラム』18、60～77頁、考古学フォーラム編集部。
- 木村幾多郎 1980「貝輪」『新延貝塚』87～91頁、敦手町教育委員会。
- 清野謙次ほか 1920『備中国浅口郡大島村津雲貝塚発掘報告』京都帝国大学文学部考古学研究所報告5。
- 九州縄文研究会 2005『九州の縄文時代装身具』九州縄文研究会 沖縄大会実行委員会。
- 酒詰伸男 1941「貝輪」『人類学雑誌』56-5、1～24頁、日本人類学会。
- 新東晃一 1991「南九州の縄文後期の貝輪—特に川上貝塚出土の貝輪製作工程について—」『南九州縄文通信』5、50～55頁。
- 田邊由美子 2002「吉胡貝塚出土の骨角貝製品」『山内清男考古資料13』46～53頁、奈良文化財研究所。
- 春成秀爾 1980「縄文晩期の埋葬原理」『小田原考古学研究会報』9、44～60頁、小田原考古学研究会。
- 樋口清之 1952「腕輪考」『上代文化』23、9～19頁、国学院大学考古学会。
- 福田友之 1995「北日本におけるベンケイガイ交易—津軽海峡を渡った貝輪—」『北海道考古学』31、125～146頁、北海道考古学会。
- 堀越正行 1985「関東地方における貝輪生産とその意義」『古代』80、311～322頁、早稲田大学考古学会。
- 堀越正行 1990「縄文時代の貝製腕輪」『月刊文化財』326、40～45頁、文化庁。
- 堀越正行・田多井用章 1996「東京大学蔵の船橋市古作貝塚出土遺物」『千葉県史研究』4、75～90頁、千葉県。
- 永井昌文 1972『山鹿貝塚』山鹿貝塚調査団。
- 松永幸男 1995「福岡県遠賀郡芦屋町山鹿貝塚採集貝製腕輪の紹介」『研究紀要』2、31～46頁、北九州市立考古博物館。
- 安川英二 1988「貝製品」『伊川津遺跡』215～248頁、渥美町教育委員会。
- 八幡一郎 1928「最近発見された貝輪上蓋附土器」『人類学雑誌』43-8、357～366頁、東京人類学会。
- 渡辺 誠 1972「縄文時代における貝製腕輪」『古代文化』21-1、1～8頁、古代学協会。
- 渡辺 誠 1973「装身具の変遷」『縄文土器と貝塚』古代史発掘2、147～151頁、東京 講談社。
- 渡辺 誠 1974「赤貝の腕輪」『えとのす』1、89～93頁、東京 新日本図書株式会社。

#### 報告書など

- 愛知県教育委員会 1982『朝日遺跡II』。
- 麻生 優 1961『西貝塚』磐田市教育委員会。
- 市原寿文 1967「遠江石原貝塚の研究—縄文後期における地域性的の問題をめぐって—」『人文論集』18、25～50頁、静岡。
- 市原寿文編 1981『袋井市大畑遺跡—1951・1977・1978・1980年度の発掘調査—』袋井市教育委員会。
- 磯部幸男・井関弘太郎・杉崎 章・久永春男 1960『咲畑貝塚』愛知県知多郡師崎町立師崎中学校。
- 伊藤正人・川合 剛 1993『名古屋の縄文時代 資料集』名古屋市見晴台考古資料館。
- 岩瀬彰利編 1995『大西貝塚』豊橋市教育委員会。
- 岩瀬彰利編 1996『大西貝塚(II)』豊橋市教育委員会。
- 岩瀬彰利編 1998『水神貝塚(第2貝塚)』豊橋市教育委員会。
- 大参義一・加藤安信・山田 猛・川合 剛ほか 1989『刈谷市史 第五巻 資料 自然・考古』刈谷市。
- 大山 柏 1923「愛知県渥美郡福江町保美平城貝塚発掘概報」『人類学雑誌』38-1、1～25頁、人類学会。
- 小川栄一 1933「第七 庭田及羽沢貝塚」『岐阜県史蹟名勝天然記念物調査報告書』2、36～47頁、岐阜県。
- 小野田勝一 1991『渥美町史 考古・民俗編』渥美町。
- 小野田勝一・安井俊則ほか 1993『川地遺跡』渥美町教育委員会。
- 小野田勝一・春成秀爾・西本豊弘 1988『伊川津遺跡』渥美町教育委員会。
- 小野田勝一・芳賀 陽・安井俊則 1995『伊川津遺跡』渥美町教育委員会。
- 清野謙次 1969『日本貝塚の研究』東京 岩波書店。
- 紅村 弘 1963『東海の先史遺跡 総括編』名古屋 名古屋鉄道。
- 小金井良精 1923「日本石器時代人の埋葬状態」『人類学雑誌』38-1、25～47頁、人類学会。
- 後藤守一ほか 1957『蛸塚遺跡 その第一次発掘調査』浜松市教育委員会。
- 後藤守一ほか 1958『蛸塚遺跡 その第二次発掘調査』浜松市教育委員会。
- 後藤守一ほか 1960『蛸塚遺跡 その第三次発掘調査』浜松市教育委員会。
- 後藤守一ほか 1961『蛸塚遺跡 その第四次発掘調査』浜松市教育委員会。
- 後藤守一ほか 1962『蛸塚遺跡 総括編』浜松市教育委員会。
- 後藤守一ほか 1963『瓜郷』豊橋市教育委員会。
- 小林知生ほか 1967「5 岐阜県根方岩陰」『日本の洞穴遺跡』175～187頁、東京 平凡社。
- 小林知生・高平修一・長谷部学・早川正一 1966『保美貝塚』渥美町教育委員会。
- 斎藤弘之 2004「3 堀内貝塚」『新編 安城市史』10 資料編 考古、12～25頁、安城市。
- 末永雅雄 1961『榎原』奈良県教育委員会。
- 杉崎 章ほか、1958『西屋敷貝塚』八幡公民館郷土史編纂室。
- 杉原莊介・外山和夫 1967「豊川下流域における縄文時代晩期の遺跡—稲荷山遺跡・五貫森遺跡・大蚊里遺跡・水神平遺跡の調査—」『考古学集刊』2-3.37～101頁、東京考古学会。

鈴木敏雄 1951『三重県越賀村考古誌考 志摩郡越賀村阿津里貝塚並に附近関係地に於ける遺跡と遺物』桑山文庫蔵。

鈴木とよ江 1995『貝ス遺跡・新御堂遺跡』西尾市教育委員会。

萩本 勝ほか 1990『白浜遺跡発掘調査報告書』本浦遺跡群調査委員会。

早野浩二ほか 2005『朝日遺跡』『年報 平成 16 年度』13～19 頁。愛知県埋蔵文化財センター。

原田 幹編 1995『川地遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。

久永春男・杉浦 知 1998『築地貝塚遺物概報』刈谷市教育委員会。

久永春男ほか 1972『伊川津貝塚』渥美町教育委員会。

廣嶋一良 1986『観音洞穴遺跡』『福井県史 資料編 13 考古—本文編—』147～149・194～195 頁、福井県。

福岡猛志・楠美代子 2003『新編 東浦町誌 資料編 原始・古代・中世』愛知県知多郡東浦町。

藤本健三・野村宗作・渡辺 誠 1995『岐阜県丹生川村根方岩陰遺跡発見の貝輪』『飛騨と考古学』275～281 頁、飛騨考古学会。

文化財保護委員会 1952『吉胡貝塚』

中村文哉・出口 剛 1992『平井稲荷山』小坂井町教育委員会。

牧富也ほか 1983『枯木宮貝塚』『西尾市史 自然環境 原始古代』802～901 頁、西尾市史編纂委員会。

増山禎之 2003『国指定史跡吉胡貝塚 平成 13・14 年度範囲確認調査の概要報告書』田原市教育委員会。

松井直樹 2003『八王子貝塚 IV』西尾市教育委員会。

三重県教育委員会 1954『三重考古図録』三重県。

宮腰健司 1992『朝日遺跡 III』愛知県埋蔵文化財センター。

宮下健司 1988『骨角器・牙器・貝器』『長野県史 考古資料編 全一卷(四) 遺構・遺物』411～413 頁、長野県。

山下勝年編 1989『神明社貝塚』南知多町教育委員会。

吉田富夫・和田英雄 1971『名古屋市中区古沢町遺跡発掘調査報告書』名古屋市教育委員会。

立教大学博物館学講座 1966『3. 大築海貝塚の発掘調査』『MOUSEION』12、46～50 頁。

渡辺 誠編 2000『羽沢貝塚発掘調査報告書』南濃町教育委員会。



# 弥生時代の大型土坑

## —東海地域を中心として—

● 蔭山 誠一

弥生時代の尾張地域の遺跡においてよくみられる大型土坑について、形態や埋土の特徴から、その機能の主体を生活道具類の廃棄と考え、遺跡中では居住域に多く、墓域に少ないことを明らかにした。さらに阿弥陀寺遺跡の事例から大型土坑が堅穴住居の周囲 10m 程の範囲に掘られ、被熱痕跡がある埋土の土坑が堅穴住居群の間の空閑地に多いことを推定した。また東海地域の弥生時代～古墳時代前期前半にかけての遺跡にみられる大型土坑についても分析し、尾張地域における占地と同様な特徴を確認した。東海地域では沖積微高地に立地する遺跡において多くの大型土坑が掘られ、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の遺跡に少ない傾向を指摘した。

### 1 はじめに

尾張地域における弥生時代の集落遺跡を発掘調査すると、堅穴住居、掘立柱建物、井戸、方形集溝墓、環濠、土坑、溝など様々な形態をした遺構が検出できる。筆者は、近年当センターにおける発掘調査に携わる中で、比較的土器など遺物が多く出土し、阿弥陀寺遺跡の報告などにおいて焼土や炭、灰層を堆積する土坑として分析された大型土坑について、当地域の弥生時代集落を考える資料にならないだろうかという認識を抱いていた。

今回分析するような大型土坑は、1967年に石野博信氏により弥生時代における貯蔵のための施設としてとりあげられた「貯蔵施設の三形態」である「屋内小土坑」、「屋外土坑」、「高床倉庫」の「屋外土坑」の一部に当たり、弥生時代の貯蔵施設について「中期以降の三者の実態を要約すれば、住居に接していくつかの屋外土坑が付設され、住居内には小土坑が、離れて集落の一面には高床倉庫が建てられるという形態をとる」としてまとめられた「屋外土坑」の恐らく大部分に当たるものと思われる。石野氏が当時全国で蓄積された弥生時代集落の調査事例を網羅して分析された労作であり、各地の屋外土坑についてその機能等にも追求された研究で

ある（石野 1967）。今回の分析は貯蔵施設としての大型土坑ではないが、大型土坑の占地の結論は石野氏の屋外土坑の実態とされたものと同じものを想定しているものと考えられる。同様に弥生時代前半期の北部九州地域を中心に分布する袋状堅穴についても、弥生時代の貯蔵施設として武末純一氏が堅穴住居との関係から高床倉庫と推定される掘立柱建物との集落内における位置関係から分析を試みられている（武末 1991）。また弥生時代の北部九州地域に展開する墓域内にある「墓域縁土坑」について、多くの土器類が出土する類例から墓前における祭祀に関する分析がある（川上 1995）。

以上から考えると弥生時代の遺跡において、様々な形態をとり、広く展開する遺構として認識できる可能性が高いように思われる。そのため弥生時代における遺跡の分析・研究の中では、集落の広がりや変遷を考えるための材料にはなってきたが、個別の研究素材としてはあまりとりあげられてこなかったものといえるだろう。

よって本論では、弥生時代の東海地域における集落遺跡において、大型土坑がどのように展開するのか、立地との関係、時期的変遷、遺跡内における占地の特徴について検討したい。尚、本論では土坑の平面における長径が 1.0m 以上のものを主体に分析し、また長径 0.5m 以

上1.0m未満のものを中型土坑としてとりあげる（溝状の遺構は除く）。

## 2 大型土坑の特徴

まず、大型土坑の特徴について弥生時代の発掘資料が多く、遺跡立地等条件が均質な尾張地域における遺跡調査の事例をもとに考えたい（表1）。

### (1) 大型土坑の形態分類とその傾向

大型土坑の規模は、大きいもので長径が10mを超し、短径においても3mを超えるものがあるが、全体的には短径が1m前後であり、竪穴住居より小さい。遺構の深度は規模により様々であるが、30cm～50cm前後のものが多いように思われ、全体的には竪穴住居よりは深い遺構として検出される場合が多い。

形態に関しては、一色青海遺跡において平面の形態分類を、阿弥陀寺遺跡において埋土の分類がされている。この結果からは、土坑の使われ方には焼土と灰層・炭層が互層になるものや炭層が顕著にみられるもの、多量の土器が出土するもの、それらがあまりみられないものが存在することから、機能の違いを推定できるが、土坑の平面や断面形態との対応関係はあまり認められていない。また焼土と灰層・炭層のラミナ堆積が顕著に認められる土坑は、土坑内における火の利用も考えられるが、土坑内の壁面が被熱しているものはない。阿弥陀寺遺跡の報告に指摘があるように、集落遺跡の土坑の埋土は違いがあり分類は可能ではあるが、ほとんどの土坑に炭化物は含まれ、多くは程度の差とも考えられる。

よって当地域にみられる弥生時代の大型土坑の大部分は、井戸や土坑墓を除くと形態と埋土などの特徴から廃棄を主体とした性格のものといえる。

### (2) 遺跡内における占地

今回対象にしている大型土坑の遺跡内における分布について考える。

#### 居住域に分布する土坑

遺跡の居住域に展開する土坑の存在について

は、土坑自体が竪穴住居や掘立柱建物と同様、遺跡における居住域を構成する要素と考えられて分析されることもあるので、ほとんどの遺跡の居住域内にみられる。しかし、遺構の検出状況において重複が認められる大型土坑と竪穴住居・掘立柱建物等の建物遺構は、検出状況からは同時存在があり得ないものと考えられ、建物遺構との占地の関係の変化がみられるものといえる。

実際に竪穴住居と掘立柱建物が検出され、大型土坑が10基以上見つかった遺跡には、弥生時代前期・中期前葉・中期中葉前半・中期中葉後半・中期後葉・後期・古墳時代前期の朝日遺跡、弥生時代前期頃の三ツ井遺跡、山中遺跡、弥生時代中期前葉～中期中葉の志賀公園遺跡、猫島遺跡、弥生時代中期中葉～中期後葉の阿弥陀寺遺跡、大淵遺跡、一色青海遺跡、勝川遺跡苗田地区、弥生時代後期末～古墳時代前期前半の廻間遺跡がある。厳密な時期分類ができていない朝日遺跡を除くと、ほぼ同一時期において多数の竪穴住居が検出されている猫島遺跡、阿弥陀寺遺跡、大淵遺跡、一色青海遺跡では竪穴住居と大型土坑の重複関係が比較的多くみられ、阿弥陀寺遺跡竪穴住居SB28、猫島遺跡00Aa区竪穴住居SB07等のように1棟の竪穴住居に数基重複・隣接して分布するものがある。一方当然であるが、建物遺構の検出数が少ない遺跡では異なる時期と考えられる建物遺構とは重複がみられるが、ほぼ同一時期においては建物遺構と重複する大型土坑は比較的少なく、大型土坑は建物遺構の周囲10m程の範囲に分布する。ただし、猫島遺跡、阿弥陀寺遺跡、大淵遺跡、一色青海遺跡においても、ほぼ同一時期に分類される建物遺構との関係では、重複する大型土坑より、建物遺構の周囲に分布し重複しない大型土坑の方が多い。

以上の分析からは、大型土坑は竪穴住居等の建物遺構と重複する立地条件において遺跡内に占地し、遺構の検出状況から考えれば、竪穴住居等建物遺構が検出されない（検出できていない）部分（建物遺構の周囲の部分）からも検出される（検出できる）遺構の形態的条件をもつと同時に、相対的には竪穴住居等建物遺構の周囲（周囲10m程の範囲）に占地する条件を持

つものと考えられる。弥生時代中期後葉以後に多く検出される井戸は、朝日遺跡、一色青海遺跡、八王子遺跡、阿弥陀寺遺跡のように旧河道の際や谷状の窪地等、居住域の縁辺にみられ、建物遺構の周囲 10m の範囲より遠くに分布する傾向がある。また弥生時代中期の猫島遺跡、大淵遺跡、一色青海遺跡、阿弥陀寺遺跡のように堅穴住居とほぼ同数程度（それ以上の場合もある）、検出される状況がある。

### 墓域に分布する土坑

ここでは方形周溝墓・墳丘墓が分布する範囲を墓域と考え、その範囲内に分布する大型土坑を取り上げる。ほぼ同一時期において方形周溝墓・墳丘墓内およびその周辺に分布する大型土坑が検出されているのは、弥生時代前期頃の三ツ井遺跡、山中遺跡、弥生時代中期前葉～中期中葉の猫島遺跡、志賀公園遺跡、弥生時代中期後葉の阿弥陀寺遺跡、一色青海遺跡、弥生時代後期の山中遺跡、古墳時代前期初頭の廻間遺跡、土田遺跡、西上免遺跡、弥生時代中期前葉～古墳時代前期の朝日遺跡等がある。また土坑墓と考えられるものもある。この中で、明確に大型土坑と方形周溝墓・墳丘墓と重複関係が認められるのは、三ツ井遺跡、猫島遺跡、志賀公園遺跡、弥生時代後期の山中遺跡、古墳時代前期初頭の廻間遺跡、土田遺跡、西上免遺跡があり、弥生時代中期の志賀公園遺跡の一部、弥生時代後期の山中遺跡、朝日遺跡の一部のように方形周溝墓・墳丘墓内にある埋葬主体部に関係する土坑と土器棺に伴う土坑と考えられるものもあるが、ほぼ同一時期か近い時期において墓域と居住域が隣接する猫島遺跡、志賀公園遺跡、廻間遺跡等では、大型土坑が方形周溝墓・墳丘墓の周溝と重複している場合もあり、土坑の性格が必ずしも墓域に関連するものではない可能性がある。西上免遺跡の墳丘墓では大型土坑と墳丘墓に重複関係が認められるが、報告されているように墳丘墓に関連する祭祀等に伴う土坑の可能性もある。また阿弥陀寺遺跡、一色青海遺跡では大型土坑（ここでは井戸も含む）との重複はなく、井戸等が埋没しないまま居住域から墓域に変遷する状況を示している可能性が高い。弥生時代前期頃の三ツ井遺跡では方形周溝墓と報告される方形状に廻る溝があり、堅穴住

居の周溝とも考えられるが、時期分類が不明であるので、居住域から墓域への変遷する状況を示しているものと考えておきたい。

以上の分析からは、方形周溝墓・墳丘墓の埋葬主体部に関係する土坑、土器棺に伴う土坑を除くと墓域に伴う大型土坑は少ないといえる。

### (3) 大型土坑の占地からみた遺跡の復元

ここでは発掘調査報告において土坑埋土の分類が行われ、居住域が広く調査されている阿弥陀寺遺跡における弥生時代中期中葉前半の遺構配置について分析したい。阿弥陀寺遺跡のⅠ期とされる堅穴住居、掘立柱建物、大型・中型土坑、溝等の遺構を示したのが図 1 で、北東から南西にのびる尾根状微高地上全体に遺構が形成されていることがわかる。この中で、堅穴住居が地形の傾斜に沿って北東から南西に分布する 4 群に分かれることがわかる。大型・中型土坑は一部堅穴住居と重複するものがあるが、大きくは堅穴住居の周辺に分布することが分かる。興味深いことに、土坑の埋土 A 類と分層された単一層からなり分層できない土坑は堅穴住居周辺に混在して分布するものが多く、埋土 C 類と分類された焼土と灰層・炭層が互層になるものや炭層が顕著にみられる大型・中型土坑は北 1 堅穴住居群と北 2 堅穴住居群の間の地点や北 2 堅穴住居群と南 1 堅穴住居群の間の地点、南 1 堅穴住居群と南 2 堅穴住居群の間になる地点を中心にやや集まって分布する傾向が見られ、埋土の状況が異なる二者がやや異なった地点に分布する。この状況から考えると、弥生時代中期中葉前半の阿弥陀寺遺跡の人々は、堅穴住居・掘立柱建物等建物遺構の周囲に大型土坑を掘り、さらに隣の堅穴住居群との境界部分（堅穴住居の周囲 10m 程のところ）に掘った大型土坑の中に焼土・灰層・炭層が埋まっていく（埋めた？）行為が行われた指向性が認められるのである。また大型土坑の中でも土器等の遺物が比較的顕著にみられるのは堅穴住居の近在のものであり、住居から離れるにつれて土器等の廃棄が少なくなる傾向がある様に思われる。

同様な状況は弥生時代中期後葉の一色青海遺跡 95Ca 区・95Cb 区・96A 区にもみられる。また、弥生時代中期中葉～後葉の西上免遺跡に

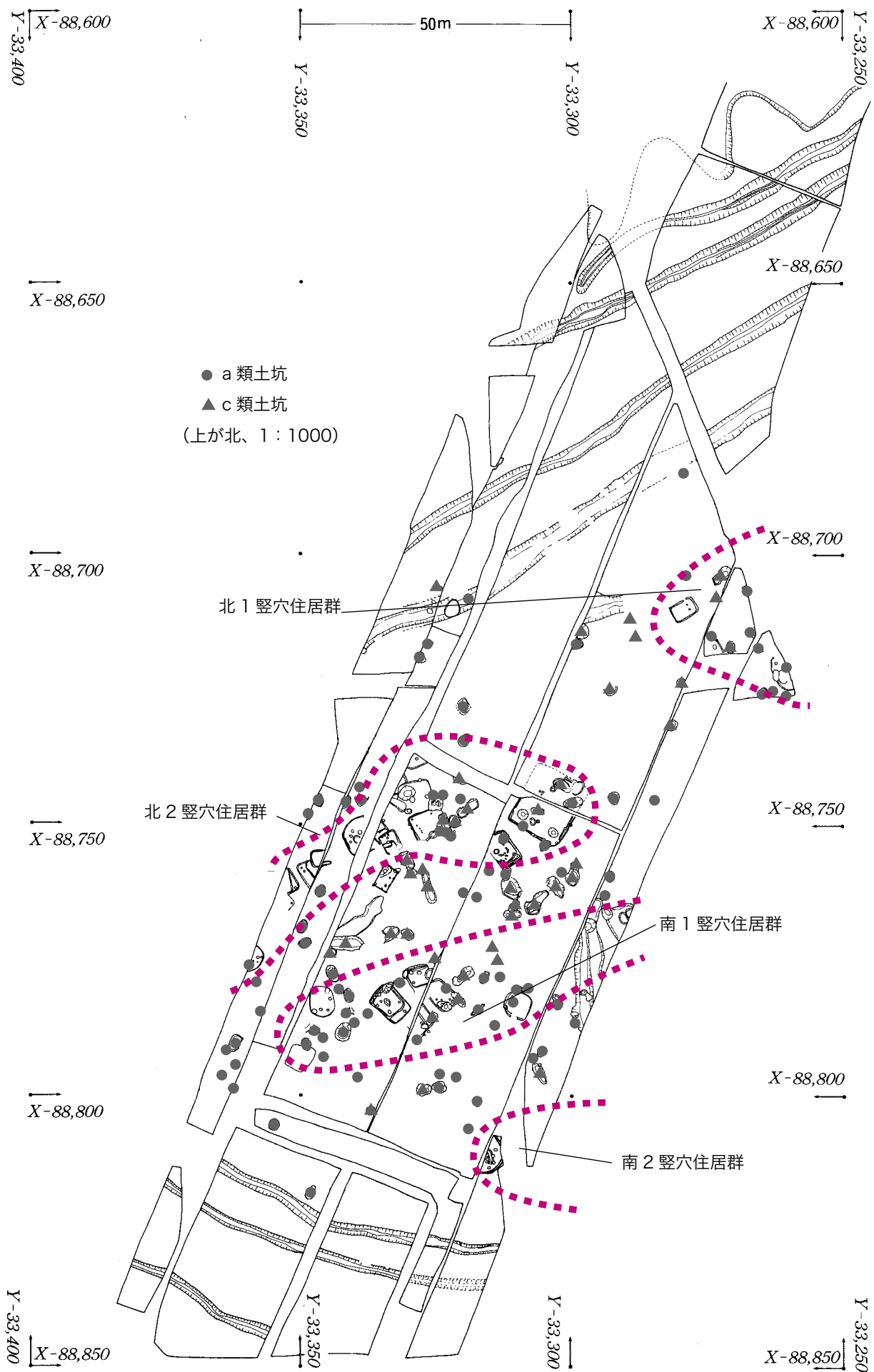


図1 阿弥陀寺遺跡の大型土坑 (弥生時代中期中葉前半)



において指摘されているように、地点により分布する土坑の特徴が異なる状況も同様な傾向を示しているのかもしれない。

### 3 東海地域における大型土坑の展開

それでは先に触れたような状況が、異なる条件（立地、地域等）の遺跡においてもみられるであろうか。弥生時代における東海地域の大型土坑の有無を検討したのが表1である。

#### (1) 遺跡立地と時期的変遷

沖積微高地（氾濫原地帯、谷底平野、扇状地縁辺沖積微高地を含む）に立地する遺跡で大型土坑が10基以上検出されている遺跡は、愛知県では弥生時代前期の月繩手遺跡・山中遺跡・三ツ井遺跡、弥生時代前期・中期前葉・中期中葉前半・中期中葉後半・後葉・後期の朝日遺跡、弥生時代中期中葉後半・後期・古墳時代前期初頭の八王子遺跡、弥生時代中期前葉～中期中葉の志賀公園遺跡・猫島遺跡、弥生時代中期前葉～中期後葉の西上免遺跡、弥生時代中期中葉前半・中葉後半・中期後葉・後期の阿弥陀寺遺跡、弥生時代中期後葉の大淵遺跡・一色青海遺跡・勝川遺跡苗田地区、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の山中遺跡、弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の廻間遺跡がある。三重県では弥生時代前期の村竹コノ遺跡、弥生時代中期前葉の蔵田遺跡、弥生時代中期後半の下川原遺跡、弥生時代後期の堀町遺跡がある。この他10基以上ある可能性が高い遺跡は弥生時代前期の愛知県松河戸遺跡、弥生時代中期の三重県納所遺跡がある。

洪積台地（丘陵、河岸段丘を含む）の遺跡では愛知県では弥生時代後期～古墳時代前期初頭の見晴台遺跡、三重県では、弥生時代中期前葉～中葉の東庄内B遺跡、弥生時代中期中葉前半の和遅野遺跡、弥生時代中期（中葉主体）の片野遺跡、弥生時代中期後葉の菟上遺跡・永井遺跡、弥生時代後期の堀町遺跡・小谷赤坂遺跡がある。この他10基以上ある可能性が高い遺跡は弥生時代中期中葉前半の三重県古里遺跡がある。

以上の弥生時代前期から古墳時代前期初頭の

遺跡において、大型土坑の多くつくられる遺跡は沖積微高地に立地する遺跡に多く、洪積台地に立地する遺跡は少ない傾向がある。大型土坑の時間的変遷では、弥生時代前期には既に多く掘られており、以後弥生時代中期後葉の遺跡で多数検出されている。弥生時代後期～古墳時代初頭においては、先に分析した墓域に関連する山中遺跡、西上免遺跡、居住域に関連する廻間遺跡、朝日遺跡、八王子遺跡等、尾張地域の沖積地において比較的多数の大型土坑がみられるが、他の地域においては堅穴住居等の遺構のあり方から考えると大型土坑が少ない傾向がある。ただし、三重県辻子遺跡のように沖積地の遺跡や洪積台地に立地する弥生時代後期の環濠集落である小谷赤坂遺跡では比較的多くの大型土坑がみられ、異なる状況がある点は留意される。

#### (2) 洪積台地上の弥生時代遺跡にみられる大型土坑

前節において、東海地域における弥生時代の大型土坑について、洪積台地上に立地する遺跡に少ない傾向を指摘した。この傾向は大きくは変わらないと思われるが、洪積台地上の遺跡においても沖積微高地に立地する遺跡と同様に大型土坑が掘られることは重要である。

大型土坑の遺跡内における占地を検討すると、堅穴住居や掘立柱建物等の建物遺構と重複関係があるものは、弥生時代中期後葉の愛知県橋良遺跡において2基、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の見晴台遺跡で数基、南山畑遺跡で1基、三重県では、弥生時代中期前葉～中葉の東庄内B遺跡で2基（1棟の堅穴住居に）、弥生時代中期後葉の菟上遺跡において5基（1m内外に隣接するものが8基）、弥生時代後期小谷赤坂遺跡において2基、古墳時代前期後半の三重県新畑遺跡において3基（堅穴住居2棟に）あるだけで、大型土坑は建物遺構の周囲に分布し、重複する例がある遺跡は比較的多数の堅穴住居が検出されている遺跡に限られる。また墓域との関連でも弥生時代中期（中葉主体）の片野遺跡において、時期は不明であるが方形周溝墓と重複する関係にある大型土坑の例があ

のみで、先に触れた尾張地域の大型土坑の占地の傾向がより明瞭に確認できる。

形態的特徴を細かく分析できていないが、楕円形から隅丸長方形の平面形態で断面丸底状の様々な形態をしており、規模も尾張地域の状況と類似するように思われる。

### (3) 縄文時代晩期の遺跡にある大型土坑

弥生時代前期の東海地域において、すでに今回分析したような大型土坑が存在することは明らかで、縄文時代晩期にさかのぼって存在する可能性も高い。縄文時代後期～晩期の岐阜県西田遺跡や愛知県三斗目遺跡、縄文時代晩期の三重県蛇亀橋遺跡では、今回の大型土坑に分類できる土坑が竪穴住居周辺に分布する傾向がみられる。一方、愛知県牛牧遺跡では竪穴住居の周辺に土坑墓とされる大型土坑が多数みられ、愛知県麻生田大橋遺跡では土器棺墓の分布と径1.0m前後の平面円形状、断面やや袋状の形態が復元できる土坑が並行する時期に存在する状況が見られる。また三重県森添遺跡においては大型土坑が住居跡、配石遺構、焼土面などとともに多数あり、時期的変遷の多様さと同時に重複関係も多数みられる。

東海地域における縄文時代晩期の遺跡では、大型土坑が平面楕円形状断面丸底状のものと平面円形状断面袋状のものに大きく分類でき、前者は土坑墓と分類されるものが多く、居住域の内部から近在に分布する可能性がある。

## 4 まとめ

以上の分析において、東海地域弥生時代の遺跡における大型土坑の主に占地の状況について分析したが、遺跡の居住域内部において竪穴住居等建物遺構と分布するものの、竪穴住居との重複は少ないことは明らかで、竪穴住居を始めとする建物遺構が存在する地点が人間活動の拠点とするならば、大型土坑が分布する地点はその縁辺といえる。ここではさらに主に居住域に分布する大型土坑の特徴について、大型土坑の占地から朝日遺跡と菟上遺跡を分析し、その補足をしてまとめとしたい。

### (1) 大型土坑のない地点

朝日遺跡の南居住域において基盤砂層上に弥生時代の遺物包含層を堆積しない黒色土の堆積が確認される地点が数カ所ある。これらの部分は弥生時代の朝日遺跡において遺構の掘削が地中深くに及ばなかった地点であり、掘削されなかった可能性が高い場所である。既に指摘されているように遺跡南居住域を縦断する大溝等の土手状の遺構（堆積）が存在した可能性のために遺構が形成されなかった可能性もあるが、その他にもこのような地点が散在することから考えると、今回詳細な分析はできないが弥生時代の一定期間窪地であった可能性が高い地点と考えられる。したがって朝日遺跡の南居住域内の場合、竪穴住居を始めとする土坑（大型土坑から小柱穴まで）・溝などがどのような状態で変遷していったか細かな変遷をたどることは困難であるが、大型土坑が環濠に囲まれた居住域の内部においても、窪地状になる地点には分布せず、窪地の周辺に分布する状況がみられる。この状況は性質の異なる可能性があるが、弥生時代遺跡の集落外側の窪地・谷・後背湿地において大型土坑が分布しない状況と類似する。

また集落域が比較的広範囲に調査された弥生時代中期後葉の菟上遺跡においては、居住域の状況が復元されており、大型掘立柱建物が検出された地点においてはあまり大型土坑が分布せず、反対に幅20m程の谷であるST802の延長上にあたる窪地状になる地点にまとまった数の大型土坑が検出されており、周囲の丘陵微高地状に立地する竪穴住居群から周囲10m程の中に入る。一定の継続期間をもつ遺跡であり、細かな遺構変遷は不明であるが、報告書の分析においては、建物の規模・形態、出土遺物の分布も鑑み、大型竪穴住居と大型掘立柱建物を中心とする区域を「集落中枢部」と位置付け、谷ST802を囲む丘陵微高地の竪穴住居群を含む区域を「一般成員居住区・工房区」として役割分担が存在したことを指摘されている。先に述べた竪穴住居が形成される空間に大型土坑が少ない傾向のより明確に区分された状態を菟上遺跡の大型竪穴住居と大型掘立柱建物が存在する周囲の地点において形成されていたものと考え

られる。

## (2) 集落研究のための評価

以上の分析から導き出された大型土坑の占地のあり方を模式的にあらわしたのが図2である。居住域内部において竪穴住居の周囲10m程の範囲を中心に掘られ、隣接する竪穴住居群との中程に火の痕跡のある堆積物が埋まる行為が行われた。そして住居の周囲20mの範囲でほとんどが掘られ、周縁やその外縁の大型土坑として掘られるものとして井戸や墓域の周縁にある土坑墓がある。このような状況が認められるならば、尾張地域の沖積微高地にみられる大型土坑が竪穴住居等と重複する地点が多い遺跡

は、居住域における地点（役割の違う場所）の変換が行われた痕跡を残すものと考えられ、細かな遺跡変遷が究明できるならばより多様な遺構変遷が存在した可能性が高いものと考えられる。またこのような状況が沖積微高地に立地する尾張地域の弥生時代における集落構造の特徴ともいえないであろうか。一方で、洪積台地に立地する弥生時代の集落において、大型土坑が掘られない理由（単にゴミとなった遺物を集落外に持ち出すのか等）についても考えていく必要があるように思われる。今後の課題としたい。

本論を作成するにあたり、木野本和之氏・川北秀実・水野多栄氏のご教授、ご協力を得た。記して感謝の意としたい。

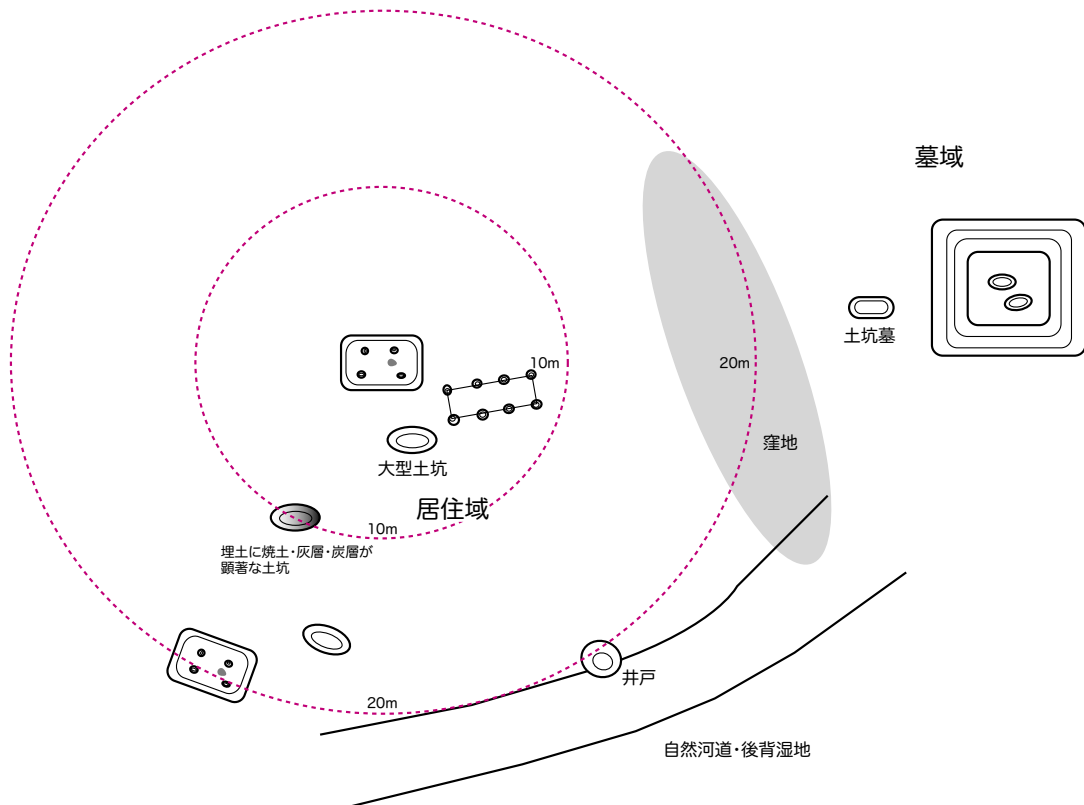


図2 弥生時代における大型土坑の占地

### 参考文献

本論では、報告書による遺跡事例の分析についての研究を取り上げていない。今後他地域における各遺跡の分析事例を検討していく必要があるものと思われる。尚、今回取り上げた報告書の引用文献は各遺跡の遺構データとともに表1において記述した。

石野博信 1967 「貯蔵施設の貯蔵施設」『関西大学考古学研究年報1』。

武末純一 1991 「倉庫の管理主体—北九州の弥生拠点集落例から—」『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念事業会。

川上洋一 1995 「弥生時代の墓地における土器出土状況の分析—北部九州と吉備を中心にして—」『考古学研究』第42巻第2号、考古学研究会。

表1 東海地域における弥生時代の大型土坑

県名	市町村名	遺跡名	立地	調査面積 (㎡)	時期	弥生住居等	大型土坑	備考	文献
愛知県	二宮市	三ツ井遺跡	沖積隆起地	1,210	縄文時代後期	0棟 (報告不注)	大型土坑	4	田中伸明、見野剛編『三ツ井遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第87集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	津田市	三斗目遺跡	沖積隆起地	約1,300	縄文時代後期～晩期	遺構26基	約30		余谷昭彦編1993『三斗目』三本松出版、『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第47集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	名古屋府 牛久保遺跡	沖積隆起地		1,250	縄文時代後期～晩期	遺構43基	35基		川和伸編2001『牛久保遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第95集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
岐阜県	丹生川村	西田遺跡	沖積隆起地	約3,800	縄文時代後期～晩期	遺構20棟 (平式式含む)	58		谷口和久編1997『西田遺跡』『岐阜県文化財保護センター調査報告書第28集』岐阜県土木部、財団法人 岐阜県文化財保護センター
三重県	長古屋町	見野台遺跡	低地地区		縄文時代晩期		3		伊藤孝史・野口孝子1993『見野台遺跡調査報告書―遺構編―』名古屋市長官舎古資料館
三重県	津島町	森家遺跡	河岸段丘中位部	約2,000	縄文時代晩期	遺構15棟	21		三島隆次・柳村靖典1988『森家遺跡調査報告書』関西学芸会編『関西学芸会』
三重県	津島町	松島遺跡	低丘段丘台約隆起	約64	縄文時代晩期後半	遺構2棟	1		新田洋1981『志磨郡野町松島遺跡』『昭和65年度埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会
三重県	津島町	松島遺跡	低丘段丘台約隆起	約300	縄文時代晩期後半	遺構2棟			新田洋1981『志磨郡野町松島遺跡』『昭和66年度埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会
愛知県	一宮市	三ツ井遺跡	沖積隆起地	1,210	縄文時代晩期	0棟	2以上 (報告で1は6)		田中伸明、見野剛編『三ツ井遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第87集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	津川市	麻生田大塚遺跡	沖積隆起地	約9,600	縄文時代晩期末(～弥生時代初期)	遺構234棟	32基以上		編文野代編1991『麻生田大塚遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第21集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	名古屋府	月橋手遺跡	沖積隆起地	1,85	弥生時代前期	0棟	12		松田田・宮原健司編1990『月橋手遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第12集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	名古屋府	月橋手遺跡	沖積隆起地	320	弥生時代前期	0棟	25		松田田・宮原健司編1994『月橋手遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第15集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	一宮市	八王子遺跡	沖積隆起地	2,374	弥生時代前期	遺構3棟、区画溝、方形溝溝渠、杖の溝あり	12		橋上昇編2001『八王子遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第25集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	豊田市	野口北出遺跡	沖積隆起地	1,274	弥生時代前期	遺構1棟	4以上		北條京子2000『野口・北出遺跡発掘調査報告書』稲沢市福祉保健部・稲沢市内遺跡発掘調査委員会
三重県	松阪市	柳屋遺跡	河岸段丘	約1,000	弥生時代前期	遺構1棟	0		下村登良編1981『柳屋遺跡発掘調査報告書』『松阪市文化財調査報告5-3』松阪市教育委員会
三重県	松阪市	上寺遺跡	河岸段丘	約5,500	弥生時代前期	遺構1棟	6		下村登良編1981『上寺遺跡発掘調査報告書』『松阪市文化財調査報告5-2』松阪市教育委員会
三重県	松阪市	小倉赤坂遺跡(第2次)	段丘上	2,450	弥生時代前期	平式式住居2棟?	3		伊藤隆博編2005『天守寺内遺跡発掘調査報告書VII』三重県埋蔵文化財センター
三重県	松阪市	小倉赤坂遺跡(第1次、7次)	段丘上	3,100	弥生時代前期	0棟	2		伊藤隆博編2005『天守寺内遺跡発掘調査報告書VI』三重県埋蔵文化財センター
三重県	田原市	木谷遺跡	沖積隆起地	約2,700	弥生時代前期	遺構2棟、掘立柱建物か、七土坑あり	3		小玉道明編1966『木谷遺跡発掘調査報告―A地区・B地区―』四日市市埋蔵文化財調査報告2、四日市市教育委員会、四日市市埋蔵文化財センター
三重県	三豊町	中之庄遺跡	三角洲	3,000	弥生時代前期	方形柱建物1棟 (SK13)	2以上		小玉道明編1976『木谷遺跡発掘調査報告―C地区の遺構―』四日市市埋蔵文化財調査報告11、四日市市教育委員会、伊藤洋1977『木谷遺跡発掘調査報告―D地区の遺構―』四日市市埋蔵文化財調査報告14、四日市市教育委員会
三重県	一宮市	三ツ井遺跡	沖積隆起地	約2,800	弥生時代前期	0棟	1～5基		谷本敏文1972『中之庄遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会
愛知県	一宮市	三ツ井遺跡	沖積隆起地	1,210	弥生時代前期～	遺構5棟以上、方形溝溝渠3～4棟か、水田遺構	4以上		田中伸明、見野剛編『三ツ井遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第87集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	一宮市	山中遺跡	沖積隆起地	4,800 (4次と5次併せて)	弥生時代前期1	0棟	2		飯沼信博編1992『山中遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	一宮市	山中遺跡	沖積隆起地	4,800 (4次と5次併せて)	弥生時代前期2	遺構19棟、方形溝溝渠9棟 (住居と掘立土坑溝渠人で分布する)	10		飯沼信博編1992『山中遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
三重県	玉城町	仲内遺跡	丘陵の裾部	400	弥生時代前期後半	遺構3棟	1		三重県教育委員会1979『徳倉奈玉町仲内遺跡』昭和48年度埋蔵文化財発掘調査報告書
三重県	松阪市	村付コノ遺跡	沖積隆起地	1,500	弥生時代前期後半	遺構19棟、方形溝溝渠9棟 (住居と掘立土坑溝渠人で分布する)	23		三重県埋蔵文化財センター2005『村付コノ遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書No.19』三重県埋蔵文化財センター
三重県	津島町	金明坂遺跡	河岸段丘縁部	約900	弥生時代前期新設	遺構1棟	2		山岡義典・谷本敏文1971『金明坂遺跡発掘調査報告』明和町教育委員会
三重県	玉城町	上山遺跡	低丘段丘上	約2,400	弥生時代前期新設	遺構1棟	0		上村安生1992『上山遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告103、三重県埋蔵文化財センター
愛知県	春日井市	阿弥陀寺遺跡	沖積隆起地	約15,000	弥生時代中期前葉	遺構36棟	7		石黒立人編1990『阿弥陀寺遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第1集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	一宮市	八王子遺跡	沖積隆起地	2,374	弥生時代中期前葉	区画溝あるか	3		橋上昇編2001『八王子遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	津州阿弥陀	朝日遺跡	沖積隆起地	約50,000	弥生時代中期前葉	遺構不明土坑か、35(南側)×1(北側)、15(東側)×16(南側)、15(東側)×15(北側)、掘立土坑約47(東側)2棟(南側)	0 (南側) 0 (北側)		石黒立人編1991『朝日遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

県名	市町村名・遺跡名	立地	遺跡面積 (1)	時期	土坑等	大型土坑	中型土坑・溝	文献
三重県	名張町 西支群 平田遺跡	丘上	1,570	弥生時代中期前半	壱穴住居3棟	3	大型土坑壱穴住居と重複する。	伊藤英晃「竹内塚1987『平田遺跡』、宝塚市遺跡調査委員会
三重県	津市 藤原遺跡	沖積地	1,170	弥生時代中期前半	壱穴住居14棟、柱列4列、方形溝1溝、溝1基	11	不明	米山浩之・宮田勝也1989「藤原遺跡発掘調査報告」、「三重県埋蔵文化財調査報告115-13」、三重県埋蔵文化財センター
愛知県	名古屋市中区 名古屋三の丸遺跡(1)	溝内	9,000	弥生時代中期前半	壱穴住居7棟	1以上	不明	梅本肇1990「名古屋三の丸遺跡(1)」、「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第15集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
三重県	伊勢市 中ノ尾外遺跡	河原段丘位	約7,000	弥生時代中期前半	壱穴住居2棟	0	不明	高尾重雄・若中淳「伊勢中ノ尾外遺跡」、三重県教育委員会
愛知県	一宮市 溝島遺跡	尾根段丘	約32,000	弥生時代中期前半	壱穴住居30棟、壱穴住居2棟、方形溝1基、溝5基、堀1基	37以上	大型土坑は土溝と重複する。壱穴住居の可能性がある。壱穴住居と重複する。壱穴住居の可能性がある。壱穴住居と重複する。壱穴住居の可能性がある。	「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第107集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	名古屋市中区 志賀公園遺跡	沖積段丘	1,4200 (97E) 区12,000 (S900)	弥生時代中期前半	壱穴住居2棟、壱穴住居3棟、方形溝1溝、溝5基	17	不明	永井宏幸2001「志賀公園遺跡」、「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第90集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	名古屋市 志賀公園遺跡	沖積段丘	2,3740	弥生時代中期前半	壱穴住居2棟、溝3基	1	不明	永井宏幸2001「志賀公園遺跡」、「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第90集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
三重県	津市 東区内内遺跡	溝内	1,6125	弥生時代中期前半	壱穴住居8棟、土器溝1基、方形溝1溝、溝5基	72	不明	小玉道明1970「東区内内遺跡」、「東名阪連絡道埋蔵文化財調査報告書」、日本道路公団名古屋支社、三重県教育委員会
愛知県	春日市 阿弥陀寺遺跡	沖積段丘	約15,000	弥生時代中期前半	壱穴住居43棟、溝1基	2	不明	石丸立人1991「阿弥陀寺遺跡」、「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	一宮市 八王子遺跡	沖積段丘	2,3740	弥生時代中期前半	壱穴住居9棟	12	不明	石丸立人1991「八王子遺跡」、「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第9集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	一宮市 八王子遺跡	沖積段丘	1,274	弥生時代中期前半	壱穴住居18棟(溝1基)	5以上	不明	石丸立人1991「八王子遺跡」、「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第9集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	清洲市 朝日遺跡	沖積段丘	約50,000	弥生時代中期前半	壱穴住居1棟、溝1基	2	不明	石丸立人1991「朝日遺跡」、「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
三重県	白山市 和野遺跡	河原段丘	288	弥生時代中期前半	壱穴住居3棟	20	不明	石丸立人1975「和野遺跡発掘調査報告書」、白山教育委員会
三重県	伊賀市 古遺跡地区	溝内	約30,000	弥生時代中期前半	壱穴住居2棟(円形と方形)	8以上	不明	山江義典1973「古遺跡発掘調査報告書-C地区」、「三重県教育委員会
愛知県	春日市 森遺跡	沖積段丘	1,950 (E-H) 区(のり)	弥生時代中期前半	壱穴住居5棟(中央)	3 (E区)	不明	長谷川・丸藤義弘・加藤英夫1990「森遺跡発掘調査報告書」、「春日市埋蔵文化財調査報告書」、春日市埋蔵文化財調査委員会
愛知県	清洲市 朝日遺跡	沖積段丘	約50,000	弥生時代中期前半	壱穴住居41棟(溝1基)	14 (西部) 33 (南部) 37 (南部) 0 (東部) 0 (東部) 2 (北部) 2 (北部)	不明	石丸立人1991「朝日遺跡」、「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
岐阜県	美濃郡 牧野山遺跡	河原段丘	1,500	弥生時代中期前半	壱穴住居1棟	4	不明	尾形勉1973「牧野山遺跡」、岐阜県教育委員会・美濃加茂市教育委員会
三重県	伊賀市 上野遺跡	河原段丘	約5,500	弥生時代中期前半	壱穴住居1棟	0	不明	下村弘良1981「上野遺跡発掘調査報告書」、松原市教育委員会
三重県	伊賀市 金原遺跡	河原段丘	約900	弥生時代中期前半	方形溝遺跡2基	1	不明	山江義典・谷本敏夫1971「金原遺跡発掘調査報告書」、明和町教育委員会
三重県	名張市 東区内内遺跡	溝内	約2,680	弥生時代中期前半	壱穴住居1棟	0	不明	小玉道明1970「東区内内遺跡」、「東名阪連絡道埋蔵文化財調査報告書」、日本道路公団名古屋支社、三重県教育委員会
三重県	名張市 柳井地区6区 溝内	溝内	200	弥生時代中期前半	壱穴住居1棟	1	不明	田代仁「名張市柳井町 柳井遺跡」、三重県教育委員会
愛知県	清洲市 朝日遺跡	沖積段丘	約50,000	弥生時代中期後半	壱穴住居20棟(溝1基)	1 (西部) 9 (西部) 26 (南部) 88 (南部) 1 (東部) 0 (東部) 4 (北部) 2 (北部)	不明	石丸立人1991「朝日遺跡」、「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
三重県	土師町 上野山遺跡	上位段丘面	9,200	弥生時代中期後半	壱穴住居4棟(円形2、方形2)	4	不明	奥野次1985「上野山遺跡発掘調査報告書」、五木町教育委員会
愛知県	津市 川原遺跡	沖積段丘	1,2500	弥生時代中期後半	方形溝遺跡12基、土器溝3基、土溝14以上、溝3基	14以上	不明	藤原信博・赤塚次郎・丸藤義弘・堀内隆子2001「川原遺跡」、「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第91集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	名古屋市中区 志賀公園遺跡	沖積段丘	1,4200 (98E) 区10,000	弥生時代中期後半	壱穴住居1棟、方形溝遺跡1基	7	不明	永井宏幸2001「志賀公園遺跡」、「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第90集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	名古屋市 西上免遺跡	沖積段丘	1,0588	弥生時代中期後半	壱穴住居0棟	13	不明	赤塚次郎1997「西上免遺跡」、「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
三重県	津市 起野遺跡	低位段丘	4,500	弥生時代中期後半	壱穴住居11棟、壱穴住居11棟	1	不明	藤原信博1983「起野遺跡発掘調査報告書」、「昭和57年度東海地域埋蔵文化財調査報告書」
三重県	津市 御所内遺跡	丘陵	約2,000	弥生時代中期後半	壱穴住居4棟	4	不明	水口昌也・門田731984「御所内遺跡」、名張市教育委員会
三重県	津市 亀井遺跡	河津自然堤防跡	堤防ノット No.15	弥生時代中期後半	壱穴住居0棟	2	不明	谷本敏夫1973「津市河津町 亀井遺跡」、「昭和47年度東海地域埋蔵文化財調査報告書44」、三重県教育委員会
愛知県	春日市 大野遺跡	沖積段丘	約10,000	弥生時代中期後半	壱穴住居52棟、方形溝遺跡1溝、方形溝遺跡SKO1、井2基	49	不明	菅原可嗣1991「大野遺跡」、「愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第18集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	春日市 藤川遺跡	土師地区	不明	弥生時代中期後半	壱穴住居22基	2	不明	永井宏幸1984「藤川遺跡埋蔵文化財調査報告書第1集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター、松原隆治1989「藤川遺跡埋蔵文化財調査報告書第3集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター、松原隆治1992「藤川遺跡埋蔵文化財調査報告書第19集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター、藤上昇1992「藤川遺跡埋蔵文化財調査報告書第29集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	春日市 藤川遺跡	南東山地区	なし	弥生時代中期後半	なし	1	不明	藤上昇1992「藤川遺跡埋蔵文化財調査報告書第29集」、財団法人 愛知県埋蔵文化財センター



県名	市町村名	遺跡名	立地	調査面積 (㎡)	時期	遺構	大型土坑	中型土坑	備考	文献
愛知県	名古屋市長三の丸遺跡	名三の丸遺跡	赤橋台地	9000	弥生時代後期	方形周溝3基	58	0	弥生時代中期～古墳までの土坑100基の内大土坑58基	梅本博志編1990『名古屋市長三の丸遺跡(Ⅰ)』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第15集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	高瀬遺跡(第1次～第3次)	高瀬遺跡	赤橋台地		弥生時代後期	方形周溝4棟	0	0	中層土坑で彫穴の付属穴がある。	豊田市埋蔵文化財センター『高瀬遺跡』豊田市教育委員会
愛知県	高瀬遺跡(第2次)	高瀬遺跡	赤橋台地	3240	弥生時代後期	彫穴住居10棟(特殊遺構2号を含む)	0	0	中層土坑で彫穴住居の付属穴がある。	久米春男・斎藤隆雄他1969『高瀬遺跡』豊田市教育委員会
愛知県	高瀬遺跡(第3次)	高瀬遺跡	赤橋台地	660	弥生時代後期	彫穴住居4棟	0	0	中層土坑で彫穴住居の付属穴がある。	豊田市埋蔵文化財センター『高瀬遺跡(第3次)調査報告書』(『豊田市埋蔵文化財センター調査報告書11』) 豊田市教育委員会
愛知県	高瀬遺跡(第4次)	高瀬遺跡	赤橋台地	1800	弥生時代後期	彫穴住居6棟以上	0	0	中層土坑で彫穴住居の付属穴がある。	松井孝宗1977『高瀬遺跡第七次発掘調査報告』(『豊田市埋蔵文化財センター調査報告書12』) 豊田市教育委員会
愛知県	高瀬遺跡(第5次)	高瀬遺跡	赤橋台地	1390	弥生時代後期	彫穴住居8棟以上	0	0	中層土坑で彫穴住居の付属穴がある。	松井孝宗1978『高瀬遺跡第八次発掘調査報告』(『豊田市埋蔵文化財センター調査報告書15』) 豊田市教育委員会
愛知県	高瀬遺跡(第6次)	高瀬遺跡	赤橋台地	3700	弥生時代後期	彫穴住居4棟	3	1	大土坑はWS(K)土器層を含む。彫穴住居など0。中層土坑で彫穴住居の付属穴がある。46高瀬遺跡(第3次・第39次)、『名古屋埋蔵文化財センター調査報告書60』名古屋埋蔵文化財センター	
愛知県	堀之内花ノ木遺跡	堀之内花ノ木遺跡	沖積扇高地	7100	弥生時代後期	彫穴住居9棟	2	1	1基は彫穴住居と重複していてSB5より新しい。	繁江若弘1984『堀之内花ノ木遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第52集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	三井遺跡	三井遺跡	沖積扇高地	12100	弥生時代後期	彫穴住居2棟	0	1	田中健明・黒野順『三井遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第87集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター	
愛知県	阿部寺遺跡	阿部寺遺跡	沖積扇高地	約15000	弥生時代後期	彫穴住居22棟(周溝)	12	4	大土坑は井戸状の土坑を含む。	石井立人編1990『阿部寺遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	朝日遺跡	朝日遺跡	沖積扇高地	約50000	弥生時代後期	彫穴住居22棟(周溝)	1(周溝) 50(周溝)	11(周溝) 0(周溝)	大土坑の内、周溝の2基は複層時期、中層土坑の内、周溝の1基は複層時期。周溝不明土坑が28(周溝)+1(土坑)。	石井立人編1991『朝日遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
三重県	上寺遺跡	上寺遺跡	河原段丘	約5500	弥生時代後期	彫穴住居1棟(他1棟)	0	0	下村登良男編1981『上寺遺跡発掘調査報告書』『松原市文化財調査報告書5-2』松原市教育委員会	
三重県	金剛坂遺跡	金剛坂遺跡	河原段丘縁辺	約900	弥生時代後期	方形周溝2基	0	0	山口義典・谷本敏次1971『発掘調査報告書』明和町教育委員会	
三重県	小倉赤坂遺跡(第8次)	小倉赤坂遺跡	丘上	2560	弥生時代後期	彫穴住居9棟、掘立柱建物1棟	20	10	伊藤哲博編2005『天花寺丘陵内遺跡発掘調査報告VII』『三重県埋蔵文化財調査報告書260』三重県埋蔵文化財センター	
三重県	小倉赤坂遺跡(第6次・7次)	小倉赤坂遺跡	丘上	3100	弥生時代後期	彫穴住居9棟、掘立柱建物2棟、方形周溝遺構1基	2	4以上	伊藤哲博編2005『天花寺丘陵内遺跡発掘調査報告VI』『三重県埋蔵文化財調査報告書259』三重県埋蔵文化財センター	
三重県	津市 野田遺跡(第4次)掘B遺跡	野田遺跡	丘上	約1000	弥生時代後期	彫穴住居5棟	0	0	淡生俊生1974『野田遺跡発掘調査報告』『津市埋蔵文化財調査報告書8』津市教育委員会	
三重県	津市 野田遺跡(第4次)掘B遺跡	野田遺跡	丘上	約800	弥生時代後期	彫穴住居3棟	1	1	淡生俊生1974『野田遺跡発掘調査報告』『津市埋蔵文化財調査報告書8』津市教育委員会	
三重県	玉成町 月ヶヶ遺跡	月ヶヶ遺跡	丘上の裾部	384	弥生時代後期	方形周溝3基	0	0	三重県教育委員会1979『度念寺遺跡(月ヶヶ)遺跡』『昭和48年度宮内庁管理官庁遺跡調査報告書』三重県埋蔵文化財センター	
三重県	四日市市 西ヶヶ遺跡	西ヶヶ遺跡	赤橋台地上	約4000	弥生時代後期	赤土層出土、古墳時代後期は彫穴住居10棟、土坑15ヶ所(全て大型のもの)。	1	3	小玉道明他1970『西ヶヶ遺跡』『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会、小玉道明他1972『西ヶヶ遺跡』西ヶヶ遺跡調査報告書D地区-1、四日市市教育委員会	
三重県	四日市市 永井遺跡	永井遺跡	台地上	約2800	弥生時代後期	彫穴住居19棟	0	0	小玉道明他1973『永井遺跡発掘調査報告』四日市市教育委員会	
愛知県	名古屋市長三山遺跡	三山山遺跡	赤橋台地	2500	弥生時代後期～縄文時代後期	彫穴住居10棟	0	0	藤野野也1981『三山山遺跡発掘調査報告』名古屋埋蔵文化財センター	
三重県	伊勢市 朝日遺跡	朝日遺跡	上位段丘	2500	弥生時代後期～古墳時代前期	彫穴住居22棟以上	0	0	弥生時代後期～古墳時代前期の間、期間不明か？	伊勢市埋蔵文化財センター『朝日遺跡』伊勢市教育委員会
愛知県	高瀬遺跡(第5次)	高瀬遺跡	赤橋台地	1200	弥生時代後期～古墳時代前期	彫穴住居17棟(普通8棟、欠19)	2	1以上	大土坑は特殊遺構1を含む。土器周溝の付属穴あり。(後編)	谷沢良光1979『高瀬遺跡第九次発掘調査報告』(『豊田市埋蔵文化財センター調査報告書9』) 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	春日井市 朝日遺跡	朝日遺跡	沖積扇高地	9882	弥生時代後期～古墳時代前期	彫穴住居25棟、方形周溝3基(9:6以上、生時代中期後期)、他にSD03	1以上	1以上	土坑は23基あるが半分は古代以後。SK33がSB07を切っている。SK45がSB22により切られている。住居に併せ、土器出土。古墳時代後期は彫穴住居10棟、土坑15ヶ所(全て大型のもの)。	神谷友和編1989『朝日遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書9』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	見古屋市 見古屋遺跡	見古屋遺跡	赤橋台地		弥生時代後期～古墳時代前期	方形周溝3基	1	1	伊藤史・野口孝子1993『見古屋遺跡発掘調査報告書』遺構編一、名古屋市長三山遺跡調査報告書古資料編	
愛知県	見古屋市 見古屋遺跡	見古屋遺跡	赤橋台地		弥生時代後期～古墳時代前期	方形周溝3基	7	7	伊藤史・野口孝子1993『見古屋遺跡発掘調査報告書』遺構編一、名古屋市長三山遺跡調査報告書古資料編	
愛知県	見古屋市 見古屋遺跡	見古屋遺跡	赤橋台地		弥生時代後期～古墳時代前期	方形周溝3基	6	6	伊藤史・野口孝子1993『見古屋遺跡発掘調査報告書』遺構編一、名古屋市長三山遺跡調査報告書古資料編	
愛知県	見古屋市 見古屋遺跡	見古屋遺跡	赤橋台地		弥生時代後期～古墳時代前期	方形周溝3基	3	3	伊藤史・野口孝子1993『見古屋遺跡発掘調査報告書』遺構編一、名古屋市長三山遺跡調査報告書古資料編	
愛知県	川島市 川島遺跡	川島遺跡	丘上	約2000	弥生時代後期	彫穴住居6棟	0	0	住居内の掘立柱1基(長さ1mをこす)	西田史史・野田明1990『中野成田内遺跡埋蔵文化財調査報告書』松原市教育委員会
愛知県	一宮市 八王子遺跡	八王子遺跡	沖積扇高地	23740	弥生時代後期	(前編) 彫穴住居28棟、掘立柱建物1棟、(後編) 彫穴住居7棟	58	0	大土坑は12基+46基(古墳時代前期のみ)。H6区では彫穴住居と重複する	西田史史・野田明1990『八王子遺跡』『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書9』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
三重県	朝日市 朝日遺跡	朝日遺跡	丘上	22808	弥生時代後期	彫穴住居7棟、水田跡15棟	8	8	大土坑は彫穴住居内彫穴付属穴を含む。S14・S15周辺に掘立柱建物と重複する	穂積信昭・角正孝子編2004『土器周溝埋蔵文化財調査報告書227-6』三重県埋蔵文化財センター
三重県	松原市 堀田遺跡	堀田遺跡	沖積扇高地	14926	弥生時代後期	掘立柱建物4棟(溝溝の前方を穿っている。集落の中心部と外にもある。)	14	0	大土坑の内、1基は井戸SE327。掘立柱建物とは重複しない。溝溝の中心部と外にもある。	穂積信昭・角正孝子編2004『土器周溝埋蔵文化財調査報告書227-6』三重県埋蔵文化財センター

県名	市町村名	遺跡名	立地	調査面積 (1)	時期	穴・柱等	大塚土坑	中塚土坑	備考	文献
愛知県	一宮市	山中遺跡	沖積扇高地	4800(4次と5次併せて)	弥生時代後期～縄間式	方形周溝遺跡10基	16	2	大塚土坑(SZ10・SZ11とSZ15)の内柱土坑として検出されている。他にSZ10に、扇内形の土坑5～6基、中塚土坑はSZ10のワウツトから。	石黒立人編1993「山中遺跡」、『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第45巻』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
三重県	松阪市	村竹ノ遺跡 第3次	沖積扇高地	1500	弥生時代後期～縄間式	竪穴住居1棟(方形)	1		大塚土坑は井戸。	三重県埋蔵文化財センター2005「一般公開42号バリエス松阪・多気発掘調査ニュースNo.19」三重県埋蔵文化財センター
三重県	松阪市	村竹ノ遺跡 第2次	沖積扇高地		弥生時代後期～縄間式	竪穴住居3棟	4		大塚土坑は新しい時代のものもあるか。	三重県埋蔵文化財センター2005「一般公開42号バリエス松阪・多気発掘調査ニュースNo.19」三重県埋蔵文化財センター
愛知県	春日井市	柳川遺跡 上層敷地区	沖積扇高地		弥生時代後期末～古墳時代前期	方形周溝遺跡22基	0	0	赤塚次郎編1984「柳川」『愛知県埋蔵文化財センター埋蔵文化財調査報告書第11巻』財団法人愛知県埋蔵文化財センター、松原隆治編1989「柳川遺跡」、『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第33巻』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター、松原隆治編1992「柳川遺跡」、『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第19巻』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター、柳上昇編1992「柳川遺跡」、『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第29巻』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター	
愛知県	春日井市	柳川遺跡 南東山地区	沖積扇高地		弥生時代後期末～古墳時代前期	竪穴住居8棟	5以上		大塚土坑は掘削不明	三重県埋蔵文化財センター2005「村竹ノ遺跡(第3次)発掘調査現地説明会資料」三重県埋蔵文化財センター
愛知県	名古屋市	三十五ノ遺跡	丘陵上	2400	弥生時代後期末～古墳時代前期	竪穴住居7棟、方形周溝遺跡	2	5	村丸編1999「三十五ノ遺跡」～5次、「名古屋埋蔵文化財調査報告書40」名古屋埋蔵文化財センター	三重県埋蔵文化財センター2005「村竹ノ遺跡(第3次)発掘調査現地説明会資料」三重県埋蔵文化財センター
三重県	伊勢市	野内内遺跡	河岸段丘縁辺	1000	弥生時代後期末～古墳時代前期	竪穴住居21棟、土器遺構1基、方形周溝遺跡4基	20	0	本塚土坑の穴は井戸(竪穴住居と分るは遺構あり)、土坑9基は、ほぼSZ20に連続し、14基は竪穴住居と分布、連続、重複する。土器遺構は含まず、あまり重複しない。	三重県教育委員会1974「伊勢市上野内野内遺跡」、『昭和48年度県営埋蔵文化財調査報告書』
愛知県	津市	淵田遺跡	沖積扇高地	11591	弥生時代後期末～古墳時代前期	竪穴住居75棟、竪穴住居5基	21	3		赤塚次郎編1990「淵田遺跡」、『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10巻』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
岐阜県	関市	砂行遺跡	丘陵斜面	11250	弥生時代後期末～古墳時代前期	竪穴住居53棟	0	0	成瀬正勝編2000「砂行遺跡」、『岐阜県埋蔵文化財センター調査報告書第65巻』財団法人 岐阜県埋蔵文化財センター	三重県埋蔵文化財センター2005「村竹ノ遺跡(第3次)発掘調査現地説明会資料」三重県埋蔵文化財センター
三重県	名張市	城敷遺跡	河岸段丘	2000	弥生時代後期末～古墳時代前期	竪穴住居8棟	0	0	門田了三1995「城敷遺跡」名古屋埋蔵文化財センター	三重県埋蔵文化財センター2005「村竹ノ遺跡(第3次)発掘調査現地説明会資料」三重県埋蔵文化財センター
愛知県	一宮市	三ノ井遺跡	沖積扇高地	112100	古墳時代前期後半	竪穴住居19棟、竪穴住居2棟、方形周溝遺跡1基	0	0	田中伸明・見剛編「三ノ井遺跡」、『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第7巻』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター	三重県埋蔵文化財センター2005「村竹ノ遺跡(第3次)発掘調査現地説明会資料」三重県埋蔵文化財センター
愛知県	津市	柳川遺跡	沖積台地	7220	古墳時代前期	竪穴住居19棟、竪穴住居2棟、方形周溝遺跡1基	0	0	天野博之編1999「柳川遺跡」、『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10巻』	三重県埋蔵文化財センター2005「村竹ノ遺跡(第3次)発掘調査現地説明会資料」三重県埋蔵文化財センター
愛知県	津市	高塚遺跡(第1次～第3次)	沖積台地		古墳時代前期	竪穴住居28棟	1		中塚土坑は柱土との重複はない。中塚土坑で竪穴住居の貯蔵穴がある。	三重県埋蔵文化財センター2005「村竹ノ遺跡(第3次)発掘調査現地説明会資料」三重県埋蔵文化財センター
愛知県	津市	高塚遺跡(第2次)	沖積台地	3240	古墳時代前期	竪穴住居13棟	0		中塚土坑で竪穴住居の貯蔵穴がある。	三重県埋蔵文化財センター2005「村竹ノ遺跡(第3次)発掘調査現地説明会資料」三重県埋蔵文化財センター
愛知県	津市	高塚遺跡(第2次)	沖積台地	660	古墳時代前期	竪穴住居5棟	0		中塚土坑で竪穴住居の貯蔵穴がある。	三重県埋蔵文化財センター2005「村竹ノ遺跡(第3次)発掘調査現地説明会資料」三重県埋蔵文化財センター
愛知県	津市	高塚遺跡(第7次)	沖積台地	1800	古墳時代前期	竪穴住居6棟以上	0		中塚土坑で竪穴住居の貯蔵穴がある。	三重県埋蔵文化財センター2005「村竹ノ遺跡(第3次)発掘調査現地説明会資料」三重県埋蔵文化財センター
愛知県	名古屋市	高塚遺跡(第44次・第45次)	沖積台地	1390	古墳時代前期	竪穴住居4棟以上	0	0	中塚土坑で竪穴住居の貯蔵穴がある。	三重県埋蔵文化財センター2005「村竹ノ遺跡(第3次)発掘調査現地説明会資料」三重県埋蔵文化財センター
愛知県	津市	土古遺跡	沖積扇高地	約800	古墳時代前期	竪穴住居3棟	0		方形周溝に隣接する。SK71がSZ09と重複するか？	三重県埋蔵文化財センター2005「村竹ノ遺跡(第3次)発掘調査現地説明会資料」三重県埋蔵文化財センター
愛知県	一宮市	八王子遺跡	沖積扇高地	23740	古墳時代前期	竪穴住居59棟(間式)+8棟(間式)、竪穴住居2棟、区画溝あり	42	72	大塚土坑は26棟+46基(弥生時代後期を含む)	三重県埋蔵文化財センター2005「村竹ノ遺跡(第3次)発掘調査現地説明会資料」三重県埋蔵文化財センター
三重県	玉城町	仲田遺跡	丘陵の裾部	400	古墳時代前期	竪穴住居1棟	0	0		三重県教育委員会1979「便倉部玉城町仲田遺跡」、『昭和48年度県営埋蔵文化財調査報告書』
愛知県	清洲市	朝日遺跡	沖積扇高地	約50000	古墳時代前期(Ⅵ～Ⅶ期)	竪穴住居6棟+9棟(古墳時代(前期)+1棟(後期))	0(西部) 0(南部) 9(東部) 0(北部)	0(西部) 6(南部) 1(東部) 0(北部)	規模不明土坑あり、12(西側)・3(南側)・多数の土坑あり(東側)・区画溝あり	三重県埋蔵文化財センター2005「村竹ノ遺跡(第3次)発掘調査現地説明会資料」三重県埋蔵文化財センター
三重県	玉城町	柳田遺跡	沖積台地縁辺	500	古墳時代前期	竪穴住居2棟	0	0		倉田隆博・東浩編1988「柳田遺跡発掘調査報告」、『三重県埋蔵文化財調査報告書82』三重県教育委員会
三重県	津市	中津遺跡	沖積台地	420	古墳時代前期	竪穴住居1棟	0	0		菅原康光1977「中津遺跡発掘調査報告」、『津市埋蔵文化財調査報告14』津市教育委員会
三重県	伊勢市	中央山遺跡A地区	佐位石段上	堤掘りノット	古墳時代前期	竪穴住居2棟	2		大塚土坑は未発掘、重複なし。	下村登良男1973「伊勢市上野内・中央山」、『昭和47年度県営埋蔵文化財調査報告書4』三重県教育委員会
三重県	玉城町	赤尾遺跡	丘陵の裾部	750	古墳時代前期	竪穴住居8棟、竪穴住居1棟	0	0		三重県教育委員会1979「度念部赤尾町赤尾内遺跡」、『昭和47年度県営埋蔵文化財調査報告書4』三重県教育委員会
愛知県	名古屋市	名古屋城三の丸遺跡I	沖積台地	9000	古墳時代前期	竪穴住居23棟、方形周溝遺跡1棟	0	0		海老澤志朗編1990「名古屋城三の丸遺跡(Ⅰ)」、『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第15巻』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	稲沢市	堀之内花ノ木遺跡	沖積扇高地	7100	古墳時代前期	竪穴住居1棟、竪穴住居5基、溝5基、水田1区画	1		竪穴住居は掘削は、大塚土坑は柱土との重複する。柱土との重複しない。	菅江吉弘1994「堀之内花ノ木遺跡」、『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第5巻』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
愛知県	稲沢市	西上免遺跡	沖積扇高地	10568	古墳時代前期	竪穴住居1棟、竪穴住居5基、溝5基、水田1区画	1			赤塚次郎編1987「西上免遺跡」、『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73巻』財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
三重県	四日市市	上野遺跡	河岸段丘	3496	古墳時代前期	竪穴住居3棟	0	0		春日井編1991「上野遺跡」、『四日市市埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』四日市市埋蔵文化財センター
三重県	津市	中津遺跡	沖積台地	420	古墳時代前期	竪穴住居1棟	0	0	他に数基の土坑あり。	菅原康光1977「中津遺跡発掘調査報告」、『津市埋蔵文化財調査報告書14』津市教育委員会
三重県	津市	新畑遺跡A地区	丘陵上	700	古墳時代前期	竪穴住居9棟(内1棟は方形周溝遺跡)	5	5-6	大塚土坑の穴は3基、竪穴住居は重複している。中塚土坑は竪穴住居の内側土坑4～5基を含む。	吉村利男1973「新畑遺跡発掘調査報告」、『津市埋蔵文化財調査報告書7』新畑遺跡発掘調査団





# 伊勢湾周辺地域における 弥生時代の平野地形について

● 石黒立人

弥生時代に関わらず集落を基礎とする地域論を展開するためには地形環境を復元することが必須の作業である。しかし、沖積平野は弥生時代に至ってもなお形成途上にあり、地形を動態として捉えることが求められる。しかし、われわれが入手しえる地形情報の多くは現地表の観察に基づくものであり、到底弥生時代に適用できるものではない。そこで発掘調査成果が重要となる。各地で日々実施され、蓄積され続けている発掘調査データこそまさに地形変遷の詳細を明らかにするものである。しかし、現状をみると残念ながら十分に活用されているとは言い難い。

本稿では最近蓄積された良好なデータに基づいて地形変遷を明らかにすることを試みた。その結果、縄文晩期に地形の大幅な更新があったこと、伊勢湾周辺では沖積平野に限っても、主要河川の河口部には砂堆が形成され、潟や後背湿地が点在する複雑な海岸線であったことが窺えた。

## 1 たとえば、現在の濃尾平野

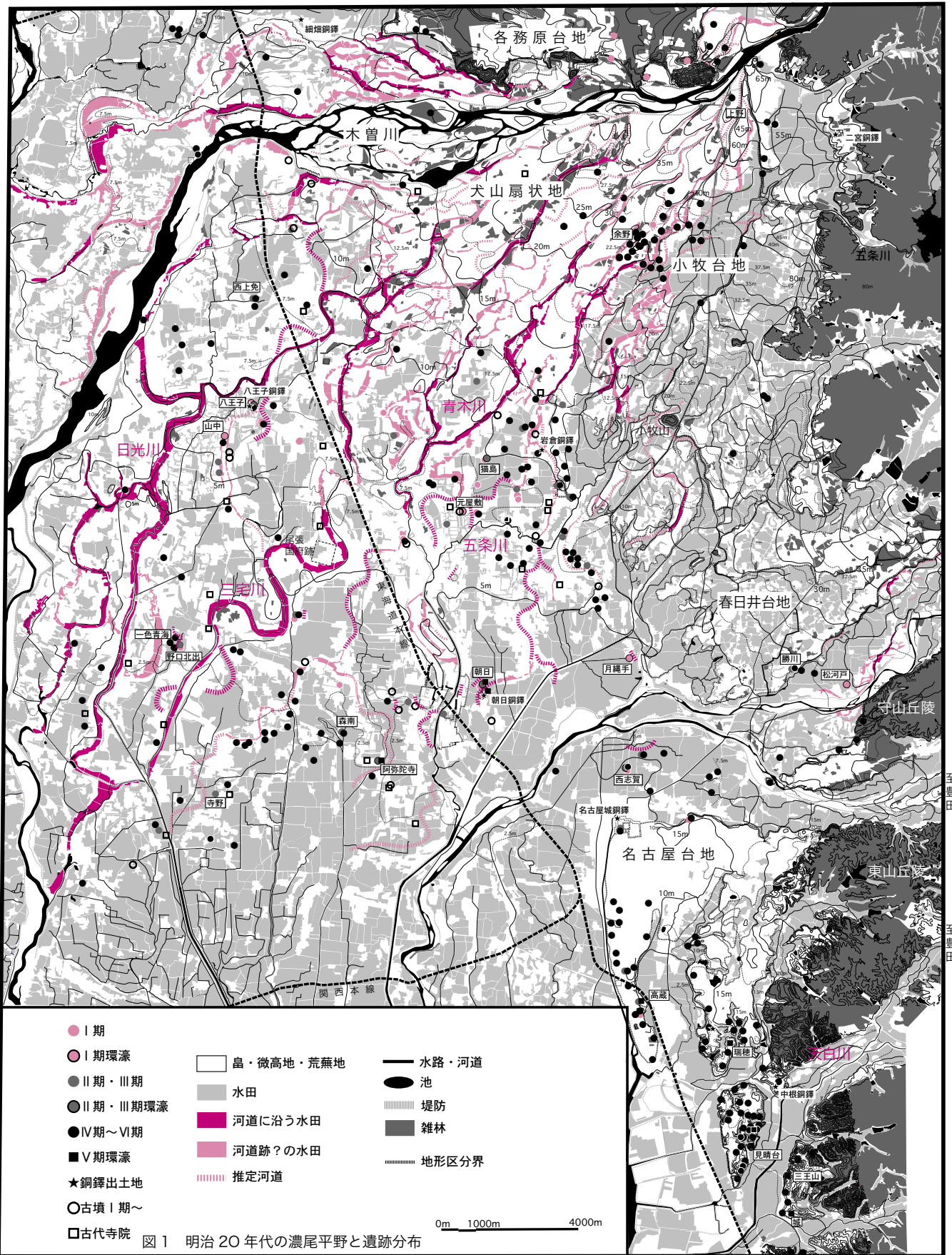
現在の濃尾平野は、南端のウォーターフロントがすべて堤防で護岸された干拓地であり、自然の海岸線はその影すら無い。江戸時代の旧海岸線付近は標高ゼロメートル地帯となり、愛知県埋蔵文化財センターの本部がある海部郡弥富町周辺は全くの海面下にある。

弥生時代の遺跡分布の南西端である津島市から北東に進むと、日光川の高い堤防によって視界を遮られる。日光川、そして三宅川を越え、植木畑が点在する愛西市・稲沢市を、ほとんど起伏を感じることなく通過する。一宮市に入り五条川から分かれた青木川沿いを進む。青木川の堤防はいつしか小規模なものになり、五条川との合流点付近の規模に比べれば貧弱な印象を受ける。岩倉市・一宮市の市境を抜けて江南市に至る。このあたりから犬山扇状地となる。ようやく行く手の道路に緩やかな起伏が始まる。扶桑町までくると、旧流路とそれに挟まれた高まりが明確なコントラストをなし、行く手の左前方に見え隠れする小山とともに景観にアクセントをつけている。犬山市にはいる。段丘斜面の急坂をのぼっていくと、左右は城下町の風情

を残す町並みとなり、ほどなく国宝犬山城に至る。

濃尾平野北東部の一角を占める犬山扇状地は、地形図では等高線が弧をなして重畳し、犬山城の西を収束点として幾筋もの旧流路が放射状にのびている。扇状地は標高10mあたりから45mまでの半径約15kmの広がりを持ち、斜度は平均2.33%である。旧流路は扇状地高位面では直線的、低位面では屈曲の度合いを増す。明治20年代の地図(図1)によれば、標高12.5m以上では、水田の分布は現・旧流路付近に限定され、他は雑木林・竹林や桑畠となっている。水田耕作には不向きであったことがわかる。犬山扇状地における遺跡分布が縄文時代前期を遡らないことからいえば、地形が安定した時期がおおよそ知れよう。しかし、扇頂部付近の安定度に対して、流路と微高地の比高が小さくなる扇中央部から扇端部にかけては流路の水位の上昇によって地表面が影響を受けた可能性が高い。とりわけ扇端部では、沖積面への移行部分で小さな谷が開析して小扇状地が形成される、というように順次堆積が進行したであろう。この点で、扇状地そのものの成長過程の復元が不可欠である。

南東側のほとんどを占める沖積地は、近世の海岸線からの幅が15～20km前後、高低差は



10mである。斜度平均は0.5～0.6%であり、本当に平坦である。このうち、濃尾平野の最南部は戦後になって地盤沈下が急激に進み、旧海岸線に沿う地域は現在海面下となっている。が、濃尾平野の場合、南西端にいくほど地盤の自然な沈降が進むとされ、少なくとも年に1mmは沈降するとさえ言われている。人為的な影響による地盤沈下と自然現象としての沈降をどのようにデータとして区別するのか、実のところ容易ではないようだ。

濃尾平野を縫う河川は、ほとんどが江戸時代には付け替えられ、直線的な流路に改修されたり、人工的に合流させられたりしている。しかし三宅川のように大蛇行を残す例もあり、かつて国府が置かれたことと関係するのであれば、本格的な河川制御、つまり大規模な築堤の開始時期が問題になろう。

以下では、発掘調査の成果から弥生時代の地形に迫ってみたい。対象とするのは、変化を続ける伊勢湾周辺地域の沖積地、および旧海岸線である(註1)。

## 2 伊勢湾西岸域

### (1) 安濃川下流域の事例

安濃川下流域は長岡丘陵(「見当山丘陵」とも呼称される)と半田丘陵に南北を画され、その間に広がる沖積平野のほぼ中央を安濃川が蛇行している。安濃川の河口部には三重県庁所在地である津市街地が南北に広がる。津市の原型は藤堂藩津城下町であり、河口右岸側の砂堆上に展開した。現在では砂堆の存在はまったくわからないが、「藤方」などの地名にかつての「潟」の存在が窺える。

安濃川下流域では近年、中勢バイパス建設に伴って平野を南北に横断する遺跡調査が行われ、関係遺跡の報告書もすでに順次刊行されている。小規模な平野とはいえ、発掘調査によって詳細なデータが得られたことは希有なことであり、きわめて貴重である。

かつて、1973年から1976年にかけて行われた納所遺跡の発掘調査に際して微小化石分析が行われ、植生を含めた自然景観が復元された。

安田喜憲氏は低湿地に囲まれた微高地上に立地している景観を描いた。その後、1997年に刊行された安濃津遺跡の報告書においては、地籍図等を含めた諸資料によって微地形分析が行われ、砂堆と潟湖の復元案が提示されている。本稿では、これらの報告も参考にしつつ弥生時代の地形変遷と遺跡分布の関係について触れる。

中勢バイパス関連で調査された遺跡の概要を北から順にみる(表1参照)(註2)。

北の長岡丘陵上には、やや平野から奥まった位置に長遺跡・山籠遺跡(IV期単純)がある。長遺跡は、浸食が進んで多くの谷が樹枝状に開析する丘陵地帯のほぼ中ほどにあり、居住域はいくつかの丘陵頂部に分かれて分布している。このうち、中勢バイパス関連調査で明らかになった居住域は丘陵の頂部平坦面から斜面にかけて広がるが、階段状に造成された段状遺構に営まれる斜面居住域は奇異な印象を与える。地形的にみて、平坦面は他の丘陵にもあり、斜面まで居住域としなければならない理由は一応は無い。「集住」するためであったなら、その集落設計の系譜・背景が問題となろう。

宮ノ前遺跡(V期初頭)は丘陵西端に位置し、平野を臨む斜面に営まれている。

森山遺跡(弥生V期～古墳I期)は現状では独立丘として扱われている。しかし、埋没旧地表においては低い按部を介して丘陵とつながっている可能性がある。

森山東遺跡は森山遺跡の東にあり、緩やかな丘陵裾部斜面にV期?の水田が見つかっている。弥生前期の土器が出土していることから、付近に当該期の包含層が存在したらしい。

太田遺跡ではV期以後の遺物を含む大規模な流路が検出されている。南側は無遺構区域であり、後世の削平による。

松の木遺跡は縄文晩期後半に属す竪穴建物跡・土坑・流路が検出され、該期では唯一居住地の様相を見せている。II期には方形周溝墓が営まれるが継続しない。遺構検出面は南に向かっていったん下降し、また上昇に転じて蔵田遺跡に至る。

蔵田遺跡は縄文晩期後半の流路が形成した微高地にII期の集落が展開するが、III期に継続しない。V期以後は盛んに流路群が掘削され、井

堰なども検出されている。微高地上が水田域になったことを示している。

位田遺跡はⅥ期の方形周溝墓が営まれており、それ以前に遡る資料は無い。遺構面下部には砂層が堆積し、それ以前は浅谷であった可能性が高い。新しく形成された自然堤防といえよう。濃尾平野の土田遺跡と様相が類似している。

替田遺跡・武之坪遺跡では縄文晩期の土器が出土しているが遺構は認められない。替田遺跡は南北とも流路で画される。Ⅱ期～Ⅲ期前半の集落で、Ⅳ期以降に継続しない。

里前遺跡に向かってはさらに下降し、里前遺跡では高位面でⅥ期の溝、梁瀬遺跡では縄文後期？に遡る埋積谷が検出されている。ここから南は丘陵であり、標高は急激に上昇する。

さて、これらの遺跡の発掘調査報告書には土層セクションが掲載されている。ただ、土層セクションは遺跡・調査区ごとに完結しているため、遺跡を越えた相互の関係は直接にはわからない。だが、主要遺構の埋没年代によって大雑把につなぐことはできる。その結果が図2である。

弥生時代の基盤形成を考える上で重要なのは、先述したように縄文晩期後半（突帯紋系土器期）の自然流路が松の木遺跡・蔵田遺跡で検出されていることである。どちらも縄文晩期後半に限られ、弥生前期までは下らない。蔵田遺跡では弥生前期の溝が検出されているが、位置は流路とずれている。流路の活動は活発で、それによって側方浸食が進み蛇行する。それが極限に至って、蛇行する流路の屈折点が直通して切り離された結果、河跡湖化して埋没する。蔵田遺跡の蛇行する流路跡はそうした経過を表しているであろう。そして、弥生前期の溝が並行して掘削されているのは、流路の痕跡が地表面に残存して影響を与えた可能性がある。いっぽう松の木遺跡では小規模ながら居住の痕跡がある。推定地表面標高は蔵田遺跡よりも高く、比較的安定した環境であったのだろう。

東方の納所遺跡では弥生前期の蛇行する流路群が検出されている。流路からは縄文晩期終末の土器も出土しており、松の木遺跡や蔵田遺跡よりは年代が新しいものの、縄文晩期まで遡る可能性がある。報告書によれば、この流路は弥

生前期で埋没すると判断されているようだが、Ⅱ期の土器が集中して出土したSD08がちょうど流路に重複していることをみると、弥生中期前葉にはまだ窪地状であり、SD08の掘削位置はその影響を受けた可能性を残す。つまり、完全な埋没は弥生中期初頭まで下る可能性がある。現状での問題は、この流路の上流部が23号バイパス関連調査地点のどこにあるかだが、残念ながら明確ではない。

ともかく、これら流路の活動に伴う自然堤防の形成が縄文晩期に進行して、弥生時代の基盤面を形成したことは確かである。蔵田遺跡では縄文後期の土器が標高5.7mから出土しており、弥生時代の推定地表面標高とは1.3mの差がある。それだけ地表面が上昇したのである。場所は違うが、鈴鹿川下流右岸の上箕田遺跡でも縄文晩期後半の流路が検出されており、同様の現象があったのであろう。

このように、流路の活発な活動によって縄文晩期に自然堤防が形成された。ひとつは松の木遺跡から納所遺跡へつながり、また蔵田遺跡に分岐する微高地Ⅰである。そして、南の替田遺跡や武之坪遺跡では縄文晩期末の土器が出土しており、遺跡が形成されるよりも古くに微高地は形成されていたようであるが、その形成過程や広がりにはわからない。これらも自然堤防と看做せば、主要な流路は少なくとも2条存在したことになるが、いずれにしても両者が分流であったのか、前者から後者への流路の遷移があったのかについて決定するデータは無い。あくまで現状で言えるのは、主要な2つの微高地（Ⅰ・Ⅱ）があり、北側の長岡丘陵との間に大きな谷（谷A）、その南には自然堤防上の窪地、微高地Ⅰと微高地Ⅱの間に谷B（現在の安濃川の流路付近）が想定できる点である。谷Aは、弥生後期に至るまで微高地Ⅰとは2m以上の比高を保つ明確な谷であり、南斜面からは水田が検出された。遺構面が一段低いために、後世の削平・改変の影響を受けず遺存したのであろう。自然堤防上の窪地は平面的な広がりが全く不明であるが、安田喜憲氏によれば湿地であった可能性もある。

海側には幾列もの砂堆が形成されている。このうち、もっとも陸地に近い第1砂堆に弥生

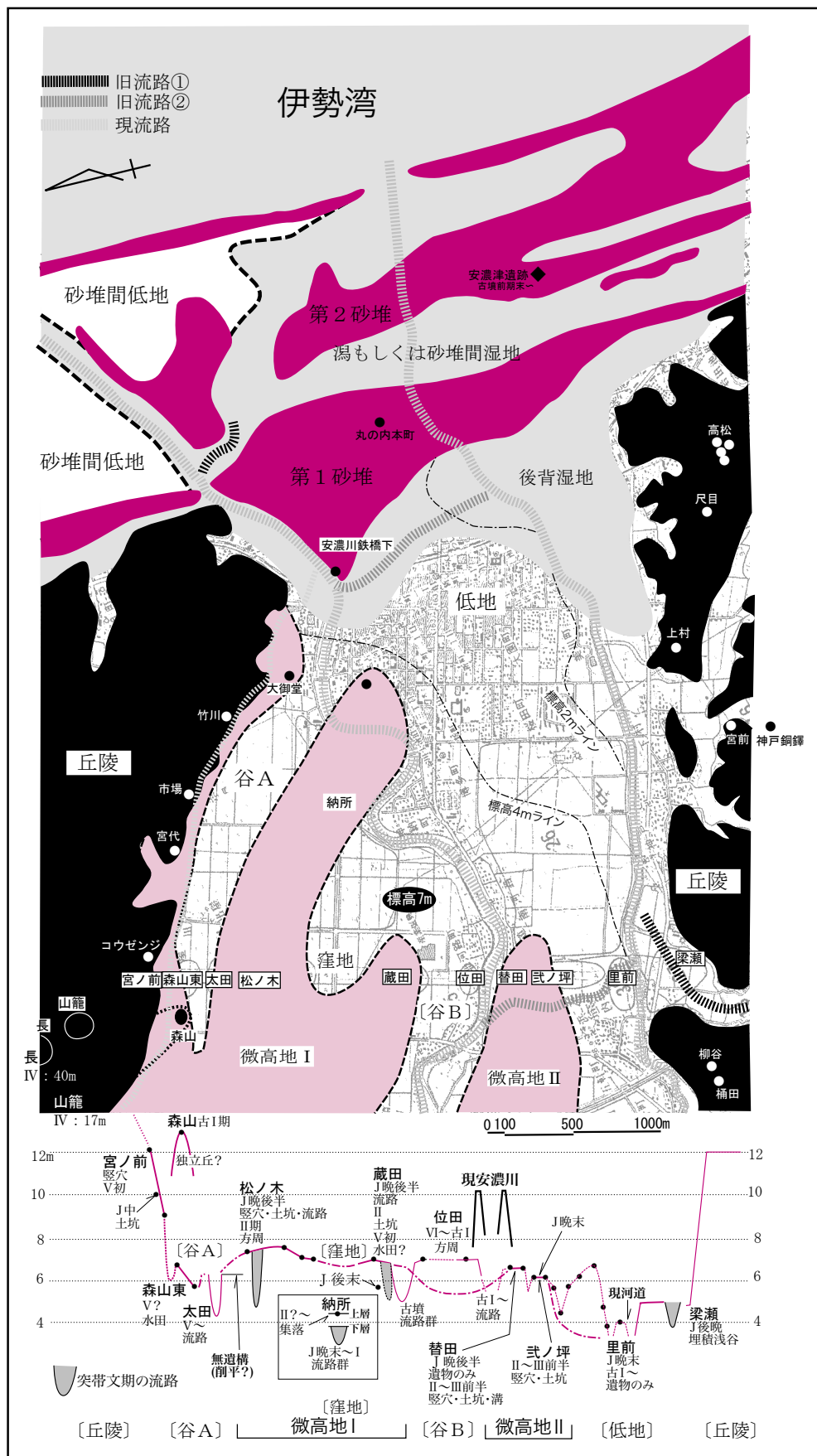


図2 安濃川下流域における遺跡分布と横断模式図

表 1 関連遺跡一覧

No.	遺跡名	地形	標高 (m)	検出遺構	時期	備考	文献
1	山籠	丘陵頂部	16~20	竪穴建物・土坑	IV	竪穴建物に排水溝が付設	三重県埋蔵文化財センター（以下同）1995『大古曾遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』
2	宮ノ前	丘陵斜面	8~11	竪穴建物	V前半		
3	森山東	緩斜面	5.6~6.7	水田	V		1993『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』
4	太田	平坦地	6~6.5	大溝	V~	大溝から縄文後晩期土器が出土	
5	松の木	微高地	7.5	竪穴建物・自然流路 方形周溝墓	突帯紋土器期 (五貴森期) II		1999『蔵田遺跡発掘調査報告』
6	蔵田	微高地	7	自然流路 掘立柱建物・方形周溝墓 流路・井堰	突帯紋土器期 (五貴森期から馬見塚期) II V初頭?	基盤下部からは縄文中期から後期の土器が出土	
7	井田	微高地	6.7	方形周溝墓	VI	基盤は砂層・砂質シルトであり、流路に相当する	1999『位田遺跡発掘調査報告』
8	替田	微高地	6.6	竪穴建物・土坑・溝・自然流路	II末~III前半		2004『替田遺跡（第4次）発掘調査報告』
9	式之坪	微高地	6.5	竪穴建物・土坑	II~III前半		2005『式之坪遺跡発掘調査報告』
10	里前	沖積地	5.6	溝	VI~		2002『里前遺跡発掘調査報告』 2005『里前遺跡（第2次）発掘調査報告』
11	梁瀬	沖積地	5.2	自然流路	III	幅60mの埋積谷がある。縄文後期？	2004『梁瀬遺跡発掘調査報告』

時代の遺跡が形成されているが、詳細は不明である。第2砂堆の陸側に位置する安濃津遺跡では石鏃が出土しており、この部分まで陸化していた可能性がある。雲出川下流域では、陸側の砂堆第1列に弥生前期前半の中ノ庄遺跡が位置しており、その点を参考にすると、安濃川下流域においてもその基盤形成が縄文後期以前に遡る可能性は十分にある。

弥生時代の安濃川下流域の沖積平野は、北側に谷と微高地、南側に低地が広がる。海側には第1砂堆が形成されており、第2砂堆は形成途上であっただろう。以上が、本稿で推定した安濃川下流域の自然景観である。その形成要因となった原安濃川の本流についてこれまでの発掘調査によっても特定されてはいない。

現在の安濃川は平野のほぼ中央を西流している。一部蛇行し自然状態であるかのような姿を見せているが、江戸時代には南の半田丘陵側に大きくそれており、新しく付け替えられたものであることが知られている。安濃川下流域の平野は北西から南東に向けて傾斜しており、しかも半田丘陵付近ではさらに一段落ち込むように低くなっている。現在でも標高2mと標高4mのラインは半田丘陵側に収束している。この収束点付近に里前遺跡・梁瀬遺跡があり、両遺跡

の地表面は他の遺跡に比べて最も低くなっている。梁瀬遺跡では縄文後期に遡る埋積谷が検出されているので、古い時期の谷（流路）がこの低地につながる可能性が高い。現標高2m以下の区域に関して、どれだけ遺跡が分布しているのか、あるいは分布しないのか、現状では明確ではない。この低地は、湿地もしくは干満の影響を受ける潟になっていた可能性も十分に考えられるのであり、今後の探究が期待される。

## (2) 雲出川・櫛田川下流域の事例

雲出川下流域については高橋学氏による微地形分析が行われているようだが、残念ながらその詳細を私は把握していない。ここでは、櫛田川下流域も含めて旧海岸線と砂堆列について触れるにとどめる。

土地条件図によれば、図3のように自然堤防に加えて砂堆が示されている。そして、雲出川最下流域の砂堆は比較的良好に把握できるものの、南方の櫛田川最下流域は流路の乱流による自然堤防の拡散や新田開発によって分断されて大きく乱れている。したがって、ここでの議論において櫛田川下流域は除外する。

雲出川最下流域には現海岸線沿いを除いた2列の砂堆が読み取れる。そのうち、もっとも陸

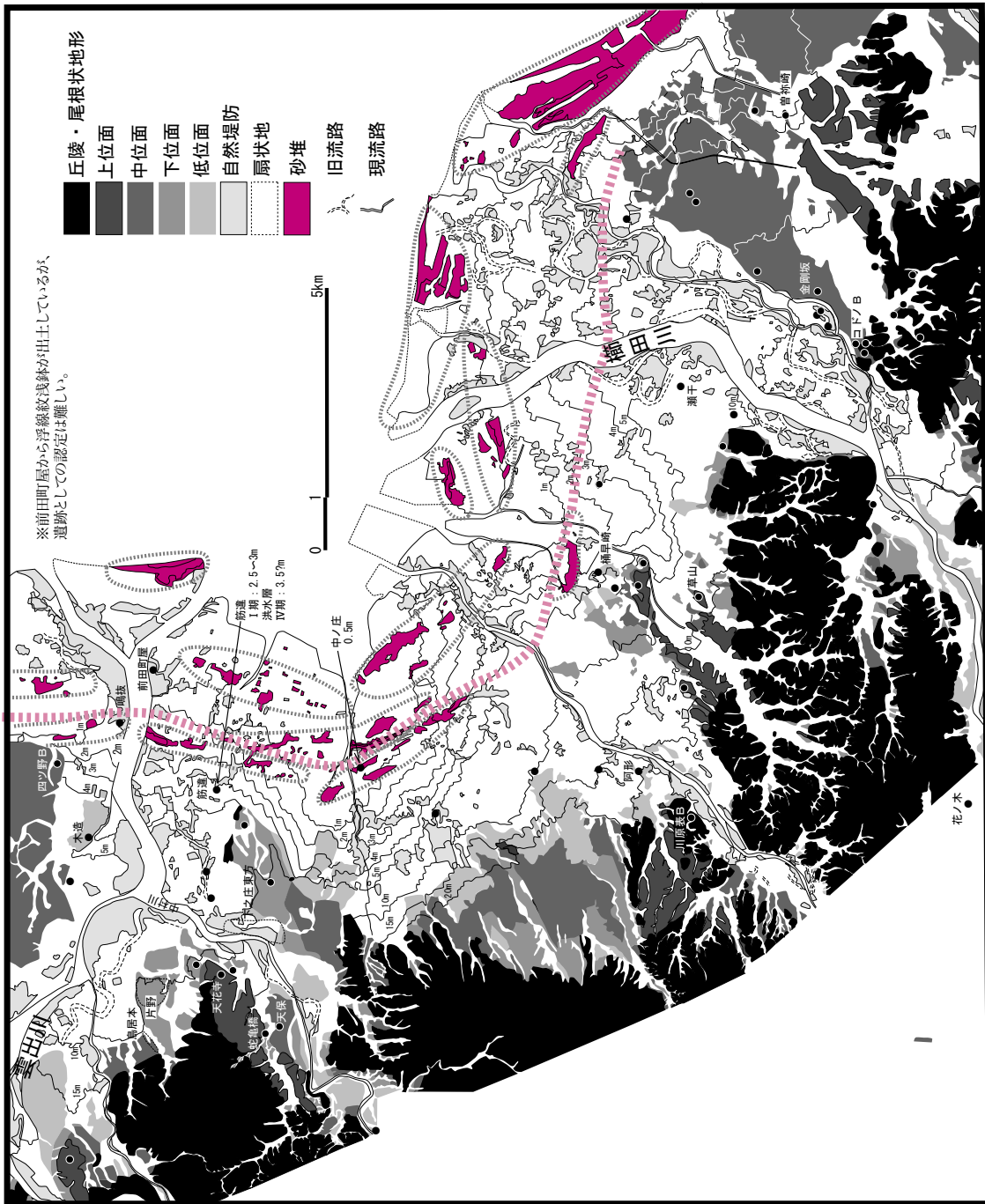


図3 雲出川・檜田川下流域地形図(土地条件図を参考に作製)

地よりの第1列に嶋拔遺跡や中ノ庄遺跡が立地している。第1列は大きく西の陸側に湾入しており、陸側の等高線も他に比べて間隔が詰まっており、傾斜は急である。砂堆第1列が弥生時代の海岸線に近いなら、沖積平野はさきわめて狭いものとなる。かりに砂堆の西側に後背湿地や潟が形成されていたならば、沖積平野の範囲はさらに狭まることになる。

雲出川下流域における遺跡分布は、砂堆を除けば現在の地表面標高4m以上の地点に位置している。実際の遺跡の検出面はそれより低くなり、筋違遺跡の場合、弥生前期面は標高2.5m～3mで、現地表から1.5～2mほどマイナスとなる。これだけの堆積を見込むなら、現標高3m以下の範囲は湿地もしくは干満の影響範囲となる。雲出川や檜田川下流域における堆積(あ

るいは沈降)の進行が一律ではないにしても、現状の遺跡分布が生活環境をある程度反映しているとするれば、弥生時代における海岸線の想定ラインは図3に示したように砂堆第1列東側の破線のようなだろう。

### 3 伊勢湾東岸域

#### (1) 濃尾平野

濃尾平野では縄文海進の後、多くの微高地が沖積平野面上に姿を現すことになった。それらのいくつかには縄文中期末(山ノ神式期)になって人間活動の痕跡が記されるようになり、縄文後期にはさらにその密度も上昇する。しかし、確実な定住を示す遺跡は、縄文中期には師勝町熊之堤遺跡、縄文後期には犬山扇状地末端付近に位置する岩倉市権現山遺跡、晩期後半は一宮市馬見塚遺跡、同山中遺跡に限られ、ほかは散布地程度の貧弱な内容にとどまっている。

弥生時代になると、縄文中期以後断続的に利用された微高地と、利用が縄文時代に辿ることのできない微高地の両者に遺跡が形成されるようになる。朝日遺跡は標高が約2.7mであり、前者のうちで最も標高が低い。朝日遺跡の南西端に位置する貝殻山貝塚周辺は弥生初期の居住域であるが、ここからは縄文中期から晩期にかけての土器も少量出土している。

弥生時代を初現とする遺跡は標高3m以下が多く、濃尾平野でも海岸よりの区域に位置している。しかし、貝塚が形成されているのは名古屋市西志賀遺跡のみであり、海岸に近接しているとはいえ、貝塚形成が一般的というわけではない。こうした事例は、生業問題をけっして極小環境下に限定して捉えてはならないことを示している。

朝日遺跡は、埋積浅谷を挟んで並列する自然堤防上に居住域や墓域が広がる、弥生時代の全期間にわたって営まれた遺跡である。遺跡の初期は微高地の南西端(貝殻山貝塚周辺)に居住域が限定され、その後北東に向かって拡大を続ける。この埋積浅谷は縄文海進後の海水準の低下によって形成されたもので、弥生時代になっても底面と自然堤防上面の比高は3mをこえ

る。この埋積浅谷に恒常的な流路の存在が認められるようになるのは弥生後期になってからであり、それ以前はⅢ期前半に砂層の形成が一時的に認められるのみで、間欠的である。

この点は、われわれが発掘調査で検出する自然流路について、それが当初から継続して流路であったのかどうか、についての吟味を必要とする重要な根拠となる。自然流路を谷地形と認定するかどうかは、単に個別の地形をどのように認識するのかという点にとどまらず、環境変動にまで問題が広がるからである。ちなみに、Ⅲ期前半の砂層の堆積は阿弥陀寺遺跡や野口北出遺跡等、濃尾平野の複数の遺跡でも認められる現象であり、濃尾平野全域の環境変化と関係がある。このような<鍵層>を把握し、広範囲に追跡することが濃尾平野の変遷を復元する上で必須である。

ともかく、これまで発掘調査によって偶然とはいえ、いくつかの谷地形や自然流路が検出されている。それらは、

- ① 遺跡の景観を構成する事例(狭域事例)、
  - ② 濃尾平野の地形変遷を知る上で重要な事例(広域事例)、
- の二つに区分できる。

このうち、①は朝日遺跡の谷地形や稲沢市一色青海遺跡の自然流路、一宮市猫島遺跡の谷地形がある。②には、上述したⅢ期の砂層堆積、清須市土田遺跡の自然流路などがある。

一色青海遺跡では、西北西から東南東にのびる微高地にぶつかって蛇行する流路とその後背湿地がセットになって検出された。いずれも弥生Ⅳ期前半のうちには埋没しており、主要流路の移動が窺える。猫島遺跡は、北東から南西にむけて並列する二つの大きな谷に挟まれた微高地上に位置している。両谷とも弥生時代後期にはほぼ埋没して水田化されていたようである。新しい時期の流路は旧地形とは無関係に形成されており、周辺が埋没して後に形成されたのであろう。おそらく、猫島遺跡は犬山扇状地が沖積平野に移行する部分に位置していると考えられる。

土田遺跡では弥生終末から古墳初頭の方形周溝墓群と中世の居住域が見つかっている。このうち、方形周溝墓群が弥生後期に活動した自然



流路の堆積層上面に形成されていた。自然流路は幅約60mで、地籍図では該当する範囲が島畑になっており、島畑はさらに南北に続いている。島畑部分がすべて微高地化した自然流路跡とは限らないが、方形周溝墓の削平状況から周辺に比べて高所であったことは確実である。

発掘調査では流路を含めて東西の連続土層セクションが記録されている。それによれば流路側方には、土層の上面から弥生後期初頭の台付甕が出土した黒褐色シルト層（「Ⅲ層」：標高50cm～70cm）を基盤に、細流砂とシルトのラミナが形成され、その上部に中粒砂が堆積して、高さ1m以上の自然堤防が形成されていた。この「Ⅲ層」からは汽水性ケイ藻も検出されており、海水の影響を受ける区域であったことも判明している。土田遺跡の南には大洲遺跡・阿弥陀寺遺跡、南西には森南遺跡がある。このうち、森南遺跡では弥生Ⅳ期のハマグリを主とする貝層が見つかった。それに対して、大洲遺跡・阿弥陀寺遺跡からは直接「海」に関わる情報は得られていない。

さて、今回の考察に先立ち、濃尾平野に分布する遺跡の各時期の推定地表面標高に基づき等高線図を作製した（図4・5）（註3）。

弥生前期は遺跡数が少なく蓋然性も低い、弥生中期以降は遺跡数が増加し、議論には耐え得ると考える。その結果、弥生時代を通して2つの谷地形が存在することがわかった。一つは、一宮市の〈谷筋A〉、もう一つは清須市土田遺跡周辺から岩倉市にかけての〈谷筋B〉である。実は、これらの谷地形は、愛知県埋蔵文化財センターの鬼頭剛氏によれば濃尾平野の基底層にも存在するとのことである。つまり、谷地形は弥生時代を遡る遙か以前から存在したのであり、濃尾平野における不断の堆積もけっして地表面の平準化をもたらさなかったことになる。その谷筋Bの末端が弥生中期には阿弥陀寺遺跡と森南遺跡の間の海岸線を入り江状にしていた可能性が高いのである。

残念ながら谷筋A・Bの当時の具体的な様子はわからない。しかし、この部分が周囲に比べて一段低いのであれば、主要な流路が集中する区域であったことは間違いないだろう。たとえば谷筋Bについてみれば、現在の五条川中流域

は大きく蛇行しつつもほぼこのラインに沿っており、下流域で東に外れる。沖積化がそれほど進んでいなかった段階には下流域もこの軸線に沿って流れ、阿弥陀寺遺跡と森南遺跡に挟まれた入り江部分に至り、その汽水環境を成り立たせていた可能性は十分にあるだろう。

なお、図4では大胆にも海岸線を表現しているが、汽水性ケイ藻の検出例は少数であり、全域にわたって確証を得ることはできない。弥生中期についてはⅡ期（朝日式期）前半の遺跡分布を重視し、その後消滅する状況などを考慮して想定したものである。津島市方面への突出が顕著であるが、これは犬山扇状地からの中軸線の方向に相当する。主要河川はこの軸線に沿って流下する傾向が強く、現在では三宅川流域となっている。弥生後期には等高線自体も大きく突出し、三宅川下流域においてさらに堆積が進行したことがわかる。朝日遺跡南方の入り江については、朝日遺跡における膨大な貝層・貝塚形成を考慮して海との距離を近く考え、また庄内川の河口域を大規模な谷地形と看做して想定した。もちろん、今後の調査によって確認される必要がある。

濃尾平野南部に接する名古屋台地の海岸線は、ほぼ陸と海が直接する区域である。後に「アユチガタ」と呼ばれ、縄文時代以後多くの遺跡が分布する。貝塚・貝層の形成も濃尾平野とは対照的に顕著で長期にわたり、海産資源の利用度の高さをよく示している。平野を介在させないで陸・海が直接する区域は、さらに知多半島周縁、矢作川下流右岸の碧海台地臨海部とつづく。

知多半島では、伊勢湾側に面する大きな谷の臨海部にいくつか砂堆が認められる。東海市の太田川河口部の南北には幅500mほどの大規模な砂堆（第3砂堆）が形成されている。左岸側の砂堆東側（後背地側）に位置する烏帽子遺跡は縄文晩期終末に遡る。烏帽子遺跡を含めて弥生時代前期の荒古遺跡や細見遺跡などを結ぶラインは砂堆の東側を通り、この部分の形成時期は安濃川や雲出川河口部の第1砂堆に対応する可能性がある。それに対して河口部右岸側には古い時期の遺跡は無く、砂堆の西側（海側）に位置する松崎遺跡は5世紀を遡ること

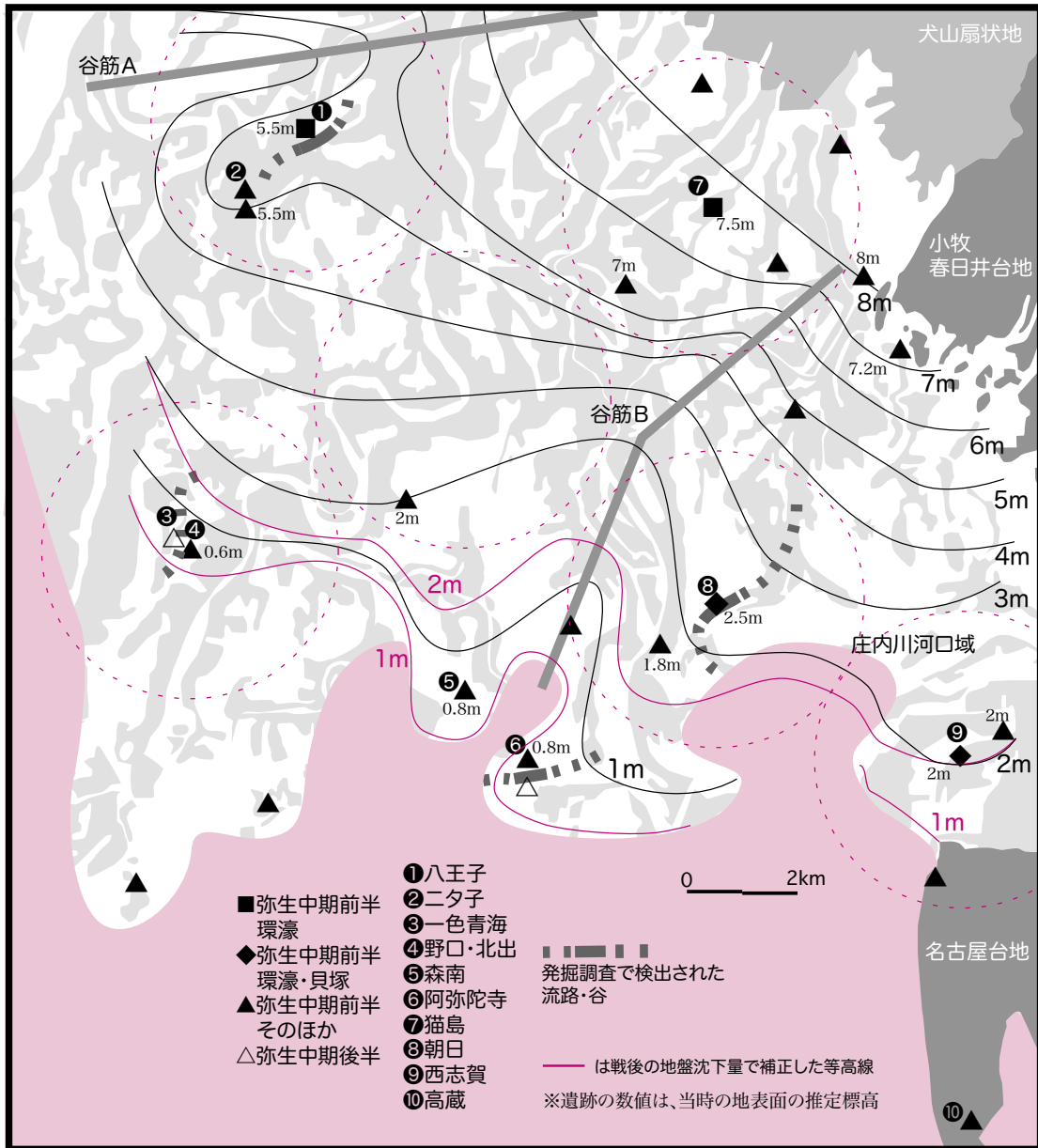


図4 濃尾平野南部弥生中期遺跡分布図

はない。第3砂堆の中央部が幅広いことを考慮するならば、複数時期の砂堆列が複合している可能性を考える必要もある。第3砂堆東方の陸側では、低地を囲む丘陵に至るまでさらに複数列(少なくとも2列)の砂堆が認められる。知多半島中央部にある内海谷でも縄文時代に遡る砂堆形成が認められる。

このように、知多半島の砂堆はもっとも海側の砂堆(の主要部分)の形成時期が縄文晩期(もしくは後期)である可能性が高いのに対して、西岸域ではもっとも陸側の砂堆が縄文時代晩期(もしくは後期)に遡る可能性が高いという違

いがある。砂堆列の形成時期の相違について一般論としては、地盤が沈降する伊勢湾西岸と隆起する伊勢湾東岸における構造的な差異である可能性もあるが、重要なのは当該期に活動可能な地表面を形成していたのかどうかの確定である。

知多半島東側から碧海台地にかけては海が台地縁辺にせまり、また谷奥に入り込んで埋没谷となり、複雑な海岸線を形成している。知立市の猿渡川下流域は珍しく弥生時代の遺跡が集中する区域であるが、縄文時代の貝塚が数多く形成されて後は、弥生時代前期を別にしてIV期ま

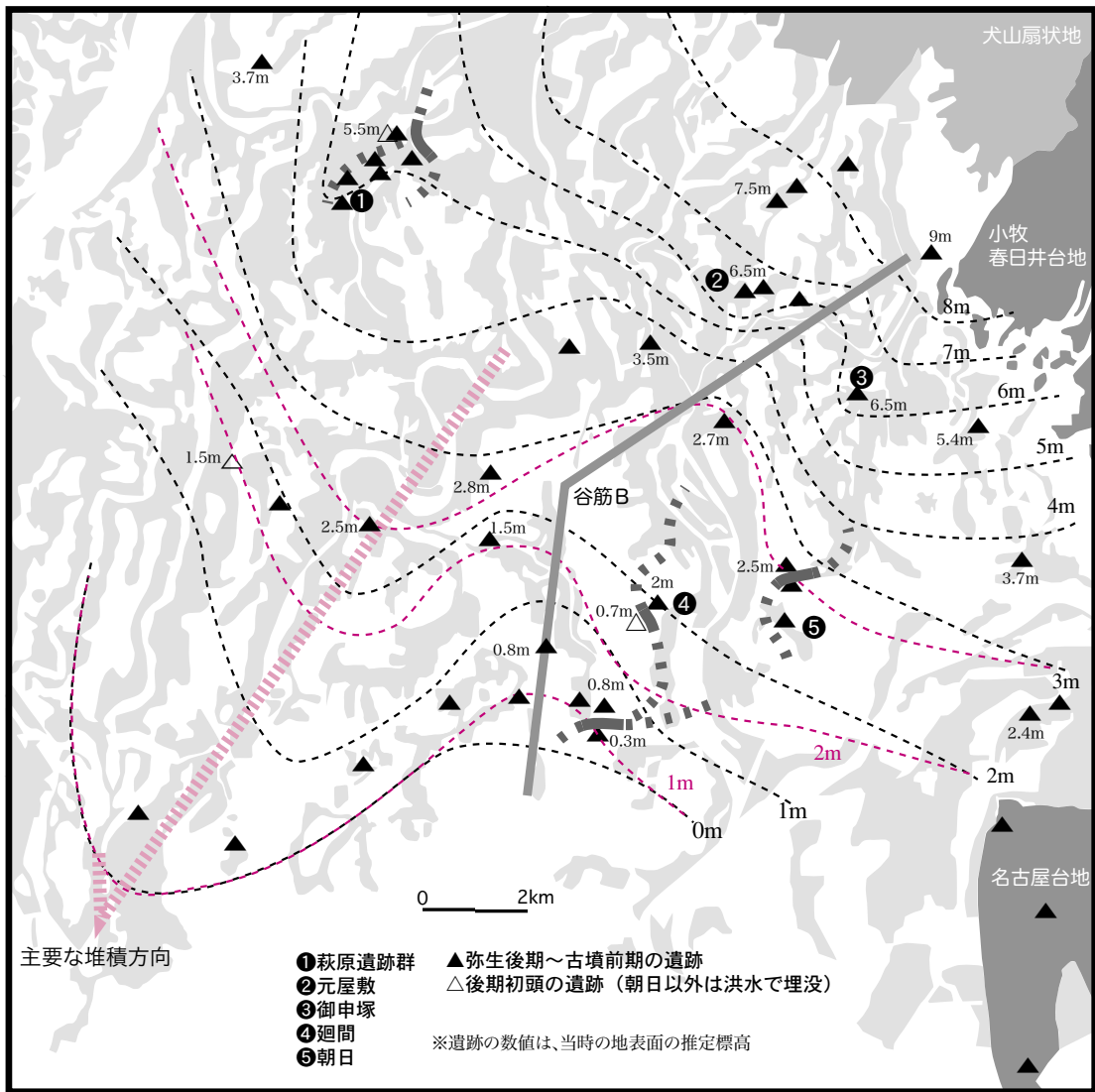


図5 濃尾平野南部弥生後期～古墳初頭遺跡分布図

で空白期である。この地域では一般的に弥生時代の遺跡形成は低調なようだが、かえってIV期における遺跡形成の活発さが際立つ。

## (2) 矢作川下流域・豊川下流域

矢作川流域は豊田市域から下流に向けて2km～5kmの幅で段丘に挟まれた氾濫平野が続く。安城市・岡崎市から西尾市にかけて矢作川は碧海台地を横断して流れるが、それは江戸時代の付け替えによるのであり、本来は矢作古川が流路であった。矢作古川の最下流域における弥生時代の遺跡分布は、弥生後期には兩岸の台地・丘陵上に分布の重心がある。低地側は不明瞭であり、確実に集落と考えられる遺跡は認

められないようである。縄文晩期から弥生前期にかけて、そして弥生後期の2度の寒冷化と小海退によって河口部の形状は大きく変貌したであろうが、それを確実に把握できるだけの情報は残念ながら得られていない。いまだ埋没して、人知れず眠ったままの遺跡があることだろう。

矢作川の流路がけって固定していなかったことは「矢作川河床遺跡群」の存在から明らかである。しかも、それは矢作川の堆積の進行速度（天井川化）が速いことも複合的に関係しているのである。現在は段丘面も1面しか認められないのだが、地表面形成において地盤の隆起現象よりも天井川化がより強い要因であっ

たならば、より低位に段丘面が存在した可能性は否定できない。となれば、下流域における沖積面の形成も同様に考えなければならないだろう。つまり、伊勢湾西岸域や知多半島の西側沿岸で明瞭に形成された砂堆が三河湾沿岸で不明瞭である点は、確かにより内湾に位置しているための沿岸流の弱さにも一因があるのかもしれないが、矢作川の運搬量の多さからいえば沖積作用が勝った結果であるといえるかもしれない。

矢作川河口左岸から豊川河口右岸にかけては丘陵が海に向かってせり出し、沖積平野の形成は低調である。陸・海が直接する区域となっている。

豊川下流域は豊川市域から下流に幅 4km ほど沖積平野が続く。両岸の段丘面には縄文・弥生の遺跡が重複して分布し、沖積平野には縄文晩期後半から遺跡が形成される。

弥生時代には瓜郷遺跡や篠束遺跡等の学史的に著名な遺跡が分布する。瓜郷遺跡には貝塚・貝層が形成され、土壌分析から汽水域であったことが判明している。篠束遺跡は近年調査されたが、区画整理事業による削平の為に十分な成果を得ることはできなかった。

土地条件図によれば河口域周辺には砂堆が分布するようだが、矢作川河口域同様に伊勢湾西岸域に比べて貧弱である。これも沖積作用が原因なのかどうか、その判断は今後の調査によるところが大きい。

## 4 おわりに

以上、やや駆け足で伊勢湾周辺の地形を概観した。以下に要約する。

### 註

1) 濃尾平野の変遷についての基本的理解については以下を参照。

井関弘太郎氏は 1962 年に濃尾平野の基本的堆積構（沖積層基底礫層〔第一礫層〕／下部砂層／中部シルト・粘土層〔中部泥層〕／上部砂層／沖積陸成層〔頂部泥層・頂部礫層〕）を明らかにするとともに、最終水期最盛期以後の海水準変動とが関連することを指摘した（井関弘太郎 1962 「沖積平野研究の基礎的問題点」『名古屋大学文学部研究論集』X XVI）。

1972 年には、沖積面下にある埋積浅谷の形成と海面高度との関連の指摘し、海水準変動について具体的に言及した（井関 1972 「日本における三角州平野の変貌」『第四紀研究』11）。同じ年、古川博恭氏は 2500～1500 年前の 2 m 以上の海水準低下を指摘し、「弥生の小海退」と呼称（古川博恭 1972 「濃尾平野の沖積層-濃尾平野の研究その 1-」『地質学論集』7）し、井関氏も賛同した。

井関氏は 1975 年に縄文前期の海進期における海岸線の推定を行った（井関 1975 『新修稲沢市史』研究編 3）。

① 西岸域は、平野の面積が思いの外狭い。縄文晩期に活発化した流路によって自然堤防が形成され、また成長し、弥生時代における遺跡展開の基盤を形成したが、平野の地表面そのものは形成途上にあった。特に安濃川下流域は詳細なデータによって地形環境の理解が進んだが、他地域でも同様なデータの集積が望まれる。

海岸付近では、鈴鹿川・雲出川・櫛田川などの運搬物によって縄文晩期までに砂堆が形成され、一部は陸化していた可能性がある。しかし、砂堆はその後の沈降や浸食、また開発によって変形し、詳細は明確ではない。

② 濃尾平野は調査地点の数量がいまだ不十分ではあるが、海岸線について見通しを得るに至った。ただ、海岸線は固定されたものではなく、汀線は干満や海水準変動によって前後・上下に移動し、また潟・湿地帯もからんで幅をもったもの、つまり曖昧にならざるをえない。

平野を考える上で重要なのは自然流路の把握である。しかし、自然地形は埋蔵文化財調査の直接の対象とはならないため、遺跡の範囲をどのように認識するのかという点とも関係して、調査データの集積は容易ではない。立ち会いなどあらゆる機会を見つけて対応するしかないのが実情である。

等高線図については今後の調査地点の増加によって精度は増すであろう。結論を急ぐ必要は無い。

③ 矢作川・豊川流域は、中流域における埋没地形の把握と、最下流域・河口域のデータを蓄積する必要がある。まずは沖積平野における遺跡の内容把握が先決である。

海津正倫氏は1976年、沖積層上部砂層上面の高まりを縄文海進時の汀線に沿って形成された砂堆との類似を指摘した。(海津正倫1976「津軽平野の沖積世における地形発達史」『地理学評論』49)。

1982年、大田・松島・森脇は、「縄文中期の海退」と「弥生の小海退」について報告した。(大田陽子・松島義章・森脇広1982「日本における完新世海面変化に関する研究の現状と問題-Atlas of Holocene Sea-level Records in Japan-を資料として」『第四紀研究』21)

森勇一氏は1992年、埋積浅谷の形成期は、朝日遺跡では縄文中期に遡り、谷底は海拔-2mに及ぶことを確認。縄文後期の再海進を指摘した。朝日遺跡では+1.5m、名古屋市菩薩遺跡では+2mまで海水面が上昇したと指摘した。(森勇一1992「朝日遺跡およびその周辺地域の地質と古環境」『朝日遺跡II』)

なお、同書において上部砂層の高まりを「浜堤」(森1992)と呼称したが、なお決着はついていない。定義の問題(内湾のそれを「浜堤」に分類しない)なのか、高まりが果たして帯状に分布するのか、いずれにしても確定していない。

2) 時期区分案は以下のとおりである。

I期:弥生前期、II期:中期前葉(朝日式期)、III期(貝田町式期)、IV期(凹線紋系土器期:高蔵式期はこの時期の最末期)、V期(初頭:八王子古宮式期・見晴台式期、前半:山中式期)、VI期(欠山式期・期廻間1式期)、古墳I期(元屋敷式期・廻間2式期)。

3) 固定した2点の標高がわかれば、2点間の傾斜を一律と看做して機械的に標高を配分することができ、その作業を周辺に拡大して等高線を作製する。計測点が増えればそれだけ正確になるが、少なれば歪みも大きい。少数の発掘調査成果に依拠するのではなく、試掘調査や立ち会い調査などの膨大なデータを活用すれば、より精度は増すので、研究レベルではなく、行政的な作業の一環として進めるのが現実的であろう。これによって沖積地の埋没微地形を復元すれば、高橋 学氏が説くように遺跡の分布を予測することが可能になり、埋蔵文化財保護にも貢献しよう。

#### 付記

脱稿後、2006年2月4日に開催された考古学研究会東海例会(静岡大学)において篠原和大氏の作成した静岡平野・瀬名遺跡の土層セクションの接合・復元図に接した。報告書を丹念に読み込み地表面の変遷をトレースしたその作業結果には高い価値がある。細部に問題があるとしても、それは作成者である篠原氏の責任ではない。

行政は確かに精度の高い調査を行うこともあるが、調査区が複数にわたる場合には担当者も複数となり、遺跡の調査成果もモザイク化することが多い。遺跡像をどのように捉えるのかという観点に立てば、篠原氏の行った作業は報告の前提になるものであり、それが提示されてこなかったことが問題である。今後沖積地の調査において堆積学的な成果を自然地理学者にまかせるのではなく、自らが旧地表面の変遷について強く関心を持って復元作業を継続する必要がある。そこまでがわれわれ現場の調査担当者の仕事である。

#### 参考文献・引用文献

安田喜憲1979「IV.三重県津市納所遺跡の泥土の花粉分析的研究」『納所遺跡-その自然環境と自然遺物-』三重県教育委員会。

三重県埋蔵文化財センター1997『安濃津』。

森 忍 1985「ケイソウ化石群集による土田遺跡59A区基盤の堆積環境」『埋蔵文化財発掘調査年報』愛知県埋蔵文化財センター。

# 鋏の機能に関する基礎的研究

樋上 昇

本稿では伊勢湾周辺地域における、弥生～古墳時代の鋏の編年作業をおこなった。さらに、これらの鋏の刃部幅・柄の装着角度を検討した結果、民具学的な機能分化には必ずしも適合しないことがわかった。おそらく弥生時代の鋏は使用者=製作者の関係にあるため、個人の身体的特徴や作業姿勢の違い(好み)によってバラつきが認められる。半完成品が広域に流通する古墳初頭以降、急速に規格化が進み、その結果、機能による鋏の細分化が成立したものと考えた。ただし、民具学的な器種分化はさらに後のことであり、その萌芽は直柄風呂鋏が出現する古墳後期であると推定した。

## 1 はじめに

本稿では、伊勢湾周辺地域(図1)から出土した、弥生前期から古墳後期前半(6世紀前葉)の鋏類について、まず形態分類と編年的な位置づけをおこなう。つぎに、それぞれの鋏の刃部幅と柄孔の角度(膝柄・反柄の場合は、台部と柄部の角度)の相関関係を示し、これらの考古資料が民具学的な鋏の機能に合致し、同様の機能論的研究が可能なのかを検討してみたい。

なお、編年表に掲載した資料は、原則として完成品のみとし、完成品が確認されない形態についてのみ、未成品を載せている。また、やや煩雑になるが、他地域との比較を容易にするため、『木器集成図録 近畿原始篇』で上原眞人がおこなった分類(上原1993)に合致するものについては、上原分類を併記しておく。

## 2 直柄鋏の編年的位置づけ

弥生～古墳時代の鋏には、鋏の身部上半に孔をあけて真直ぐな柄を通すタイプの鋏(直柄鋏)と、身部の上に棒軸状の突出部をもうけ、その突出部に木の枝分かれ部分などを利用した「く」の字状を呈する膝柄や反柄を固定するタイプの鋏(曲柄鋏)が存在する。まず本章では、直柄鋏について、編年的な位置づけをおこなう(図2～5)。

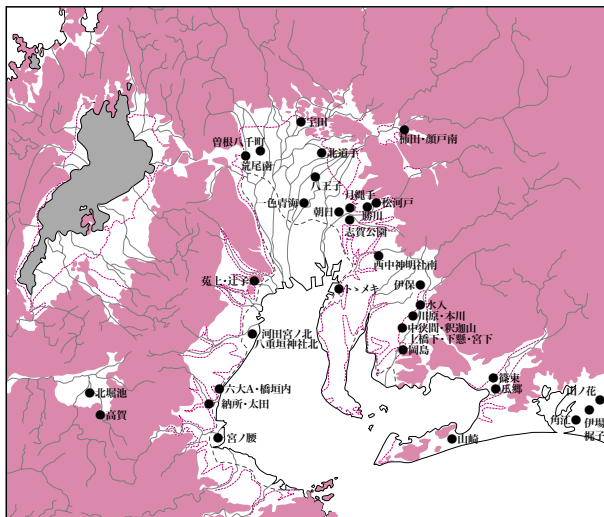


図1 木製品出土主要遺跡位置図

### (1) 弥生前期

弥生I期(前期)の直柄鋏は、三重県津市納所遺跡(1～4・26・27)と愛知県春日井市松河戸遺跡(5～7)から出土している。器種としては、直柄諸手鋏(1)・直柄平鋏(2・3・5・6)・泥除け具(4・7)・直柄多又鋏(26・27)がある(以下、本章ではそれぞれの鋏の名称から直柄を省略する)。

諸手鋏は中央の円形柄孔周辺につくり出された隆起部のある面にむかって上下ともに強く湾曲している。上原分類では、狭鋏I A1式に相当する。

平鋏は、いずれも柄孔の周囲に明確な隆起部をつくり出す。I類(2)は平面が縦長の長方形で、隆起部が丸く、身部の下端ではなく側縁

に刃をつけている。柄孔は円形ではなく、やや隅丸の方形を呈する。上原分類の狭鍬 IIA5 式に属する。II 類 (3・5) も同じく縦長の長方形の平面だが、下端部に刃をつける。上下に長い舟形の隆起部をもち、柄穴は円形である。上原分類では、広鍬 IIA1 式にあたる。III 類 (6) は全形が不明だが、舟形隆起部の両横に逆三角形の孔をあけ、さらにその横の側縁部には 2 つの小突起をもうける。この逆三角形の孔と小突起は泥除け具を固定するための細工と考えられる。上原分類の広鍬 I 式に該当する。

泥除け具 (4・7) は、文字どおり水気を含んだ土壤に鍬を打ち込む際に、跳ねた泥から手元を守るための補助具で、かつて丸鍬とよばれたものに相当する。4・7 ともに陣笠状の立体的なつくりで、上原分類では泥除 I 式とされている。前述の直柄平鍬に固定するための細工はみられないが、III 類の直柄平鍬に装着されたとおもわれる。

多又鍬 (26・27) は平鍬同様、舟形ないしは円形の隆起部をもち、下端には熊手状に 3 本の細い刃部をつくり出す。上端部は半円形と方形のものがある。

## (2) 弥生 II 期

弥生 II 期 (中期前葉) の直柄鍬は、愛知県清須市の朝日遺跡においてのみ認められる (8～11)。このうち、10・11 は大型方形周溝墓の周溝底面からの出土である。

諸手鍬はこの時期まで残らず、多又鍬も現状での出土例はない。

平鍬では、I 類から隆起部の不明瞭な IV 類 (8) へと移行し、II 類 (9) は弥生 I 期の形態が維持されるが、柄孔は隅丸方形を呈する。なお、この IV 類は上原分類の狭鍬 IIB 式にあたる。この時期、新たに舟形の隆起部が下方に長くのびる V 類が出現する。平面形は縦長の長方形だが、柄孔付近で両側縁がわずかにくびれ、上半部に鋸歯状の細工をほどこす例 (11) もある。

## (3) 弥生 III 期

弥生 III 期 (中期中葉) は朝日遺跡 (12～16・28～30) のほか、納所遺跡、愛知県西尾市岡島遺跡、豊橋市瓜郷遺跡などの出土例がある。

平鍬 IV 類は弥生 II 期以来の幅狭タイプ (13)

に幅広タイプ (12) が加わる。II 類 (14) は残り、V 類 (15) は柄孔の両側縁がゆるやかにくびれ、上端に逆台形の抉りがつく。新たに VI 類として、隆起部は逆水滴状を呈し、柄孔の両側縁が強くくびれるタイプが出現する (16)。このうち、14・15 は大型方形周溝墓の周溝底面から出土している。

この時期、身部の全長が 15cm 以下、最大幅が 10cm 程度で、上端部が丸く、両側縁・下端部ともに刃がつく小型鍬 (28) が出現する。このタイプの鍬は弥生 III～IV 期の伊勢湾周辺地域から静岡県の駿河湾沿岸地域にかけて特徴的に認められる器種である。完形品では、弥生 IV 期の 34 のように、60cm 以上の柄がつく。

29 は木目が身部に対して横方向に走り、平面形が縦方向よりも横方向に長い、いわゆる横鍬である。現在、伊勢湾周辺地域で弥生前期～中期に属する直柄横鍬はこれ 1 例のみである。

30 は多又鍬で、4 本歯で、身部上端は隅丸方形を呈し、柄孔は横長の方形である。

## (4) 弥生 IV 期

弥生 IV 期 (中期後葉) は朝日遺跡 (17～22・31～36) のほか、各地で多数の出土例がある。

平鍬 (17～22)・小型鍬 (31～34)・多又鍬 (35・36) はいずれも弥生 III 期以来の系譜を引き継ぐ。このうち平鍬では、VI 類の出土が各地で特にめだち、未成品も多数出土する。

小型鍬の出土例も多く、朝日遺跡出土の 33 には、両端を折り曲げるタイプの鉄刃を装着した痕跡が認められる。

## (5) 弥生 V 期

弥生 V 期 (後期) は朝日遺跡 (23・24) のほか、愛知県豊田市川原遺跡 (25) の出土例があるが、弥生 IV 期に較べて格段に木製品全般の出土量が極端に減少する。

直柄鍬は平鍬のみで、IV 類 (23)・VI 類 (24) がある。下端の刃部幅が広く、上端部が丸い VII 類 (上原分類の広鍬 IIA3 式) は未成品が川原遺跡で出土しているのみである。

なお、泥除け具もわずかながら、この時期から出土するようになる。

## (6) 弥生終末期～古墳前期前半 (2・3 世紀)

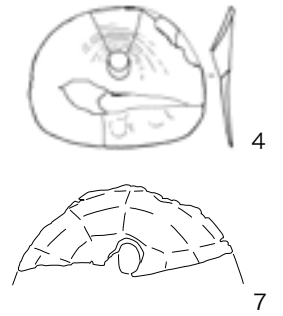
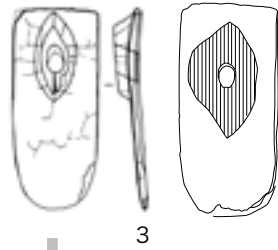
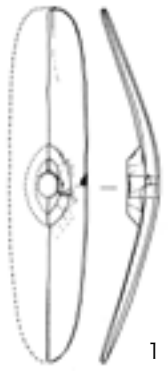
弥生 V 期の貧弱な様相に対し、突如として

直柄諸手鋤

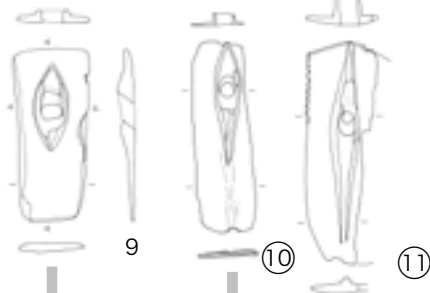
直柄平鋤

泥除け具

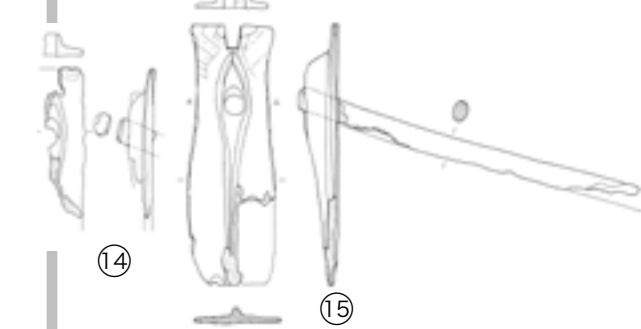
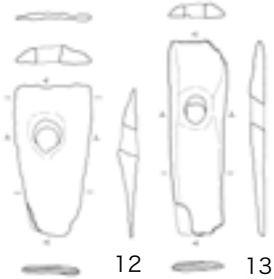
弥生I期



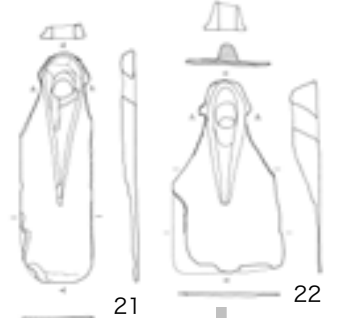
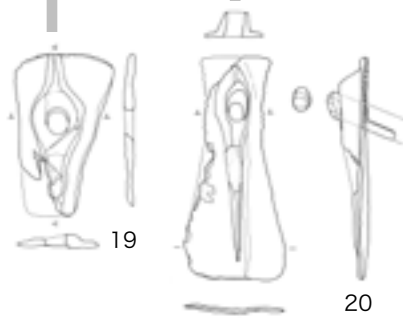
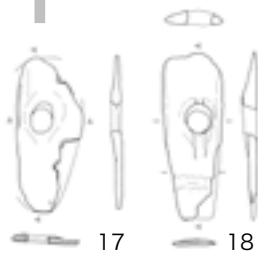
弥生II期



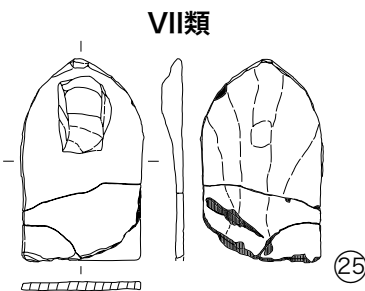
弥生III期



弥生IV期



弥生V期



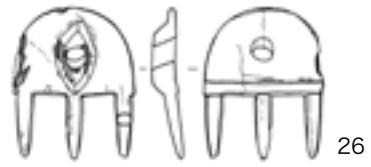
○は墳丘墓およびその周辺より出土

- 1~4 三重:納所
- 5~7 愛知:松河戸
- 8~24 愛知:朝日
- 25 愛知:川原

図2 直柄鋤編年表-1



直柄多又鍬



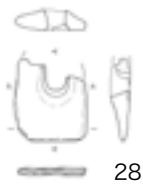
弥生Ⅰ期

弥生Ⅱ期

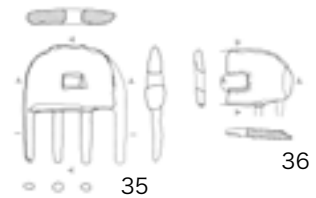
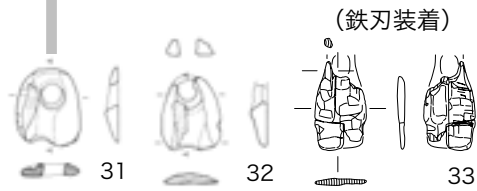
直柄小型鍬

直柄横鍬

弥生Ⅲ期



弥生Ⅳ期



26・27 三重：納所  
28～36 愛知：朝日

1/12 0 60 cm

弥生Ⅴ期

図3 直柄鍬編年表-2

各地で出土例が増加し、活況を呈するようになる(37～47・55～63)。

平鍬では、弥生Ⅲ期以来のⅣ類(37)、Ⅵ類(38・39)が濃尾平野以外の地域に遺存しており、うちⅥ類はこの時期で姿を消す。新たに泥除け具の装着を意図して身の上端部を幅広にし、隆起部とは反対側の面に断面が逆台形の溝(蟻溝)を切る鍬(Ⅷ類-上原分類の広鍬ⅧA3式に相当)が出現する(40～45)。このうち、40～42は平面形・法量に遺跡の単位を超えた広い地域におよぶ強い企画性が認められることから、特にⅧa類として分類する。ただし、隆起部の形態は遺跡ごとにやや異なる。一方、43～45はⅧa類をモデルとしつつ、1点ごとに個性が認められるグループをⅧb類としてまとめておく。

泥除け具は、弥生Ⅰ期とは異なる平面的なつくりである(上原分類の泥除Ⅲ式)。平鍬Ⅷ類の蟻溝に対応して、身の上端部に断面が逆台形の突出部(蟻ホゾ)をもうけ、下端部中央付近には装着角度を一定にするために柄と紐で固定するための小孔があく例が多い(47など)。

55～57は、柄の装着角度が105.5～126.0°といずれも鈍角で、木目が身に対して横方向に走る鍬である。しかも身部の下端が柄孔隆起部のある面(使用者側)に強く反り返る形態をもち、刃は下端部ではなく両側縁についている。この種の鍬を上原は横鍬Ⅰ式とし、山田昌久は除草用の鍬として払い鍬と命名した(山田2003)。本稿では山田の名称にしたがう。身の側縁に刃がつくことから、弥生Ⅰ期以来の平鍬Ⅰ・Ⅳ類とおなじ系譜に属する可能性がある。

また、横鍬も久々に現れ(上原分類の横鍬Ⅱ式)、専用の泥除け具(上原分類の泥除Ⅱ式)が装着される(58・59)。さらに横鍬とは別に、下端部に鋸歯状の歯をつけたエブリ(サラエ)も認められる(60・61)。この種のエブリを上原は横鍬Ⅲ式に分類している。このほか、多又鍬も出土している(63)。

さらに特殊な例として、福岡平野を中心とする北部九州地方に特徴的な縦長の方形柄孔を有する鍬が岐阜県大垣市で数例認められる(62)。

この種の鍬はほぼこの時期にのみ、滋賀県湖東地方や北陸地方からも出土していることから、日本海からのルートで伊勢湾周辺地域に流入したと考えられる。

#### (7) 古墳前期後半～中期前半(4世紀～5世紀前半)

前段階に較べて出土量は著しく減少する(48・49・64・65)。

48は平鍬Ⅷa類で、49はその泥除け具。64・65は横鍬で、特に64は泥除け具装着のために、上端部に突起をもうける。柄孔は方形で隆起部をもたない。現状では、岐阜県東濃地方の可児市周辺のみ分布範囲が限定される。

#### (8) 古墳中期後半～後期(5世紀中葉～6世紀)

この時期は直柄鍬の出土量がやや増加する(51～54・66～74)。

51は刃部幅が8.9cmと狭く、身と柄は110.4°と鈍角に装着されている。柄孔周辺の隆起部は逆水滴状でしっかりしており、隆起部とは反対側の面上端に段がつく。通常、隆起部は使用者側とは反対の面につき、かつ身に対して鋭角に柄が装着される場合が多いことから、本例は意識的に逆方向に柄を装着していることがわかる。明確な隆起部や本来ならば使用者側の面上端につく段など、弥生Ⅱ期以来のⅣ類とは異なる特徴や、この時期には珍しい刃部幅の狭い鍬であることから、一応Ⅸ類としておくが、Ⅷa類を再加工しての転用品である可能性が高い。なお、上原分類では狭鍬ⅡA3式に相当する。52はⅧa類の未成品で、二連の連続成形段階のものである。50は上原分類では広鍬ⅧA3式で、筆者の分類ではⅧb類にあたる。

53は弥生Ⅰ期以来の直柄平鍬とは全く異なる系譜として、この時期新たに登場する直柄鍬である。身の上半部は截頭三角形で、下半部にはU字形の鉄刃が装着される。柄孔は縦長の長方形で、54の柄がつく。柄孔の周囲に隆起部をもたず、側面形は真っ平らである。これは、近世のいわゆる風呂鍬の原形にあたるもので、ここでは直柄風呂鍬とよんでおく。

66・67は横鍬で68はその泥除け具。70・71は下端部が鋸歯状になるエブリで、72・73は下端部が平らなエブリである。柄孔は横長の

直柄平鍬

泥除け具

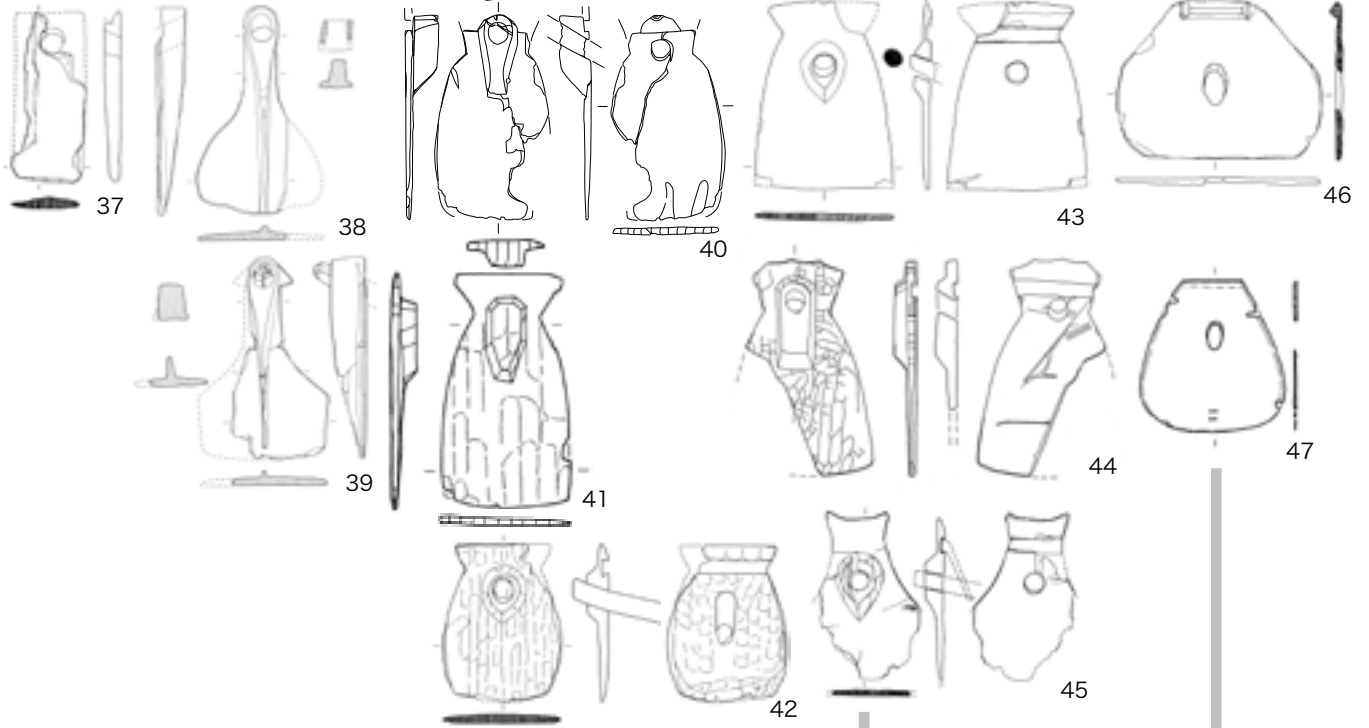
弥生終末期～古墳前期前半（二・三世紀）

IV類

VI類

VIII a類

VIII b類



古墳前期後半～五世紀前葉  
（四世紀～五世紀前葉）

37・42・43・45・46 三重：六大A  
40 愛知：八王子  
51・52 愛知：勝川  
41・47 岐阜：荒尾南  
44・48～50・53・54 岐阜：柿田  
38・39 静岡：角江



IX類（VIII a類からの再加工？）

古墳中期後半～六世紀  
（五世紀中葉～六世紀）

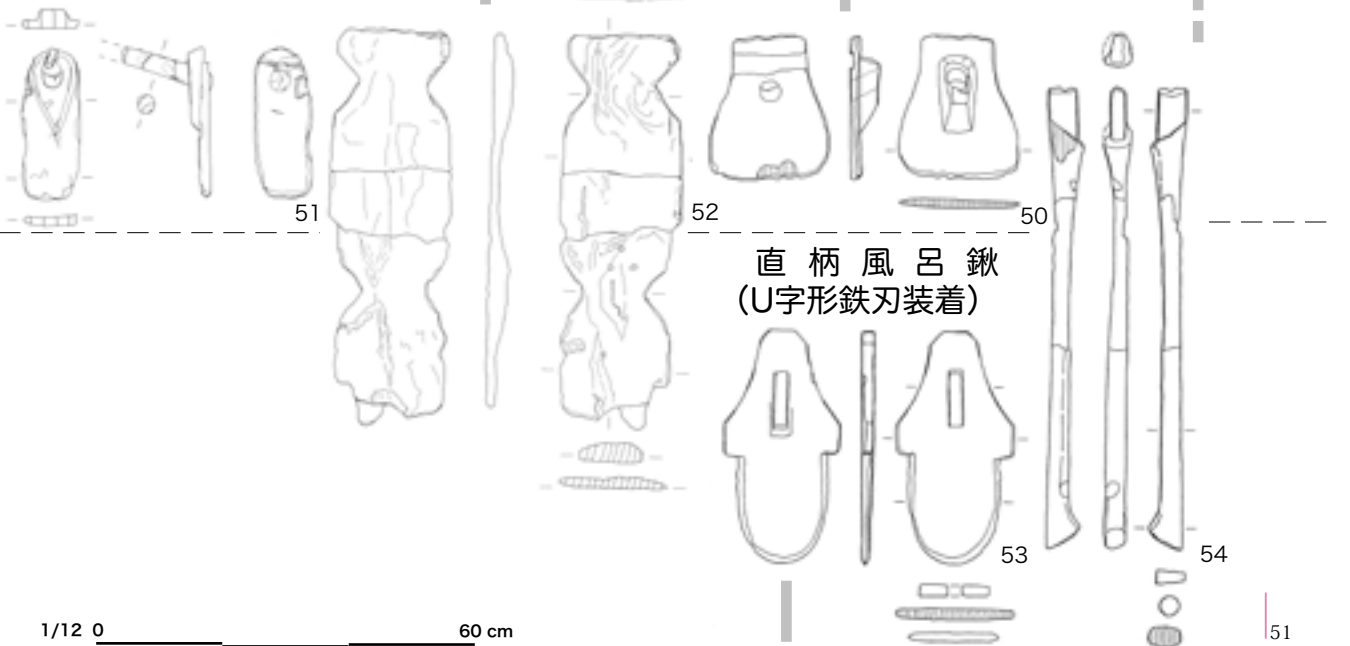


図4 直柄鍬編年表-3

直柄払い鍬



55



56



57

エブリ・サラエ

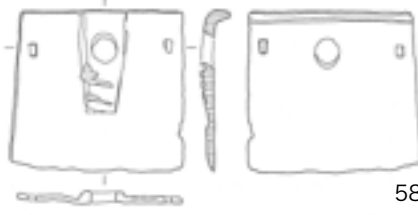


60

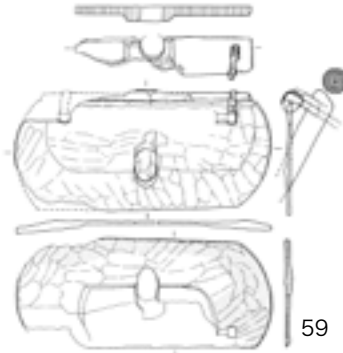


61

直柄横鍬  
泥除け具

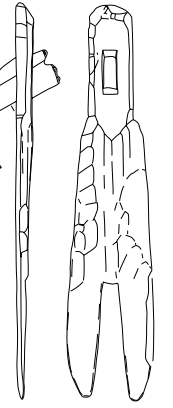


58



59

北部九州型  
直柄二又鍬



62

直柄多又鍬



63

弥生終末期～古墳前期前半（二・三世紀）

古墳前期後半～五世紀前葉  
（四世紀～五世紀前葉）

古墳中期後半～六世紀  
（五世紀中葉後半～六世紀）

55～57・59～61・66・70・74 三重：六大A  
67・68・71 三重：河田宮ノ北  
62 岐阜：荒尾南  
64・65 岐阜：顔戸南  
58 岐阜：柿田  
63 静岡：角江  
69・72・73 静岡：山ノ花



64



65



70



71



72



73



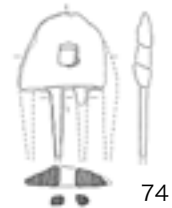
66



67

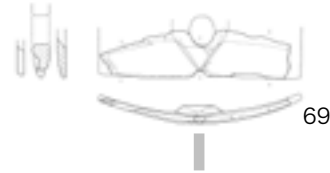


68



74

変形諸手鍬



69

1/12 0 60 cm

図6 曲柄鍬編年表-1

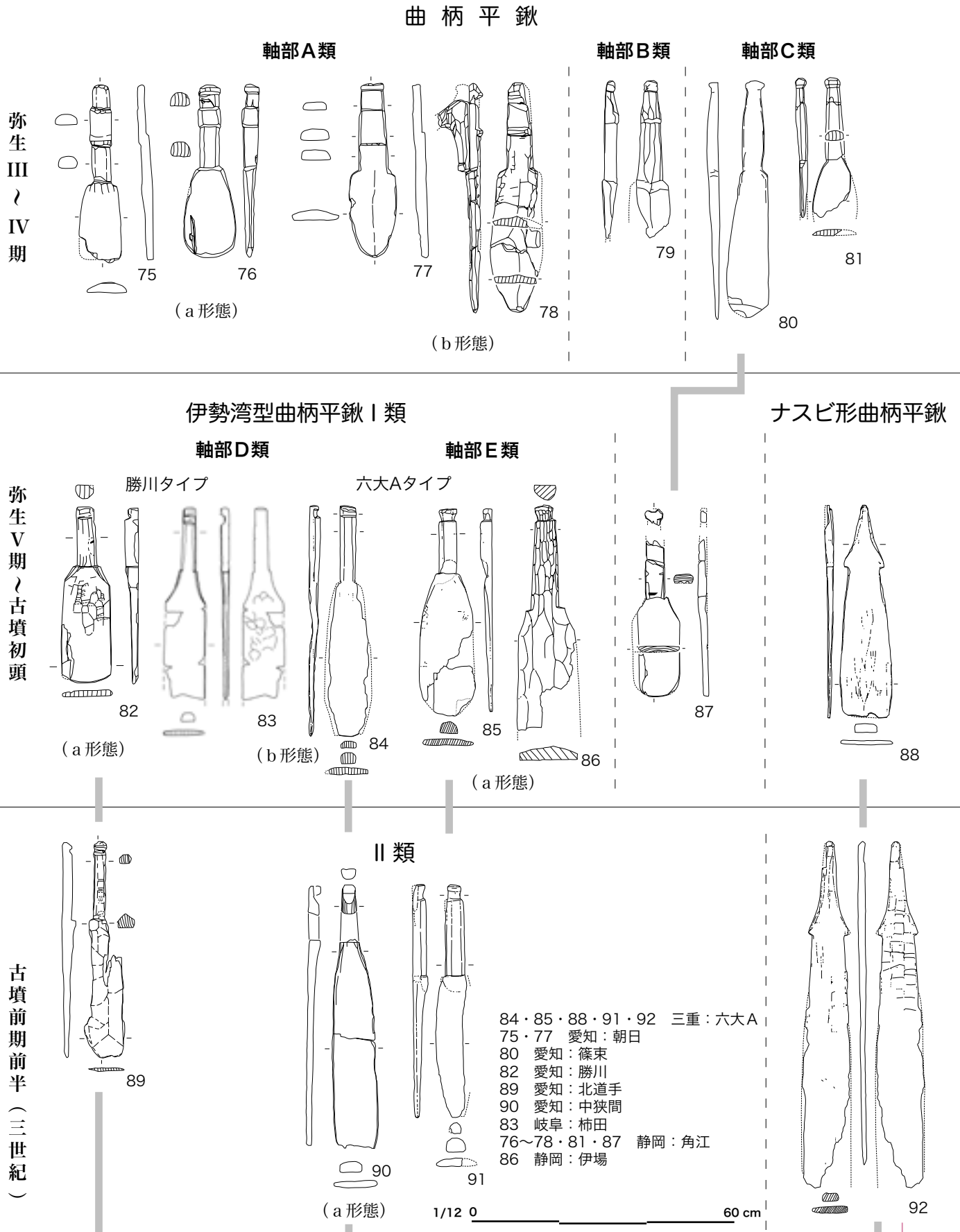


図7 曲柄鍬編年表-2

長方形。74は多又鋏である。

69は、長手方向の両端が柄孔周囲の隆起部がある面にむかって反る鋏で、一見、弥生Ⅰ期の諸手鋏に似ている。ただし、隆起部の形状は図面上の下にむかう逆水滴状で、下端部中央に三角形の抉りが入る。左右両端は欠損しているが、完形品のなかには片側にのみU字形の鉄刃を装着する細工をもつものがあることから、図面上の縦方向にも横方向にももちいられる多目的な鋏である。関東以北に多く分布しており、この地域では静岡県西遠江地方がその分布圏の西端に位置する。必ずしも適当な名称ではないが、黒崎直の命名(黒崎1996)にしたがって変形諸手鋏とよんでおく。

### 3 曲柄鋏の編年的位置づけ

曲柄鋏に関しては、筆者が1989年以降、たびたびその分類案と変遷案を示してきた(樋上1989ほか)ため、本稿での詳述はひかえ、概略のみ記す。

まず器種として(曲柄)平鋏・二又鋏・多又鋏が存在する(図6～8)。この地域では弥生Ⅲ期に出現し、弥生Ⅴ期には伊勢湾型(東海系)曲柄鋏とよばれる独特の形態を生み出して、弥生終末期から古墳中期前半には近畿地方以東の地域に広く分布するようになる。

一方、西日本では弥生Ⅲ期頃、岡山県の吉備地方でナスビを縦割りにしたような形状をもつ曲柄鋏(ナスビ形曲柄鋏)が創出され、弥生終末期に大阪府の河内平野に定着する。さらに古墳前期には東海系曲柄鋏と拮抗して全国に伝播する。

この地域では、伊勢湾型曲柄鋏に2つのタイプが存在し、愛知県尾張地方に特徴的なものを勝川タイプ(82・83)、三重県伊勢地方に特徴的なものを六大Aタイプ(84・85)とよぶ。弥生終末期には奈良盆地周辺から六大Aタイプが、古墳前期前半には北関東(群馬県)から勝川タイプが多く出土する。また、愛知県西三河地方では両者とも在地で製作されている。伊勢地方では、いち早くナスビ形曲柄鋏が流入するが、伊勢湾型曲柄鋏も根強く残る。

古墳前期後半(4世紀)には岐阜県西濃地方

にナスビ形曲柄鋏が流入し、中期前半(5世紀前葉)には尾張・三河地方を飛び越して西遠江地方へと分布圏を拡大する。

古墳中期後半(5世紀中葉)頃、このナスビ形曲柄平鋏にU字形の鉄刃を装着することによって、この地域の伊勢湾型曲柄鋏が一掃され、尾張・三河地方にもナスビ形曲柄鋏が定着するようになる。

柄との対応関係では、古墳前期後半以降、ナスビ形曲柄鋏には反柄がつくことがわかっており、伊勢湾型曲柄鋏および古墳前期前半以前のナスビ形曲柄鋏には膝柄がともなう。

## 4 曲柄鋏の刃部幅および柄の装着角度の検討

### (1) 曲柄平鋏の刃部幅

まず、曲柄平鋏の刃部幅を検討する(図9)。

弥生Ⅳ期および古墳初頭は10～12cmをピークとする正規分布を示す。ただし全体的には、弥生Ⅳ期は10cm未満に、古墳初頭は12cm以上にシフトしており、静岡県浜松市の角江遺跡では20cmを超える刃部幅の平鋏がある。

古墳前期には、伊勢湾型のピークが8～10cmとより狭い刃部幅に移行するのに対して、ナスビ形は14～16cmと逆に幅広化傾向を示す。

古墳中期以降は12～14cmをピークとする分布になるが、鉄刃を装着しないナスビ形の刃部幅が7.3cm～17.5cmと著しくバラつくのに対し、鉄刃装着のナスビ形は12～14cmと16～18cmの2つの山をもつ分布域を示す。

上原による近畿地方の例と比較すると、平鋏C(非ナスビ形)は10cmと12cmあたりにピークをもつ点や、鉄刃装着のナスビ形(平鋏D)の刃部幅が14cmあたりにピークがくることなど、共通点が多い(cf.1)。特にU字形の鉄刃は製作地が限られる規格品であることから、鉄刃のサイズにあわせて身部(風呂部)がつくられた可能性が高い。

### (2) 曲柄二又鋏の刃部幅

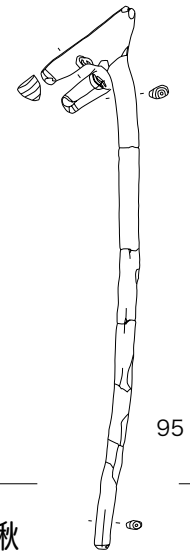
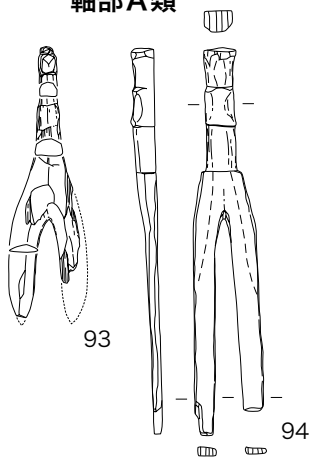
曲柄二又鋏では、弥生中期以降、伊勢湾型Ⅰ類・ナスビ形(古墳初頭～前期)へと、刃部幅

曲柄二又鍬

鍬膝柄

弥生 III ~ IV 期

軸部 A 類



伊勢湾型曲柄二又鍬 I 類

ナスビ形曲柄二又鍬

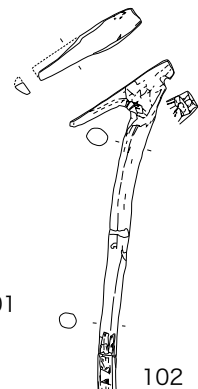
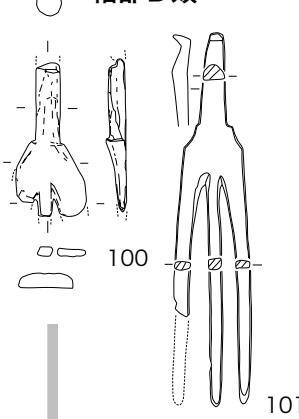
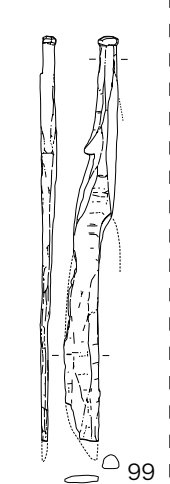
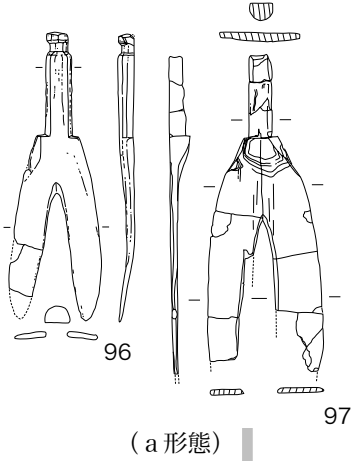
伊勢湾型曲柄三又鍬

弥生 V 期 ~ 古墳初頭

軸部 E 類

軸部 D 類

軸部 D 類

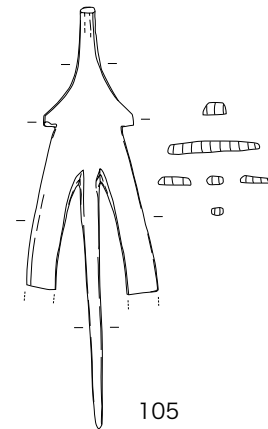
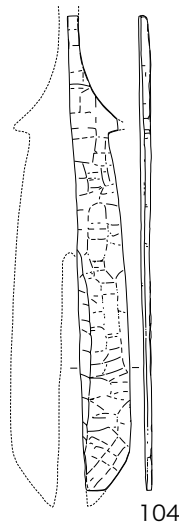
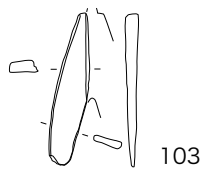


(a 形態)

(b 形態)

ナスビ形曲柄三又鍬

古墳前期前半 (三世紀)



- 93 三重：納所
- 96・99・104 三重：六大A
- 94・97 愛知：勝川
- 100 愛知：八王子
- 102 愛知：朝日
- 103 愛知：中狭間
- 105 岐阜：荒尾南
- 95・98 静岡：角江
- 101 静岡：岡の平

1/12 0

60 cm

図 8 曲柄鍬編年表 -3

の拡大化傾向が認められる(図10)。ただし、古墳中期のナスビ形は、前段階に対して刃部幅が狭くなる。

大まかな傾向としては、近畿地方のデータともほぼ共通する(cf.2)。

### (3) 柄の装着角度

柄(膝柄・反柄)の装着角度は50～55°をピークとする正規分布を示す(図11)。そのなかで、弥生IV期は52.2°～72.7°と角度がやや緩やかな方にシフトしている。

## 5 直柄鍬の刃部幅および柄の装着角度の検討

### (1) 直柄平鍬・横鍬未成品の刃部幅

本稿では、ここまで完成品についてのみ、形態分類と変遷案を提示してきたが、ここではじめて当地域の直柄平鍬・横鍬未成品の刃部幅を確認しておく(図12)。全時期を通じて19～22cmをピークとする正規分布を示す。時期別にみると、弥生I～III期は22～25cmにピークがある。最も未成品が多い弥生IV期は19～22cmに集中する一方で、分布域は9.8cmから29.4cmと裾野も広い。それに対し、古墳初頭以降は16.5cmから27.2cmと分布域がかなり狭まる。

19～22cmのピークは近畿地方の直柄平鍬未成品の刃部幅も同様である(cf.3)。ただし直柄横鍬では、近畿地方が31～34cmをピークとする正規分布を示すのに対し、当地域では完成品が17.9～40.5cmとバラつき、未成品も30.0～45.8cmとかなりの幅がある。

### (2) 伊勢・濃尾平野の直柄鍬(弥生I～V期)

直柄平鍬に関しては資料数が多いことから、時期と地域を限定して検討を試みる(図13～15)。

まず、伊勢～濃尾平野(納所・朝日遺跡)の弥生I～V期では、刃部幅は6.6cm(8)から17.3cm(22)と、かなりの幅がある。柄孔の角度も46.3°(19)から74.7°(8・15)までバラつく。この範囲を示したのが図13の破線である。さらに同時期・地域(遺跡)の直柄平鍬未成品の刃部幅に完成品の柄孔の角度をあてはめたのがグレーのトーンをかけた範囲であ

る。未成品の刃部幅は9.8～27.6cmで、この幅から完成品の幅まで製作過程あるいは使用段階で削り込まれたことになる。

本稿ではここまで直柄平鍬について、特に刃部幅によって広鍬と狭鍬に分けることなく分類・変遷案を示してきた。これまでの出土木製農耕具(掘削具)の研究では、おおむね広鍬と狭鍬は刃部幅15cmを境として分けられてきた(黒崎1970・根木1976・上原1993など)。ここでその分類を適合させると、完成品で広鍬の領域には朝日遺跡の弥生IV期に属する2点(20・22)がかろうじて入るのみで、他はすべて狭鍬の領域となる。

ではここに、民具学の分野でよくもちいられる鍬の機能分類である打ち鍬・引き鍬(打引き鍬)の領域を重ねてみる。打ち鍬(土壌の反転・耕起用の鍬)の領域は一般に刃部幅15cm以下(5cm以上)、柄の角度は60～90°とされる(ドットで示した領域)。しかし引き鍬(土壌の削平・移動用の鍬)については、刃部幅15cm以上(25cm以下)という点ではほぼ一致するが、柄の角度は民具学の分野では40～45°(飯沼・堀尾1976など)と非常に鋭角なのに対し、出土遺物からみた根木修の研究では45～75°とかなり広めに設定されている。本稿では一応、根木の説にしたがい、引き鍬の領域を、打引き鍬(両者の中間的な鍬)込みの範囲として斜線で示した。それによると、図13では、全体のおよそ3分の1が打ち鍬・引き鍬(打引き鍬)のいずれにも該当しない範囲に属することになる。直柄小型鍬はすべて狭鍬でなおかつ打ち鍬の領域に属する(グレーの枠内)。しかし、小型鍬は身部の長さが短いため、地面に深く打ち込み、土を反転させるという打ち鍬本来の機能はない。つまり、この時期には、刃部幅と柄の装着角度に明確な相関関係が存在しなかった可能性が高い。ただし固有の平面形をもつ直柄小型鍬(31～34)と、身の側縁に刃がつく平鍬I(2)・IV類(8・12・13・17・18・23)に関しては、他の直柄平鍬とは異なる機能を有していたとおもわれる。

### (3) 東三河・西遠江の直柄鍬(弥生III～IV期)

東三河および西遠江では、広鍬に分類されるものが伊勢・濃尾平野より多くなり、広鍬側の



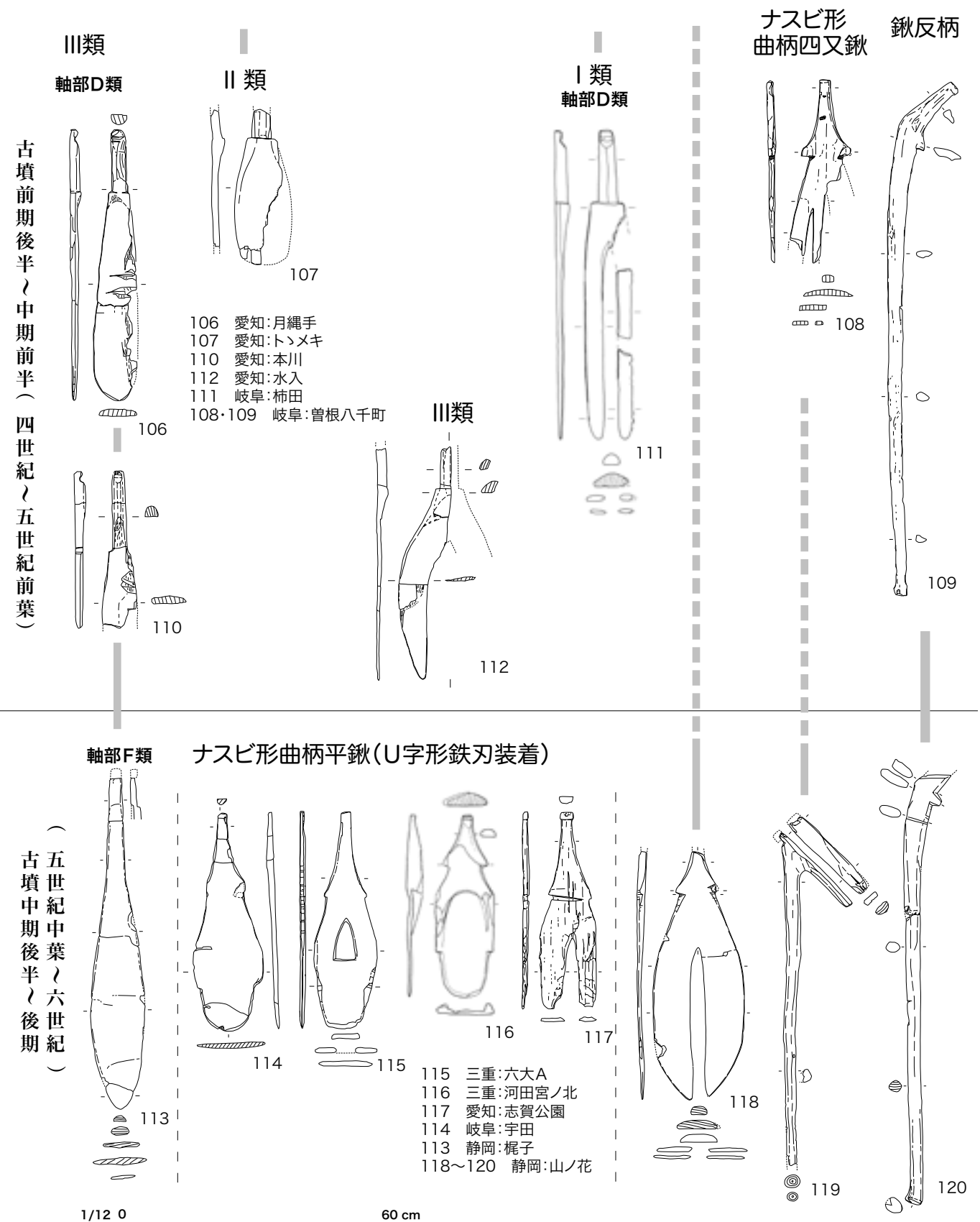


図9 曲柄鍬編年表-4

刃部幅はより広くなる傾向が認められる(図14)。しかし、やはり全体的には刃部幅・柄の装着角度は著しくバラついており、打ち鋤・引き鋤(打引き鋤)の領域を重ねても、両者に属さないものが3分の1を超えている。小型鋤は伊勢・濃尾平野と同様に打ち鋤の領域に収まるが、前述のように打ち鋤としての機能はなかったと考えている。

ここまでみてきた2地域について、直柄平鋤完成品の領域に、先に検討した弥生IV期の曲柄平鋤の領域(黒の太枠内)を重ねると、直柄平鋤(小型鋤)の大半が曲柄平鋤と重複することになる。以上のことから、弥生I~V期を通じて、当地域の直柄平鋤と曲柄平鋤の間には、明確な機能分化は存在しなかったと考えられる。

#### (4) 古墳初頭~中期の直柄鋤

最後に、古墳時代の直柄鋤を検討する(図15)。直柄平鋤は、37・51を除いてすべて広鋤の領域に属する。37は平鋤IV類で、この時期としては希少例であり、51は先に検討したように平鋤VIII a類からの再加工品である可能性が高いことから、この時期の直柄平鋤は刃部幅の点でかなり規格性が高いことがわかる。また、柄の装着角度も51以外は60.5~86.7°と弥生I~V期の直柄平鋤よりもはるかにまとまっている。

曲柄平鋤は、刃部幅が5.6~17.5cm、柄の装着角度は39.7~72.5°と、ほとんど直柄平鋤とは重ならない領域にシフトしている。

以上の点から、古墳初頭以降に関しては、直柄平鋤のほとんどを広鋤とよぶことができ、かつ曲柄平鋤との間にも明確な機能分化が認められる。これに打ち鋤・引き鋤(打引き鋤)の領域を重ねると、直柄平鋤はかろうじて引き鋤(打引き鋤)の領域に重なってくるのに対し、曲柄平鋤はいずれの領域にも属さない。それぞれの鋤の形態からその機能を想定すると、まず直柄平鋤VIII(a・b)類にはすべて泥除け具を装着するための細工がほどこされている。黒崎によると泥除け具装着の鋤は、「激しく打ち下ろして土を耕起する作業には不向きで、土を反転し砕きながら引き均す作業に適した鋤」(黒崎1996)であることから、直柄平鋤VIII類は

引き鋤ないしは打引き鋤の機能が相応しい。ただ近世の鋤から類推される引き鋤(装着角度が40~45°)に較べると、はるかに柄の装着角度は緩やかである。一方、曲柄平鋤については、刃部幅の点では打ち鋤に相当するが、柄の角度で打ち鋤の領域と重なる部分は少なく、むしろ引き鋤(打引き鋤)の領域にふくまれる。

直柄横鋤に関しては、刃部幅が25cm以下のものと30cmを超えるものに大きく分けることができる。柄の装着角度は50~69°と比較的狭い範囲に集中し、しかもそのほとんどに泥除け具を装着することから、ほぼ引き鋤としての機能に限定できる。

直柄払い鋤については、直柄平鋤(横鋤)・曲柄平鋤とも全くかけ離れた領域をもち、その独特の形状からも、他とは異なる特殊な機能を有していたことがわかる。

## 6 まとめ

前章では、伊勢湾周辺地域の鋤について、刃部幅と柄の装着角度からその機能の類推をおこなった。その結果、弥生I~V期には、直柄平鋤のうち、身の側縁に刃部を有するI・IV類や直柄小型鋤以外は、広鋤・狭鋤という従来の分類基準も不明確で、曲柄平鋤との間にも明確な機能分化を認めることができなかった。

一定の規格性をもち、泥除け具を装着する直柄平鋤VIII類が出現する古墳初頭にいたって、ようやく広鋤へのシフトが明確になり、曲柄平鋤との間にも機能差が認められるようになる。さらにこの時期、引き鋤として直柄横鋤、除草用?の直柄払い鋤が登場し、鋤の機能分化がいつそう明瞭になる。しかし、この段階でもなお、すべての鋤に対して打ち鋤・引き鋤・打引き鋤という民具学的分類が完全に適合するわけではない。とすれば、弥生~古墳時代の鋤にみる法量差には、民具学的な機能差では割りきれない、異なる原理が働いていたと考えられる。

弥生時代の鋤に関しては、沖積地にある多くの遺跡から製作途上の未成品が出土することため、基本的にどの集落でも製作されていた。製作者も専門工人とよばれる特殊な技術者ではなく、一般成員が農閑期などに製作していたとお

図9 曲柄平鎌の刃部幅分布グラフ(伊賀～西遠江:弥生IV～古代)

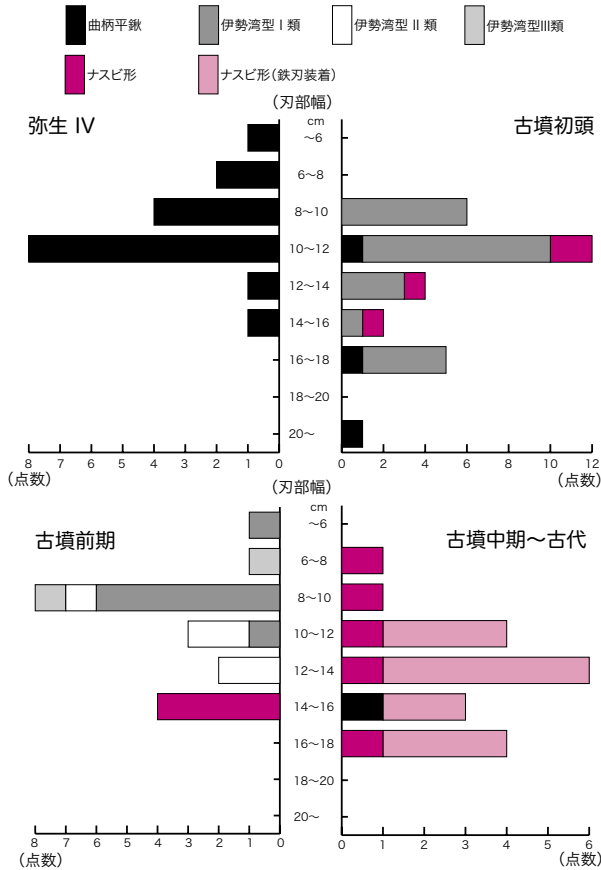
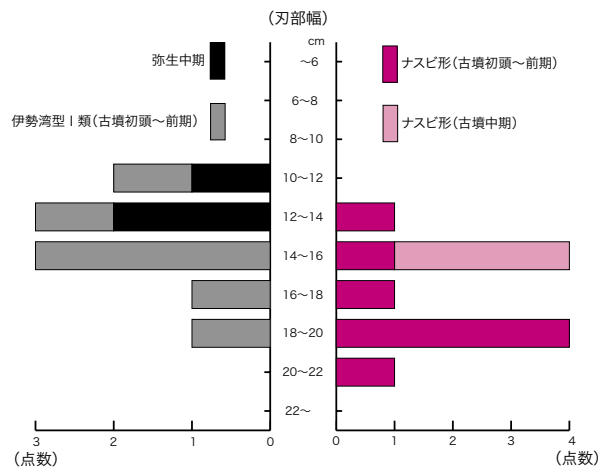


図10 曲柄二又鎌の刃部幅分布グラフ(伊賀～西遠江:弥生III～古墳中期)



cf.1 近畿地方から出土した曲柄平鎌の刃部幅 (上原真人1993『木器集成図録』より)

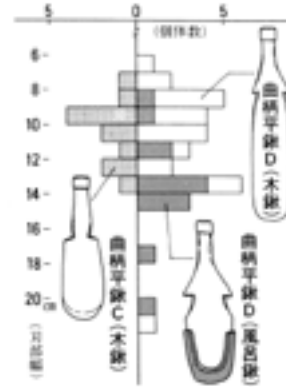
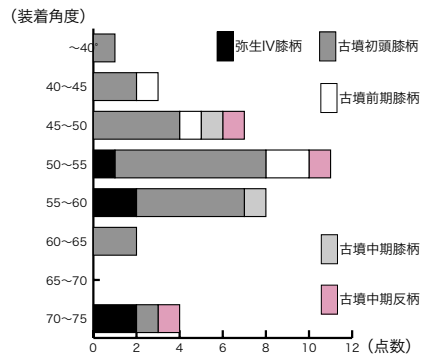


図11 膝柄・反柄の装着角度分布グラフ (伊勢～西遠江:弥生IV～古墳中期)



cf.2 近畿地方から出土した曲柄二又鎌の刃部幅 (上原真人1993『木器集成図録』より)

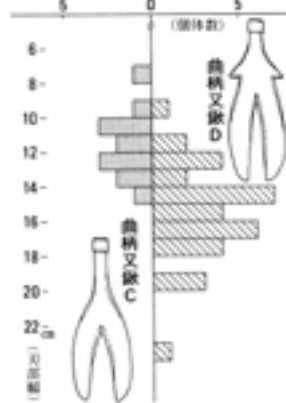
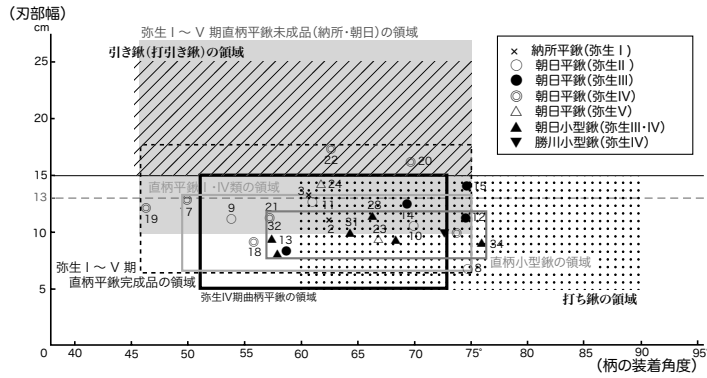


図13 直柄平鍔・小型鍔の刃部幅・柄の装着角度相関関係グラフ  
(伊勢・濃尾平野:弥生I～V期)



cf.3 近畿地方出土の直柄平鍔・横鍔の刃部幅  
(上原真人1993『木器集成図録』より)

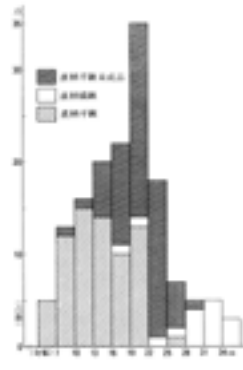


図14 直柄平鍔・小型鍔の刃部幅・柄の装着角度相関関係グラフ  
(東三河・西遠江:弥生III～IV期)

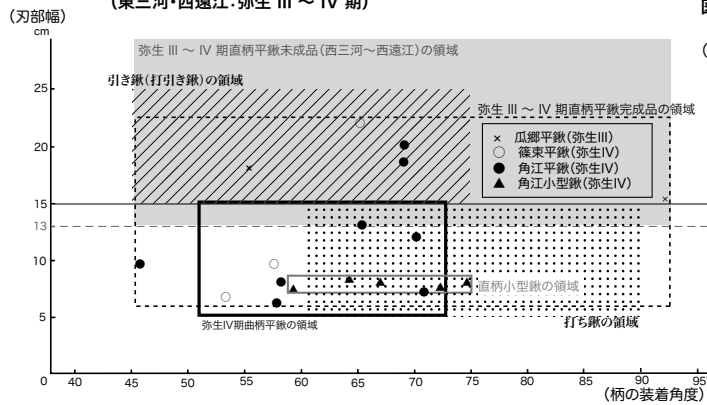


図12 直柄平鍔・横鍔未成品の刃部幅分布グラフ  
(伊勢～西遠江:弥生I期～古墳中期)

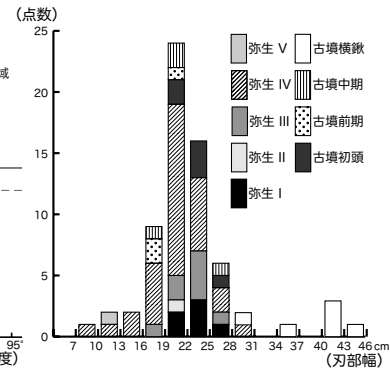
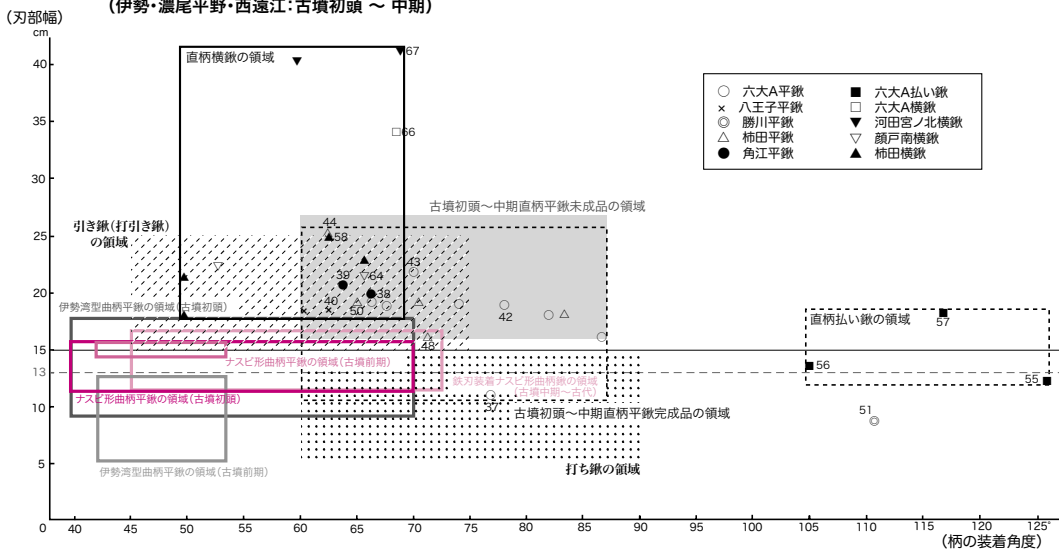


図15 直柄平鍔・横鍔・払い鍔の刃部幅・柄の装着角度相関関係グラフ  
(伊勢・濃尾平野・西遠江:古墳初頭～中期)



もわれる（樋上2005）。とすれば、この時期は鎌の製作者と使用者が、同一ないしは互いの顔がみえるようなきわめて近い関係にあったといえる。すなわち、刃部幅や柄の装着角度にみる著しいバラつきは、柄の長さもふくめて使用者の身体的特徴や作業姿勢などの違い（好み）を反映していた可能性がある。

さらに、西三河以東の直柄平鎌に較べて、濃尾平野（朝日遺跡）の刃部幅が総じて狭いことについては、鎌を作るためにその集落で調達できる原材の太さの差を反映している可能性も考えられる（樋上2002）。

古墳初頭（弥生終末期）以降、直柄平鎌未成品（特に連続成形品）は沖積地の集落から姿を消し、山間部や丘陵（洪積台地）の縁辺部に立地する集落からしか出土しなくなる。この時期から、鎌の原材となるアカガシ亜属の大径材（直径70cm以上）が確保できる集落に鎌の製作地が限定され、木材資源に乏しい沖積地の集落は完成品（あるいは半完成品）の供給をうけるのみとなる（穂積2000・樋上2005）。直柄平鎌の規格化が著しく進行し、未成品と完成品の領域がほとんど重なるのは、このためであろう。ただし、柄の装着角度は未だ若干のバラつきがあることから、着柄のみは使用者側でおこなわれていたとおもわれる。

この時期の鎌が、生産地と消費地の間で、どのようなかたちで取引されていたのかは不明である。しかし規格化の進行は、すでに商品と

しての鎌の第一歩を踏み出している可能性がある。その傾向がよりいっそう明確になるのは、直柄風呂鎌（図4-53）の出現以降と筆者は考えている。この段階をもって、弥生I期（あるいは縄紋晩期）以来続いた直柄平鎌の伝統が途絶え、かつ古墳前半期には隆盛をきわめたナスビ形（および伊勢湾型）曲柄鎌も終息にむかっていくという点で、この直柄風呂鎌の成立は非常に大きな意味をもっている。近世の農書や民具学の研究から復原される「打ち鎌・引き鎌・打引き鎌」という機能分化の、本当の意味での出発点も、この直柄風呂鎌が登場して以降のことだとおもわれる。ただ、この古墳後期～中世の直柄風呂鎌はいまだ全国的にも数えるほどしか出土していない（山田1998）。今後、これらの資料が増加し、本稿で示したような分析をおこなうことができれば、民具学からも追える近世の鎌への道筋がみえてくるのではなからうか。

#### 謝辞

本稿は、2005年3月におこなわれた唐古・鍵遺跡共同研究における口頭発表を骨子としている。今回文章を作成するにあたり、つぎの方々より貴重なご教示を得たことを記します。

植田信太郎・金原正明・寺澤 薫・外山秀一・福田栄治・藤田三郎・穂積裕昌・山田昌久（敬称略、50音順）

#### 参考文献

- 飯沼二郎・堀尾尚志 1976 『農具』ものと人間の文化史 19 法政大学出版局。  
 上原真人 1993 『木器集成図録 近畿原始篇（解説）』奈良国立文化財研究所史料第36冊。  
 黒崎 直 1970 「木製農具の性格と弥生社会の動向」『考古学研究』第16巻第3号 考古学研究会。  
 黒崎 直 1996 『古代の農具』日本の美術 No.357 至文堂。  
 根木 修 1976 「木製農具の意義」『考古学研究』第22巻第4号 考古学研究会。  
 樋上 昇 1989 「木製農具の地域色とその変遷—勝川遺跡出土資料を中心として—」『年報 昭和63年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター。  
 樋上 昇 1993 「木製農具研究の一視点—ナスビ形農具の出現から消滅まで—」『考古学フォーラム』3。  
 樋上 昇 2000a 「東海系曲柄鎌再論」『考古学フォーラム』12。  
 樋上 昇 2000b 「3～5世紀の地域間交流—東海系曲柄鎌の波及と展開—」『日本考古学』第10号 日本考古学協会。  
 樋上 昇 2002 「樹種からみた尾張地域の木製品」『考古学フォーラム』15。  
 樋上 昇 2005 「木製品専業工人の出現と展開—伊勢湾周辺地域における木製品の生産と流通をめぐって—（上・下）」『古代学研究会』168・169号 古代学研究会。  
 穂積裕昌 2000 「弥生時代から古墳時代の木器生産体制について～三重県内の木器出土遺跡からの素描～」『研究紀要』第9号 三重県埋蔵文化財センター。  
 宮本常一 1979 『民具学の提唱』未来社。  
 山田昌久 1998 「風呂鎌の成立と展開」『人類誌集報1998』東京都立大学考古学報告3。  
 山田昌久 2003 『考古資料大観 第8巻 弥生・古墳時代 木・繊維製品』小学館。

# 古墳文化共鳴の風土

● 赤塚次郎

弥生時代からの伝統的地域社会が、いかなる要因で前方後円墳や前方後方墳を採用し、造営していったのかという点を、特に地域社会の側に立脚して考えてみたい。前方後円（後方）墳とは、本来が弥生社会が生み出した地域型墳丘墓から出発している点を確認し、その大きさや形、墳丘テクスチャーなどはすべてそれぞれの地域社会がほぼ独自に決めてきたものであり、かつ所有しているものであると考える。したがって前方後円（後方）墳はヤマトから一元的に拡散したのではなく、すでにそれ以前に普遍化していた地域型墳丘墓から、その地域が時間をかけ選択し収斂した結果にすぎないものである。そこに王権のデザインへの共鳴現象が関与し、民族的な問題を止揚する方向性が生み出される。

## 1 はじめに

弥生時代後期を中心として伊勢湾岸地域に、「東海系」と総括される独自の文化が存在する。そしてこの文化の重要性は、古墳時代の幕開けそのものに大きく関わっていると想定できる点にある。その具体的な資料としては、東海系土器・木製品・人面文・墳丘墓（前方後方形）などを加えた東海系文化そのものの拡散現象として把握できる。かつて東海系のトレースと呼んだ現象である（赤塚 1992）。その具体的な現象は大きく西暦二世紀末葉から三世紀前葉の第一次拡散期と、西暦三世紀中頃から後葉を中心とした第二次拡散期に区分できる。前者は、主に東日本に広がりをもち、東海・北陸・中部高地から関東各地の地域社会に構造的な社会変革を起こした、あるいはその契機を作り出したことは間違いない。さらにこうした広域的な文化拡散現象は、新しい歴史の方向性を模索し始めていた、各地の地域社会において共鳴し、結果的に列島規模に多様な土器様式が錯綜する時代をカタチづくっていったと言えよう。見方を替えると広域的な情報が錯綜し、伝統性からの離脱を含めた浮遊性志向が強く生み出されつつあったことになる。一方で、第二次拡散期は、東海系のトレースのベクトルが反転する。すなわち近畿地域に向かって「東海系」が積極的

に動き出したことになる。それは新しい編年観に照らし合わせると、おおむね三世紀中ごろを中心とした時代を設定することができるようだ（赤塚 2003）。まさに破格な規模をもつ歴史的な巨大前方後円墳がヤマトに誕生しようとする時代に相当する。こうした現象の背景には、本来が伊勢湾沿岸部の部族社会がもつ矛盾が引きがねになり、個人的カリスマの登場と伝統・風俗性の強化が下地に存在すると考えている。

以上のような点を踏まえて、拙論では東海系文化を整理する過程で浮かび上がってきた古墳文化誕生のプロセスをまとめてみたい。ここで問題にしたいのは、そうした流動化した伝統的地域社会が、いかなる要因で前方後円墳や前方後方墳を採用し、造営していったのか。さらに各地の地域社会がどのような意味合いをもって、こうした墳墓を受け入れていったのかという点を考えてみたい。

### 「ヤマトから」という幻想

古墳文化の主要な要素やカタチは、全てヤマトから列島内に波紋のように広がって行った。ここに古墳文化の全てが存在し、この地から全てが発進されたというような幻想がある。しかしながら現在の考古学的成果からは、これらを実証する具体的な資料は残念ながらほとんど見だしにくいといっても過言でない。つまり「ヤマト」に遅くとも三世紀中頃に誕生したとされ

る倭王権は、まさに突如、忽然とこの場所に登場するという印象が強い。彼の地の弥生社会が母体となり、その枠組みを基盤にして急速に発展していった形跡は見いだし難い。では、あのヤマト東南部に残る無数の巨大古墳や遺跡はいかなるものなのであろうか。結論を最初に述べれば、この幻の王権の実体は、列島内に存在した多様な地域社会の集合体であると考えている。様々な地域社会がある歴史的な出来事性(狗奴國との抗争)を起因として「ヤマト」に集合し、そしてあらたな集合体が出来上がった。そしてその場所に、各地の地域社会が生み出したさまざまな文物が集まってきた。やがて、集合体は各種の地域性豊かな文化の中から選択性と取斂性の過程で、新たに誕生させた王権のデザインを決定して行くと考える。

#### 共同性の創造に向けて

二・三世紀列島内には、個性的で独自の文化がそれぞれの地域単位で一つの地域社会を形作っていた。決して一様な文化が存在したのではない。間違いをおそれず言及すれば、それは民族的ともいえる違いが内包されていたと思っている。したがって拙論の前提は、多民族的な列島社会の風景を容認するところから出発する。それは都出比呂志が示した共通圏としての第1・第2地帯(北部九州から東北中部)内(都出1993)においても例外ではなく問題にしたという事である。

そしてそこに存在した多様な地域社会が、次なる新しい時代への胎動を自ら感じ取り、判断しているように思える(共鳴現象)。東海系のトレースはその方向性に一つの契機をもたらしたにすぎない。「東海系」は古くからの交易ルートに導かれて、結果的に地域社会が決断した様々な共同性の新たな創造に参画して行ったものと考えている。

以上の前提を踏まえて考えていきたい。なお、取り扱う時代はおおむね三世紀を中心とする。

## 2 前方後円墳というカタチ

前方後円墳について、まずその各々の要素・属性を徹底的に分解していくと、各要素が個

性を持ち始める。それまで同一視されたモノが、その時点で別な区分においても把握できるように見えてくる。例えば葺石を取り上げてみると、まず外表施設としての葺石という概念からはじまり、葺石の施工法、そのものカタチや岩石学的な種別にいたる。施工法や種別には個々の墳墓において個性的なあり方がむしろ一般的といえよう。それはその場所に意味があり、言ってみれば地域性が表面化しているからでもある。つまり伝統性や地質学的な景観や立地条件等が深く関わっていると一言換えても良いだろう。しかし逆の見方をすると、今度はモノがもつ普遍性が蘇ってくる。それはそれぞれが孤立したモノではない点にあるようだ。そして見方や切り口によって、何らかの空間的な広がりや把握できる場合も多い。しかしながら普通、こうした個性が分析段階では把握されながらも、いつの間にか葺石という概念化された普遍性に埋没する場面が多いように思われる。葺石以外の要素において同一化という方向性が存在する点は否定できない。このように前方後円墳は、なぜかはじめに一つの完成された複合体として存在し、受け止められていると思われる。なるほど全体構造として「前方後円墳」は、確かに個別性があり普遍性が存在する点は否定しない。しかしながらその出現において、地域性を踏まえた多様性が内包されている限り、それは見かけ上の事である。こうした前提を確認し、強く意識しておく必要がある。結論を急ぐと、大きく見ればこの時代、墳墓の諸属性の多くは、地域性の集合であるといってもよい。

#### 前方後円形というカタチ

そもそも前方後円形とは、弥生時代の地域型墳丘墓である「円形周溝型」から出発して変化したものである点は動かない。したがって突出部がいかなる原理で発展したかと言う問題をここでは棚上げすれば、カタチのイメージは明らかに弥生時代から踏襲されたモノである。現時点でその淵源地は、東部瀬戸内から大阪湾沿岸部周辺地域と思われる。いずれにしても前方後円墳そのもののカタチは、地域型墳丘墓の遺伝子をもつ。したがってこれに付随する様々な属性は、必然的に地域性を踏襲していると考えた

方が良い。これが前提となる。

近年の発掘調査からは、宮崎平野や千曲川流域、関東北西部などに円形原理の地域型墳丘墓が存在し、分布する点が明らかになってきた。

つまり円形原理の墳丘墓においても列島内に点在することになる（石野 2001）。前方後円墳のカタチそのものを議論するのであれば、各地の円形墳墓がどのような仕組みで存在し、展開して終焉していったのかを含めて議論すべきであろう。そしてその幾つかは、間違いなく地域社会において古墳時代へと受け継がれている。そうした視点と前提でこの時代の墳墓を考えるべきである。地域の墳墓を踏まえることなく、前方後円墳・前方後方墳というカタチから、その多くを畿内ないしは東海に直接結びつける傾向が認められる。

地域性というものは、暗々裏の内にいつのまにか消え去ってしまうものなのであろうか。そうではなく、執拗に残存することが一般的であったと思われる。

一方で、「ヤマト」発の前方後円形は存在するのか、という視点も重要だ。寺沢薫が提唱した「纏向型前方後円墳」とその政治的な拡散現象は、興味深い問題である（寺沢薫 1988・2000）。しかしながらここでは逆の考え方をしたい。すなわち纏向型前方後円墳とは円形原理を志向する地域型墳丘墓の集合にすぎないという視点である。なぜならばヤマトには、未だこれらに先行し、かつ連続する円形原理の墳丘墓を、伝統性にまで高めた地域は見られないからである。また纏向型前方後円墳の内部にはカタチにおいて多様性が存在するが、それはそのまま各小地域が所有する地域型墳丘墓そのものを表しているものである、と素直に考えるからでもある。

では、何故、円形周溝型の遺伝子をもつ前方後円形の墳墓が、列島内に普遍化したのか。それは極めて魅力的な課題である。

### 3 前方後円墳のデザイン

前方後円墳や前方後方墳の具体的かつ視覚的なイメージ。この分野の研究はむしろ遅れていると見てよい。本来の古墳の表面表現はほとん

どわからない。各種の布類・木製品、有機質の製品群は痕跡がほとんど確認できないからでもある。そこに描かれた色、色彩も重要な要素であるが、現状では欠損する。本来、地域には「色」があり色彩がある。地域特有の素材も重要だ。こうした墳丘のテクスチャーが視覚的な古墳の違いを明確化していた可能性が高い。しかしながら考古学はこうした視点にはほとんど無力といってもよい。古墳周辺の景観にも配慮が必要になる場合が想定できる。例えば意図的に整理された木々や草々があったかもしれない。水の流れや周囲の山々が意識されていたはずだ。このように墳丘のテクスチャーとその景観をいかに考えるかによって、一見同じように思われていた前方後円墳も、まったく異なるモノとして描き出せる可能性がある。従来の二次元法による区分や分類の限界性を認識し、墳丘を含めたその場をモデリング化する方向性を持つことが必要がある。こうした三次元化とともにバーチャル的なテクスチャーの違いを研究することが重要になろう。墳丘斜面の立ち上がり方や段築、葺石の素材やその施工法によってもテクスチャーが大きく異なることになる。

つまりカタチは同じようだが、印象が異なる。重要な点は、地域に存在する固有の素材を巧みに使用したデザインがここでの視点といえよう。

#### 技術者

前方後円墳の普遍化には技術者の存在が不可欠であることは明白である。イメージを描き、理念を謳い上げた後に、最後の仕事が技術者に委ねられる。さて、ここで不思議な落とし穴がある。考古学の論述にはいたって技術者をあえて高く評価する傾向が強い。本当にそうであろうか。銅鐸製作や鏡製作、玉作など、そこには優れた技術者の存在を前提化する傾向が支配的である。なるほどそうした優れた技術の継承が、技術体系として完成されている場合は考慮に値しよう。しかしながら本来の技術とはそのイメージが伝われば、技術者は類似するモノを作ることが可能である。ただし美術工芸作品を目指すという視点はここでは棚上げすることになるが、いずれにしても製作法はまっ



たく異なるかもしれないが、技術者の脳裏に一定のイメージができればそれで良い。見たこともないモノを作り上げることさえ可能となるはずだ。そして、こうして製作されたモノがどのように評価されてきたかと言えば、稚拙・例外という解釈で処置してきた場合が多い。

歴史的な巨大な墳墓を例外として、その多くは、大きく見れば前方後円墳のデザインも、このような不安定な技術環境下にあると考えたい。弥生時代から続く墳丘墓の延長上に位置づける立場を持つ限り、あえて詳細な技術マニュアルは必要ないし、存在しないと考える。

#### 大きさについて

技術者たちの頭の中にイメージがわき上がる。するとそのイメージを基にしてデザインが描かれ始める。地域には「大きさ」や「カタチ」が存在すると考える。それはおおまかな「尺度」といっても良いかもしれない。これらは伝統性に沈殿する不動的なものに近い。いや繰り返される変化と言った方が正確かもしれない。いずれにしろその時代、その地域が所有する「大きさ」や「カタチ」を基礎にして、前方後円墳がデザインされると考えたい。多くの前方後円墳の大きさは、その地域が所有する「大きさ」や「カタチ」によっておおまかに決定されるという基本的な視点をもつ。問題はその地域が所有する「大きさ」以上の規模をもつ墳墓が出現した場合というべきだろう。列島内に存在するすべての前方後円墳が、王権の基に一定の絶対的な基準と規格を基礎として「大きさ」が決定された。こうした従来の見解とは大きく異なる立場にたつ。逆に多くの場合、「大きさ」のイメージは地域の中に存在すると考えたい。その具体的な姿は弥生時代の墳丘墓(方形周溝型を含む)において明確に認められる。

## 4 前方後円墳論の前提とは

ここで、現在の前方後円墳論を整理しておきたい。まず都出比呂志は前方後円墳の源流が弥生時代の墳丘墓にある点を認めつつ、前方後円墳への飛躍には「死者を北枕で葬る(畿内から吉備・出雲)・三段築成・遺体の周辺に大量の

朱を撒く(神仙思想)・僻邪の観念(三角縁神獣鏡の配置・黒塚古墳)」があり、共通祭式の拡大は、墳丘規模の斉一化、長大な竪穴式石槨の採用、三角縁神獣鏡の副葬などに見ることができる。また「前方後円(後方)墳に相似形が見られ、基準尺度を共通」し、それは「各地の首長が共通した古墳祭式と築造技術を受け入れはじめたことを意味する」と考えた。ただし「各地の伝統は保持され、例えば東西頭位が九州や四国に主流となる」点も付け加える。そしてその祭式は各首長層が共通の政治秩序の中で、異なる葬送儀礼を融合し、かつそれらから超越する新しい葬送儀礼を創造する必要があったと考え、「各地にそれ以前からあった墳丘や埋葬施設の築造技術を葬送儀礼のうちいくつかの要素を採用すること。吉備や讃岐の竪穴式石槨、吉備や出雲の葺石、吉備で発達した埴輪が初期の古墳に採用された。もう一つは外来の儀礼と技術、つまり北枕の埋葬や銅鏡、朱の重視や墳丘の三段築成など。古代中国の宗教思想と墳丘構築の土木技術を新しく取り入れた。この「融合と超越」の原理により創造された祭式が前方後円墳祭式である。」こうした前提を踏まえて、「墳形と規模との二重の原理により被葬者の系譜と序列を表示する身分制のシステム」とする著名な前方後円墳体制論が展開する。(都出 2000)ここでは、特に融合と超越の原理に共感し、さらに論を進めていきたい。

次に白石太一郎は「当時の古墳は、列島各地の政治的首長たちが、彼らの構成する政治連合の構成員の死に際して共にその墓を造るといった性格がきわめて強かった」として「古墳の墳丘の規模もまた、彼ら各地の首長たちがその政治連合のなかで占めていた地位、すなわちその身分秩序と関連しているものと考えられる。おそらく祖先を共通にするといった同祖意識で結ばれ、共通のイデオロギーにもとづいた古墳を、共通の政治秩序にもとづく基準によって共に造り、共にその葬送儀礼を執り行う事によって、彼らの間の同盟関係の確認や強化がはかられた」(白石 1999)と主張する。列島内に点在する古墳のあり方を、「政治勢力の間に形成されていた首長同盟の政治秩序」との関係で理解している。そして「各地の首長たちは、ヤマ

トの王に倭国王としての外交権と海外交易の統制権を認め、最高の宗教的権威を承認することによって、自らもその権威に連なるものとして、配下の民衆に臨み、鉄資源をはじめとする先進的文物の入手システムに加わることができたのである」とそのシステムの具体的な内容に踏み込んで言及した。

広瀬和雄はその著書の中で「画一性と階層性をみせる墳墓が前方後円墳であり、前代からの伝統、技術的な限界性、中央からの距離感などに起因した地域的特殊性をもちながらも、墳丘構造や埋葬施設や副葬品の組合せに画一性をもたらしたのは、亡き首長がカミと化して共同体を守護するという共同幻想を内容とした前方後円墳祭祀であった」と主張し、「もの・人・情報の再分配システムを媒介とした、首長層の利益共同体のイデオロギー装置として前方後円墳は機能していた」と考える。つまり「一定の領域をもって、軍事・外交・イデオロギー的共通性をそなえた首長層の利益共同体が前方後円墳国家であり、そしてそれを運営していたのは終始、大和政権であった。すなわち、前方後円墳国家のメンバーシップを表象したのが前方後円墳連鎖として〈目で見る王権〉の役割を果たしたわけだ。」(広瀬 2003)

#### ヤマトという前提と同じ民族性という前提

以上のように現状の前方後円墳論には大きく2つの傾向が読み取れる。それはまず第1に何らかの共通性を保持する点を認め、前方後円墳そのものを政治的な諸関係を表示するものであると考える点である。特にその形と大きさが重要なキーワードになっているようだ。第2に偏差のある地域性を認めつつも、その中心はあくまでも「ヤマト」である点は変わらない。つまり文化情報の発信は、ヤマトが全て掌握したものであるという前提の上に語られている。さらに上記の論文では明確に言及されていない重要な点がある。それはこれらの理論は列島内の多くが、基本的には同じような風俗・風習、考え方やその方向性を享受するものである、という一つの民族的土俵の上に存在するという前提がある。こうした暗々裏に認められた前提が、ほん

とくに正しいものかをまずは考えてみる必要がある。この視点を以下、最も重視したいと思う。大林太良や網野喜彦が提示した民族的視点(大林 1986・網野 1998)は未だ不透明なままといえよう。

そこで、まず共通性を保持ないし、共通性を見いだす積極的な要因について考えることにしてみたい。先に引用した代表的な論考に共通する点は、どうやら鉄資源を代表とする、特殊な文物の具体的な分配システムに重きを置くように思われる。そしてそれはすべてがヤマトに一元的に集約されるという前提がそこに存在すると思われる。はたして現在の考古学的成果がこうした点を傍証できるのか問題にしたい。なるほど畿内においても副葬品に見る圧倒的な鉄製品や鏡・石製品の所在は間違いない。しかしその所在がほんとうに彼らの独善的な保有品なのかは議論の余地がある。前期古墳から出土する品物が、すなわち彼らのだけの仕組みによって独占的に集積されたものかは問題である。むしろ、現在の詳細な属性的な分析からは、その多くは偏差に満ちた品物であるという方向性が指摘できるのではないと思われる。つまりそこに存在するものは、結果として多様な製品が集積されたものであるという視点が浮かび上がってくる。中には彼らそのものによる所有も否定はしない。しかし問題はこうした鉄製品などの製品再分配システムが、実は表面的な見掛け上の動きにすぎないものとも考えることもできる。弥生後期から古墳早期の地域社会はすべからく同一の品物を嗜好し、かつ蓄積したというのは明らかに間違いである。実質は地域による製品の選択的集積と生産にある。この執拗な地域性を一気に払拭する魔法のような思想は見当たらない。

そこで次に早期・前期古墳の代表的な副葬品を概観することにしてみたい。

## 5 収斂する副葬品

早期・前期古墳の副葬品の中で特に注目されるものはやはり鏡と石製品であろう。加えて鉄製品・青銅製品を概観してみよう。

まず鏡であるが、従前の予想に反して倭鏡

製作の開始がさかのぼる点や複数の系列が存在し、またその変化も多様である点が指摘されている（森下 1991）。三角縁神獣鏡の製作とほぼ同じくして初期倭鏡製作が列島のどこかで行われていた可能性は極めて高いと考えるべきであろう。ところが、倭鏡製作が一元的な生産体制の中で実施されたと考える研究者は多い。はたしてそうだろうか。ここでいう一元的な場所とは、明確な場所の推定ではなく、ぼんやりとヤマト東南部周辺といったぐらいの感覚であろうか。遅くとも三世紀中ごろには三角縁神獣鏡が市場に出回る。するとその段階で東南部に一元的な倭鏡製作体制が誕生していたことにならねばならない。しかし残念ながら現状ではヤマト地域の弥生後期から古墳早期の社会にはそうした伝統は見いだしにくい。三世紀中ごろから後葉にかけての地域社会における倭鏡の保有は、予想に反して多いと思っている。そして実は東日本にも広く拡散しているのが現実だ。そして大阪湾沿岸部や濃尾平野・北陸加賀地域などには独自の倭鏡が分布し、具体的には複数の地域社会で倭鏡制作の伝統性が生み出されていると考えたほうが良い（赤塚 2004）。ここでは倭鏡製作も例外とは考えるべきではなく、やはり地域社会が所有する多様な製作環境や製作方法を基盤にしてしだいに収斂されていくと考えるべきではなかろうか。具体的には雑多な青銅製作環境を基礎として、列島内の複数の地域社会が独自に倭鏡を製作した。初期前方後円墳などに副葬される倭鏡の存在を、すべて一元的な製作と一元的な配布システムから理解できるかはかなり難しいと思われる。列島内各所の雑多な製作環境という基盤の上に、より効率化され合理化された工房へと移り変わっていくものではなかろうか。ここにも偏差に満ちた多様なモノから収斂へという基本原理が存在すると考えたい。

次に石製品についてであるが、まずその分布を概観しても、地域的にかなりの偏在性が存在する点は明らかである。こうした点を政権の地方経営の所産とする解釈が大きな支持を得ているように思われる（川西 1988）。しかし近年は大和政権の絶対的主導を疑問視する傾向も見られ、それぞれの形が単純な変遷ではなく、さ

らにその素材においても多様性があることが指摘されている（北條 2002）。倭鏡も同じであるが、ここであらためて確認するまでもなく、基本的には石製品化は弥生時代から続く伝統工芸技術である。容器形石製品などで解釈したようにこうした品物の石製品への写しは地域性が存在する（赤塚 1999）。具体的には容器形への石製品化（写し）は、東海地域の中にその伝統性を見いだすことが必要である。そして他の腕輪類を含めても、東海から北陸地域を中心とした伝統的地域社会が作り出した工芸品であると理解した方が良い。地域から生み出された多様な工芸品が、王権およびその周辺に交換され、やがてその中からより規格化されたデザインが生み出されていく。これらの工芸品の基本的な道筋は、以下のように理解したい。

まず部族を表象するアイテムとしての地域の特産物から出発するものであり、やがて市場、交換媒体の中で選択され収斂され、より適合したカタチが志向される。するとその方向に見合うデザインが工房内で生み出され、急速に普遍化し、市場に出回ることになる。王権による独善的・特権的な方向性のみが、そこに介入するというような単線的な系列はどこにも見いだせない。ただ優れた工芸品への憧憬が王権内にも存在した事は間違いない。

鍬の形は本来、地域の部族的な要因から決定される場合が一般的である。したがってその形は多様であり、大きく見れば地域により分布に偏在性が見られる。拵えやその装飾、素材を加えるとまさに所属する集団を表象する優れた品物であり、より具体的な違い（視覚的な差違）がむしろ重要であったはずだ。副葬品にみられる鍬・剣の形や拵え、副葬法に多様性が存在するのはそのためである。銅や鉄素材はしたがって地域に存在してこそ意味があるものと理解したほうが良い。王権による一元的な巨大な工房はどこに存在するというのだろうか。そしてその技術はどこから習得したものなのだろうか。ここでも本来、こうした技術力は、弥生時代からの地域社会がそれぞれ風俗性に則して工夫し、育て上げてきた伝統的な技術である。これらの素地を踏まえた特定工房の存在は、すなわち地域社会からの技術者の集積であり、それ以外の

何者でもない。特定工房の存続性は、市場で選択され収斂された後、普遍化するデザインの登場までまたねばならない。因に、筒形銅器や巴形銅器も弥生時代からの伝統性から引き継がれたものである可能性が高いと考えており、やはり地域性を基本にした作品と受け止めている(赤塚 2004)。

こうした前提が許されるならば、初期古墳の副葬品に見られる工芸品は、その大半が弥生社会から引き継がれた伝統的地域社会が所収するモノであることになる。その素材や形はまさに多様で希少、地域性が強いモノと言えよう。こうした工芸品がより広域的に急速な交換がはじまると、効率的なデザインが必要とされ形と素材が収斂されていく。そしてそれを市場が選択したことになる。したがって多くの副葬品を無批判に威信財として受け止める方向性は認めがたい。なぜならばそうした共通意識が存在すると言う前提が存在しえないと考えるからである。弥生時代後期の段階においても地域はそれぞれ自らの意志と風俗性の許容範囲内において、素材や文物を選択し収斂してきた。全ての地域社会が同じモノを同じ程度望み、求めていたというような状況はどこにも存在しない。この時期、列島内にモノやその使用にあたっての統一的な価値観を求めることは難しいと考える。

## 6 共鳴性としての墳墓の形

さて、ここで今までの概要を整理しておきたい。

まず前方後円墳や前方後方墳とは、本来が弥生社会が生み出した地域型墳丘墓から出発している点を確認しておきたい。そしてその大きさや形、墳丘テクスチャーなどはすべてそれぞれの地域社会がほぼ独自に決めてきたものであり、かつ所有しているものである。どちらかというとならぬ方を優先し、これらの属性を受け止めていきたい。そして重要な点は、地域型墳丘墓には多様な方向性が内包されているのであって、必ずしも一様ではない。そのカタチと文化に何らかの共通性を見だし、その地域社会から外に向かって力強く情報を発信し

ようと試みた地域は、この時代においては特定地域に限定できる。具体的には大阪湾沿岸部(前方後円形)と伊勢湾沿岸部(前方後方形)である。この二個所の地域社会からの文化情報を基本にして、地域を動かし、新たな伝統を築こうとする力強い意思が働いた瞬間、その形に共鳴性が生み出されると考えたい。共鳴性という言葉に含まれるコードは、厳格な政治的なイデオロギーというより、むしろ何らかの共同性に共感する感性的な集団行動に近いと言えよう。そして重要な視点は、それぞれの地域社会が未だに独自の言語と風俗・風習を保持し続けていたと考える点にある。つまり受け止め方はすべて地域社会の側にその決定権があり、情報発信者側にあるのではない。列島内が一律でかつ一様な民族的基盤を保持しえたかどうかは甚だ疑問である。むしろその逆であった可能性が高いものと推測する。多様な部族社会としての地域的まとまりが、それぞれ判断し、雑多で偏差に満ちた「古墳文化」への志向性が沸き起こる。その端緒は前述したような東海系のトレースに起因する。

すなわちヤマト発の「古墳文化」という単一の目標があつて、その合理性に賛同して、列島内の地域社会が一様に変革していったわけではないという事になる。

### 新たな王権が目指すモノ

邪馬台國と狗奴國との抗争とその終結を契機にして、三世紀中ごろ段階で、大阪湾沿岸部と伊勢湾沿岸部を中心としたまとまりが、新たな共同性を作り上げる動きに出る。この抗争が歴史的な出来事性を持ち、初期倭王権誕生の直接的な起因になっているであろう点は、都出比呂志や白石太郎がすでに指摘しているところであり、拙論もその起因と言う点において一致を見る。ただ「こうした共通化への直接的な契機が、卑弥呼の死により、巨大前方後円墳の出現と古墳祭式の共通化が実現した」「つまり卑弥呼の死によって、より具体的な前方後円墳共通祭式が普遍化した。」とする都出の考え方とは共通祭式の採用が共同性の主眼であり前提である点において異なる。

具体的にはヤマト東南部の纏向の地に情報発

信基地を建設することであり、列島内に新たな中核を築くことでもある。そしてそこに新たな王権を誕生させることである。はたしのその内容がどのようなものであったのかは、纏向遺跡での具体的な発掘調査とその調査成果の報告を待つ必要がある。

新たな王権が謳う共同性に共鳴した各地域社会が、自らの判断で競ってヤマトにやって来る。その共同性の主目的は、弥生社会では果たしえなかった、大きく東西の異文化を融合させ、ぼんやりとではあるが民族的な統一を掲げることにあると考えたい。そしてそこに地域社会が培ってきた伝統的な風俗や風習、技術力が必然的に集まってくる。情報が集積し、新たな情報が発信され続ける素地を作くる。こうした地域社会の伝統性を参考にして新たな王権だけが許される特権的なデザインが模索され、具体的に実施されていくと考えたい。その方向性がまた共鳴性として、新しい時代を予見させ、地域社会にインパクトを与えていく。この共鳴性の連鎖が古墳文化誕生の具体的なプロセスと考えたい。したがって古墳の形や大きさ、墳丘テクスチャー、さらには副葬品や埋葬法にいたる部分は、参集した各集合体の具体的でかつ地域性を帯びた習慣や風習から出発している。そしてやがてよりデザイン化されたモノへと収斂されていく。その素材のほとんどが、実は各地域社会が伝統的に形作ってきたさまざまな文物や伝統そのものだとさえよう。

選択性と収斂性のその過程において王権のデザインが決定されていく。はじめから複合体としての古墳祭式なるものが決まっていたわけではない。あらたな王権の志向性を基本に、紆余曲折の連鎖を古墳造営という「場」で実現しようとしていた。外来文化の享受と地域性・風俗性への執拗という矛盾が、固体性（丸山 2004）としての王権の姿でもある。そして共同体の外枠を形作っているモノの前提は、習俗などの共同性と考えるべき（大塚 2000）。

## 7 連鎖

まず第1段階では王権のデザインは優れた技術力が伴う憧憬の対象となるが、同時に模倣

の対象ともなる。市場原理は新たな技術力や希少な地域社会が生み出した工芸品に集まる。古墳の形や大きさ、テクスチャーも模倣の対象の例外ではない。どのパーツを選択するかは判断は、伝統的弥生社会に決定権があり、その下地には許容できる風俗性が存在するはずだ。したがって三世紀後半期の古墳とは、弥生社会からの伝統的地域社会の延長上に、歴史的な抗争という出来事性を止揚する力強い動きとメッセージ性が新たに誕生した王権から発せられ、列島内の東西をわける大きな民族的な統一を志向する理念への共鳴現象である。であるから共鳴性が生み出され、こうした共鳴性によって見掛け上とは裏腹に、偏差に満ちた多様性がはじめてから存在する。共鳴性への温度差が具体的な族長たちの墳墓の形や大きさを決定づけていくものと考えたい。そこに絶対的な階級・身分秩序が忍び寄り余地を見いだすことはできない。重要な点は、むしろ新たな王権とその仲間たちが放つ新しい時代への方向性（新出的時代性）と、弥生時代には想像できないような多様な地域社会の情報（民族性を越える）を発信していくという点にある。そしてその方向性（共同性）に共鳴した多様な地域社会が存在したという点である。彼らは習俗の範囲内においてはあながち、主体的に王権のデザインを模倣しはじめた。

前方後円墳祭式というまつりを共通する事（田中 1991）でも、ヤマトと擬制的同族関係（近藤 1998）を目指したわけでもない。ヤマト発の一様でかつセット化された古墳文化という目標があつて、その合理性に賛同して、各地域社会がただ無批判に受け入れ、変革していった、あるいは前方後円形を受け入れていった。というような従来の歴史観は、地域に所在する具体的な古墳文化からは浮かび上がってはこない。

ところで、選択性と収斂性により生み出された方向性は、本来は新たに共立されたヤマトの王権だけが許されるデザインであるはずだ。しかしながら集められた富やチカラは参集した各集合体個々のものであり、富の動員は各部族長が握っている。したがってこれを手本として各部族長の模倣の連鎖がはじまることになるが、部族長はきそって自らの存在性を主張する地域色の濃い贈答品や特産物を交換したと思われ

る。これが前期、前方後円（後方）墳に副葬された具体的な文物であると考えたい。ヤマトから単線的な単純化された絶対的分与体系などまさに幻想である。全ては「ヤマト」から発進されていくのではなく、「ヤマト」に向かって集積・集合するところからはじまる。したがって繰り返しになるが、纏向型前方後円墳の実体は、彼の地に参画した族長たちの地域型墳丘墓の集合体にすぎない。そして倭鏡をはじめ各種の武器・宝器の多くは、各地の部族長が交換した贈答品・特産物類と考える。

このような視点にたてば前方後円墳・前方後方墳はヤマトから一元的に拡散したのではなく、すでにそれ以前に普遍化していた地域型墳丘墓から、その地域が時間をかけ選択し収斂した結果にすぎないものであると考えた方がよい。そこに新たな王権が放つ強い共鳴性が存在した点は言うまでもない。さらにその選択には、弥生時代からの伝統的な地域間交流や部族間のネットワークが下地に存在する。根強い風俗性と新しい感性、その矛盾の中での偏差に満ちた個性が前方後円（後方）墳の造営であり、その形と大きさの選択性に現れている。

## 8 まとめにかえて

前方後円墳とは、まず弥生時代の地域型墳丘墓から出発し、浮遊化した規範と二極化（大阪湾と伊勢湾）した民族的な集合を一つの方向性として、二世紀から三世紀にかけて、大阪湾沿岸部の部族社会が辿ってきた歴史を受け継ぎ、主に西日本の地域社会に受け入れられていく。その後の匈奴國との抗争という歴史的出来事性を契機に誕生した、新たな王権のデザインとして採用された。同様にして前方後方墳は主に東日本という視点で広がりをもつ。

新たな王権は、大阪湾と伊勢湾に割拠した部族集団を基軸として、列島各地に存在した伝統

的な地域社会が織りなす多様な文化を基盤にして、ある種の共同性の創造に複数の地域社会が参画したところからはじまるものと想定した。この共同性は列島内に存在する西と東という習俗的な差違を止揚し、より広域的な民族的統一を創造する事にある。

新たな王権のデザインへの憧憬が、その後の前方後円墳の形の広がりを保証したが、まずもって地域社会がもつ風俗性の許容範囲内において模倣される。それはあくまでカタチの模倣を志向する。したがってその大きさやカタチは基本的にはそれぞれの地域社会が所有する風俗性を選択基盤として採用される。そこに王権による統一的な基準を想定することは難しい。なぜならば参集した集合体の富と力の動員はすべて、各集合体の手中にあるからである。

同様に墳墓への副葬品の多くは、王権に参画しようとする地域社会間の交易品であり、部族社会が培ってきた優れた工芸品である。こうした多様な雑多な品物から、交易と市場の方向性により、選択され収斂性を経て、規格化された副葬品とその生産工房が各地で新たに誕生する。王権はその上位品に収斂し、王権だけが許されるデザインを模索するが、結果として模倣の連鎖の中で埋没し、合理化した規格品が市場に出回ることになる。そこに人的な威信は存在するだろうが、王権としての「威信材」という共通意識が内包されていたかは甚だ疑問である。

以上、前方後円（後方）墳というデザインの共鳴が、弥生時代からの地域社会を基盤にしなが、列島内に存在した各民族性を止揚させようと動いた。古墳文化創世期の状況をこのように考え、列島内には当然のように共鳴しない地域も存在した。そして古墳後期になっても、地域の独自性は残存し、この段階においても倭王権は揺れ動く複数の集合体であり、比較の上において優位性を保っているにすぎないと考えたい。

## 参考文献

- 赤塚次郎 1992 「東海系のトレース」『古代文化』第44巻第6号。
- 赤塚次郎 1999 「容器形石製品の出現と東海」『考古学ジャーナル』no.453。
- 赤塚次郎 2003 「中部・近畿地方の弥生・古墳時代編年の現状と課題」『第5回考古学シンポジウム発表要旨』。
- 赤塚次郎 2004 「東日本からの青銅器論」『考古学フォーラム』16。
- 赤塚次郎 2004 「東日本としての青銅器生産」『伊勢湾岸における弥生時代後期を巡る諸問題 山中式の成立と解体』第11回東海考古学フォーラム三重大会。
- 網野善彦 1998 『東と西の語る日本の歴史』講談社学術文庫。
- 石野博信 2001 『邪馬台国の考古学』歴史文化ライブラリー113 吉川弘文館。
- 大塚久雄 2000 『共同体の基礎理論』岩波現代文庫。
- 大林太良 1986 「日本の文化領域」『風土と文化』日本民族文化大系1 小学館。
- 川西宏幸 1988 『古墳時代政治史序説』塙書房。
- 近藤義郎 1998 『前方後円墳の成立』岩波書店。
- 白石太一郎 1999 『古墳とヤマト政権』文春新書。
- 田中 琢 1991 『倭人争乱』集英社。
- 北條芳隆 2002 「古墳時代前期の石製品」『考古資料大観』石器・石製品・骨製品9 小学館。
- 寺澤 薫 1988 「纏向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズ。
- 寺澤 薫 2000 『王権の誕生』日本の歴02 講談社。
- 都出比呂志 1993 『前方後円墳体制と民族形成』待兼山論叢第27号。
- 都出比呂志 2000 『王陵の考古学』岩波新書。
- 広瀬和雄 2003 『前方後円墳国家』角川選書。
- 丸山真男 2004 「原型・古層・執拗低音」『日本文化のかくれた形』岩波現代文庫。
- 森下章司 1991 「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林』74巻6号。

## 石製模造品

● 早野 浩二

本稿は、県内から出土した石製模造品の集成結果を提示し、個別地域におけるそれらの展開過程の追求を目的として、若干の考察を添えたものである。考察部分においては、集落から出土した石製模造品を主要な分析対象として、それらが定着、盛行、衰退する時間的な流れを整理した。さらにこれを受けて、石製模造品（滑石製品）出土古墳の編年、石製模造品の流通と保有形態の把握に向かう見通しを示した。

### はじめに

近年、自身に対して県内の石製模造品に関わる機会が二度にわたって与えられた。愛知県史編纂さん事業に係る祭祀遺物についての概説（早野 2005）と、埋蔵文化財研究集会に係る滑石製品の基礎資料作成作業（埋蔵文化財研究会 2005）である。しかし、前者においては、祭祀遺物の全体把握という性格上、石製・土製模造品の集成作業を実施したものの、それに対する綿密な解説を加えることはなかった。また、作業期間の制約もあって、集成に遺漏が多いことも判明した。後者については、前者の遺漏を補いつつ、他の滑石製品をも網羅したが、それらの基礎資料に対して何ら問題を深めることはなかった。また、それらとは別に、かつて当センターにおいては、県内の遺構・遺物を集成し、研究の基盤を構築しようとする気運があった。そこで、今回の紙面を利用し、県内遺構・遺物集成として、石製模造品についての集成結果を提示する。さらにその結果を踏まえ、過去の集成作業において十分に深められなかった問題についても改めて詳述したい。

なお、今回の愛知県における集成作業を軸とした検討が意図するところについても若干触れておく。古墳出土の石製模造品については、白石太一郎によって組成の時期的変化が精細に論じられ（白石 1985）、河野一隆や北山峰生ら

によって刀子を中心とした石製模造品各種についても型式学的分析が深められている（河野 2002・2003、北山 2002 など）。集落出土の石製模造品については、篠原祐一によって石製模造品の詳細な型式学的分析も進められ（篠原 2005）、祭祀遺跡の石製模造品についても、福島県建鉾山遺跡における考察がよく知られている（戸田編 1998）。しかし、これらの各論においては、型式や年代が個別に論じられることが多く、白石や寺沢知子が、古墳、祭祀遺跡、製作遺跡を通じた年代の関係をすでに論じてはいるものの（白石 1985・寺沢 1990）、詳細な年代の把握には、なお検討の余地があるように思われる。

一方、石製模造品の詳細な年代把握を試みた所論として、田中新史による常総地域を主たる対象とした整理（田中 2002）、佐久間正明による福島県正直古墳群を対象とした分析（佐久間 2004）がある。これらは、個別地域における詳細な年代把握と、それを前提とした地域展開を論じる方向性が一定程度に有効であることを示している。

愛知県においては従来、石製模造品が定量出土した遺跡として、一宮市馬見塚遺跡が知られる程度であったが、近年、定量の石製模造品を出土する集落遺跡の調査事例が増加し、同時に石製模造品に共伴する遺物についての知見も増加した。これを受けて、土器編年（赤塚 1994、赤塚・早野 2001）を参考としながら、



集落出土の石製模造品の組成変化と各種の形態変化を見通すことも可能になりつつある。また、集落出土の石製模造品の年代決定が実現されれば、それとの対比を前提として、石製模造品を出土する古墳、あるいは同時に副葬される他の品目に対しても、土器編年を機軸とした相対的な年代を与えることも可能となるであろう。それは、白石や岩崎卓也（岩崎 1986・1987）らが論じようとした「古墳の祭祀と神まつりの同異」を、古墳と集落遺跡の双方向から同一の基準に即して論じるうえで欠くことのできない一義的な前提でもある。

## 1 県内出土の石製模造品

愛知県内の石製模造品は、過去に岩野見司、安達厚三、伊藤正人によって集成されている（岩野 1982、安達 1985、伊藤 1993）。なお、これらは石製模造品をはじめとする祭祀遺物全般、祭祀遺跡を扱った集成である。今回もこれら過去の集成を再構成した。試みに過去の集合作業と遺跡・遺物の件数を比較した結果を図1に示した。図1は、10年前後を単位として、件数がほぼ倍加しつつ推移していることを表し、検討の機が熟していることをも示唆する。

古墳から出土した石製模造品（図2）としては、一宮市野見神社古墳から出土した刀子2点（図2—13・14）、豊橋市中野古墳から出土した刀子2点と滑石製石枕に伴う立花（同15

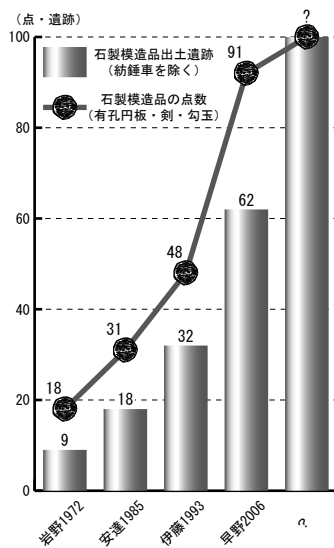
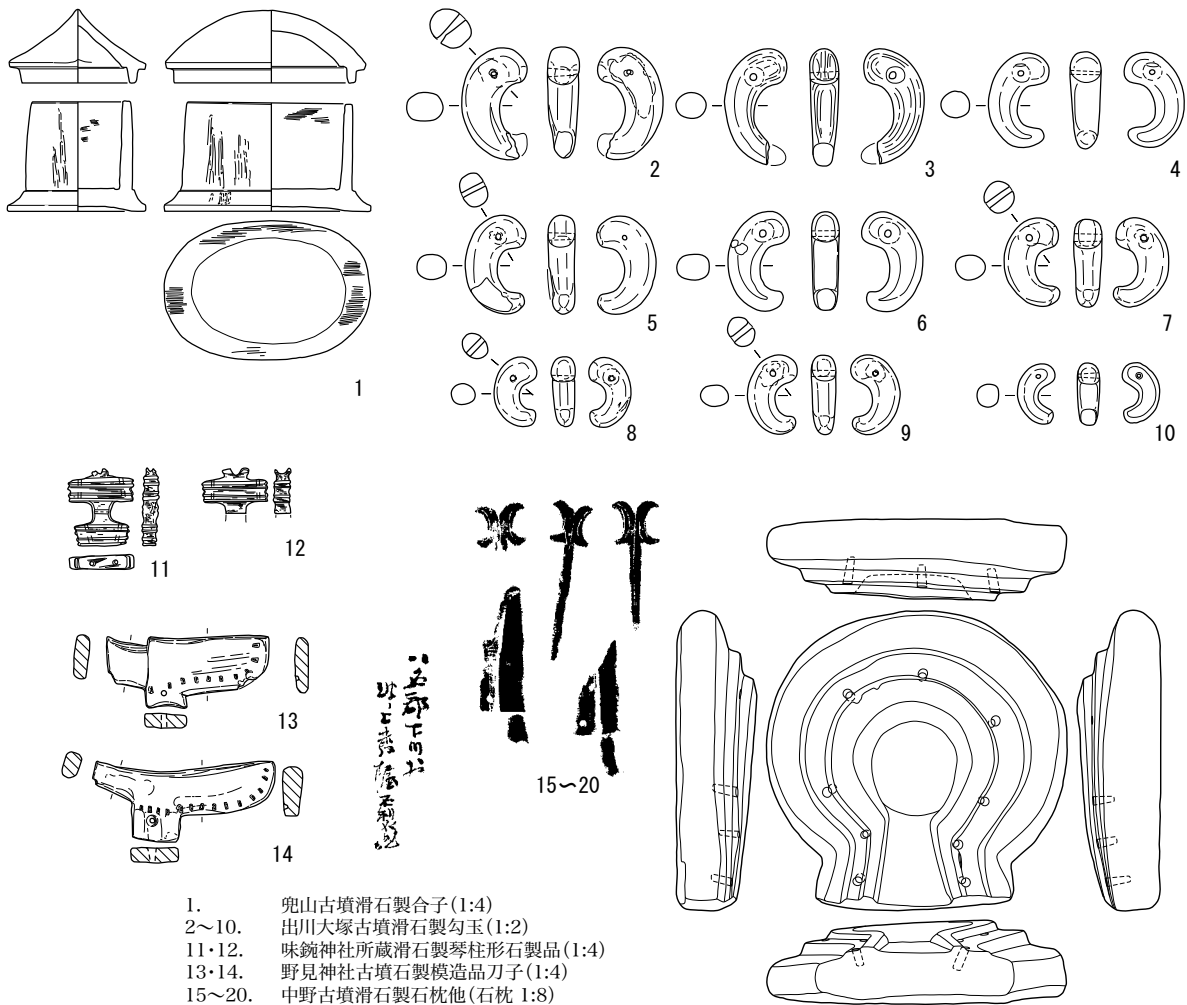


図1 石製模造品出土遺跡・出土点数の推移

～20、現在は石枕のみを愛知大学が保管）が知られているのみである。また、模造品ではないが、滑石製品としては、東海市兜山古墳に副葬された滑石製合子1点（同1）、春日井市出川大塚古墳に副葬された勾玉9点（同2～10）、名古屋市味鏡神社に伝わる琴柱形石製品2点（同11・12、味鏡古墳群出土か）などが知られている。豊田市三味線塚古墳においては、周溝から有孔円板1点、勾玉1点、白玉3点が出土しているが、隣接する神明遺跡に關係する遺物と理解して、集落出土の石製模造品に含めて理解することとした。

集落出土の石製模造品として集成の対象としたのは、有孔円板、剣、勾玉、管玉、白玉、子持勾玉、紡錘車である。丸みを残した滑石製の勾玉、管玉、白玉については、模造品として同列に扱うことには問題があるが、出土状況に依拠して厳密に識別することが困難であると判断してあえて区別していない。紡錘車も実用品であろうが、模造品と材質を同じくすることに加えて、三重県石山古墳など、逆裁頭円錐形の紡錘車が石製模造品と同時に古墳に副葬される例があることから、参考として集成に加えることとした。結果、有孔円板を出土した遺跡26遺跡、剣を出土した遺跡10遺跡、勾玉を出土した遺跡27遺跡、管玉を出土した遺跡8遺跡、白玉を出土した遺跡23遺跡、子持勾玉を出土した遺跡7遺跡、紡錘車を出土した遺跡28遺跡をここに集成した（図3・表1）。有孔円板、剣、勾玉、白玉からなる4品目が確認される遺跡には、馬見塚遺跡、名古屋市志賀公園遺跡、同正木町遺跡、豊田市水入遺跡、同神明遺跡がある。

さて、馬見塚遺跡は、祭祀遺跡として紹介されることがあるが、祭祀のみを目的として遺跡が形成されたことが断定できないとする意味合いにおいて、ここでは祭祀遺跡としては扱わない。一方、石製模造品の製作に關与したと推定される遺跡、遺構の例は県内において知られていないので検討の対象とはしない。先述したように、古墳出土の石製模造品については、数量が少なく検討を深めることが難しいので、以下においては、集落において消費された石製模造品を中心に考察を加えることとする。



- 1. 兜山古墳滑石製合子(1:4)
- 2~10. 出川大塚古墳滑石製勾玉(1:2)
- 11・12. 味鏡神社所蔵滑石製琴柱形石製品(1:4)
- 13・14. 野見神社古墳石製模造品刀子(1:4)
- 15~20. 中野古墳滑石製石枕他(石枕 1:8)

図2 古墳出土の滑石製品・石製模造品

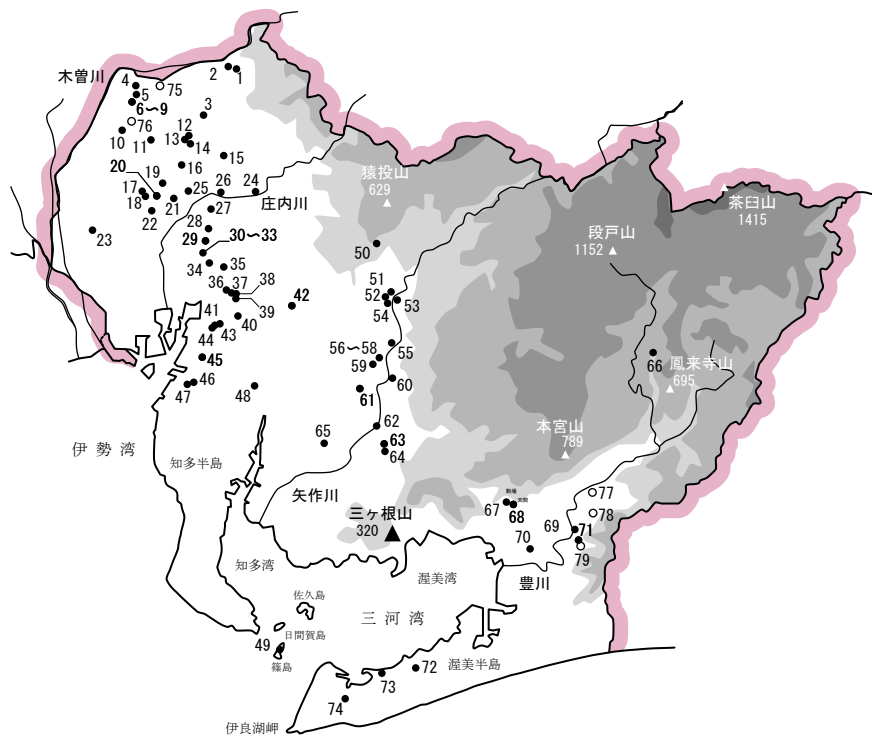


図3 石製模造品出土遺跡の分布(番号は表1に一致)

表1 石製模造品出土遺跡地名表

遺跡名	所在地	有孔 円板	剣	勾玉	管玉	白玉	子持 勾玉	紡錘 車	その他	備考
1 北大森遺跡	犬山市橋爪字北大森	1	0	0	0	0	0	0		
2 上野遺跡	犬山市上野字八幡東	0	0	1	0	0	0	0		
3 大口町秋田字北替地採集品		0	0	0	0	0	0	1		一宮市博物館保管
4 田所遺跡	一宮市田所他	1	0	0	0	0	0	0		
5 大毛池田遺跡	一宮市大毛字池田	0	0	0	1	0	0	0	丸玉1	
6 門間遺跡	一宮市門間	1	0	1	0	0	0	0		
7 一宮市門間字沼採集品		0	0	0	0	0	0	1		一宮市博物館保管
8 一宮市門間字下流採集品		0	0	0	0	0	0	1		一宮市博物館保管
9 門間沼遺跡	一宮市門間	0	0	0	0	1	0	3		
10 八王子遺跡	一宮市大和町苅安賀字北出	1	0	1	0	0	0	0	破片1?	
11 馬見塚遺跡	一宮市馬見塚字東見六	4	1	2	5	91	0	0		
12 御山寺遺跡	岩倉市中野町	1	0	0	0	0	0	0		
13 天神遺跡	岩倉市宮前町	0	0	6	0	0	0	0		
14 岩倉城遺跡	岩倉市下本町城跡	0	0	0	0	0	0	2		
15 中島遺跡	小牧市市之久田字中島	0	0	0	0	0	1	0		旧市之久田遺跡
16 弥勒寺御申塚遺跡	西春日井郡西春日町弥勒寺東	0	0	1	0	0	0	0		
17 中花の木遺跡	稲沢市奥田南花の木町	2	0	0	0	1	0	0		
18 地藏前遺跡	稲沢市七ツ寺町地藏前	1	0	0	0	0	0	0		
19 地藏越遺跡	稲沢市北市場町地藏越	1	0	0	0	0	0	0		
20 土田遺跡	稲沢市増田南町他・清須市	1	0	0	0	0	0	1		石材不明有孔円板?1
21 朝日遺跡	清須市朝日他	0	0	1	0	0	0	0		
22 大淵遺跡	海部郡甚目寺町字大淵	0	0	0	0	0	0	3		
23 埋田遺跡	津島市埋田町	0	0	1	0	0	0	0		
24 松河戸遺跡	春日井市松河戸遺跡	0	0	1	0	0	0	0		
25 貴生町遺跡	名古屋市西区貴生町	1	0	0	0	1	0	0		有孔円板?1(線刻)
26 味噌B遺跡	名古屋市北区味噌鏡	0	0	0	0	0	0	1		
27 志賀公園遺跡	名古屋市北区平手町他	5	2	2	0	389	0	0		
28 名古屋城三の丸遺跡	名古屋市中区三の丸	0	0	0	0	1	0	0		
29 竪三蔵通遺跡	名古屋市中区栄	1	0	1	0	3	0	1		
30 金山北遺跡	名古屋市中区金山	0	0	0	0	3	0	1		
31 尾張元興寺遺跡	名古屋市中区正木	0	0	1	0	0	0	2		
32 正木町遺跡	名古屋市中区正木他	1	2	2	0	7	0	0	盾1?	
33 伊勢山中学校遺跡	名古屋市中区正木	0	1	1	0	16	0	1		
34 高蔵遺跡	名古屋市熱田区高蔵町他	0	0	0	0	2	0	0		
35 大喜遺跡	名古屋市瑞穂区大喜新町	0	0	0	0	0	0	1		
36 曾池遺跡	名古屋南区曾池町他	3	0	0	0	0	0	0		
37 桜本町遺跡	名古屋南区桜本町他	1	0	1	0	0	0	0		
38 楠町遺跡	名古屋南区楠町他	1	0	0	0	0	0	0		1992年南山大学調査
39 春日野町遺跡	名古屋南区春日野町他	0	0	0	0	2	0	0		
40 城遺跡	名古屋緑区鳴海町城他	2	1	0	0	119	0	0		
41 西古根遺跡	名古屋緑区高町西古根他	1	0	0	0	0	0	0	破片1?	泥板岩製有孔円板?1
42 若王子遺跡	豊明市雀掛町若王子	0	0	1	0	0	0	2		
43 三ツ屋1号墳周辺	東海市名和町三ツ屋	0	0	0	0	0	1	0		
44 カブト山遺跡	東海市名和町石田他	0	1	0	0	0	0	0		石材不明剣形?1(無孔)
45 松崎遺跡	東海市大田町松崎	1	0	1	0	0	0	1		
46 法海寺遺跡	知多市八幡字平井	0	0	0	1	24	0	0		
47 細見遺跡	知多市八幡字細見	1	0	0	0	0	0	0		
48 天白遺跡	知多郡東浦町大字緒川字天白	0	0	2	0	0	0	0		
49 神明社貝塚	知多郡南知多町大字篠島字神戸	0	0	1	0	3	0	0		
50 上ノ段遺跡	豊田市加納町上ノ段	0	0	0	0	0	1	0		
51 万加田遺跡	豊田市荒井町万加田	0	0	1	0	0	0	0		
52 梅坪遺跡	豊田市東梅坪町	1	0	0	1	1	0	0	不明1	
53 高橋遺跡	豊田市高上〜上野町	0	0	0	0	0	0	0	不明1	石材不明不明品1
54 千石遺跡	豊田市陣中町	0	0	0	0	0	0	1		
55 水入遺跡	豊田市渡刈町	3	3	1	6	115	0	0		
56 神明遺跡	豊田市鶯鴨町神明	5	1	1	4	231	1	0		
57 三味線塚古墳	豊田市鶯鴨町神明	1	0	1	0	3	0	0		
58 矢迫遺跡	豊田市鶯鴨町矢迫	0	0	0	2	13	0	0		
59 本川遺跡	豊田市永覚町本川他	0	0	1	0	2	0	0		
60 生平遺跡	岡崎市岩津町字生平	0	0	0	0	1	0	0		
61 小針遺跡	岡崎市小針町	0	0	1	0	0	0	3		
62 矢作川河床遺跡	岡崎市	0	0	0	0	0	1	0		
63 高木遺跡	岡崎市柱町字高木他	0	0	0	0	1	0	1		
64 神明遺跡	岡崎市柱町神明	0	0	0	0	0	0	1		
65 宮下遺跡	安城市桜井町宮下	1	0	0	0	0	0	0		
66 西沢遺跡	南設楽郡鳳来町海老字西洞	0	0	1	1	0	0	0		
67 駒場遺跡	豊川市平尾町大脇	0	0	0	0	0	0	1		
68 天間遺跡	豊川市平尾町天間	0	0	0	0	1	0	1		
69 郷中遺跡	豊川市三谷原町郷中他	0	1	0	0	0	0	0		片麻岩製剣形1
70 欠山遺跡	宝飯郡小坂井町大字小坂井字欠山	0	0	0	0	0	0	1		
71 白石遺跡	豊橋市石巻本町権割	0	0	1	0	2	1	1		
72 山崎遺跡	田原市大字野田字東山崎	0	0	0	0	0	0	3		
73 青山遺跡	田原市渥美町大字伊川津字横浜	0	0	0	0	0	0	1		
74 保美遺跡	田原市渥美町大字保美字平城	0	0	0	0	0	1	0		
75 浅井6号墳	一宮市浅井町尾関字同者	0	0	0	0	0	0	1		
76 野見神社古墳	一宮市今伊勢町宮後字稀荷	0	0	0	0	0	0	0	刀子2	
77 (伝)段林	新城市八井字反林	0	0	0	0	0	0	1		
78 姫塚	豊橋市石巻西川町北の谷細田	0	0	0	0	0	0	1		
79 中野古墳	豊橋市石巻本町中野	0	0	0	0	0	0	0	石枕1・立花3・刀子2	
計		43	13	36	21	1033	7	39		

## 2 出土状況

石製模造品各種の出土が知られ、出土状況からそれらの帰属時期が推定できる主要な事例を以下に参照する。

### 馬見塚遺跡

馬見塚遺跡は、標高約7mの沖積平野に立地する遺跡で、A～Gの7地点において各時代の遺物が検出されている。石製模造品など古墳時代の遺物が豊富に出土したのはB地点で、有孔円板4点、剣1点、勾玉2点、管玉5点、白玉97点（現存91点）、鉄製品（現存刀子・鉄鎌各1点）が土器中とその付近から出土したという。他に土鈴1点、鏡形土製品1点が本遺跡の出土品とされているが、各報告にこれらの記述は残されていない。

### 正木町遺跡・伊勢山中学校遺跡

互いに隣接する正木町遺跡、伊勢山中学校遺跡の両遺跡は、標高約10mの熱田台地西縁端に立地する。尾張元興寺遺跡など周辺の遺跡を含めたこれら一連の遺跡（遺跡群）は、5世紀における名古屋台地の中核的な集落遺跡である。両遺跡では各次の調査を通じて石製模造品が豊富に出土している。正木町貝塚出土遺物として名古屋博物館に所蔵されている剣（図5—21）、白玉各1点は出土状況が不明であるが、同地点において、いわゆる羽釜形態を呈する杯（図4—1）が出土している。伊勢山中学校遺跡では、松河戸Ⅱ式1段階の土器が鉄鋌、鉄鎌と一括して出土した第5次調査SB16において勾玉1点（図5—26）が出土している。

### 志賀公園遺跡

志賀公園遺跡は、庄内川左岸の標高約5mの沖積平野に立地する遺跡で、遺跡の各地点に目的的に集積された土器群（SU13、SU14、SU12、SU11）に混在して石製模造品が出土している。なお、これらの土器群は濃尾平野の古墳時代中期における土器編年の標識資料である。石製模造品は、松河戸Ⅱ式2段階の遺物集積SU13において有孔円板3点（図5—4～6）、勾玉1点（同28）、白玉134点、宇田Ⅰ式1段階の遺物集積SU14において有孔円板1点（同8）、剣2点（同22・23）、白玉155

点、宇田Ⅰ式2段階の遺物集積SU12において、有孔円板1点（同11）、勾玉1点（同32）、白玉50点、同じく宇田Ⅰ式2段階の遺物集積SU11において白玉28点が出土している。白玉の出土は松河戸Ⅱ式2段階から宇田Ⅰ式1段階にかけて多く、以後、数量を減じる傾向にある。なお、松河戸Ⅱ式1段階の遺物集積SU01においては、小型土器が出土するものの、石製模造品は認められない。

### 水入遺跡

水入遺跡は、矢作川右岸に埋没した標高約23mの低位段丘面に立地する遺跡で、矢作川に面する段丘崖を開削した大溝から、大量の土器群や刀形木製品などの木製品に混在して石製模造品が出土している。石製模造品は、大溝99B区SD01-6層・99A区SD01-6層において剣各1点（図5—16・18）、白玉計52点、98C区段丘崖SX01において勾玉1点（同29）、剣1点（同24）、白玉8点、99C区大溝SX13において有孔円板2点（同12・13）、白玉55点が出土した。SD01-6層出土土器群は、松河戸Ⅱ式併行の土器が主体で、須恵器は含まれない。一方、99C区SX13出土土器群は、宇田Ⅰ式2段階を前後する土師器と須恵器把手付腕などによって構成される。なお、99C区SX01には各時期の土器が包含され、出土状況から、石製模造品の帰属時期を推定することはできない。

### 神明遺跡

神明遺跡は、矢作川右岸の標高約30mの舌状台地上に立地する遺跡で、5世紀後半に集落造営の盛期がある。石製模造品として有孔円板5点、剣1点、勾玉1点、管玉4点、白玉231点、子持勾玉1点が出土しているが、これらの多くは、竪穴住居が埋没する過程で覆土に包含されたものである。やや不安定な出土状況下にあるながらも、神明Ⅱ期（松河戸Ⅱ式1段階に併行）の竪穴住居SB240において出土した有孔円板1点、管玉1点、白玉3点は、ごく初期の段階における石製模造品の消費を示す事例である。また、神明Ⅲ期（宇田Ⅰ式2段階に併行）のSX201において有孔円板1点（図5—3）、白玉65点が出土しているが、鉄鎌などの鉄製品を含めて一括出土したとされるSX201の土器

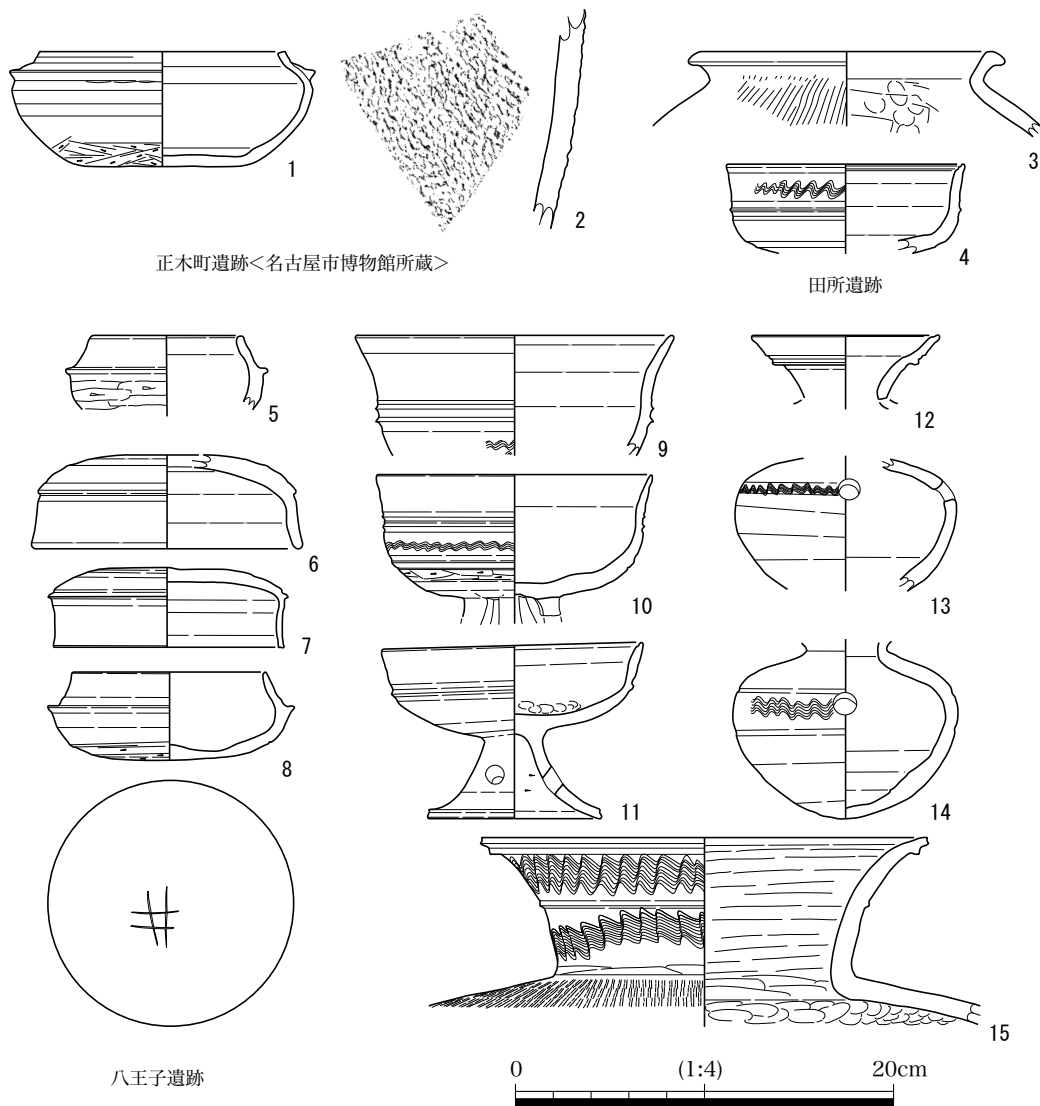
群は、土師器の型式から神明Ⅱ、Ⅲ期の複数時期に及ぶ可能性をも考慮しておきたい。その他、SB226から出土した勾玉1点と白玉2点は、「古式須恵器」を含む古墳時代中期の土器と知多式製塩土器1A類(図7—1)が共伴する可能性がある」と報告されている。

**その他**

上記の遺跡に加えて、石製模造品の帰属時期が推定できる事例について一瞥する。名古屋市城遺跡では、大溝SD1の上層において、大量の土器群とともに有孔円板2点(図5—1・2)、剣1点(図5—19)、白玉119点、不明破片1点が出土した。出土した土器は松河戸Ⅱ式に相当する。

一宮市八王子遺跡Ab区(SD73下層)では、有孔円板1点(図5—9)、勾玉1点(同31)

が出土している。周辺(95Ba区など)では小谷が完全に埋積する過程で包含された宇田Ⅰ式の土器群(図4—5～15)が豊富に認められるので、有孔円板と勾玉も同時期に対応することが予測できる。一宮市田所遺跡92Aa区では、古墳時代中期の水田面を精査する過程で、絹雲母片岩製の有孔円板1点(図5—15)が出土した。同一の層位で出土した土器には、宇田型甕3類(図4—3、宇田Ⅰ式)と須恵器有蓋高杯(同4、城山2号窯期)がある。東海市松崎遺跡の有孔円板1点(図5—14)は包含層中の出土で、共伴する土器は明確ではないが、原則として遺跡の形成は、宇田Ⅰ式であることから、有孔円板が帰属する時期の上限も同時期に求めることができる。



正木町遺跡<名古屋市博物館所蔵>

田所遺跡

八王子遺跡

図4 各遺跡から出土した古墳時代中期の土器

### 3 消長

共伴した土器から年代の推定が可能な石製模造品を手がかりとして、以下、有孔円板、剣、勾玉の型式変化と、各種から構成される組成の推移について、その大略を把握する。結果、土器編年に則して、定着期、盛行期、衰退期の3期に大別、1～6期の6期に細別した区分を提示する(図5)。

#### 定着期〈1・2期〉— 松河戸Ⅱ式

集落において石製模造品の消費が定着する段階を定着期とした。松河戸Ⅱ式が対応する。さらに、松河戸Ⅱ式の区分に従い、松河戸Ⅱ式1段階に対応する段階を1期、松河戸Ⅱ式2段階に対応する段階を2期とした。1期は明確ではないが、神明遺跡SB240の事例から、有孔円板が剣に先行して使用されている可能性がある。また、伊勢山中学校遺跡第5次調査SB16において出土した勾玉(図5—26)は小型でありながら、丸みをほとんど失った形態である。豊田市本川遺跡は、松河戸式に併行する段階(本川式)に集落造営の盛期を迎え、続く宇田式に併行する段階(神明式)には終息に向かう遺跡で、小型で丸みがある勾玉1点(同25)と白玉2点が出土している。また、本川遺跡SD2001をはじめ、松河戸Ⅱ式1段階に相当する稲沢市福田遺跡SD01、志賀公園遺跡SU01では、小型土器が多出する一方で、石製模造品は出土しないことから、1期以前は小型土器を使用する集落祭祀が主で、同時に丸みを残した勾玉は原則として1期以前の所産であることが予測できる。

2期には、志賀公園遺跡SU13、水入遺跡99B区SD01-6層・99A区SD01-6層、城遺跡SD1上層の事例から、有孔円板、剣、勾玉、白玉の使用が広く定着していることが理解される。有孔円板は、志賀公園遺跡SU13(図5—4～6)のように径2.0cm前後の小型のもので構成される。剣は水入遺跡(同16・18)のように鎬状の表現を残す断面三角形、菱形のものがある一方で、城遺跡(同19)のように扁平化したものも認められる。城遺跡の剣は扁

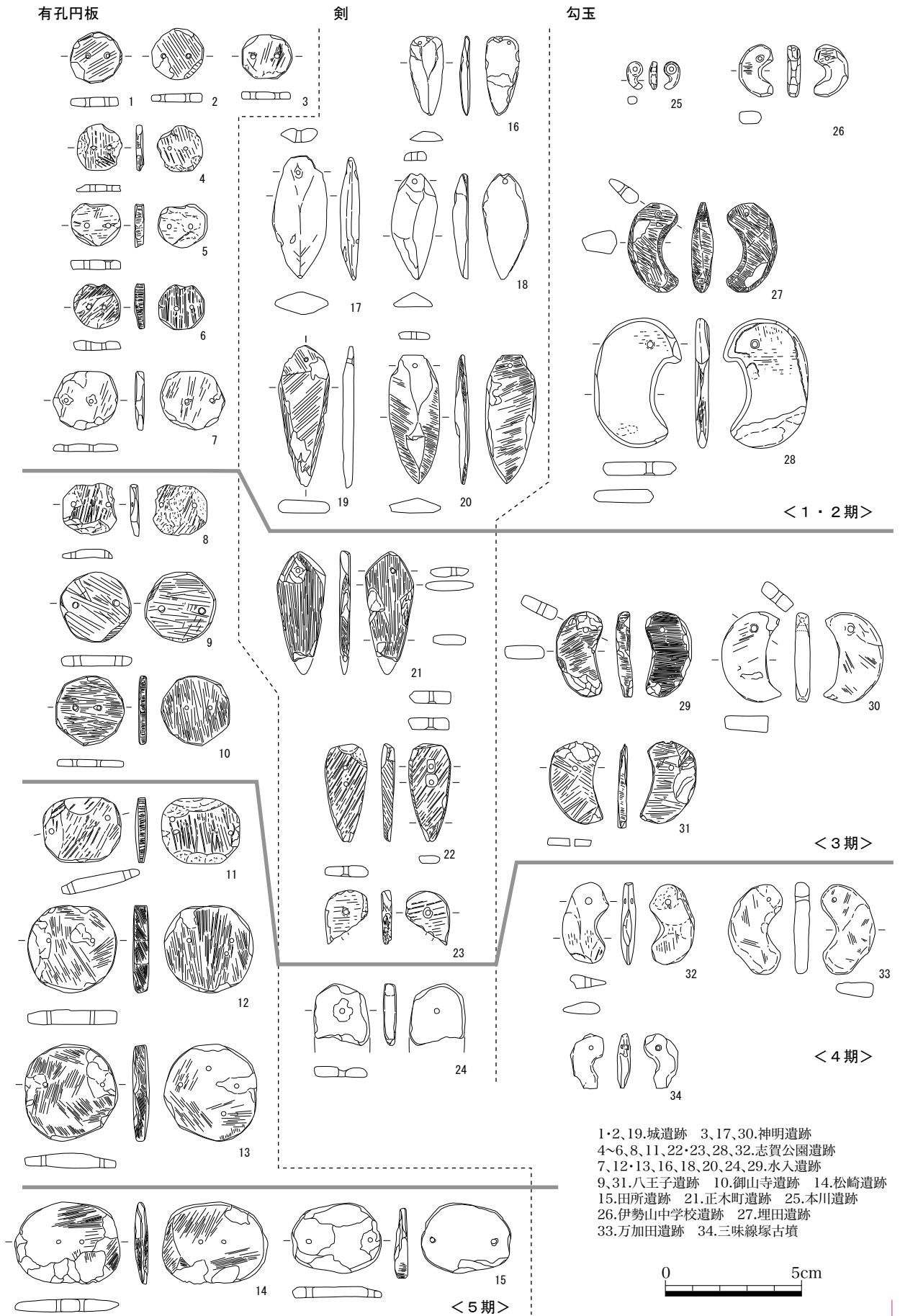
平に形式化しつつも、基部側を三角形状に加工することで茎状の表現を保ち、懸垂用の小孔も茎に近い位置(基部側)にある。より詳細に観察すると、頂辺と側辺の間にはわずかな斜面を残し、茎に相当する部分は基部側に傾斜する。つまり、表裏の区別が完全には失われていない形状として認識できる。勾玉は志賀公園遺跡SU13(同28)のように一気に大型、扁平化が進行するが、緩やかな「C」字状の形状を残す。なお、出土状況が不安定ながら、津島市埋田遺跡の勾玉(同27)は、整形時の面を多く残し、やや小型で厚みがあるもので、その形状から先行する1期に帰属させることができるであろう。この推定は、埋田遺跡においてS字甕D類(新)など松河戸Ⅱ式1段階の土器が出土していることによっても補強される。

以上から、石製模造品の当地域への定着は、ごく短期間に実現し、続く盛行期に速やかに移行したことが理解される。剣や勾玉などの扁平化(形式化)に向かう速度も相当に速かったのであろう。

#### 盛行期〈3・4期〉— 宇田Ⅰ式

集落において石製模造品の使用が普遍化する段階を盛行期とした。宇田Ⅰ式が対応する。宇田Ⅰ式の区分に従い、宇田Ⅰ式1段階に対応する段階を3期、宇田Ⅰ式2段階に対応する段階を4期としたが、編年上の区分、それに対応する石製模造品の出土状況にはやや不安定な面がある。

3期は、志賀公園遺跡SU14の事例を中心とした把握である。有孔円板(図5—8)は小型ながらもやや粗雑化し、双孔の位置が極端に離れ、楕円形に近い形態のものがみられるようになる。八王子遺跡の有孔円板(同9)は、小型で円形ながら、双孔の位置が離れた特徴から3期に位置づけた。出土状況もおよそ調和的である。岩倉市御山寺遺跡の有孔円板(同10)は、作りが薄いものの、側面の研磨面数が多い特徴から、3期でも4期に近い所産として理解した。剣は原則として扁平化したものに移行し、基部側にあった茎状の表現は完全に消失する。懸垂用の小孔は基部から離れた位置に移動し、志賀公園遺跡の剣(同22・23)は剣身に相当する



1・2, 19.城遺跡 3, 17, 30.神明遺跡  
 4~6, 8, 11, 22・23, 28, 32.志賀公園遺跡  
 7, 12・13, 16, 18, 20, 24, 29.水入遺跡  
 9, 31.八王子遺跡 10.御山寺遺跡 14.松崎遺跡  
 15.田所遺跡 21.正木町遺跡 25.本川遺跡  
 26.伊勢山中学校遺跡 27.埋田遺跡  
 33.万加田遺跡 34.三味線塚古墳

図5 石製模造品(有孔円板・剣・勾玉)の消長

部分に縦列に2孔を穿孔する。正木町遺跡の剣(同21)は明確ではないが、同地点から出土した土器を考慮して3期とした。勾玉は明確な出土例がないが、八王子遺跡における出土状況、次段階の勾玉との比較を参考として、八王子遺跡(同31)、水入遺跡(同29)、神明遺跡(同30)などの諸例が同期に対応すると仮に推定した。それらによると、剣と同様、扁平化したものが画一的な形態として存在することが予測できる。あるいは、有孔円板、剣、勾玉の大きさが相互に近似することも形態の画一化と無関係ではないように思われる。その他、勾玉特有の「C」字形の形状が失われ、わずかに彎曲する形態に変化する点が指摘できる。

4期は、志賀公園遺跡SU12、水入遺跡99C区SX13の事例を参考とする。有孔円板(図5—11～13)は径3.0cm前後に大型化し、厚みも増す。双孔の位置は、相互に離れるばかりでなく、穿孔位置に乱れがみられることも珍しくない。勾玉(同32)は粗雑化し、勾玉特有の形態も、元来の形状を想像させないまでに完全に失われつつある。豊田市万加田遺跡の勾玉(同33)も同期の所産であろう。剣の出土は明確でないが、水入遺跡の粗雑化した剣(同24)が同期に対応する可能性がある。あるいは、剣の使用そのものが低調になっていたことも考えられる。三味線塚古墳の周溝において、東山111号窯期の須恵器に伴出した有孔円板、勾玉(同34)は4期を上限とする。

以上のように、盛行期としたこの段階は、3期に石製模造品の使用が一気に定着、普遍化した2期の流れを受けながら、4期には衰退期とする次段階に向かう流れも顕在化しつつある段階として把握できるであろう。

#### 衰退期<5・6期>—宇田Ⅱ式以降

石製模造品の使用が低調となり、やがて消滅する段階を衰退期とした。宇田Ⅱ式以降が対応する。宇田Ⅱ式に相当する段階を5期、およそ儀長式が相当する6世紀を中心とした時期を6期とした。

5期には、田所遺跡(図5—15)、松崎遺跡(同14)の事例がある。有孔円板の出土が知られるのみで、剣、勾玉といった品目の存在は明

確でない。両者ともすでに前段階において退化の傾向が著しかったことからすると、この段階には組成から欠落したか、例外的に存在するのみであったと思われる。有孔円板は、楕円形の形態が一般化し、前段階には全面に行き届いていた研磨がこの段階には極端に省略され、面の整形が不十分になる。また、田所遺跡の有孔円板は滑石製ではなく、絹雲母片岩製で、この段階の石製模造品の製作に際しては、類似の石材による代替も珍しくなかったようである。

さらに神明遺跡や後述する伊勢山中学校遺跡第7次調査の事例などから、有孔円板、剣、勾玉といった品目が原則的には消失し、白玉の使用のみが継続する段階を6期とした。6期には石製模造品としての有孔円板、剣、勾玉が消失する一方で、土製模造品が使用されたとみられるが、県内においては良好な事例に恵まれず、田原市青山遺跡(貝塚)における鏡、春日井市勝川遺跡における勾玉、西尾市若宮西遺跡における勾玉、名古屋市名古屋城三の丸遺跡御屋形地点における丸玉などが知られる程度である。

#### 子持勾玉

子持勾玉については、小牧市中島遺跡(旧市之久田出土)、東海市三ツ屋1号墳周辺(図6—1)、豊田市上ノ段遺跡(同2)、同神明遺跡(同5)、岡崎市矢作川河床遺跡、豊橋市白石遺跡(同4)、田原市保美遺跡(同3)に出土例がある。幸い、それぞれの発見例には詳細な報告が付けられている。ここでは、資料を実見する機会に恵まれた二例について、改めて概要を記し、幾つかの知見を加えておく。

三ツ屋1号墳の周辺で1954年に採集された子持勾玉(図6—1)は、個人によって永らく保管され、2004年に東海市立郷土資料館に寄贈された。子持勾玉は全体に丸みを保持した形態で、子玉を含めた計測値は、長さ6.0cm・幅4.5cm・厚さ2.7cm、現状での重さは63.4gである。石材として深緑色の滑石を使用する。親玉は断面円形で、両端を平坦に整形する。仮に親玉の計測値を示すと長さ5.6cm・幅2.8cm・厚さ2.2cmとなる。穿孔は両面より施される。子玉は脊側に3、両側面に2、腹側に1を削り出し、各子玉は整った勾玉の形

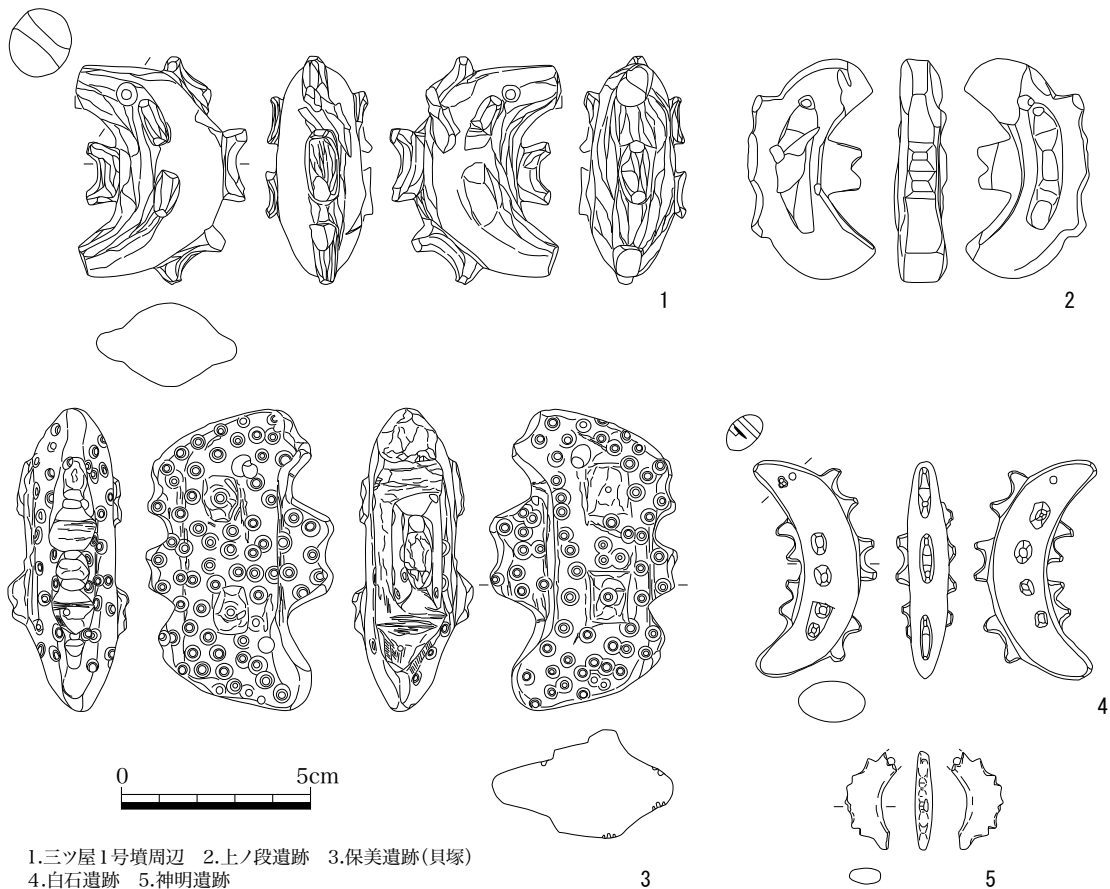


状を保持する。それぞれの位置に配される小玉の大きさや形状は均質的である。

表面は、削痕をほとんど残さない入念な研磨によって仕上げられる部分が多いが、腹側を中心として幅1～2mmを単位とするケズリ痕跡が残されている。中井正幸による製作手法の観察視点(中井1993)を参考とすると、前者が「手法f」、つまり「表面に条痕はほとんど残らず、光沢を発するような研磨手法」、後者が「手法c」、つまり、「断続的な短い単位にケズリ痕を残す手法」に相当しよう。これら形態上の特徴から、三ツ屋1号墳周辺から出土した子持勾玉は、県内から出土した他の諸例に対して時期が先行すると考えられる。なお、脊側を中心として赤色顔料の付着が認められるようでもあるが、採集品としての性格上、積極的な評価は難しかろう。蛍光X線分析の結果も、ベンガラの可能性を示すにすぎなかった。

保美遺跡(貝塚)において採集された円圏

文子持勾玉(図6—3)は現在、豊橋市美術博物館が所蔵する(旧重要美術品指定)。子持勾玉は三ツ屋1号墳周辺の例と比較して、明らかに丸みを失いつつある。子玉を含めた計測値は、長さ8.0cm・幅4.8cm・厚さ3.2cmである。石材として深い青みがかった黒色の滑石を使用する。親玉の両端の面の整形はごく曖昧である。仮に親玉の計測値を示すと長さ8.0cm・幅3.0cm・厚さ2.5cmとなる。穿孔は円圏文配置後に両面から穿孔する。子玉は脊側に3、両側面に2、腹側に1を削り出すが、両側面の子玉は突起状に退化し、脊側の子玉の削り出しもやや曖昧である。腹側の子玉は大きく誇張するかのよう削り出している。脊側と腹側の子玉の周囲には整形時の削痕が顕著に残るが、他の部分については、入念な研磨によって仕上げられている。さらに研磨後には、両側面に円圏文を充填するように配置する。円圏文の径は約0.5cmである。



1.三ツ屋1号墳周辺 2.上ノ段遺跡 3.保美遺跡(貝塚)  
4.白石遺跡 5.神明遺跡

図6 子持勾玉の諸例



上：三ツ屋 1 号墳周辺採集子持勾玉、右は腹側に残るケズリ痕跡（東海市立郷土資料館所蔵）

中：保美遺跡（貝塚）採集子持勾玉、右は側面を充填する円圏文（豊橋市美術博物館所蔵）

下：白石遺跡採集子持勾玉、右は孔内に残る折損した鉄製錐（豊橋市美術博物館所蔵）

子持勾玉の諸例については、単独で出土した例や採集品が多く、時期の推定は困難であるものの、やや特異な形態の神明遺跡例を除くと、有孔円板など他の石製模造品の品目と共存することがないことから、主として子持勾玉が使用された時期は5期以降と考えられる。これ以上深く立ち入った考察は困難であるが、石川県高田遺跡の祭祀遺構において出土した円圏文字持勾玉にはTK47型式併行の須恵器が相伴したとする所見(四柳1983)が参考となる。高田遺跡の円圏文字持勾玉は、脊側に5、腹側に1、両側面に5の整った子玉を削り出したもので、勾玉特有の彎曲、丸みがある形態からも、型式学的には保美遺跡例に先行する。よって、保美遺跡の子持勾玉は6世紀(6期)に帰属すると考えられる。

#### 小結

以上の検討を通じて、(白玉を除いた)石製模造品が集落において定着、盛行、衰退の過程を経るのは、松河戸Ⅱ式から宇田Ⅰ式の比較的限られた期間であることが明確となった。この間、3期とした段階に、有孔円板、剣、勾玉の主要品目が、相互に画一化を志向する段階があったと想定される一方で、各品目の消長は決して同一ではないことも同時に判明した。

このとき、従来年代の検討を難しくしていた馬見塚遺跡B地点の祭祀遺物に対しても一つの解釈を与えることが可能になるとと思われる。つまり、馬見塚遺跡B地点においては、小型土器を使用する段階—1期以前、石製模造品(有孔円板・剣)を使用する段階—1・2期、土製模造品(鏡)を使用する段階—6期を通じて祭祀が継続していたことが理解されるであろう。この理解に対しては、祭祀遺物に相伴した土器型式からも矛盾なく説明することが可能である。

## 4 古墳出土の石製模造品との対照

古墳出土の石製模造品に対しても、本稿における時期区分との対照を試みておきたい(表2)。古墳出土の石製模造品は、各氏によって時期区分が果たされているが(小野山1977、白石1985、寺沢1990、北山2002、河野

2002・2003、田中2002など)、ここでは各品目の組成変化を中心に整理した白石太一郎の時期区分を代表させることとする。古墳に副葬される代表格としての刀子の形態変化を軸とした北山峰生や河野一隆による時期区分との詳細な対比にはやや難がある。今後の検討課題としたい。

最初に、集落において石製模造品が定着する2期は、「鏡の模造品を粗雑にした有孔円板や粗造の剣が出現する」白石第3期に重複することが容易に推察できる。つまり白石第3期の古墳は松河戸Ⅱ式2段階(大庭寺遺跡併行)の前後に位置づけることが可能であろう。なお、白石が第3期の古墳として例示した群馬県白石稲荷山古墳は、扁平な勾玉を含みつつ、丸みを帯びた勾玉が多いことから第3期でも初期の段階として位置づけられているので、第3期の開始は、本稿における1期に重複することが予測できる。

また、白石第2期は、有孔円板や粗造の剣が出現する以前で、勾玉が扁平化していない段階とされるので、本稿における1期以前の段階、つまり松河戸Ⅱ式1段階以前が相当すると考えられる。東京都野毛大塚古墳第1主体から出土した整形時の面を多く残し、丸みが失われつつある滑石製勾玉は、すでに1期として位置づけた埋田遺跡の勾玉に類似、あるいは型式的に若干先行するので、1期あるいはその直前に対応するであろう。同じく白石第2期に相当すると考えられる岐阜県遊塚古墳(前方部副葬品埋納施設)は同様に1期以前、つまり松河戸Ⅱ式1段階以前に位置づけられ、古墳の年代観とも概ね整合する。参考までに、集落において石製模造品が出現する以前の段階で、写実的な造りの農工具の副葬を中心とする白石第1期は、松河戸Ⅰ式前半に重複することが見込まれ、さらに滑石製農工具を含まず、滑石製容器や滑石製玉類のみの滑石製品を副葬する古墳がそれに先行すると理解するなら(都出1979、森下2005)、兜山古墳の滑石製合子(図2—1)、出川大塚古墳の滑石製勾玉(同2—10)は、松河戸Ⅰ式初頭前後の所産と理解して大過ないと思われる。

白石第4期は、明らかに形骸化した粗雑な

表2 滑石製品・石製模造品出土古墳との対照

土器編年		滑石製品・石製模造品 出土古墳						
400	前後		白石第1期	寺沢第1期	田中(常総) I期	兜山 出川大塚 石山	鏡塚	富雄丸山
	松河戸Ⅱ式	1 (陶邑窯)	2	小野山第2期	II期	昼飯大塚	石神2号	室宮山 巢山
450	宇田Ⅰ式	2 (猿投窯) T G 232	3	第3期	III期	遊塚 野見神社	野毛大塚第1 白石稻荷山 多古台	
	宇田Ⅱ式	1 T K 73	4	第4期	IV期	わき塚 大足1号周溝	長瀬西	大和4号 カトンボ山
500	宇田Ⅱ式	2 東山111号窯 T K 216 (東山48号窯) O N 46	5	第5期	V期			
	儀長式	1 城山2号窯 T K 208	6	第6期	VI期	三味線塚周溝	姉崎二子塚	
550		2 東山11号窯 T K 23 T K 47 (下原) M T 15						
		東山61号窯 T K 10 M T 85						

石製模造品が副葬される段階とされるが、石製模造品の副葬はごく限られた地域に単発的に顕在化する現象で、中期における石製模造品とは「一線を画すべきもの」(北山 2002)、「一連の系譜上のものとしては対象外とみなして良い」(田中 2002) ものである。つまり、白石第3期と白石第4期に大きな断絶があることは明白で、本稿における5期が相当する5世紀後葉段階の石製模造品の存在形態については、より詳細に再整理される必要がある。

## 5 石製模造品の流通と保有形態

以上までの整理を受けて、石製模造品の流通と保有形態に関係する幾つかの問題について、簡単に見通しを述べつつ本稿の結びとしたい。

石製模造品の集落における定着は、1～2期のごく短期間を実現され、続く3期には画一化に向かう流れも看取された。この流れは、松河戸Ⅱ式から宇田Ⅰ式にかけて、つまり5世紀中葉に滑石製品の(当地域における)地域生産が確立したことを示唆する。また、石製模造品の使用が、(知多半島基部の兜山古墳を除いて)前期古墳の分布が空白であった知多半島や三河湾の島嶼にまで普及した事実から、石製模

造品を使用する祭祀は、古墳の築造が伝播する流れを必ずしも基調としなかったことが理解される。ここに指摘した石製模造品の地域生産の確立過程と石製模造品の使用が集落に普及する流れは、古墳に副葬された石製模造品として数少ない事例である1期以前の野見神社古墳の刀子(図2-14)が、奈良県巢山古墳など各地の古墳に副葬された刀子の一群と背側が大きく反り、鞘と柄に段差がなく、切先が角張る独特な形態を共有することと比較すると対照的である。これら一群の刀子は、北山峰生が「巢山C類型」として抽出するもので(北山 2003)、中川敬太や田中新史も同様な視点からこれら一群に注目している(中川 2002、田中 2002)。

古墳の動態は別として、興味深いことに5世紀中葉に広域に流通した石製模造品には、東山窯産の初期須恵器(図4)が付随していることが多い。本稿において例示した馬見塚遺跡、正木町遺跡・伊勢山中学校遺跡、志賀公園遺跡、水入遺跡、神明遺跡、八王子遺跡などはいずれもその例に違わない。また、伊勢山中学校遺跡第5次調査SB16における鉄鋌と鉄鏃の出土に加え、神明遺跡SX201では、初期の段階に属する長頸鏃、円錐状鉄器が出土している。円錐状鉄器は鈴木一有により(舌を伴わないもの

の)鉄鐸である可能性が示され、鍛冶に関する祭祀が実施されたことが説かれている(鈴木2005)。さらに神明遺跡に隣接する三味線塚古墳の周溝においても、同様の鉄製品が石製模造品に共伴して出土している。つまり、石製模造品は、鉄器製作の場においても、何らかの関係を有した形跡がある。

古墳時代中期後半から後期にかけて、滑石製品の需要は有孔円板、剣、勾玉といった石製模造品から、実用品としての紡錘車、あるいは祭祀具としての白玉や子持勾玉に移行すると考えられる。これらには製塩土器の動き、つまり塩の流通が付随する可能性がある。つまり、6世紀に至っても白玉を大量に消費した神明遺跡には知多式製塩土器1A類(図7—1)の出土が知られるし、伊勢山中学校遺跡(第7次調査)では、塩と白玉を同時に使用した祭祀の存在が明らかにされている(註1)。同様に滑石製紡錘車3点を出土した尾張元興寺遺跡、一宮市門間沼遺跡には、それぞれ知多式製塩土器1A類(同2)、1C類(同3)の出土が知られる。その一方で、製塩遺跡である松崎遺跡や青山遺跡(貝塚)においても滑石製紡錘車が出土する。ごく短期間に半島や島嶼への石製模造品の普及が達成され、三ツ屋1号墳周辺や保美遺跡(貝塚)に子持勾玉がもたらされた背景には、塩と滑石製品の予想以上に密接な結びつきが反映されているようにも思われるのである。

石製模造品の地域生産が確立するとした5世紀中葉は同時に、東山窯における須恵器生産が確立し、知多式製塩土器が成立に向かう段階

ともほぼ符合する(註2)。これらの動きを有機的に関連させるなら、産地が限定される石製模造品などの滑石製品は、同様に産地が窯業生産地や臨海に限定される須恵器や塩などの生産物と対価の交換財として流通した品目であったと想像できる。無論のこと、これらの品目を交換財として、広範に行き渡らせるには、流通網の組織的な整備が必要である。今後、より具体的に考究したい。

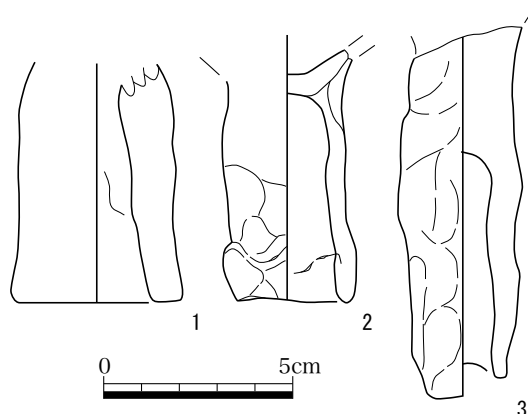
## おわりに

以上、県下を対象とした集成結果を下敷きとして、石製模造品の主要品目についての変化の傾向を示し、それぞれに年代を与えた。今回提示したのは、石製模造品の地域展開に限定したささやかな作業にすぎないが、一定の基準を提示する目的は達せられたであろう。無論のこと、次段階の作業として、より広域を対照とした比較検討、古墳出土の石製模造品と他の副葬品目との編年的位置関係の整理が必要である。また、今回の作業は、石製模造品の現象面における記述に終始し、石製模造品を使用した儀礼の内容については全く触れることがなかった。しかし、石製模造品の儀礼の意味を知るには、石製模造品のみを分析の対象とするのではなく、それを広く古墳時代祭祀の系譜、体系に位置づけて理解する必要がある。前回に触れた個別家族の自立化に関わる問題(高橋1971)についても、何ら考えを深めることがなく、議論の幅を著しく狭めてしまった感は否めない。今後、発展させるべき多くの内容を明示して、今回の作業を終えることとしたい。

本稿作成の過程で、以下の各氏、各機関からご高配を賜った。記して感謝する。

赤塚次郎 磯谷和明 入江文敏 岩原 剛  
北山峰生 鈴木一有 瀬川貴文 立松 彰  
土本典生 永井邦仁 中井正幸 中尾麻由美  
贅 元洋 服部哲也 深谷 淳 古谷 毅  
北條献示 水野裕之 森 泰通 堀木真美子  
愛知県埋蔵文化財調査センター

名古屋市見晴台考古資料館  
一宮市博物館 大垣市歴史民俗資料館  
東京国立博物館 豊橋市美術博物館  
名古屋市博物館 東海市立郷土資料館  
津島市教育委員会



1.神明遺跡 2.尾張元興寺遺跡 3.門間沼遺跡

図7 集落から出土した知多式製塩土器1類

## 註

1) 福井県浜瀬遺跡では、径約3.2m、深さ約1mの土坑から製塩土器、土師器、白玉、土製丸玉などが浜瀬ⅡA式製塩土器に共伴して出土し、土坑周辺には石製模造品として有孔円板、勾玉、白玉が残されていた。入江文敏は、ミニチュア土器を使用しての所作儀礼が実施され、近辺の柵には石製模造品や土製丸玉が懸垂されていたことを想定している(入江2003)。

2) 滑石製品生産と多岐に及ぶ生産体系の変動が同時代性を帯びていることは、関川尚功が畿内の玉生産からすでに論じている(関川1985)。また関川は、畿内の滑石製玉類の生産における一大画期を5世紀中葉～後半(TK73型式前後)に求めている。畿内、東海で滑石製品生産の画期がほぼ一致することも興味深い現象である。

## 参考文献

- 赤塚次郎 1994 「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集)(財)愛知県埋蔵文化財センター。
- 赤塚次郎・早野浩二 2001 「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第2号(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター。
- 安達厚三 1985 「愛知県」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集(附篇) 国立歴史民俗博物館。
- 伊藤正人 1993 「愛知県-古墳時代の祭祀関係遺跡・遺物-」『古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物—』北武蔵古代文化研究会・東日本埋蔵文化財研究会。
- 入江文敏 2003 「製塩遺跡における祭祀の形態—浜瀬遺跡をケーススタディとして—」『関西大学考古学研究室開設五拾周年記念 考古学論叢』 関西大学
- 岩崎卓也 1986 「古墳時代祭祀の一側面」『史叢』第36号。
- 岩崎卓也 1987 「三種の信宝」の周辺」『比較考古学試論』雄山閣。
- 岩野見司 1972 「愛知県の祭祀遺跡」『神道考古学講座』第2巻 雄山閣。
- 小野山節 1977 「千葉市石神2号墳の年代論の意義」『千葉市東寺山石神遺跡』日本道路公団東京第一建設局・建設省関東地方建設局・(財)千葉県文化財センター。
- 河野一隆 2002 「石製模造品」『考古資料大観 第9巻 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』小学館。
- 河野一隆 2003 「石製模造品の編年と儀礼の展開」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集 帝京大学山梨文化財研究所。
- 北山峰生 2002 「石製模造品副葬の動向とその意義」『古代学研究』第158号 古代学研究会。
- 北山峰生 2003 「石製模造品生産・流通の一形態」『橿原考古学研究所論集』第十四 八木書店。
- 佐久間正明 2004 「福島県における五世紀代古墳群の研究—石製模造品を通した正直古墳群の分析を中心に—」『古代』第117号 早稲田大学考古学会。
- 篠原祐一 2005 「滑石の生産と使用をつなぐ視点」『古墳時代の滑石製品—その生産と消費—』埋蔵文化財研究会。
- 白石太一郎 1985 「神まつりと古墳の祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館。
- 鈴木一有 2005 「鉄器の受容からみた古墳時代中期の東海」『考古学フォーラム』17 考古学フォーラム。
- 関川尚功 1985 「古墳時代における畿内の玉生産」『末永先生米壽記念献呈論文集』乾 末永先生米壽記念会。
- 高橋一夫 1971 「石製模造品出土の住居址とその性格」『考古学研究』第18巻第3号 考古学研究会。
- 田中新史 2002 「伝常陸浮島出土の滑石製模造品」『土筆』第7号 土筆舎。
- 都出比呂志 1979 「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻第3号 考古学研究会。
- 寺沢知子 1990 「石製模造品の出現」『古代』第90号 早稲田大学考古学会。
- 戸田有二編 1998 『古代祭祀 建鉾山遺跡』吉川弘文館。
- 中井正幸 1993 「古墳出土の石製祭器—滑石製農具を中心として—」『考古学雑誌』第79巻第2号 日本考古学会。
- 中川敬太 2002 「大和と周縁地域における農具形石製模造品の展開」『潮航』第20号 早稲田大学大学院文学研究科考古談話会。
- 早野浩二 2005 「祭祀遺物」『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』愛知県。
- 埋蔵文化財研究会 2005 『古墳時代の滑石製品—その生産と消費—』。
- 森下章司 2005 「前期古墳副葬品の組合せ」『考古学雑誌』第89巻第1号 日本考古学会。
- 四柳嘉章 1983 「古墳時代の沙庭と祭具—富来町高田遺跡祭祀遺構の一考察」『石川考古学研究会々誌』第26号(『北陸の考古学』)石川考古学研究会。

遺跡文献一覧（番号は表1に一致）

- 1 北大森遺跡；宮川芳照 1983「北大森遺跡出土の有孔円板と碗」『犬山市史 資料編三 考古 古代・中世』犬山市。
- 2 上野遺跡；正岡久直他 2005『木曾川学研究』第2号 木曾川学研究協議会。
- 4 田所遺跡；小澤一弘編 1997『田所遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第71集（財）愛知県埋蔵文化財センター。
- 5 大毛池田遺跡；武部真木編 1997『大毛池田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第72集（財）愛知県埋蔵文化財センター。
- 6 門間遺跡；岩野見司 1972「愛知県の祭祀遺跡」『神道考古学講座』第2巻 雄山閣／一宮市博物館 1990『一宮市博物館資料目録（1）』。
- 9 門間沼遺跡；石黒立人編 1999『門間沼遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第80集（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター。
- 10 八王子遺跡；樋上昇編 2002『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター。
- 11 馬見塚遺跡；岩野見司「馬見塚遺跡B地点—祭祀遺跡—」『新編 一宮市史 資料編四』一宮市。
- 12 御山寺遺跡；石黒立人・永井邦仁 2006『御山寺遺跡』『年報』平成17年度（財）愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター。
- 13 天神遺跡；岩野見司 1972「愛知県の祭祀遺跡」『神道考古学講座』第2巻 雄山閣。
- 14 岩倉城遺跡；松原隆治編 1992『岩倉城遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第38集（財）愛知県埋蔵文化財センター。
- 15 中島遺跡；小栗鐵次郎 1935「北里村大字市之久田「子持勾玉」発見地」『愛知県史蹟天然記念物調査報告』第十六 愛知県／立松宏 1975「考古」『小牧市史 資料編1（文化財編）』小牧市。
- 16 弥勒寺御申塚遺跡；近藤真人他 1998『弥勒寺御申塚遺跡』西春町弥勒寺御申塚遺跡発掘調査会。
- 17 中花の木遺跡；清水雷太郎 1972『稲沢市大里付近の遺物』稲沢市教育委員会／井口喜晴 1984『新修 稲沢市史 史料編六 考古』稲沢市。
- 18 地藏前遺跡；稲沢市教育委員会 1983『稲沢市考古資料図録—原米吉氏収集資料—』。
- 19 地藏越遺跡；日野幸治他 1996『北市場町地内埋蔵文化財発掘調査報告書』稲沢市北市場土地区画整理組合・稲沢市内遺跡発掘調査団。
- 20 土田遺跡；北條献示・日野幸治編 1989『土田関連遺跡発掘調査報告書』愛知県名古屋農地開発事務所・土田関連遺跡発掘調査団／赤塚次郎編 1987『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集（財）愛知県埋蔵文化財センター。
- 21 朝日遺跡；宮腰健司編 2000『朝日遺跡VI—新資料館地点の調査—』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター。
- 22 大洲遺跡；宮腰健司編 1991『大洲遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第18集（財）愛知県埋蔵文化財センター。
- 23 埋田遺跡；吉田富夫 1968『埋田遺跡発掘調査報告』津島市史編纂委員会／早野浩二 2005『埋田遺跡』『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』愛知県。
- 24 松河戸遺跡；赤塚次郎編 1994『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集（財）愛知県埋蔵文化財センター。
- 25 貴生町遺跡；佐藤公保他 1990「貴生町遺跡」『月繩手遺跡・貴生町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第12集（財）愛知県埋蔵文化財センター／樋上昇 1994「貴生町遺跡II」『貴生町遺跡II・III 月繩手遺跡II』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第55集（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 26 味鏡B遺跡；倉橋敦子・中嶋理恵 1995『味鏡B遺跡調査報告書』味鏡B遺跡調査会。
- 27 志賀公園遺跡；永井宏幸編 2001『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第90集（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター／石黒立人編 2004『志賀公園遺跡II』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第121集（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター。
- 28 名古屋城三の丸遺跡；鈴木正貴編 2005『名古屋城三の丸遺跡（VII）』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第127集（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター。
- 29 竪三蔵通遺跡；名古屋市教育委員会 1984『竪三蔵通遺跡発掘調査概要報告書』／伊藤厚史 1986『第III次竪三蔵通遺跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会／水野裕之 1991『竪三蔵通遺跡—第10次調査の概要—』名古屋市教育委員会／水野裕之 1993『竪三蔵通遺跡—第12次調査の概要—』名古屋市教育委員会／伊藤正人 1993「愛知県—古墳時代の祭祀関係遺跡・遺物—」『古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物—』東日本埋蔵文化財研究会。
- 30 金山北遺跡；伊藤敬太郎編 2004『金山北遺跡』名古屋市住宅都市局・（財）名古屋都市整備公社。
- 31 尾張元興寺遺跡；服部哲也編 1994『尾張元興寺跡発掘調査報告書』名古屋市文化財調査報告28 名古屋市教育委員会／野澤則幸 2000『尾張元興寺跡第8次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会。
- 32 正木町遺跡；稲垣晋也 1957「愛知県名古屋正木町貝塚」『日本考古学年報』5／岩野見司 1972「愛知県の祭祀遺跡」『神道考古学講座』第2巻 雄山閣／三渡俊一郎 1986『千種・東・中区の考古遺跡』文化財叢書第88号 名古屋市教育委員会／名古屋市博物館 1987『館藏品図録II』／野口泰子他『正木町遺跡第4次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会／竹内守哲 1988『正木町遺跡第2次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会／竹内守哲 1989『正木町遺跡第3次調査概要報告書』名古屋市教育委員会／木村有作 1996『正木町遺跡第6次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会／原久仁子他 1997

- 『正木町遺跡』南山大学大学院考古学研究所報告第7冊 南山大学大学院考古学研究室／伊藤正人 1993「愛知県—古墳時代の祭祀関係遺跡・遺物—」『古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物—』東日本埋蔵文化財研究会／早野浩二 2005「祭祀遺物」『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』愛知県。
- 33 伊勢山中学校遺跡；木村光一・村木誠 1996『埋蔵文化財調査報告書24 伊勢山中学校遺跡（第5次）』名古屋市文化財調査報告31 名古屋市教育委員会／服部哲也 1998「『塩』が入っていた！—小さなタイムカプセルその後—」『名古屋市見晴台考古資料館報 みはらし』№196 名古屋市見晴台考古資料館／服部哲也 1998『伊勢山中学校遺跡—第7次発掘調査の概要—』名古屋市教育委員会／藤井康隆「伊勢山中学校遺跡—第8次発掘調査報告—」『埋蔵文化財調査報告書38 正木町遺跡（第12次・第13次） 伊勢山中学校遺跡（第8次） 尾張元興寺跡（第9次） 竪三蔵通遺跡（第15次）』名古屋市文化財調査報告51 名古屋市教育委員会／服部哲也 2003「伊勢山中学校遺跡（第10次）」『埋蔵文化財調査報告書48 尾張元興寺跡（第10次） 伊勢山中学校遺跡（第10次） 津賀田古墳 戸田遺跡 NN319号窯群』名古屋市文化財調査報告62 名古屋市教育委員会。
- 34 高蔵遺跡；村木誠・伊藤厚史 2000「高蔵遺跡（第24次・第25次）」『埋蔵文化財調査報告書34 高蔵遺跡（第24次・第25次） 瑞穂遺跡（第5次） 春日野町遺跡（第2次） 正木町遺跡（第11次）』名古屋市文化財調査報告46 名古屋市教育委員会／山田鉦一 2003「高蔵遺跡第37次発掘調査報告」『埋蔵文化財調査報告書47 高蔵遺跡（第35次～第38次・第40次・第41次）』名古屋市文化財調査報告61 名古屋市教育委員会。
- 35 大喜遺跡；野澤則幸 1989『大喜遺跡—発掘調査の概要—』名古屋市教育委員会。
- 36 曾池遺跡；見渡俊一郎・飯尾恭之『南区の原始・古代遺跡』文化財叢書第47号 名古屋市教育委員会／伊藤正人 1993「愛知県—古墳時代の祭祀関係遺跡・遺物—」『古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物—』東日本埋蔵文化財研究会。
- 37 桜本町遺跡；伊藤厚史編 2000『埋蔵文化財調査報告書33 高蔵遺跡（第22次・第23次） 上島古墳群 守山白山古墳 桜本町遺跡（扇田町60番地地点・第3次）』名古屋市文化財調査報告45 名古屋市教育委員会。
- 38 楠木町遺跡；木村有作 1996『正木町遺跡第6次発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会。
- 39 春日野町遺跡；伊藤正人 2001「春日野町遺跡（第3次）」『埋蔵文化財調査報告書39 西志賀遺跡（第2次） 松ヶ洞14号墳 桜台高校遺跡（第3次） 春日野町遺跡（第3次）』名古屋市文化財調査報告52 名古屋市教育委員会。
- 40 城遺跡；伊藤正人 1991『鳴海城跡・城遺跡発掘調査の概要』名古屋市教育委員会／伊藤正人 1993「愛知県—古墳時代の祭祀関係遺跡・遺物—」『古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物—』東日本埋蔵文化財研究会。
- 41 西古根遺跡；見渡俊一郎編『緑区の考古遺跡』文化財叢書第69号 名古屋市教育委員会。
- 42 若王子遺跡；川合剛 2001「原始・古代・中世の集落遺跡、遺物散布地」『豊明市史 資料編補一 原始・古代・中世』豊明市。
- 43 三ツ屋1号墳周辺；杉崎章 1957「愛知県知多郡上野町三ツ屋1号墳の子持勾玉について」『考古学雑誌』第42巻第3号 日本考古学会。
- 44 カプト山遺跡；杉崎章編 1974『東海市カプト山遺跡—第二次調査報告—』東海市教育委員会。
- 45 松崎遺跡；杉崎章編 1977『松崎貝塚』東海市教育委員会／福岡晃彦編 1991『松崎遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第20集（財）愛知県埋蔵文化財センター／早野浩二 2005「松崎遺跡」『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』愛知県／立松彰・永井伸明 2005『松崎遺跡確認調査報告』東海市教育委員会。
- 46 法海寺遺跡；渡辺誠編 1993『法海寺遺跡II』知多市文化財資料第31集 知多市教育委員会。
- 47 細見遺跡；伊藤久仁洋 2002『細見遺跡—第4次発掘調査—』知多市文化財資料第35集 知多市教育委員会。
- 48 天白遺跡；戸田末起他 1999『天白遺跡発掘調査概要報告書』東浦町教育委員会・天白遺跡発掘調査委員会／楠美代子 2002『天白遺跡発掘調査報告書』東浦町郷土資料館調査報告第3集 東浦町教育委員会。
- 49 神明社貝塚；山下勝年編 1989『神明社貝塚』南知多町文化財調査報告書第8集 南知多町教育委員会。
- 50 上ノ段遺跡；森泰通 1990「上ノ段遺跡採集の子持勾玉について」『三河考古』第3号 三河考古刊行会。
- 51 万加田遺跡；山本ひろみ他 2002『花本遺跡・万加田遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集 豊田市教育委員会。
- 52 梅坪遺跡；杉浦裕幸編 1991『梅坪遺跡—第4次調査概要報告—』豊田市文化財叢書第21／杉浦裕幸 1995『梅坪遺跡II』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 豊田市教育委員会／杉浦裕幸 1996『梅坪遺跡III』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第5集 豊田市教育委員会／杉浦裕幸 1997『梅坪遺跡IV』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 豊田市教育委員会。
- 53 高橋遺跡；矢沢良光 1979『高橋遺跡第九次発掘調査概報』豊田市郷土資料館報告17 豊田市教育委員会。
- 54 千石遺跡；山本ひろみ編 1999『千石遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集 豊田市教育委員会。
- 55 水入遺跡；永井邦仁編 2005『水入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第108集（財）愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター。
- 56 神明遺跡；森泰通編 1996『神明遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第6集 豊田市教育委員会／森泰通編 2001『神明遺跡II』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集 豊田市教育委員会。
- 57 三味線塚古墳；三田敦司編 2001『三味線塚古墳』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集 豊田市教育委員会。



- 58 矢迫遺跡；鈴木正貴編 2002『矢迫遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 102 集（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター。
- 59 本川遺跡；樋上昇編 2003『本川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 100 集（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター。
- 60 生平遺跡；斉藤嘉彦 2004『生平遺跡』岡崎市教育委員会。
- 61 小針遺跡；斉藤嘉彦編 1999『小針遺跡』岡崎市教育委員会。
- 62 矢作川河床遺跡；荒木集成館 1984『謎の矢作川河床遺物展』集成館パンフレット№ 70。
- 63 高木遺跡；斉藤嘉彦 2003『高木・神明遺跡』岡崎市教育委員会。
- 64 神明遺跡；斉藤嘉彦 2003『高木・神明遺跡』岡崎市教育委員会。
- 65 宮下遺跡；川崎みどり 2003『宮下遺跡』安城市埋蔵文化財調査報告書第 11 集 安城市教育委員会。
- 66 西沢遺跡；鳳来町教育委員会 1967『鳳来町史 文化財編』。
- 67 駒場遺跡；林弘之他 1996『駒場遺跡』豊川市教育委員会。
- 68 天間遺跡；林弘之編 1995『天間遺跡』豊川市教育委員会。
- 69 郷中遺跡；鈴木徹他 1989『郷中・雨谷』豊川市教育委員会。
- 70 欠山遺跡；中村文哉編 1994『欠山遺跡』小坂井町教育委員会。
- 71 白石遺跡；賛元洋 1985「白石遺跡出土玉類について」『ホリデー考古』第 3 号 ホリデー考古刊行会／小島隆 1992「白石遺跡の出土遺物 その 1」『石巻文化財』第 8 号 豊橋市石巻地区文化財保存会／賛元洋 1993『白石遺跡』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 15 集 豊橋市教育委員会。
- 72 山崎遺跡；小野田勝一・森田勝三編 1993『山崎遺跡』田原町埋蔵文化財調査報告第 6 集 田原町教育委員会。
- 74 保美遺跡；大場啓雄 1963「祭祀遺跡の考察」『武蔵伊興』国学院大学研究報告第二冊 国学院大学／佐々木幹雄 1985「子持勾玉私考」『古代探叢 II』早稲田大学出版部。
- 75 浅井 6 号墳；橋崎彰一 1963『新編 一宮市史 資料編三』一宮市。
- 76 野見神社古墳；岩野見司 1977「古墳時代」『新編 一宮市史 本文編 上』一宮市／伊藤正人 1993「愛知県—古墳時代の祭祀関係遺跡・遺物—」『古墳時代の祭祀—祭祀関係の遺跡と遺物—』東日本埋蔵文化財研究会／岩野見司・赤塚次郎 1994『日本の古代遺跡 48 愛知』保育社／樋上昇 2005「野見神社古墳」『愛知県史 資料編 3 考古 3 古墳』愛知県。
- 77 (伝) 段林古墳；中島義二 1980「大入山第 2 号墳」『旗頭山尾根古墳群・大入山古墳群発掘調査報告書』一宮町教育委員会・新城市教育委員会。
- 78 姫塚古墳；岩原剛 2003「段塚と姫塚—三河における古墳出土遺物の研究 (III) —」『豊橋市美術館研究紀要』12 号 豊橋市美術館。
- 79 中野古墳；芳賀陽 2001「中野遺跡」『中野遺跡・東郷内 1 号窯・西上遺跡・伊奈遺跡・野添遺跡』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第 60 集 豊橋市教育委員会／岩原剛 2005「森岡遺跡 SZ02」『愛知県史 資料編 3 考古 3 古墳』愛知県。
- 出川大塚古墳；松原隆治 2005「出川大塚古墳」『愛知県史 資料編 3 考古 3 古墳』愛知県。
- 兜山古墳；小栗鐵次郎 1930「上野村名和に於ける古墳」『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』第八 愛知県／早野浩二 2005「兜山古墳」『愛知県史 資料編 3 考古 3 古墳』愛知県。
- 味鏡古墳群；小栗鐵次郎 1935「楠村大字味鏡付近の古墳及遺物」『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』第十三 愛知県／服部哲也 2005「味鏡古墳群」『愛知県史 資料編 3 考古 3 古墳』愛知県。
- ※文献の収録については、集成の対象とした県内の遺跡・古墳のみを対象とした。県外の遺跡・古墳については、埋蔵文化財研究会 2005『古墳時代の滑石製品—その生産と消費—』などを参照。

#### 挿図典拠（遺跡文献一覧を参照）

- 図 2—1 ～ 14・20；愛知県 2005『愛知県史 資料編 3 考古 3 古墳』、15～19；芳賀 2001 より作成。
- 図 4—5、7、13、14；樋上編 2002 より（6、8、9～12、15 は未報告資料）。
- 図 5—1、2、19；伊藤 1991、3、30；森編 2001、17；森編 1996、4～6、8、11、22、23、28、32；永井編 2001、9、31；樋上編 2002、25；樋上編 2003、33；山本他 2002、34；三田編 2001 より作成。
- 図 6—2；森 1990、4；賛 1985、5；森編 2001 より作成。
- 図 8—1；森編 2001、3；石黒編 1999 より作成。

# 東海地方の古代瓦塔研究ノオト

● 永井邦仁

東海地方の古代瓦塔を製作技術の観点から考察する。そして代表的なものとして美濃須衛系、猿投窯系、東三河・遠江系を見出した。東海地方においては8世紀前葉に個性的な瓦塔がみられるが、その後8世紀中葉～後葉にかけて各須恵器窯群での一定の技術を共有した量産化が進み、9世紀前葉まで続くものと考えられる。

## 1 はじめに

本稿は、東海地方（三重・岐阜・愛知・静岡県）に分布する奈良～平安時代の瓦塔について、愛知県内出土例を中心に、製作技術の一端からその系統を明らかにしようとするものである。愛知県内では猿投山西南麓古窯跡群（以下、猿投窯）で多数の瓦塔が出土していることからわかるように、須恵器窯で瓦塔が生産されていた。また窯業遺跡以外の寺院・集落遺跡での出土例をみても須恵器窯で生産されたことが明らかなものが多数を占める。したがって愛知県内出土の瓦塔は製作技術系統による分類が可能と予測される。

## 2 東海地方の瓦塔への言及

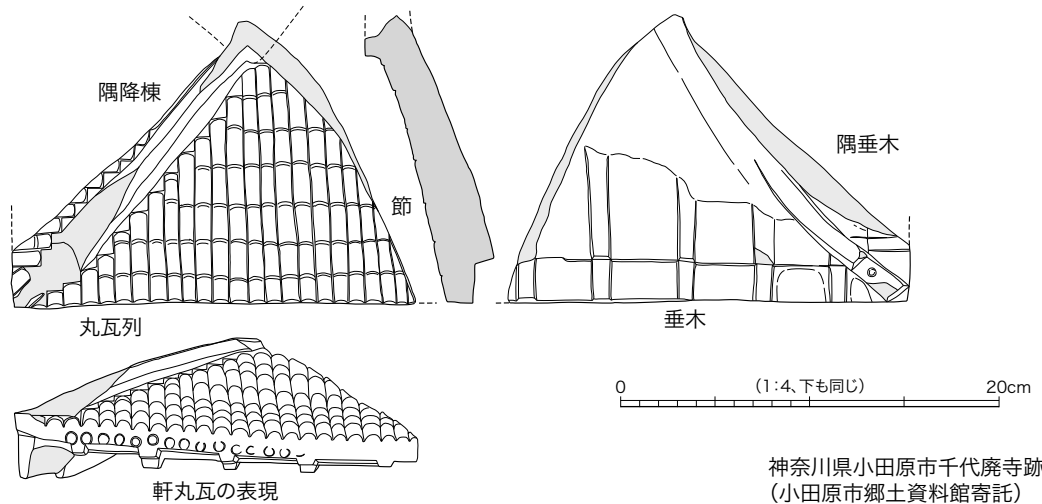
瓦塔の構造を詳細に分析した事例は、稲垣晋也（静岡県三ヶ日町字志遺跡、稲垣 1967）や石村喜英（埼玉県入間郡日高町高岡廃寺跡や坂戸市勝呂廃寺跡、石村 1980・1987）が先駆者であったが、個別紹介という要素が強かった。しかしその後高崎光司は全国的に瓦塔を概観し地域の特徴と斗栱表現の変化から時期設定をした（高崎 1989）。池田敏宏は瓦塔各部のなかで最も特徴的であり確認されやすい屋蓋部に着目しその分類から関東地方と中心とした編年をおこなった（池田 1995 他）。

1990年代になると関東地方以外の各地域で

も瓦塔研究が進んだ。石田成年は関東地方に比べて少数にとどまる近畿地方の瓦塔を概観した。そして屋根瓦表現が丸瓦列のみのAタイプ、丸瓦列と平瓦列からなるBタイプに区分し、Bタイプが東海地方以西の西日本で主体的にみられる点を指摘した（石田 1997、図1参照、以後石田Aタイプ・Bタイプと呼ぶ）。北陸地方では善端直（善端 1994）が、信濃では出河裕之（出河 1995）、吉備では亀田修一（亀田 2002）が集成を行ない、各地域での時期や特徴に言及している。この間池田は関東地方瓦塔の編年と他地域瓦塔を比較し各類型の全国的規模での系譜関係を把握しようとした（池田 1999）。

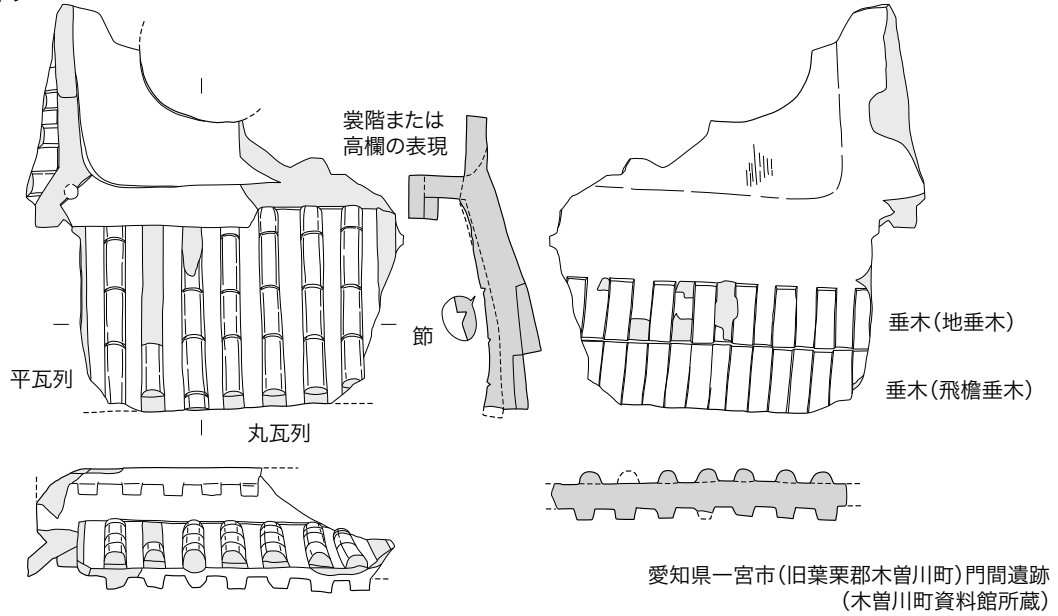
東海地方の瓦塔研究は、榑崎彰一や本多静雄が猿投窯の報告や写真集のなかで瓦塔の出土を記述したのが始まりで（榑崎 1957・1966、本多 1957 ほか）、以前から特殊品として注目されてはいた。しかし集成がなされたのは梶山勝による尾張国域瓦塔の集成展示（梶山 1985）が初めてで、ただこの時は寺院遺跡に主眼をおいていたため猿投窯の瓦塔は含まれていなかった。筆者が愛知県内で集成をおこなった時はこの集成をベースに猿投窯出土瓦塔を追加した程度であったが（永井 2000）、その後もれていたものを加える一方、豊田市水入遺跡や西尾市古新田遺跡で相次いで瓦塔が出土するなどその数は増加傾向にある。岐阜県内の瓦塔については井川祥子（井川 1995）が集成し、各務原市域を中心とする美濃須衛窯で多くが生産され

石田Aタイプ



神奈川県小田原市千代廃寺跡  
(小田原市郷土資料館寄託)

石田Bタイプ



愛知県一宮市(旧葉栗郡木曾川町)門間遺跡  
(木曾川町資料館所蔵)

図1 古代瓦塔の屋根瓦表現の二分類

ていた様相を示した。静岡県内の瓦塔については、馬飼野行雄が島田市竹林寺廃寺跡出土瓦塔の報告(斉藤編1980)でその全形復元を試み、平野吾郎は県内の出土例を集成した(平野1992)。

東海地方の瓦塔編年について高崎は、斗栱表現の変化を主軸に1期を勝川遺跡、鳴海286号窯跡、音楽寺跡、2期を折戸80号窯跡、3期を宇志遺跡、4期を真福寺東谷遺跡とし、それぞれ8世紀第3四半期、同第4四半期、9世紀前半、同後半という暦年代を想定した(高崎1989)。それによると斗栱表現は、東京都東村山市下宅部遺跡瓦塔を基準にすると、8世

紀後半以降、持送り(註1)を重視する方向性と手先三斗(註2)を重視する方向性があり、東海地方の瓦塔は後者の系統にあるという。この指摘は重要で本稿もこれを追認するものであるが、残念ながらあまり顧みられていない。

筆者は猿投窯産瓦塔を紹介するなかで、美濃須衛窯産あるいは美濃地域で出土した瓦塔と猿投窯で生産された瓦塔に顕著な相違点はいくつかあることから、東海地方の瓦塔に美濃須衛窯系と猿投窯系の2系統があることを述べた(永井2005a)。しかしこの時は美濃須衛窯系の特徴ははっきりしたもの、猿投窯系瓦塔については、手先三斗を空中粘土帯で製作する点が

示せたくらいであり十分な検討ができていなかった。

### 3 瓦塔軸部の空中粘土帯

空中粘土帯による斗拱表現とは高崎 1989 の「斗拱粘土帯作り」を受けたものである。高崎は斗拱表現の製作技術について「斗拱粘土帯作り」を提唱した。それには軸部本体（つまり壁面）上方に粘土帯を直接貼付け、切り込みなどを入れて斗の表現をするもの（壁付き粘土帯）と、手先三斗を軸部本体から離して粘土帯を一周させるものがある。高崎が指摘するように関東地方の 9 世紀代瓦塔に多くみられるのは前者であるが、東海地方では折戸 80 号窯瓦塔のように後者が多い。そこで筆者は特に後者について、猿投窯系瓦塔の製作技術系統を考える上で重要な要素であると判断し、上記の用語を設定した。

空中粘土帯によって手先三斗を表現する瓦塔を以下具体的にみていく（図 2）。

#### 勝川遺跡（愛知県春日井市）

軸部本体は粘土紐積み上げ成形である。その下半部に線刻で柱を表わす。その上の壁付き粘土帯に三斗表現がこれも線刻でなされる。軸部本体上端は外反し手先を上からぶら下げる格好になる。したがって完全な空中粘土帯とはならず構成は下宅部遺跡瓦塔に近い。

#### 音楽寺跡（愛知県江南市）

この瓦塔は軸部とその下に位置する屋蓋部を一体で成形している点が異例である。ただ屋蓋部裏面の垂木表現を大幅に省略することを前提とすれば、一旦台の上で屋蓋部を成形開始した後に裏返す必要がなくなる。したがって瓦列表現などに作業を集中しさらに軸部を一体で成形することも可能になる。ある意味効率的な製作技術である。屋蓋部は丸瓦列・平瓦列ともに節が入って一枚ずつが表現される。一方で垂木は丸瓦列に対応せず短く疎らに表現される。軸部下半には立体的な柱と長押の表現があり、上部には持送り表現があって手先三斗の空中粘土帯をのせる。本例には壁付き粘土帯はない。

#### 郷上遺跡（愛知県豊田市）

出土した三斗部分は全て空中粘土帯を篋で欠

き取り輪郭をつくった後、凸形型押ししたものである。軸部本体の出土が少なく不明部分も多いが、壁付き粘土帯はないと考えられる。

#### 水入遺跡（同上）

2 種類の屋蓋部（石田 A・B タイプ）が出土していることから対応する軸部も 2 種類あると思われ注意を要するが、粘土板組み合わせ成形による軸部本体に壁付き粘土帯が認められる例がある。軸部本体には粘土帯を切り込むための目印が線刻される。また持送りののがれた痕があり上方に空中粘土帯が付いていた可能性が考えられる。

#### 中之庄遺跡（三重県一志郡三雲町）

空中粘土帯には目印となる線刻がありそれに揃えて凸形型押しがなされる。屋蓋部は二軒構成で丸瓦列には規則的な節が入る。裏面には木葉痕がみえる。木葉痕は水入遺跡・西尾市古新田遺跡などで確認されている。

#### 折戸 80 号窯（愛知県日進市）

長押に持送りがのり、それに空中粘土帯が貼付く。三斗の凸形くり抜きの下部にある凹線は、斗の立体感を出すものではなくもはや作業用の目印にすぎない。屋蓋部は瓦列に節はなく、降棟の表現も単純である。本例は初層軸部で上層軸部はやや異なる可能性もあるが、壁付き粘土帯はないと考えられる。西春日井群西春日町弥勒寺廃寺瓦塔も実見していないが同じ構成とみられる。

#### 黒笹 8 号窯跡（愛知県三好町）

先に提示した屋蓋部は初層で、軸部は初層以外である（永井 2005a）。初層屋蓋部は反りがなく一軒で、これに対して上層の屋蓋部は大きく反る。軸部には重厚な斗拱表現がある。すなわち突出させた尾垂木の上に斗がのりさらにその上にのる軒桁が空中粘土帯となる。ただしこの空中粘土帯は折戸 80 号窯瓦塔のような篋による直線的な欠き取りをせず目印もない。また三斗の凸形は型を用いずに篋でくり抜く。

#### 市道遺跡（愛知県豊橋市）

長押上方を壁付き粘土帯が一周する。その粘土帯に持送りが取り付けさらにその上で空中粘土帯が一周する。持送りは全て尾垂木が表現される。壁付き粘土帯には大きな凸形と小さな凸形の 2 種類のくり抜きがあってこれで三斗が

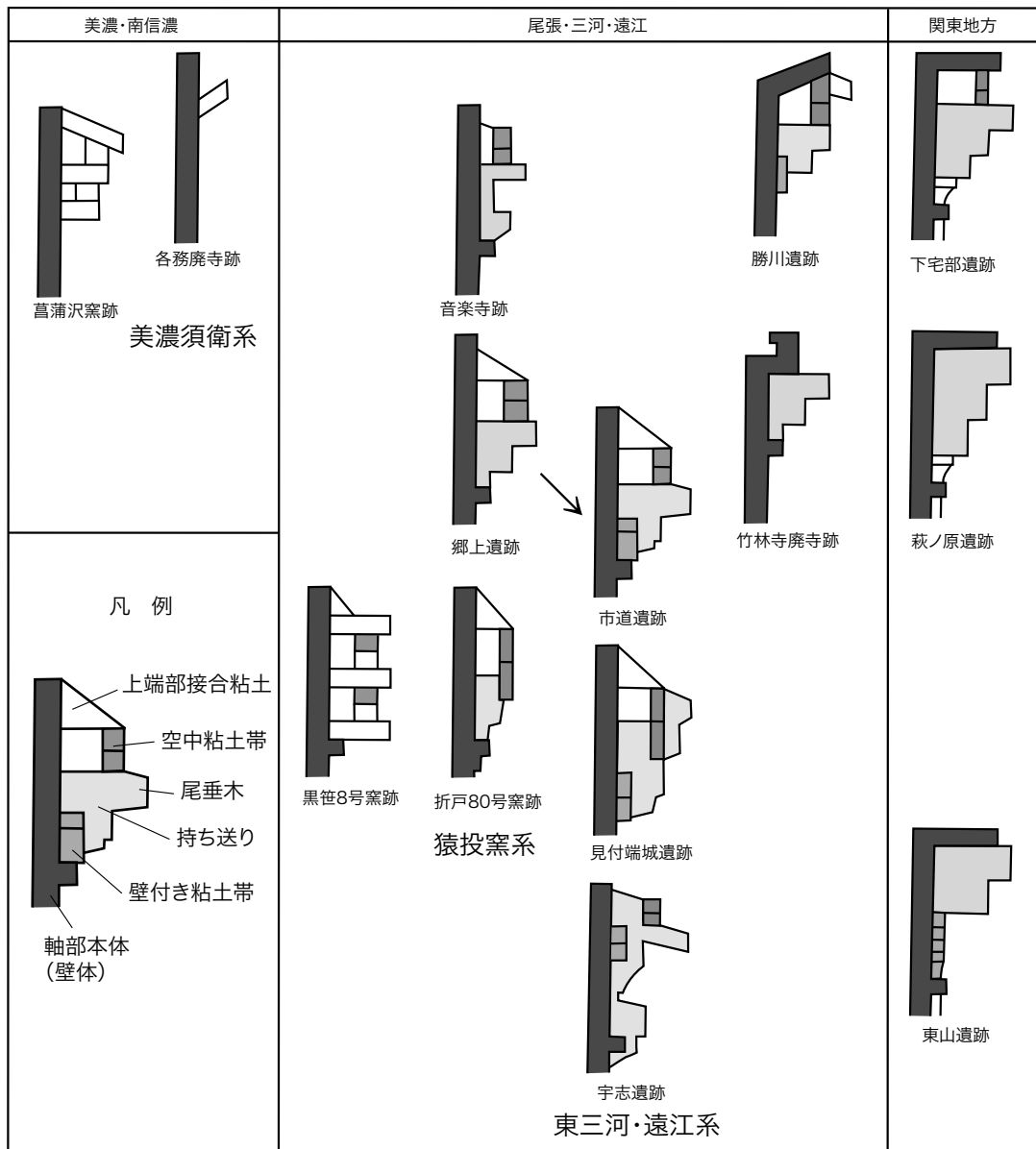


図2 古代瓦塔の斗拱表現の変遷 (高崎 1989 をもとに作成)

表わされる。小さな凸形は型押しで、初層軸部ではその上端を凹線で揃える。ここでも線刻は作業用の目印である。

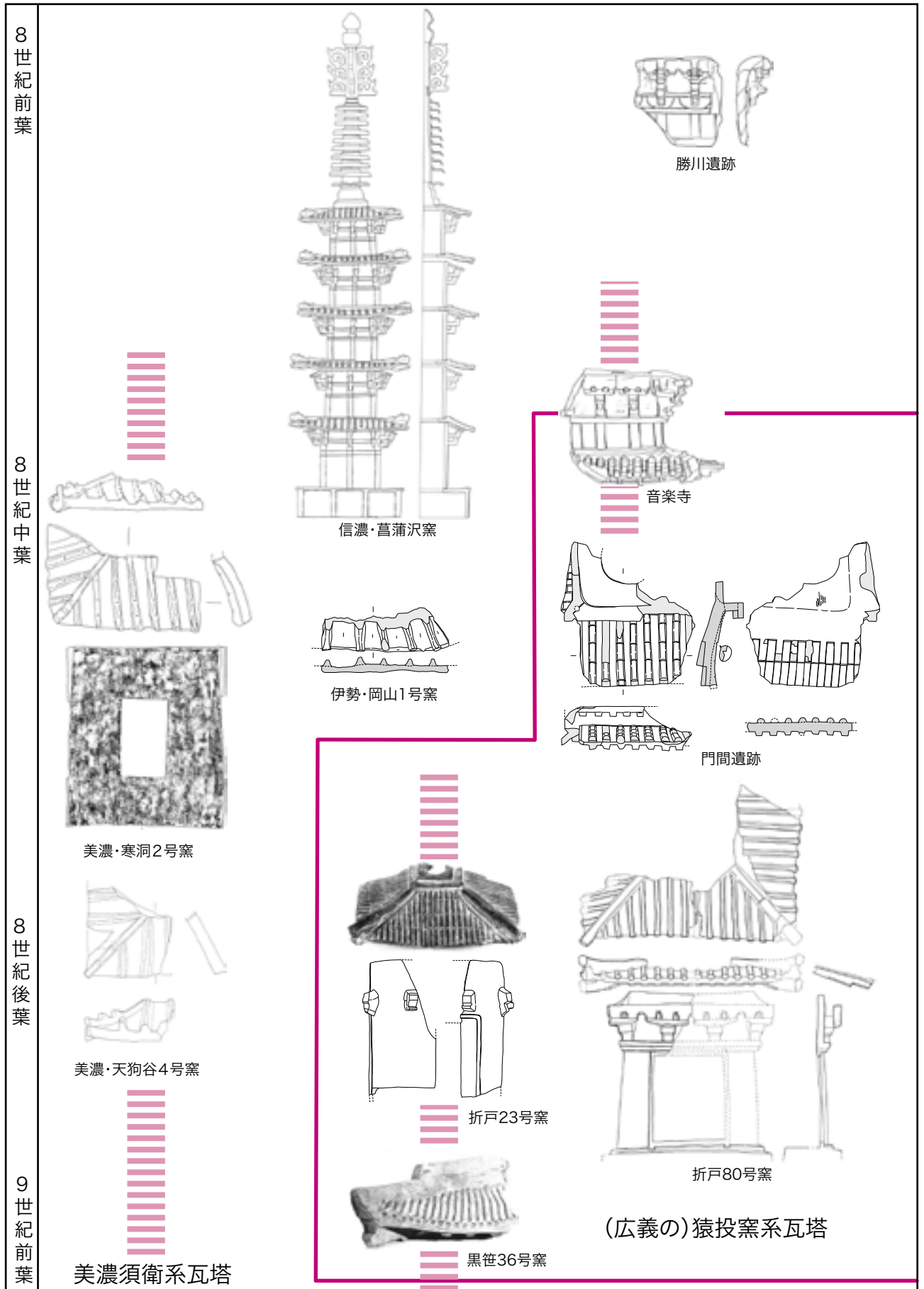
### 遠江の瓦塔

市道遺跡瓦塔と同じ斗拱表現が遠江国域にある。見附端城遺跡出土瓦塔（静岡県磐田市）は軸部上端隅部であるが壁付き粘土帯と空中粘土帯の組み合わせである。三斗の凸形は型押しで市道遺跡瓦塔のような大きな凸形くり抜きはない。尾垂木は隅にあるだけで瓦塔どうしの比較では省略が進んだといえるが逆により実物の木造多層塔には近づいたといえる。また宇志遺跡

出土瓦塔（静岡県引佐郡三ヶ日町）は全形が復元された著名な瓦塔であるが、これも同じ組み合わせである。凸形は型押しで全ての持送りで尾垂木が表現される。屋蓋部は反りが大きく丸瓦列は3～5cmごとに節が入る。隅降棟は折戸80号窯瓦塔同様単純なつくりで、この点市道遺跡瓦塔の方が実物に近い。

以上主だった斗拱表現をみたが、大別して(1)折戸80号窯瓦塔のような1段の空中粘土帯のみのタイプ、(2)市道遺跡瓦塔のような壁付き粘土帯+空中粘土帯のタイプ、(3)そのいずれにも該当しないタイプがある。(1)

図3 東海地方古代瓦塔の系統およびその変遷



8世紀前葉

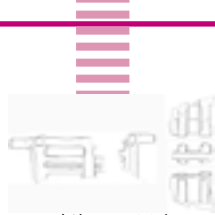


遠江・竹林寺廃寺

8世紀中葉

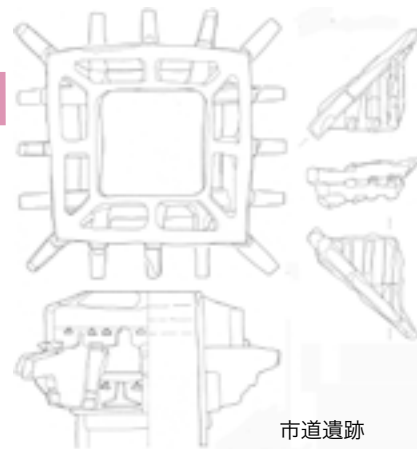


山城・瀬後谷4号窯

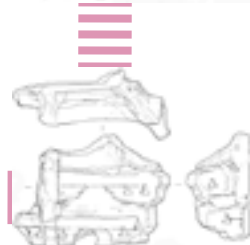


鳴海286号窯

8世紀後葉



市道遺跡



遠江・見付端城遺跡

9世紀前葉

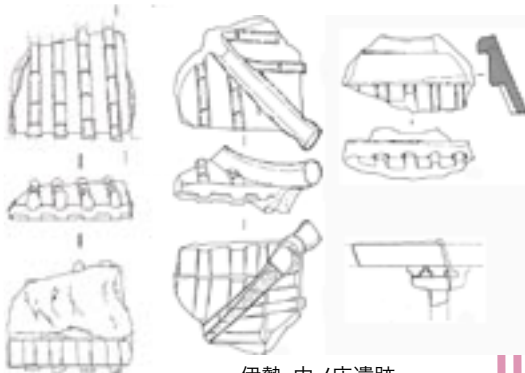


遠江・宇志遺跡

東三河・遠江系瓦塔

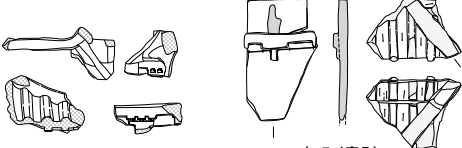
図版出典

- 寒洞2号窯 渡辺1996
- 天狗谷4号窯 渡辺1998
- 菖蒲沢窯 鳥羽1991
- 岡山1号窯 筆者実測
- 折戸23号窯 五島美術館1965・永井2005a
- 黒笹36号窯 五島美術館1965
- 勝川遺跡 松原1992
- 音楽寺 宮川1995
- 門間遺跡 筆者実測
- 折戸80号窯 高崎1989
- 神沢古窯 三渡1976
- 中ノ庄遺跡 谷本1972
- 郷上遺跡 酒井2001
- 水入遺跡 永井2005b
- 黒笹8号窯 永井2005a
- 瀬後谷4号窯 石井1992
- 鳴海286号窯 高崎1989
- 竹林寺廃寺 平野1992
- 市道遺跡 費1996
- 見付端城遺跡 磐田市埋蔵文化財センター1993
- 宇志遺跡 平野1992



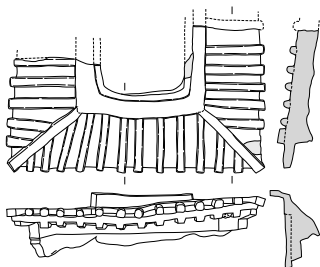
伊勢・中ノ庄遺跡

神沢古窯  
(鳴海220号窯)



郷上遺跡

水入遺跡



黒笹8号窯

と(2)は共に篋による鋭角的な切り込み、三斗の凸形型押しによる表現、それら作業のための目印となる線刻がある。また持送りなどの各部品は規格化が進む。これら特徴は(微細表現の違いは別として)瓦塔を量産するために導入された技術といえよう。

(1)と(2)の差異はその分布域にある。先述したように(2)のタイプは遠江から東三河地域にかけて分布する。これは須恵器窯の分布域とも関わってこよう。すなわち(2)の分布域は二川・湖西窯産須恵器が主体を占める地域でもある。このことから(2)を二川・湖西窯産瓦塔の特徴とみなすこともできよう。ただし同古窯跡群では瓦塔の出土は知られていないので、現状では東三河・遠江系瓦塔としておきたい。これらは空中粘土帯を採用している点からみても猿投窯系瓦塔の影響下にあることは明らかで、同時期かやや後出する時期と考えられる。

(3)には勝川遺跡瓦塔、黒笹8号窯瓦塔が該当する。前者は空中粘土帯が採用されておらず、また持送りと壁付き粘土帯(ただし切り込みはない)が埼玉県東山遺跡瓦塔のように分化していない状態にある。したがって空中粘土帯以前あるいは持送りの大型化以前ということになる。後者は空中粘土帯を採用しているもののそれが2段であり、また各部品の規格統一はなされておらず粘土紐を縫ぎ合わせたような構成となっている。すなわち(1)のような製作技術が導入された形跡がない。

#### 4 猿投窯における異系統瓦塔

前項で概観した斗栱表現に空中粘土帯を採用した瓦塔は、いずれも屋蓋部が石田Bタイプであった。ところが猿投窯では、石田Bタイプであってもあきらかに異系統と考えられる瓦塔や石田Aタイプ瓦塔も生産されていた。前者が鳴海286号窯、後者が黒笹31号窯、同36号窯、折戸23号窯の各瓦塔である。次にこれら瓦塔について概観する。

##### 鳴海286号窯(愛知県名古屋市)

鳴海32号窯式の須恵器を焼成した窯である。瓦塔は屋蓋部のみが出土し、丸瓦列は棒状粘土で節がなく平瓦列には段を入れて一枚々々を表

現ししかも写実的な高欄を表現している。瓦表現・高欄表現は共に猿投窯の他の瓦塔ではみられないもので、京都府瀬後谷4号窯跡(灰原)出土瓦塔に類例を求めることができる。したがって瀬後谷4号窯瓦塔の製作工人との直接的な関わりを考えたくもなる。ただ瀬後谷4号窯瓦塔は緑釉がかかるが、鳴海286号窯瓦塔は無釉であり緑釉陶器を併焼した痕跡もない。

##### 黒笹31号窯(愛知県西加茂郡三好町)・折戸23号窯(愛知県日進市)

黒笹31号窯は折戸10号窯式の須恵器を焼成した窯である。丸瓦列に節が入り、類例は豊田市舞木廃寺跡出土瓦塔がある。軒先の状況や軸部については不明である。折戸23号窯も折戸10号窯式とみられる。屋蓋部は黒笹31号窯瓦塔に類似し、軒先には竹管状工具によって軒丸瓦を表現する。初層軸部の斗栱表現は粘土塊を篋で切り出した持送りのみである。手先三斗を別に成形した可能性も残されるが、いずれにせよ空中粘土帯の技術とは大きくかけ離れたものである。

##### 黒笹36号窯(愛知県西加茂郡三好町)

軸部は不明で屋蓋部が知られている(本多1957)。黒笹31号窯・折戸23号窯瓦塔からさらに省略が進んだ形状で、丸瓦列に節はなく、降棟は角柱状粘土の貼付けである。垂木は軒先に対して斜めに入る。

猿投窯産石田Aタイプ瓦塔はほとんどが軸部不明であるため、例えば折戸23号窯瓦塔が黒笹8号窯瓦塔のように技術系統から外れたものかどうか、現状では結論が出せない。また東海地域における石田Aタイプ瓦塔の折戸10号窯式以前の状況も明らかでない。屋蓋部表現だけが異なるのか、それとも斗栱表現までを含めて異系統の瓦塔が存在するのか、今後の課題としたい。

#### 5 技術系統からみた東海地方の瓦塔

したがって現状では猿投窯系瓦塔を、空中粘土帯を中心にいくつかの製作技術系統を包括したものとして考えておきたい。そして明らかにしえた範囲で製作技術系統ごとの展開を提示す



る(図3)。

8世紀中葉前半とみられる信濃菖蒲沢窯は美濃須衛系須恵器工人の関与が想定されている(鳥羽1991)。しかし美濃須衛系瓦塔最大の特徴である垂木表現の省略はなく、瓦塔に関していえば製作技術が直接移植されたものではない。関わりがあったとしても別にモデルとなる木造多層塔ないしは瓦塔があったと思われる。8世紀中葉に開始された美濃須衛系瓦塔は猿投窯産瓦塔と併行して作られ続けるが(註3)、製作技術や製品そのものがあまり広範に広がらなかったとみられる。

それに対して猿投窯系瓦塔は、丸瓦のみに節を入れ簷で規則的に削りだした垂木をもつ石田Bタイプ屋蓋部が鳴海32号窯式段階(8世紀中葉)にみられる点が成立の画期となろう。神沢古窯(鳴海220号窯)瓦塔を窯式基準とし、一宮市門間遺跡・西尾市古新田遺跡・中之庄遺跡が挙げられる。中之庄遺跡瓦塔では空中粘土帯が採用されており、本例が猿投窯産かどうかは不明(註4)ながらこの時点で製作技術が完成されたことを示している。

そして丸瓦列の節を省略した屋蓋部が折戸10号窯式(8世紀後葉～9世紀初頭)に登場する。なかでも郷上遺跡瓦塔は持送りに空中粘土帯をのせるようにして接合しており、その他表現の省略程度から折戸80号窯瓦塔のような持送りに粘土帯を貼付けるものより先行すると考えられる。これは東三河・遠江系瓦塔でもみられる変化(市道遺跡→見付端城遺跡)で、製作にあたって猿投窯系瓦塔を常に参考にしてい

たことが考えられる。しかし丸瓦列に節を入れ続ける点は独自色のあらわれといえよう。

猿投窯産石田Aタイプ瓦塔は8世紀後葉に登場し、節や隅降棟に省略が進んだ黒笹36号窯瓦塔はやや後に位置付けられる。なお、折戸23号窯瓦塔・黒笹36号窯瓦塔ともに竹管状工具による軒丸瓦表現があり、尾張地域以外ではほとんど例がない点に注意しておきたい(註5)。

勝川遺跡瓦塔や竹林寺廃寺瓦塔などこれら系統から外れる瓦塔は位置付けが難しいが、勝川遺跡瓦塔は先述のように猿投窯系瓦塔に先行する時期と考えることができる。また音楽寺瓦塔も製作技術が定型化する以前の時期とみてよいと思われる。黒笹8号窯は定型化した屋蓋部に対し「我流」な斗栱表現というアンバランスさが目立つ。軸部だけが伝習不能であった可能性もあるが、屋蓋部と軸部で工人が異なることも考えられよう。ここでは屋蓋部表現から折戸10号窯式に含めて考えておきたい。

## 6 さいごに

調査にあたっては、池田敏宏、内山伸也、清水政宏、岡 潔、服部哲也、森 泰通、矢頭俊和、小田原市郷土資料館、木曾川町歴史資料館、甚目寺町教育委員会、豊田市民芸館、名古屋市見晴台考古資料館、四日市市教育委員会の各氏・各機関に御協力いただいた。御協力・御教示いただいた方々には未だ十分な成果が出せないでいることをお詫びしたい。

### 註

- 1) 持送りは、肘木や尾垂木が壁体から前方へ階段状に迫り出す部分をいう。転じてこれをシルエット的に表現する板状粘土のことを示す。
- 2) 屋蓋を支える組物の先端部分を手先という。軒桁を3つの斗で直接支持することからこのようによぶ。
- 3) 瓦塔出土の美濃須衛窯は、太田1号窯址群内3号窯跡(美濃須衛編年IV-2期:8世紀中葉)、天狗谷4号窯跡(同IV-3期:8世紀後葉)、寒洞2号窯跡(同IV-3～V-1期:8世紀後葉～9世紀前葉)である。
- 4) 伊勢国域は東海地方でも瓦塔が少ない。本例以外では四日市市岡山1号窯跡、伊勢国分寺跡くらいで、在地窯で量産されていた可能性は低い。
- 5) 尾張国域では甚目寺町清林寺遺跡瓦塔に同様の表現がある(永井2005a)。他地域では神奈川県小田原市千代廃寺瓦塔(図1下)のみである。

### 参考文献

- 井川祥子 1995 「岐阜県内出土の瓦塔」『博物館だより』No.29 岐阜市歴史博物館。
- 池田敏宏 1995 「瓦塔威屋蓋部表現手法の検討」『土曜考古』19号 土曜考古学会。
- 池田敏宏 2000 「関東地方瓦塔と他地域の比較」『研究紀要』11 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 石井清司 1992 「3. 木津地区所在遺跡」『京都府遺跡調査概報』第51冊 京都府埋蔵文化財調査センター。
- 石田成年 1997 「摂河泉の瓦塔」『河内古文化研究論集』和泉書院。

- 石村喜英 1980 「武蔵高岡廃寺跡と出土の瓦塔」『埼玉史談』27-3。
- 石村喜英 1987 「武蔵勝呂廃寺の創建と瓦塔」『埼玉の考古学』人物往来社。
- 稲垣晋也 1967 「静岡県引佐郡三ヶ日町志山中発見の瓦塔」『考古学雑誌』第53巻第1号 日本考古学会。
- 磐田市埋蔵文化財センター編 1993 『見付端城遺跡発掘調査報告書』磐田市教育委員会。
- 亀田修一 2002 「吉備の瓦塔」『環瀬戸内海の考古学 平井勝氏追悼論文集』下巻 古代吉備研究会。
- 梶山 勝 1985 『尾張の古代寺院と瓦』名古屋市博物館。
- 小嶋廣也編 2001 『古新田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 五島美術館 1965 『猿投出土陶・三彩と緑釉陶』。
- 齊藤 忠編 1980 『竹林寺廃寺跡』島田市教育委員会。
- 三渡俊一郎 1976 『緑区の考古遺跡』名古屋市教育委員会。
- 酒井俊彦編 2001 『郷上遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 善端 直 1994 「北陸地方の瓦塔」『文化財学論集』文化財学論集刊行会。
- 高崎光司 1989 「瓦塔小考」『考古学雑誌』74-1。
- 谷本鋭次編 1972 『中ノ庄遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会。
- 出河裕之 1995 「信濃の瓦塔再考」『信濃』47-4。
- 鳥羽嘉彦編 1991 『菖蒲沢窯跡』塩尻市教育委員会。
- 永井邦仁 2000 「古代の瓦塔」『まいぶん愛知』No.61 愛知県埋蔵文化財センター。
- 永井邦仁 2005a 「東海地方の古代瓦塔に関する覚書」『三河考古』第18号三河考古刊行会。
- 永井邦仁編 2005b 『水入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 名古屋市教育委員会 1996 『鳴海 286 号窯跡発掘調査報告書』名古屋市教育委員会。
- 植崎彰一 1957 『愛知県猿投山西南麓古窯跡群』愛知県教育委員会。
- 植崎彰一 1966 『陶磁全集 31 猿投窯』平凡社。
- 贊 元洋編 1996 『市道遺跡 (II)』豊橋市教育委員会・牟呂地区遺跡調査会。
- 平野吾郎 1992 「瓦塔」『静岡県史』資料編考古4 (古代)。
- 本多静雄 1957 『愛知県猿投山西南麓古窯址群』社団法人日本陶磁協会。
- 松原隆治 1992 『勝川遺跡Ⅲ』愛知県埋蔵文化財センター。
- 宮川芳照編 1996 『音楽寺遺跡発掘調査報告書』江南市教育委員会。
- 渡辺博人編 1996 『各務寒洞窯址群発掘調査報告書』各務原市埋蔵文化財センター。
- 渡辺博人編 1998 『須衛天狗谷古墳群・天狗谷窯址群発掘調査報告書』各務原市埋蔵文化財センター。



# 山茶碗の用途をめぐって —摩滅痕の分析から—

● 武部 真木

東海地域に特有の中世食膳具とされてきた無釉の陶器「山茶碗」は、中世前期の膨大な消費量に対して中世後期には一転して全く流通しない地域が生じるなど地域単位でその様相は大きく変化している。ここでは山茶碗に認められる摩滅の痕跡を「使用痕」と考え、型式ごとの変化を分析することによって使用形態という視点から中世前期と後期の山茶碗の違いを抽出した。そして山茶碗は単なる「食膳具」ではなく、使用方法と山茶碗の形態変化が相互に関連してきたことを想定した。

## はじめに

東海地方の中世陶器の主要な位置を占める「山茶碗」の基本的な流通域は、旧飛騨、伊賀、伊豆国を除く東海地域にほぼ限定される。知多半島・猿投・瀬戸・渥美・湖西・東遠・美濃中部・東部地域の各地の生産地編年研究が進展したことにより、少なくとも12世紀から15世紀末の間における流通域内部で起った地域差といったものがしだいに明らかにされつつある。消費地の様相には、生産地からの距離が常に影響し、各窯生産量の推移が製品の競合関係となって流通域に即座に反映されることがわかってきている。これは「山茶碗」が比較的狭い「在地」消費を目的とした製品であったことを浮彫りにしている。

このような特徴をもつ「山茶碗」の生産・流通における地域間の格差、および画期からその背景を考えようとするとき、そもそも「山茶碗とは何か」という根本的な課題が敢て提示されることがある。それは膨大な消費量と等量（等価）の代替品が確定できないがために「食膳具（食器）」という自明の前提に対し、ふと、あるいは強い疑念として表現されてきた。本稿では「山茶碗」の用途や機能といった問題について過去の論点を整理し、併せて「使用痕」を採用する試みを研究ノートとして提示しておきたい。

## 1 用途についての言及

山茶碗研究においても草分である赤塚幹也氏は「山茶碗は実用の飲食器で、小皿には菜（おまわり、おめぐり）を盛るか調味料を入れた。」（註1）とし、また1969年『瀬戸市史 陶磁編一』「山茶碗の名称と概説」（註2）には平安から鎌倉時代にかけて続いた食膳の場として「山茶碗は、これに飯を盛りあげ、周りに小碗（または小皿）を配して、そこには菜や調味料を入れ、それらを折敷か高脚台に載せて膳部とした。」という食膳の様子を想定した。ただし、食器の材質は陶器に限らず漆器・木器の使用も多かったであろうと補足している。

赤羽一郎氏は1987年「山茶碗に関する若干の考察」（註3）において、山茶碗の食膳具としての役割に疑問を提示した。雑穀を米と混ぜ雑炊状にして食べることが一般であったとされる当時の食習慣から類推すれば、水を含むと脆弱になるという性質や、山茶碗も灰釉碗も口をつける食べ方に適さないといった点から「主要な食器としてみなすことに若干の躊躇」を覚える」とする。また、信濃へ搬入された古代灰釉碗と中世山茶碗の量の格差から、古代～中世にかけて両者の日常雑器としての連続性を否定し、灰釉碗の特殊器種性を示唆する鋤柄俊夫氏の考察（註4）を紹介し、両者の性格の違いが受け入れ量の差違となってあらわれるという考えに一定

の理解を示しつつ、食器の主流は実は漆器や木製品であり、そのため信濃では食器として積極的に山茶碗を求めなかったとしている。さらに「山茶碗・土師器質土器は、多分に一過性の用途をもっていった」として、「日常」の食器であることを否定している。

今日、山茶碗を扱うにはまず藤澤良祐氏による研究成果に負うところが大きい。氏は山茶碗を食膳具として捉える。その上で、山茶碗の減少する時期と量産期が一致する（施釉陶器）平碗は技術的および質的な差違が大きく、しかも流通圏が異なること、出土量が山茶碗の消費量に遠く及ばないことなどをあげ、瀬戸（施釉陶器）の中には代替品が求められないことを示した。そして土器・陶磁器類のやきもの以外—すなわち漆器・木製挽物—を想定した（註5）。

城ヶ谷和広氏は、中世前期を中心とする集落遺跡である土田遺跡の陶器・土器の器種構成を時期別に示し、供膳具である碗形態の中で、山茶碗が土田Ⅰ期～Ⅳ期（藤澤編年尾張型第4型式～脇之島Ⅰ号窯式）の間を通して、圧倒的な量を占めることをあげ、漆器など木製品は、高級品としての使用・汁ものを入れる場合などの補完的な使用は想定できるが、やはり日常容器としては山茶碗を用いたと想定した。ただ「調理具」の節では「山茶碗でわずかではあるが、卸目や片口をもつものがみられ」「内面が非常に摩滅しているものがしばしば見られる」点に注目し、「単に供膳具のみでなく、鉢のようなもの（調理具）としての用途」をもっていった可能性を指摘している（註6）。

尾野善裕氏は、尾張地域の＜一般的状況＞として、山茶碗が出土土器・陶磁器全体の八割を占めることを示した。そして「異常ともみえる多さ」をはじめ、食膳具とした場合の代替品と目される14世紀の瀬戸（施釉陶器）の増加率が12・13世紀の山茶碗の比率に達しないこと、木製挽物の普及が飛躍的に増加するのは15世紀後半以降であり、山茶碗の減少する時期と隔たりがあること、多くの（1/4程度の割合で）山茶碗の内面底部に通常の飲食によるものとは考えにくい著しい摩滅の痕跡がみられることなどから、すべてを日常の食器とみなすことを疑問視し、（現段階の見通しと断った上で）調理

具的な使用を想定している。そして山茶碗の減少は瀬戸（施釉陶器）卸皿など調理用器種の量産化の時期とほぼ一致することを指摘した（註7）。

以上を整理すると山茶碗という器種が成立する段階において、灰釉陶器碗さらには白磁碗に形態の系譜が求められてきたこともあり（註8）、当然のことながら「碗」であることは自明の事と受け止められてきている。これまでの山茶碗を「供膳具（食器）」とする場合、その代替品には中世絵巻物に描かれる多くの漆器・木製品資料や、漆塗りの工程を簡素化した廉価な木地碗が生産されていた事例（註9）などをもとに、出土資料に見られる以上の普及率を予想する考え方が一般的である。一方、食器以外とみる場合には、「調理具」と仮定する場合や、山茶碗の使用の痕跡に留意した報告は数多くみられる。

## 2 山茶碗にみられる使用痕

使用法をさぐるために使用の痕跡を取り上げる。消費地遺跡でみられる使用痕の中には、磨滅の痕跡をはじめ、墨書、ススやタール、漆などの付着物などがある。

まず、墨書がされる部位は碗・小皿ともに外面底部が圧倒的に多く、内容では数を表すもの、記号など1文字である場合がほとんどである。また、墨書のある資料は高台部分に磨滅の痕跡が認められるものはなく、一過性の使用法であったと推定されている（註10）。墨書陶器は屋敷地周辺のほか集落に近い河道などに分布が集中する傾向があり、尾張地域においては尾張型と東濃型の両者の山茶碗で文字の内容に際立った差違は認められない。また、中世前期の集落で「僧」「佛」「進上」「犬法師」などが確認されているが（註11）、これらは例外的でさらに特殊な場での使用法が想定される。

ススの付着する資料は、井戸・土坑や溝や流路に一括廃棄された中に含まれている場合がある。ほぼ全面に大量に認められるものがあり、しかも破断面をススが覆うものが多々みられる。器の呈をなしていない状態で熱を受けており、この場合は使用痕ではなく最終的な廃棄方

法を示す痕跡といえる。一方、口縁部周辺のみ部分的にススが付着するものがあり、こちらは灯明皿のような使用法が想定される。その他、漆と思われる被膜状の付着物が主に内面に残る場合がある。接着部が弱く剥離しやすいため、遺存の確率がかなり低い痕跡であり、複数がまとまって出土する例もなく、用途など全く不明である。

以上の墨書やスス、漆などの付着物は、どちらかといえば特殊な用途で例外的なもの、あるいは転用など再利用の痕跡というべきものであり、大量消費という特性に結びつく用途ではない。次に「磨滅」の痕跡をとりあげることとする。

### 3 磨滅の痕跡について

尾張地域の消費地遺跡出土の山茶碗を分析の対象とする。この地域は中世前半期は尾張型、後半期にも東濃型山茶碗が流通し中世を通して追跡することができるためである。まず、磨滅のみられる部位について図1のように分類を行った(註12)。

まず外面は高台畳付、または平底の底部周囲が磨滅するもの(a類)、磨滅しないもの(b類)に分けられる(註13)。内面では見込が磨滅するものをA類とし、全体に及ぶA-1類、見込と上部の口縁近くに顕著なA-2類、見込部分のみのA-3類に細分する。B類は内面の見込を除いた部分に磨滅が認められるものであり、

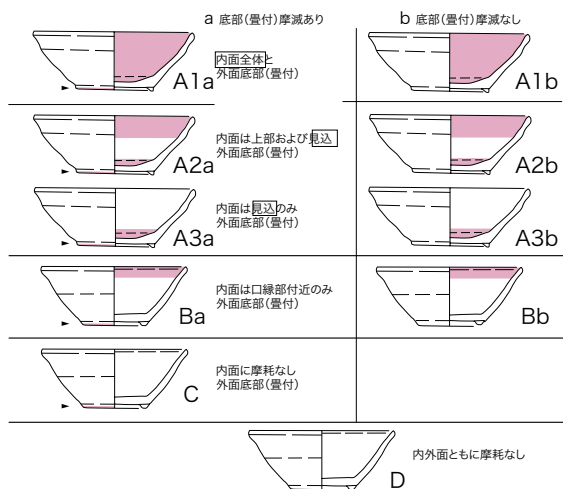


図1 磨滅部位の分類

C類は高台には磨滅が認められるが内面が磨滅しないもの、そして全く磨滅が認められないものをD類とする。

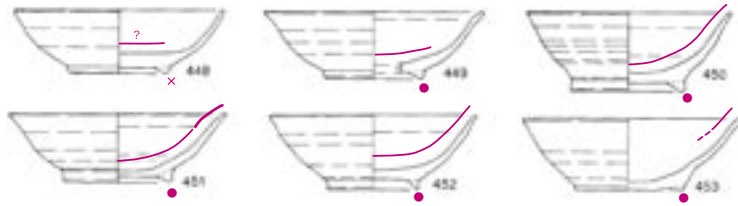
これにしたがって山茶碗を型式ごとに観察した結果が表1、および図2である。

大毛池田遺跡(一宮市)は木曾川左岸の沖積低地に立地し、12世紀後半から16世紀初頭にかけての屋敷地区画など集落の中心域が調査された。掲載資料では、尾張型第4,5型式段階では9割以上がA類、すなわち内面見込に磨滅が認められる。そして第6型式ではA類が60%、第7型式になると10%弱と極端に減少する。東濃型山茶碗は胎土が緻密で硬質の焼成であるため、元々表面は滑らかでかつ磨滅も少ない可能性が考えられるが、手触りと高台に残るモミ痕が擦れて変形していることで確認することができる。A類をみると、窯洞1号窯段階(第5型式併行)で6点のうち3点、白土原1号窯段階(同第6型式)では8点のうち5点、明和1号窯段階(同第7型式)では5点のうち3点といった比率となり、必ずしも尾張型での検出率とは一致していないようである。図4は山茶碗に先行する百代寺窯式段階の灰釉碗と輪花碗の磨滅部位を示したものである。ここでは掲載資料8点すべての内面と高台に著しい磨滅が認められた。山茶碗とは違い、器壁は薄く胎土は緻密でやや軟質の焼成ではあるが、磨滅は同様の部位で確認されている。

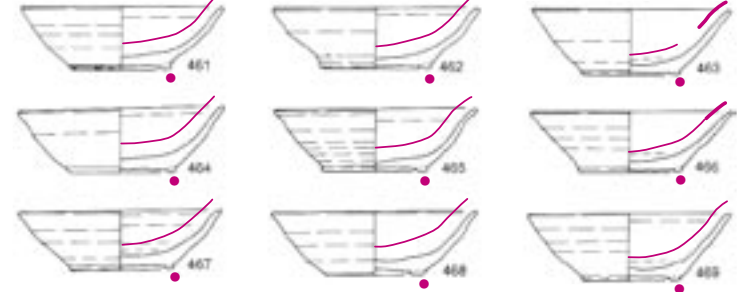
志賀公園遺跡(名古屋市北区)は矢田川と庄内川の合流地点から1km程南にあたる沖積地に立地している。調査範囲は中世段階では集落の外縁部にあたり、山茶碗は主に村境付近の溝および自然流路から多数出土している。96ASD06の山茶碗は主に尾張型で構成されており、A類は第5型式段階で72.4%、第6型式段階は71.4%とほぼ同様の割合で推移し、第7型式段階で13.3%と急激に減少する。

猫島遺跡(一宮市)は中世段階は区画溝、掘立柱建物、調査範囲東側の低湿地には方形土坑が検出されるなど集落でも縁辺であったと思われる。山茶碗は東濃型が主体となっている。A類は白土原1号窯段階が0%、明和1号窯段階で40%である。傾向は抽出し辛いものの、東濃型では高台が磨滅する比率は少ないようであ

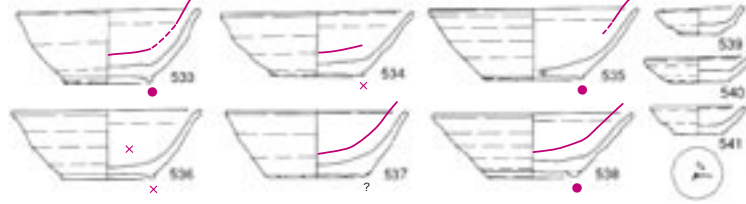
95E SE01



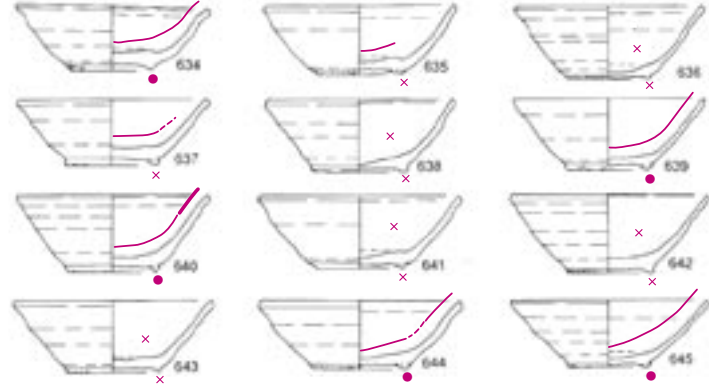
94K SK56



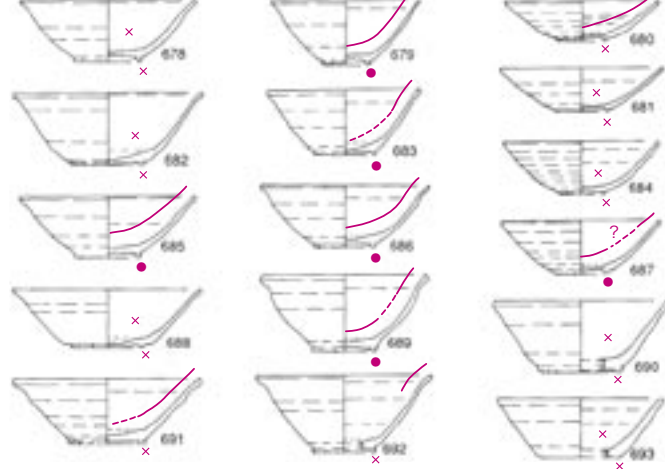
94Aa SK55



94C SK10



95F SD01



● 高台置付に摩滅が認められるもの    — 摩滅部分を示す。太線は特に著しいもの

図2 消費地出土の山茶碗にみられる摩滅痕（大毛池田遺跡）

大毛池田遺跡	A1-a	A1-b	A2-a	A2-b	A3-a	A3-b	B-a	B-b	C	D	計
百代寺	6		1		1						8
第4型式	3				1	1					5
第5型式	39		2		1	2	1			3	48
窯洞1	2				1					3	6
第6型式	4	1	2		2	3	1	1	1	5	20
白土原1	3	1	1					1		2	8
第7型式		1								10	11
明和1	2		1				1	1			5
第8型式										1	1
大畑大洞古	1									2	3
大畑大洞新			1							1	2
大洞東		1								1	2

志賀公園遺跡	A1-a	A1-b	A2-a	A2-b	A3-a	A3-b	B-a	B-b	C	D	計
第5型式	3	1	7	3	7		1	2	3	2	29
第6型式		2	6	1	7	4	2		1	5	28
第7型式						2	2	2	1	8	15

猫島遺跡	A1-a	A1-b	A2-a	A2-b	A3-a	A3-b	B-a	B-b	C	D	計
第4型式		1								1	2
第5型式	1										1
第6型式										1	1
白土原1								1		2	3
明和1	1	1						1		2	5
大畑大洞古		1									1
大畑大洞新							1				1
大洞東										1	1

松河戸遺跡	A1-a	A1-b	A2-a	A2-b	A3-a	A3-b	B-a	B-b	C	D	計
百代寺					1						1
第4型式	4		3		3					6	16
第5型式	28		4		5		1	2	1	9	50
窯洞1	1										1
第6型式	9	2	3		3	1	1	1	5	13	38
白土原1					2			1		2	5
第7型式	1	2			1		1	1		15	21
明和1	1						1	2	1	14	19
第8型式										2	2
大畑大洞古									2	4	6
大畑大洞新										1	1
大洞東										2	2
脇之島									2	2	4

表1 摩滅の部位

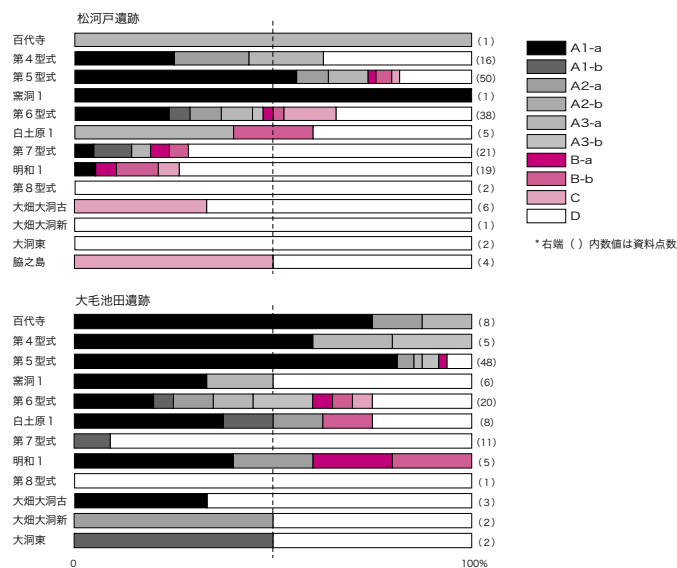
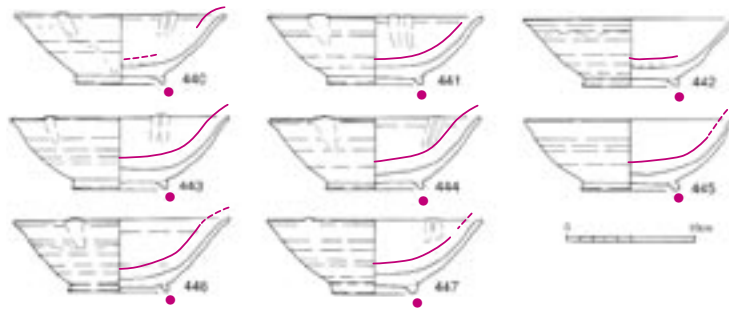


図3 摩滅部位の変化

94F SD17



● 高台置付に摩滅が認められるもの  
 — 摩滅部分を示す。太線は特に著しいもの

図4 灰釉陶器碗にみられる摩滅痕（大毛池田遺跡）

る。

松河戸遺跡（春日井市）は庄内川右岸の沖積低地に立地し、調査地点は中世集落と縁辺部の水田耕作地にあたる。山茶碗は尾張型・東濃型の両者があり、A類は尾張型第5型式段階資料50点のうち37点（74%）、第6型式段階は38点のうち18点（47%）、第7型式では21点のうち4点（19%）と急激に減少する。東濃型、明和1号窯段階では19点中の1点のみ（5%）である。脇之島1号窯段階の無高台碗は、平底の周縁部に明瞭な摩滅痕がみられる。軟質の焼成であるためこうした痕跡が現れ易いと思われる。東濃型では内面に摩滅痕はほとんど認められない。

表2は三辻利一・岡本直久氏らが行った胎土分析試料の一覧（註14）から作成した。これによると、第3型式では13点中の7点（53.8%）、第4型式では40点中の28点（70%）の高い割合で内面見込に使用痕が認められる。中世前期に大型の屋敷地区画が並び、近在では中心的な集落遺跡であった朝日西遺跡（清須市）では、10点のうち摩滅は8点に認められる。一方、白山中世遺跡（春日井市）資料では摩滅が全く認められない。ここは祭祀遺跡と考えられており、15世紀代ではあるが東濃型山茶碗の大量投棄という特異な出土状況がみられ、山茶碗の「かわらけ」的な使用法が指摘されている。

下津北山遺跡（稲沢市）では中世前期の方形区画をもつ屋敷地が検出された。そこでは猿投産製品を主体とした水注や仏器を含む壺類、「僧」「佛」など特異な文字が墨書された山茶

碗、小皿が数多く出土し、寺院であった可能性が高いとされている。報告によると山茶碗と小皿の内面見込部分の摩耗について、I期（12世紀後半～13世紀前半）では碗203個体のうち77%、皿154個体のうち64%でみられ、遺構によっては90%近くの個体で認められた。II期（13世紀後半から14世紀）では全体の総数は1/4程度に減少するものの、碗では34%、皿では66%と皿の方に多く認められる。I期資料の特徴として「大量の一括廃棄資料においては摩耗が顕著なものが多く、未使用品を廃棄したようすはみられない」とし、I期からII期の変遷にともない碗皿の使用形態が変化した可能性を指摘している。なお、ここでのI期は主に尾張型第4、5型式段階、II期は第(6)7、8形式が主体となる時期に相当する（註15）。

見込部分を含む摩滅痕（A類）では、尾張型山茶碗では第3、4、5型式段階まで9割に近いかなりの高率で検出されるが、次の第6型式段階でやや減少する傾向があらわれ、第7型式段階では摩滅痕のない資料が大半を占めるよう

遺跡名	型式	個数	使用痕有り
白山中世遺跡	第2型式	1	0
	第3型式	5	0
	第4型式	2	0
町田遺跡	第3,4型式	1	0
	第4型式	6	内面2,高台1
朝日西	第3型式	7	内面4,内面高台2
	第4型式	3	内面高台1,高台1
廻間遺跡	第4型式	10	内面8
土田遺跡	第4型式	5	内面4
尾張国府跡	第4型式	5	内面1,内面高台1
	第5型式	1	0
大淵遺跡	第3型式	1	内面1
	第4型式	9	内面8,内面高台1

表2 山茶碗の摩滅痕（尾張型）



になりその割合は逆転している。東濃型山茶碗については分析点数が少なくまだ傾向を抽出するには至らないが、高台が摩滅痕しない資料 (b類) の割合が尾張型より高い、という印象を持っている。

摩滅の部位についてみると、A類では常に (a類) > (b類) の関係があり、見込部分の摩滅が顕著な資料は高台にも確認される場合が多い。一方で見込に摩滅のない資料 B-a類と B-b類では、高台の摩滅痕の有無がほぼ等しい関係にあり、口縁部摩滅の使用法の影響が特に看取できないとすれば、見込みが摩滅するような使用を継続することによって、高台部分にも摩滅痕が生じるという対応関係が想定されよう。

#### 4 摩滅部位の意味するもの

山茶碗の形態、特に底部に限定してみるならば、高率で見込に摩滅痕が検出される尾張型山茶碗第3型式～第5型式の形状は、内面底部から体部は緩やかな曲線を描いて続く。底部の器壁は一定して厚く、この間に高台部分は量産による粗雑化が進み低くなるとはいえ、高台径の縮小傾向は抑えられている。第5型式新段階になると底部の器壁がやや薄くなり、厚さも一定でなくなる傾向がうかがわれる。摩滅資料の割合に変化がみられた第6型式碗の最大の特徴は、内面底部と体部の境が屈折して明瞭な稜を形成する点であり、体部の開きは小さくなり短く直線的になっていく。器高をほぼ据置きのまま口径・高台径ともに縮小化が進むため、全体のバランスに大きな変化がみられる。同時に底部の器壁は薄くなり明らかに一定でなくなる。以降第7型式～第11型式でも内面底部と体部の境はますます明瞭となり、器壁は薄くなっていく。

底部径の小型化、体部の直線化、底部・体部の境に稜を形成する、といった特徴は、大局的にながめれば一連の変化としてほぼ同じ段階で発生しており、知多窯では知多第6型式段階、渥美・湖西窯では第3型式第2小期、東濃型山茶碗では明和1号窯段階に見えてくる特徴である。各型式の併行関係からすると、この形態変化の出現する時期は若干前後して、13世

紀第2四半期から第3四半期の間に相当する(註16)。従来この変化は、量産化を目的に工程が省略化、粗雑化される過程の製作技法による変化と見做されてきたが、この量産化のピークを迎えた尾張型第6型式段階を境として、実は内面の摩滅痕は減少傾向にあり、それまでの使用法における需要が低下しつつあったとみることもでき、単純には説明できない。

見込部分を中心に広い範囲が「摩滅」するためには、播鉢の使用時にみられるような「する・つぶす」動作が最も想定し易い。内面底部が丸く、口は広く、かつ安定して設置できる方がより効率的となる。A-2類は体部の丸く膨らむ中程が摩滅しないもので、この存在からは棒状の播粉木のような器具を用いた可能性も考えられる。摩滅痕の比率が減少する尾張型第6型式以降の山茶碗は、見込部分の形状や面積、底部の安定性からすれば想定される使用方法に適していない、といえようか。また、末期の灰釉陶器碗にも山茶碗と同様の用途への連続性をさぐる事が可能ではないだろうか。

ところで、東濃型山茶碗生産窯では「オロシ片口碗」「オロシ碗」「オロシ無高台碗」と分類される器種が微量ながら焼成されている(図5)。片口碗は碗の口縁部に片口が作出されたもので、「オロシ碗」は内面体部や見込から口縁にむかって放射状や斜格子状、綾杉状に粗くへう描き線刻されるものであり、「オロシ無高台碗」は内面に斜格子状の線刻を施した無高台碗である。深く明瞭な線刻があり、両者はオロシ目としての機能を有した可能性がある。多治見市周辺では、白土原1号窯～大畑大洞4号窯段階の焼成器種としてこれらが含まれている(註17)。生産量全体からすれば1%にも及ばず、その後生産が継続した状況もみられないが、尾張型山茶碗の摩滅痕に変化が生じてくる時期に発生したという意味において注目したい事象である。

#### 5 山茶碗とは何か

山茶碗は質において階層差を表現しない。性格や規模のことなる様々な居住域から出土しており、中世の集落ならほぼ「どこにでもある」

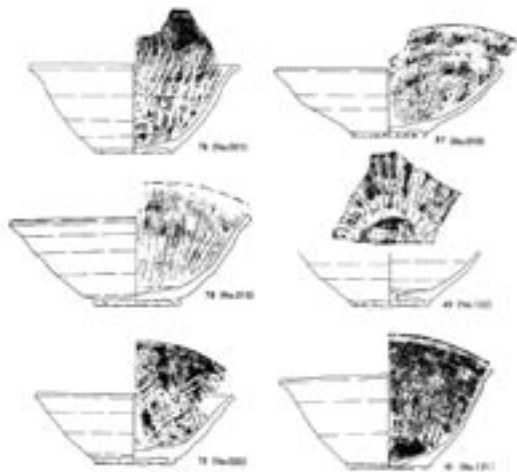


図5 卸目のある山茶碗

(76・77・78 浜井場3号窯、67 畝久田3号窯、40・41 大谷洞16号窯)

分布状況である。規模の大きな屋敷地区画で構成される朝日西遺跡は、碗・皿以外にも比較的多くの貿易陶磁器をもち、一般集落とは明らかな階層差が読み取れる地点である(註18)。山茶碗の出土量は突出して多い。しかし上質な山茶碗が存在する訳でなく、一般集落と全く同じモノである。もし食膳具と仮定するならば、基本となる碗形態が階層に関係なく共通することになる。非日常、あるいは階層差の表象という意味では、希少な貿易陶磁器、および古代において高級品とされた伝統をもつ漆器が最も相応しい。「どこにでもある」山茶碗は、集落の立地や性格、居住者の生業などに左右されず、ほぼ日常の普遍的な行為に関連する。とすれば、やはり一「食」に関連するもの—であった可能性は高いと思われる。

今回提示した山茶碗内面の摩滅痕について、表現の一般化が難しく、「手触り」という極めて主観的な感覚で判別を行っているのが現状である。ただ、調査・整理の現場においては多く共感を得られる経験ではないかと思っている。そうした欠点を課題としつつも以上の分析から、尾張型第5型式段階までの山茶碗の第一義は「食膳具」ではなく一食に関連する—「道具」と考えたい。

## まとめにかえて

山茶碗の使用痕、なかでも摩滅の痕跡から

山茶碗の使用方法を推定した。そして尾張型第6型式を境にした画期が存在することがわかった。生産・流通の様相をみると、この段階までに尾張型山茶碗の生産は増加しピークを迎える。瀬戸地域内では、主要な窯跡分布の移動がみられ、東濃型の第5型式から尾張型の第6型式の生産へと変換する(註19)。以降の生産は縮小に転じ尾張北・西部地域では代わって東濃型山茶碗の割合が増加し、西三河地域では13世紀後半に急激に減少しはじめ、東三河地域では他地域に先がけて流通しなくなる、という現象がみられる。東海地域全体で生産地の競合関係が大きく変化する時期といえる。使用方法にも明らかな変化がみられ、これは山茶碗の役割が変質していった重要な画期であると考えている。

これまでに山茶碗の役割を単純に肩代わりする代替品が復元されなかったのは、おそらく求められていた「機能」そのものが時代とともに変化したためでもあろう。一括して「山茶碗」と呼ばれている器種であるが、尾張型6型式以降と以前は違うモノである、との認識である。

では「調理具」ではなく一食に関連する—道具と曖昧な表現としたのはなぜか。山茶碗の容量と消費量を考えると、少量分の調理を頻繁に行うことを目的としたと推定される。ある程度の量の調理には「こねる」機能も発達した搗目のない片口鉢が同時に存在している。これらには山茶碗以上に顕著な摩滅痕が認められる場合があり、山茶碗より耐久性があり長期間使用されたとみることもできる。すると山茶碗の一部には搗鉢のような機能を同時に小単位に適用するという役割を規定することができる。すなわち、調理する「道具」と「食器」的な要素(形態とサイズ)の両者が未分化な状態、「碗形態の道具」である。これが「山茶碗」を特異なものにしている特徴であろう。そして山茶碗に特有の使用形態はある時期まで主要な流通圏で共有されていたとみることができる。

東海地域以外の遠隔地で山茶碗がどのように搬入されていたのか、信濃の状況を参考にあげておきたい。

鋤柄氏は「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」(註20)で、長野県南部地域(伊那・

木曾・松本・諏訪地区)の東海系窯業生産の影響の変化を示している。この中で、12世紀の日常雑器を代表する碗・皿類のうち山茶碗は、前代の折戸53号窯期に興隆し大量に搬入された灰釉陶器と比較して出土量が極めて少なく、この時期は骨蔵器等の特殊品を除いて搬入されたのは食膳具の一部に限られ、調理具・貯蔵具等は多くが平安時代以降の系譜をひく在地系製品であったとされる。また12世紀末から13世紀にかけても山茶碗の出土量は多くない状況のままであるが、調理具・貯蔵具では常滑系特殊品に代わり瀬戸系の特殊品が増加し、卸皿や捏鉢など小中形、常滑系甕など大形雑器類が出現して生活用具が多様化したことを指摘する。そして、ようやく全域に東濃系山茶碗が普及したのが14世紀以降という。

こうした状況に、実は地域の食習慣に強く根差した「調理具」と「食器」に対する需要(受容)の違いが読み取れるであろう。東海地域外でみ

られる山茶碗は、特殊な事情を除いて、おそらく「道具」の機能を伴わない「碗の形をした器」として持ち込まれたものと考えている。

「調理具」ならばより効率的な製品や技術の成立、調理方法の変化など、「食膳具」ならば材質、嗜好、食事形態の変化など多様な要因が複合的に関連し合うことによって、器種・法量分化への指向が顕在化していく。

山茶碗の機能のうち「碗」と「道具」が分離したとき、ある地域では「食膳具」の「碗」として再び採用され、別の地域では食膳具を他に求めて使用そのものを停止した(註21)。

消費地の側からの視点の必要性はかねてより示唆されてきたが(註22)、中世後半期の山茶碗流通をめぐる地域差について、また等量(等価)の代替品が見出せないという現象が成立した背景に、このような解釈の方向性を提示しておきたい。

## 註

「碗」「皿」の用字について、本稿では引用部分を除き「山茶碗」を使用する。

- 1) 赤塚幹也 1966『陶器全集19 古瀬戸』平凡社。
- 2) 赤塚幹也 1969『瀬戸市史 陶磁史篇一』。
- 3) 赤羽一郎 1987「山茶碗に関する若干の考察」マージナル7。
- 4) 鋤柄俊夫 1986「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」『信濃』38-4。
- 5) 藤澤良祐 1990「山茶碗と中世集落」『尾呂—愛知県瀬戸市定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一』、1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要3』三重埋蔵文化財センター。
- 6) 城ヶ谷和広 1991『土田遺跡II』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第23集。
- 7) 尾野善裕 1996「東海地方の尾張地域を中心とした中世の土器・陶磁器組成について」中近世土器の基礎研究XI。
- 8) 柴垣勇夫 1985「山茶碗と白磁碗について」『愛知県当時資料館研究紀要』4。
- 9) 四柳嘉章 1996「漆器考古学の方法と中世漆器」考古学ジャーナル401、四柳1995「漆器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会、北陸、関東以北においては11世紀以降、量産型の渋下地漆器の流通が確認されている。
- 10) 小池一徳 1995「大毛沖遺跡出土の墨書陶器」『平成6年度 年報』愛知県埋蔵文化財センター。
- 11) 下津北山遺跡より「僧」「佛」、土田遺跡より「進上」「犬法師」墨書が出土している。
- 12) 武部・鈴木「第3部1-5 中世以降の土器・瓦」『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター(第90集)。
- 13) 外面口縁部周辺にも摩滅が確認できるものがある。顕著なものは内面口縁部周辺も同様にみられるため、こちらに含めて考えたい。
- 14) 三辻利一・岡本直久 1995「山茶碗の流通—3・4型式を中心として—」『研究紀要第3輯』瀬戸市埋蔵文化財センター。
- 15) 早野浩二 2000『下津北山遺跡』愛知県埋蔵文化財センター(第88集)。
- 16) 三重埋蔵文化財センター 1994『研究紀要3』、中世土器・陶器編年研究会記録 2004「東海地方山茶碗研究の現在と課題」文部科学省特定領域研究『中世考古学の総合的研究』、岡本直久 2005「山茶碗(山茶碗編年の現状について)」『中世窯業の諸相—生産技術の展開と編年—』資料集文部科学省特定領域研究『中世考古学の総合的研究』。
- 17) 多治見市教育委員会 2001『北小木古窯跡群第2次発掘調査報告書』。

18) (註7) 尾野に同じ。貿易陶磁はどこでも遺跡出土遺物総量(破片数)の約1パーセントとなるが、実は山茶碗を基準とした割合でみると集落間の格差が明瞭にあらわれる。また、碗・皿以外の器種の有無に格差は明らかとなっている。

19) 青木 修 1993「片口鉢の研究—中世知多古窯跡群を中心として—」(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要1。

20) 服部 郁 2000「瀬戸区の中世窯・中世瀬戸窯の分布」瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要XVII、岡本直久 2004「猿投・瀬戸窯」中世土器・陶器編年研究会記録「東海地方山茶碗研究の現在と課題」文部科学省特定領域研究『中世考古学の総合的研究』。

21) 鋤柄俊夫 1991『中世村落と地域性の考古学的研究』大巧社 第一章第四節二「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」。

22) 緻密な胎土を用いて滑らかな器壁をもつ東濃型山茶碗の量産、拡散期は尾張型第6型式段に重なっている。この時期から専ら「食膳具」の碗として改めて生産が継続されていったのではないか。東濃型山茶碗の三重県での流通状況については次のような解釈がある。前川余嘉宏 1994「三重県における山茶碗の出土状況」研究紀要3 三重県埋蔵文化財センター、「伊勢国の北部では、需要さえあれば尾張型第7型式と併行する時期から大量生産が」始まった東濃型山茶碗を搬入することは地理的に充分可能であったと考えられるが、そういった形跡は全く認められない。また、中世土師器の大生産地であった南伊勢においては、需要さえあれば山茶碗に替わる椀形態の土師器を大量に生産することは容易であったと考えられるが、そういうこともなかった。つまり、これらの地域では、山茶碗供給の減少がきっかけであったかもしれないが、急速に椀形態の焼物使用から脱却し、鎌倉時代の中頃には既に、日常生活において椀形態の焼物を必要としなくなったと考えられる。

23) 藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要3』三重県埋蔵文化財センター、「山茶碗の流通時期の相違は、流通上の問題ではなく山茶碗の需要そのものの問題で、山茶碗が東海地方の主要な日常食膳具であったとすると、山茶碗が食膳具としての地位を失う時期には地域差があったことを意味している」。

## 参考文献

尾野善裕 1997「東海・濃飛」『中世食文化の基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告第71集。

尾野善裕 1990「白磁V類碗模倣の「山茶碗」とその周辺」『考古学フォーラム1』。

宮本馨太郎 1973『めし・みそ・はし・わん』岩崎美術社。

鋤柄俊夫 1999「挿鉢が語る食文化—中世考古学の窓から—」柴田ブックス『味噌』柴田書店。

愛知考古学談話会 1987<特集>山茶碗窯『マージナル』no.7。

岐阜県文化財保護センター 2005『柿田遺跡』報告書第92集。

多治見市教育委員会 2001『北小木古窯跡群第2次発掘調査報告書』。

多治見市教育委員会 1993『小名田小滝古窯跡群』。

春日井市教育委員会 1971『白山中世遺跡』発掘調査報告書第5集。

愛知県埋蔵文化財センター 1987『土田遺跡』調査報告書第2集。

愛知県埋蔵文化財センター 1991『土田遺跡II』調査報告書第23集。

愛知県埋蔵文化財センター 1992『朝日西遺跡』調査報告書第28集。

愛知県埋蔵文化財センター 1994『松河戸遺跡』調査報告書第48集。

愛知県埋蔵文化財センター 2001『志賀公園遺跡』調査報告書第90集。

愛知県埋蔵文化財センター 1996『大毛池田遺跡』調査報告書第72集。

愛知県埋蔵文化財センター 2000『下津北山遺跡』調査報告書第88集。



# 郷上遺跡における戦国時代から 近世にかけての集落の変遷

● 酒井俊彦

郷上遺跡は愛知県豊田市に所在する古墳時代から近世前半にかけての遺跡である。本センターの調査で溝に囲まれた屋敷地によって構成される戦国時代から近世前半にかけての集落が確認された。この期間集落は基本部分は維持されながら、時期的な変化が認められ、本稿では調査資料、地籍図及び村絵図等の文献資料から屋敷地の成立、推移、消滅のあり方を検討し、集落の変遷について考察する。

## 1 はじめに

愛知県豊田市に所在する郷上遺跡は、古墳時代から近世までの複合遺跡である。財団法人愛知県埋蔵文化財センターは1997年から1998年にかけて調査を行い、その結果、溝によって区画された屋敷地から構成される、戦国時代から近世にかけての集落が確認された。ここでは、遺跡の戦国時代から近世にかけての屋敷地の変遷を区画溝の資料を中心に追い、この時期の集落の推移とその意義について考える。

## 2 郷上遺跡の様相

郷上遺跡は豊田市鴛鴦町地内にある。矢作川の中流域の右岸にあたり、丘陵地帯から三河の平野部に移行する地点の沖積地上に立地する(図1)。現況では遺跡とその周辺は整備された平坦な水田耕作地となっている。現在の集落は遺跡の東側にある洪積段丘上に立地するが、18世紀まで旧鴛鴦集落は遺跡の所在する地域にあったとされる。

調査では戦国時代から18世紀中葉にかけての溝によって区画された屋敷地が遺跡全体に展開していることが確認された。区画は旧耕作地の区画割りに沿って検出され、15世紀中葉に出現して集落の範囲と区画内の土地利用の変化を伴いつつ近世前半まで継続することが確認されている。

検出された屋敷地の区画溝は重複と若干の移動を伴いながら、数時期にわたって再掘削が繰り返される。全体として新しい時期の溝は深さ、幅が大きくなる傾向にあり、古い時期の溝が現況をとどめることはない。新しい溝はそれ以前に存在した古い溝を掘削することにより、埋土中に以前の時期の遺物を含むため、検出された遺物を溝が掘削された時期の一括遺物として認定することは例外を除いて困難である。このため、細かい時期を単位に溝の変遷をとらえることはできない。

以下では、このような原理的限界を考慮しつつ、区画溝内の出土遺物は存続時期を反映するものと考え、その変遷から屋敷地の動向を推定する。

## 3 地籍図と屋敷地区画

遺跡は現在区画整理された平坦な水田耕作地であるため、現地地形から本来の地形及び土地割りを推定することは出来ない。図2は調査区内で確認された戦国時代から近世にかけての基本的な屋敷地区画を明治17年の地籍図に照合したものである。この地籍図で認められる区画は中世以後の土地区画を基本的に継承している。

道Aは現在の鴛鴦村集落の中心を通る道である。調査区中央やや南側で南西方向(道B)と北東方向(道C)に分岐する。道A・Bは太い道の表記で集落の本道と認識される。道D

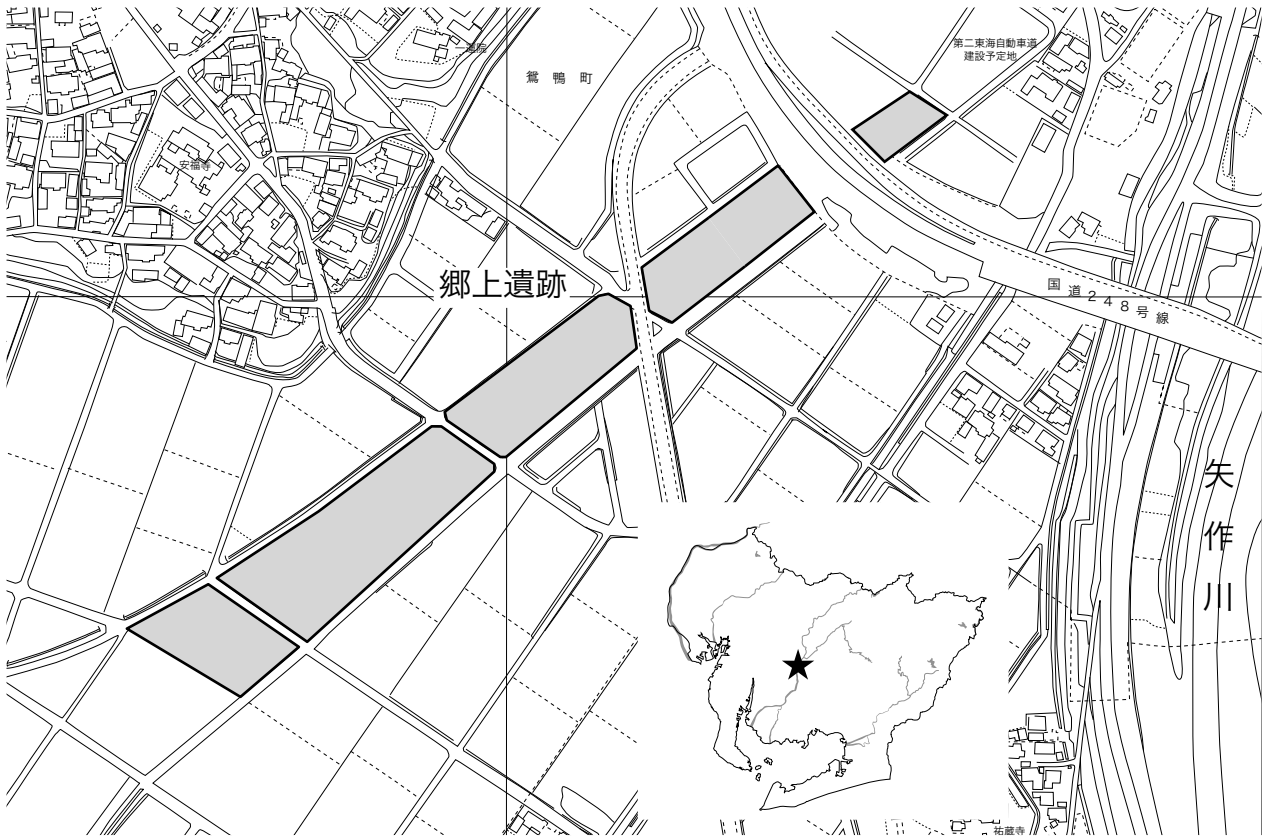


図1 調査区位置図 (1/5000)

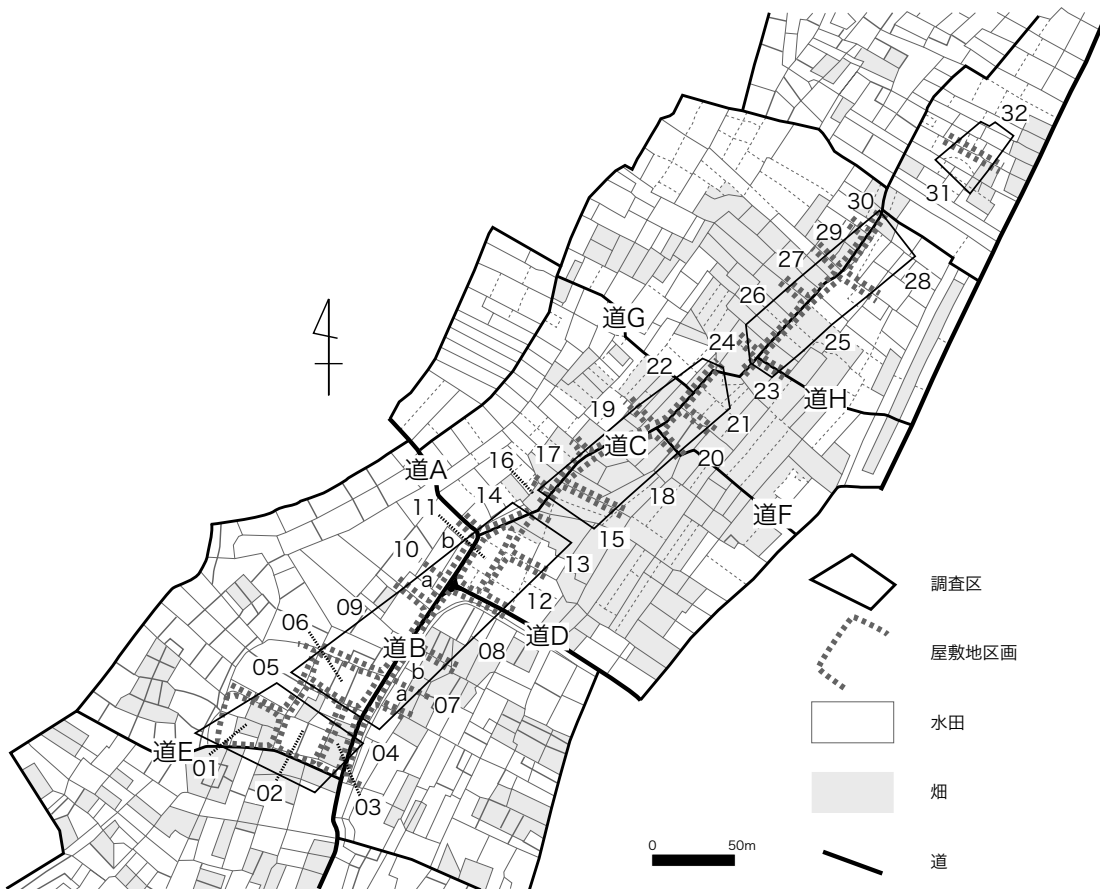


図2 調査区と地籍図

も道Bと同じ表記で本道と考えられる。道Cは細い道の表記であり、これに直行する方向の道F・G・Hも同じ表記である。道Eは道Aと道Cの中間的な太さの表記である。

近世の村絵図と現在残っている字名、および今回の調査の結果から道Bと道Cが集落の戦国時代から近世前半の時期の鴛鴨集落の中心の道であり、この道の両側に屋敷地が展開するものと推定される。道Eは集落の南限に相当し、調査ではその南側に屋敷地を構成する掘立柱建物等の遺構は検出されなかった。また、区画05・31・32などのように明治期の道から離れた部分も屋敷地に含まれる。屋敷地は土地区画の主要ラインに沿うように展開し、数区画分で構成される。

地籍図と検出された区画とは若干の異同が認められる。道Gに相当する区画の溝は検出されなかった。後述するように、江戸中期の村絵図にはこの道は表記されていないことから、それ以降に造成されたものと推定され、屋敷地の区画として明確にならなかったものと考えられる。また、区画25と28の接するラインの両区画間の溝群の間隔は広く、道の存在が想定されるが、地籍図上では表れない。前記の村絵図にも表記されていない。一時的に広い道が存在したものと推定される。地籍図と検出された実際の道との対応関係については概略は一致するが、細かい屈曲などの点で相違する部分が多く認められる。

#### 4 溝の存続時期

本遺跡の区画溝については、出土遺物の時期をそのまま溝の存続時期と認定することは困難であり、より古い時期の遺物を存続時期に含めることは原理的に出来ない。しかし、その時期の遺物が検出されたことにより、当該期の溝が同位置に存在した可能性が高く、遺跡全体に見た場合、これを特定することにより一定の傾向性を把握できるものとする。

遺物の出土傾向として、遺物の編年に沿った細かい時期の把握が可能な時期と数時期にわたる期間を一時期と認定せざるを得ない時期が存在する。本遺跡の溝の変遷は古い時期ほど細か

く設定することが可能であり、新しい時代ほど数時期をまとめた大まかな時期設定せざるを得ない。この現象自体が考察の対象となるが、本稿では触れない。

屋敷地の区画溝の変遷を把握する上での時期設定を示す。屋敷地の変遷を推定する時期の尺度として、出土量が多く、細かい編年が設定されている瀬戸美濃窯産施釉陶器を基準とする。中世末から近世までの瀬戸美濃窯産施釉陶器類の編年は藤澤良祐氏の編年案に基づく(註1)。

- 1期 古瀬戸後Ⅳ期 15世紀中葉～後葉
- 2期 大窯第1段階 15世紀末～16世紀初頭
- 3期 大窯第2・3段階 16世紀前葉～後葉
- 4期 大窯第4段階・連房式登窯第1～4小期  
16世紀末～17世紀
- 5期 連房式登窯第5～8小期 18世紀

各時期の概要は以下の様である。(図3～図6)

**1期<南半>** 集落範囲全体にわたり基本的な部分に溝の掘削が開始される。区画01～03・06・09に比較的深く明瞭な溝が形成される。道D以南の道Bの南東側の区画04・07・08はこの時期の溝・井戸が検出されず、それ以外の遺構もほとんど検出されていないため明確な屋敷地が想定できない。道Bの北西側の区画では一つの区画で1～2基の井戸が確認され、区画09では近接して3基が検出されている。**<北半>** 全体的に基本的な区画割に沿って溝が一斉に出現し、道Cの両側に屋敷地が展開する。区画31・32のように集落の周辺部と考えられる地区でも井戸が検出され、比較的多数の遺構が認められる。また、区画24・26の近接した位置に2基の井戸が確認されている。

**2期<南半>** 前時期の溝の様相を維持する。道Bの南東側では区画11・12に溝が新たに確認されるが、道Dより南側においては以前と同様に屋敷地を区画する溝は出現せず、井戸も確認されない。区画13において井戸が確認され、これ以降、道Dより北側の部分には井戸が形成される。**<北半>** 1期の溝と基本的に変化がなく、重複して溝が確認される。溝が恒常的に維持され、再掘削されている。区画31・32も溝の再度の掘削が認められる。この時期の井戸は少なく、区画18・19の南部のみ

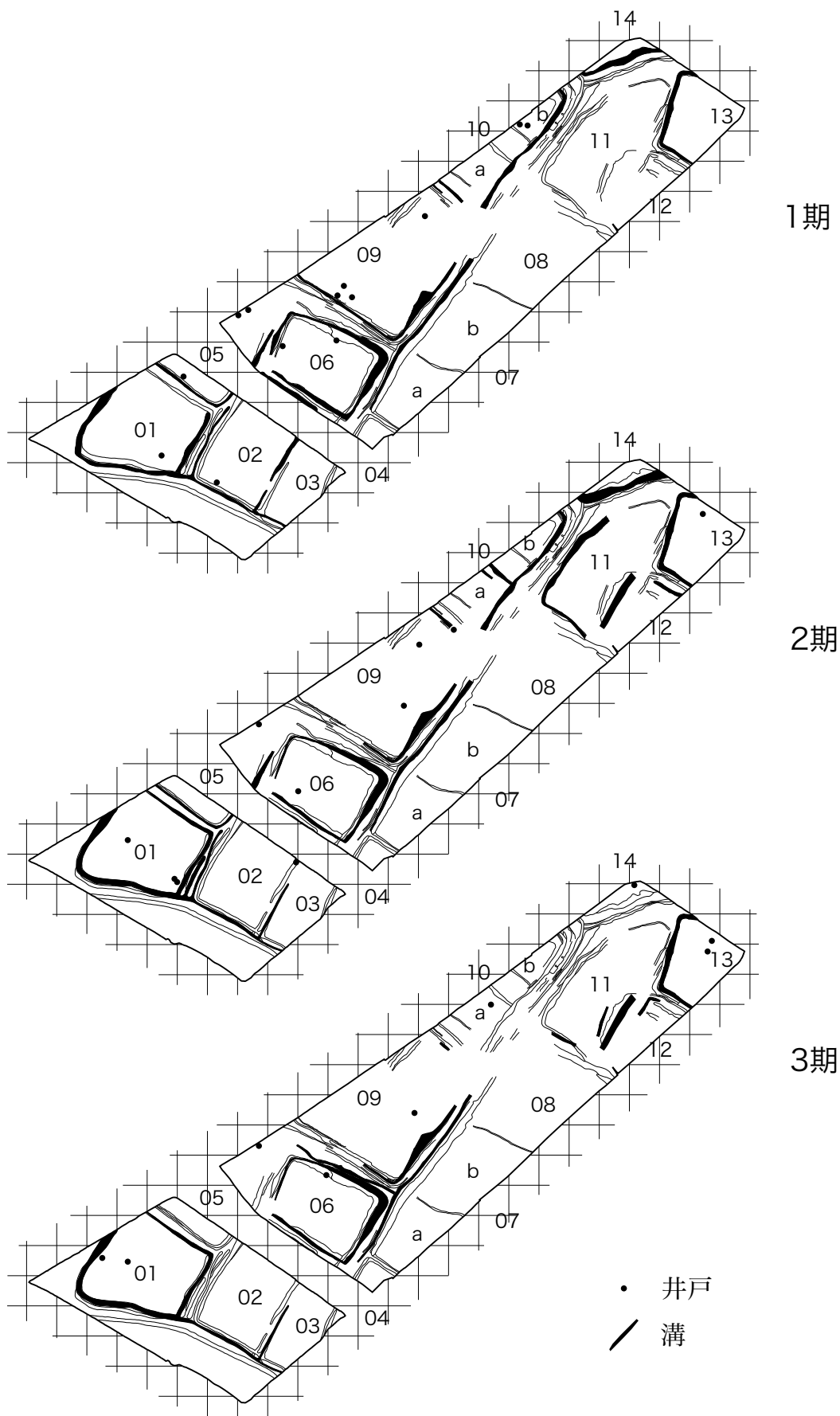


图3 南半 1-3期



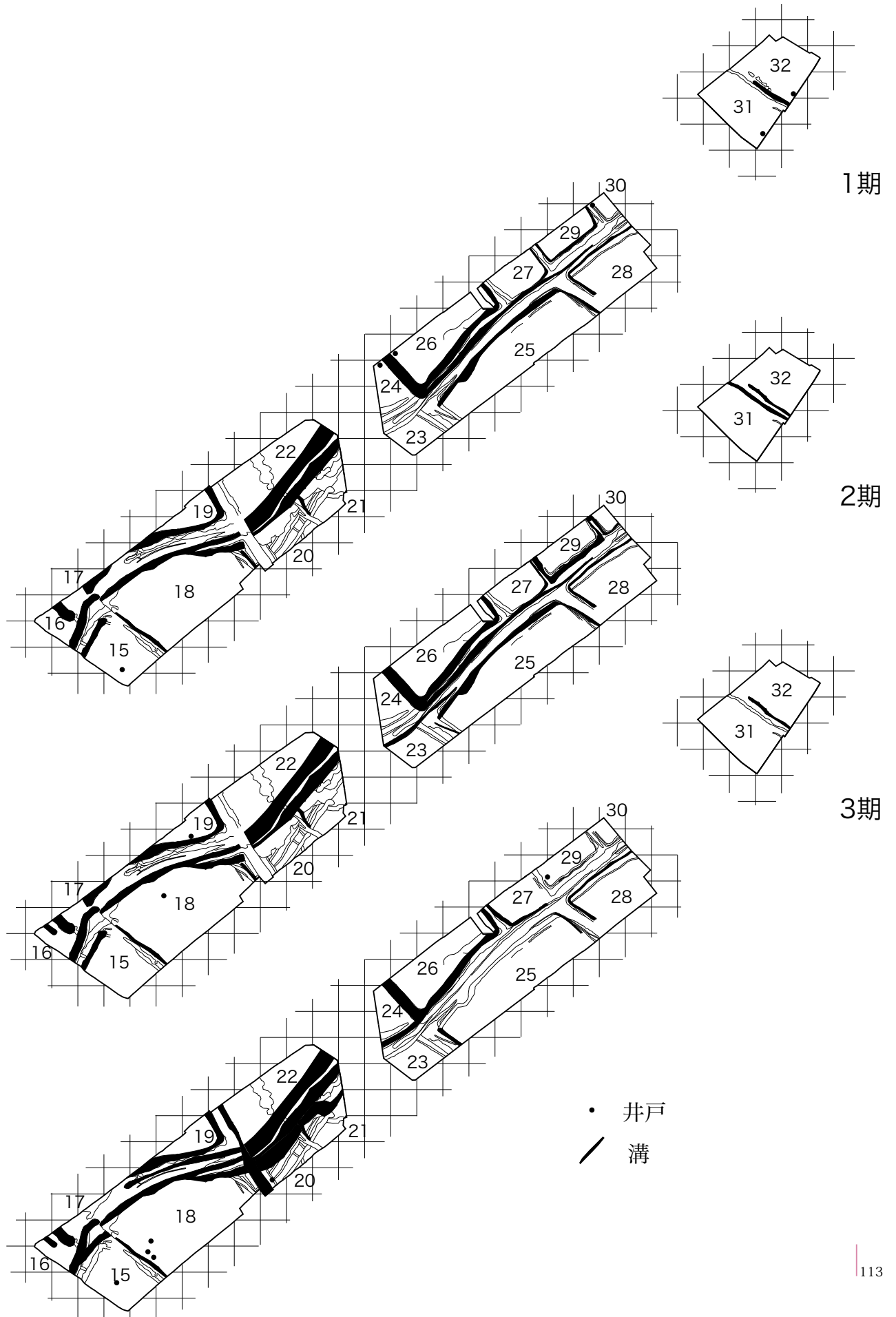


図4 北半 1-3期

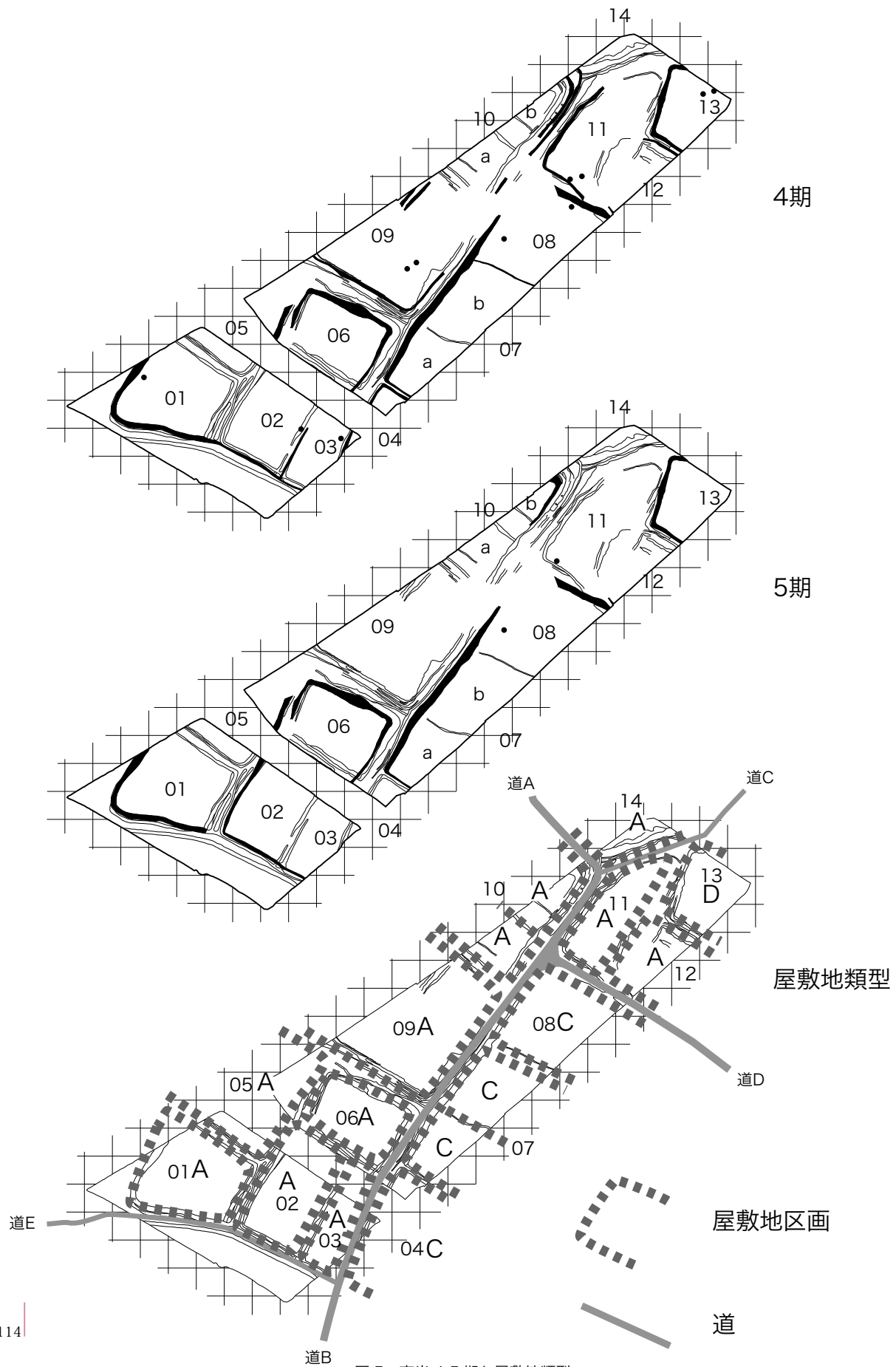


図5 南半 4-5期と屋敷地類型

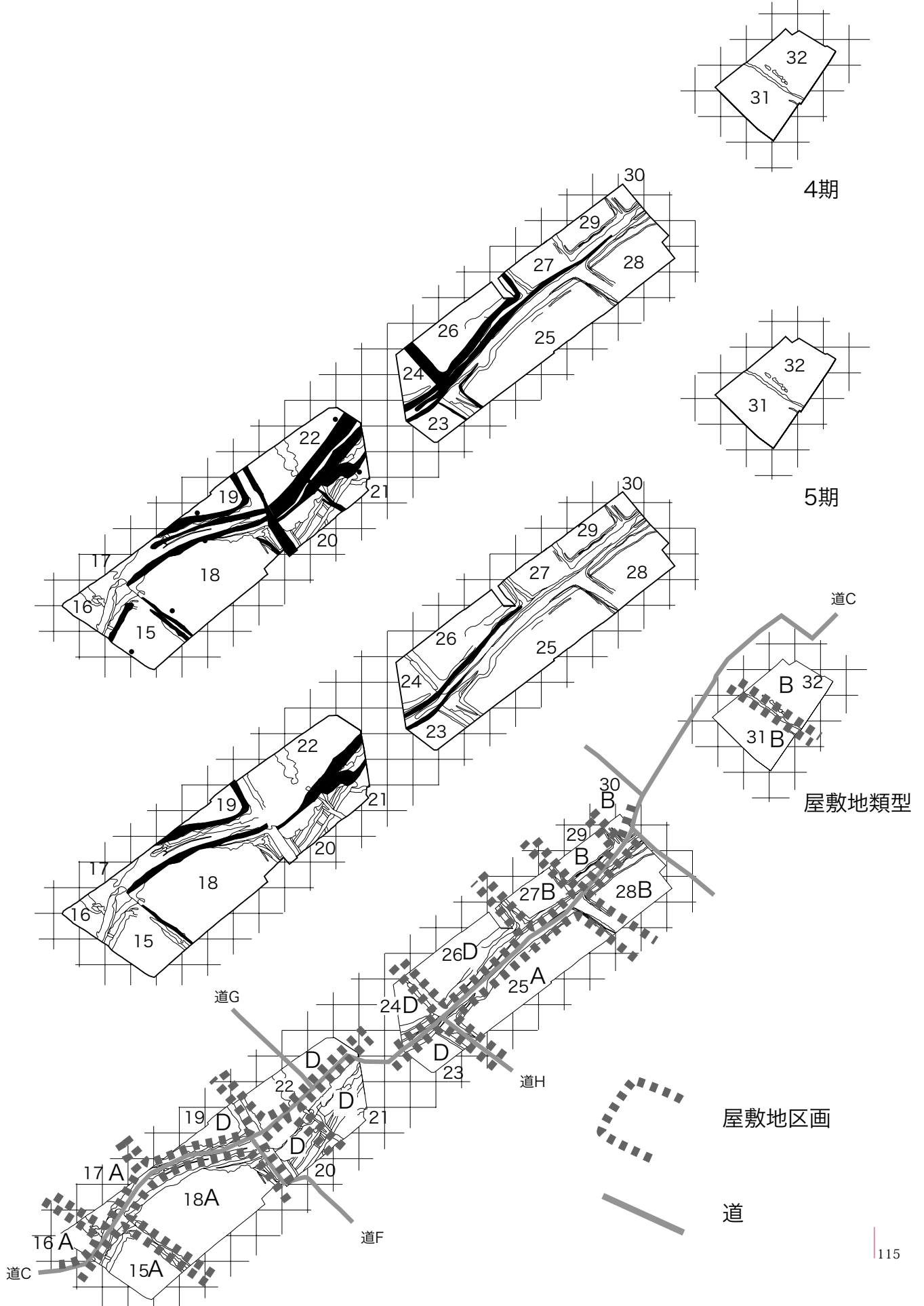


図6 北半4-5期と屋敷地類型

認められる。

**3期<南半>** この時期の遺物を含む溝が確認されない区画が現れる。1・2期で維持されていた道B・Cの北西側の区画10・14および05では、この時期の遺物を出土する溝が認められない。区画01～03などでも溝の再掘削が少なく、重複が無くなり、全体に希薄になる。井戸は全体に減少傾向にある。区画02・03では井戸は確認されない。区画04・07・08は前2時期に引き続いて屋敷地としては利用されない。**<北半>** 集落の中心と考えられる部分では区画溝は維持されるが、周辺部ではこの時期の遺物を出土する溝が確認されなくなる。南部の区画15～22の部分ではこの時期の遺物を出土する溝が重複して検出される。北部の区画25・26以北では全体に溝の密度が低くなり、29・30ではこの時期の遺物を出土する溝が認められない。31・32は区画溝が維持されている。井戸は北部では1基のみであり、南部に4基が集中する。

**4期<南半>** 区画の基本的な部分に溝を維持しているが、部分的に屋敷地間の溝が認められないなど変化が認められる。区画01～03・05・06間の溝は前時期まで基本的に維持されてきたが、この時期の遺物が検出される区画間の溝が減少する。01・02間の溝が消滅し、一時期連続した区画となっている。大きな変化として、道Cの南西側、道D以南の区画04・07・08に屋敷地が出現する。07は2区画になる可能性から最大4区画がこの時期に現れる。また、単一の区画09では、北部に小区画をなすものと考えられる溝が出現する。この区域では3期まで確認されなかった井戸が区画08に2基検出される。**<北半>** 3期の主要部分の区画溝を維持して再度溝が出現する部分が出てくる。区画23・24付近は重複して掘り返しが行われる。前段階で溝が認められなくなった区画27・28より北側では溝は確認されない。31・32は溝が消滅する。

**5期<南半>** 溝出現期から前段階まで維持されてきた区画01・02・03・06・13などの主要な溝が部分的に残り、大部分は消滅する。4期に出現した区画07・08の溝は維持され、屋敷地が継続することが推定される。道Bより

北西側には井戸は確認できず、南東側に2基検出される。**<北半>** 前段階まで溝が集中する部分でも、区画溝が減少する。北部では溝が消滅し、出土遺物の減少などから、屋敷地として利用されなくなったことが推定される。集落中心部の道Cの両側の溝が部分的に残存する。井戸は検出されない。

## 5 屋敷地の変遷の類型

戦国時代から近世前半における屋敷地の区画溝の変遷を概観した。その中で個々の屋敷地の溝の変遷をみると以下のような類型が抽出される。

**A類** 最も類例が多い。1期に溝が出現し、2期を中心に溝の掘り返しが行われる。3期にやや溝の掘り返しが停滞する。4期に新たに溝の掘削が再開され、5期は衰退消滅する。例としては区画06をあげる。区画の東・北・西を巡る溝がSD030(図7)→SD029(図8)と変遷する。SD030遺物は1期古瀬戸後IV期(1・2・6～8・11～13) 2期大窯第1段階(3・10・14) 3期大窯第2・3段階(4・5・9・15)が出土している。SD029は4期大窯第4段階(7)・連房式登窯第1～4小期(1～5・8～11) 5期連房式登窯第5小期(5)が出土している。前者において溝出現期に出土量が多く、その後再掘削で維持されるが、3期にやや停滞が認められる。17世紀初頭にSD030が掘削され、4期全般の遺物が認められる。5期の18世紀前半以後の遺物が出土しないことにより、この時期以降は溝が廃絶したことが推定される。

**B類** 集落の縁辺部と考えられる北部に見られる類型である。集落全体の区画溝の出現期と同時に屋敷地が形成される。A類と同じく、1期・2期と維持されるが、3期に衰退あるいは消滅し、近世4期以降は屋敷地としては利用されない。SD141(図9)は区画29を巡る溝である。1期古瀬戸後IV期(5～9・11～13・15～19) 2期大窯第1段階(1～4・10・14・20)の遺物を出土する。3期と推定される溝が存在し、井戸も検出されているが、遺物は極少量であり、4期以降の溝は検出されない。

**C類** 区画04・07・08に見られる類型である。

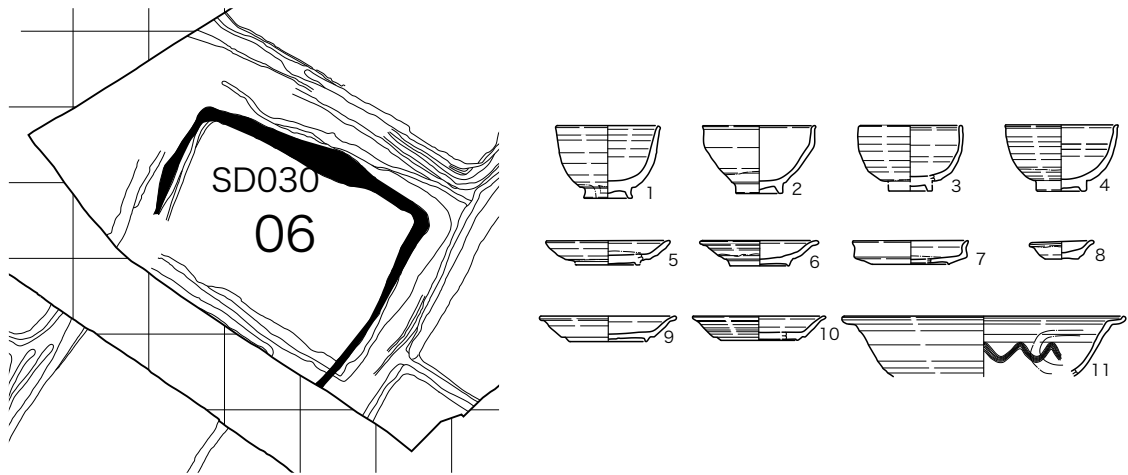


図7 区画06 SD030 出土遺物

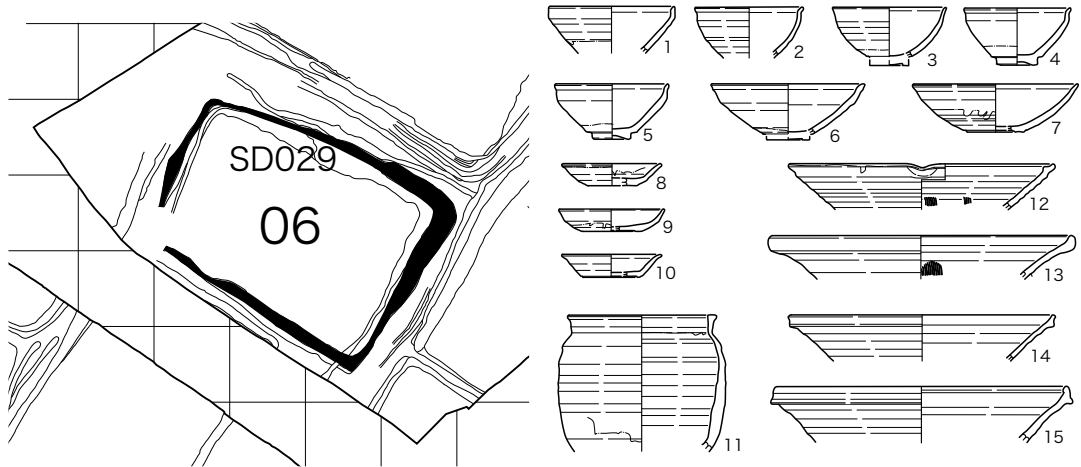


図8 区画06 SD029 出土遺物

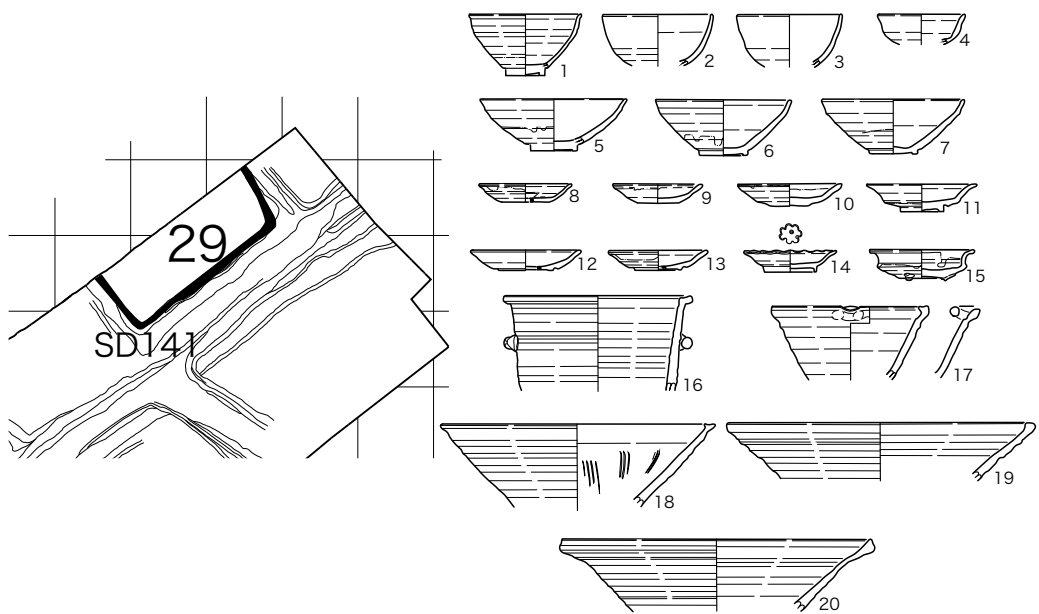


図9 区画29 SD141 出土遺物

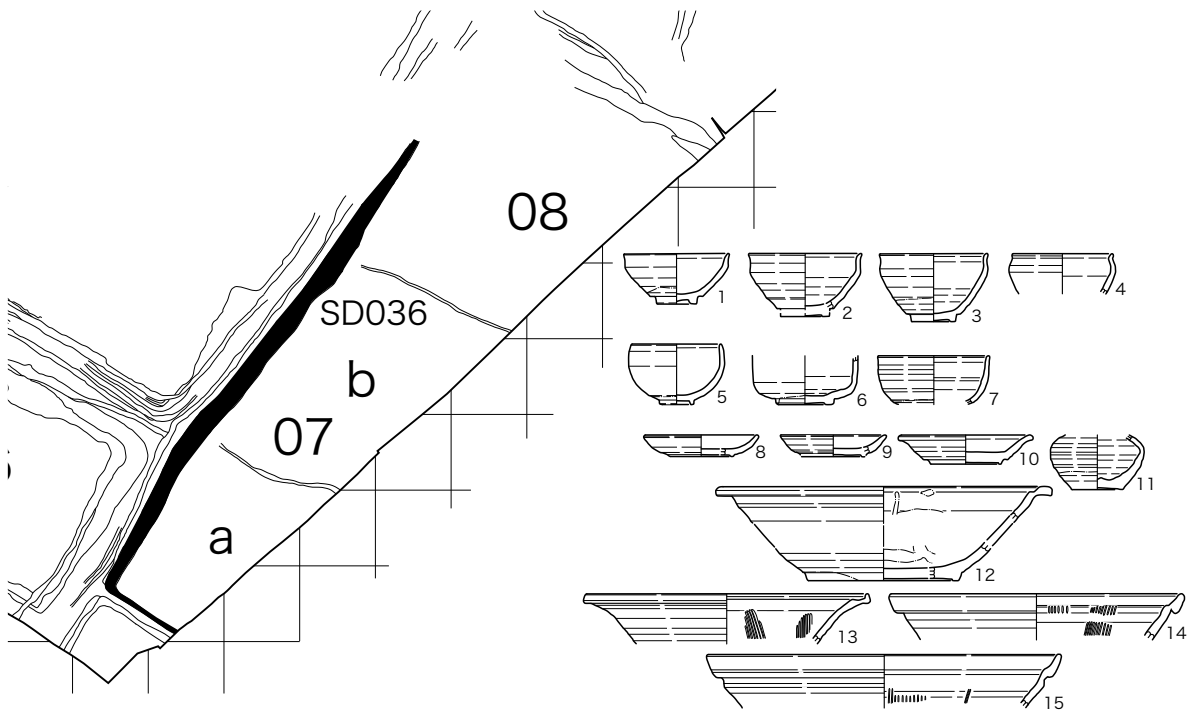


图 10 区画 07・08 SD036 出土遺物

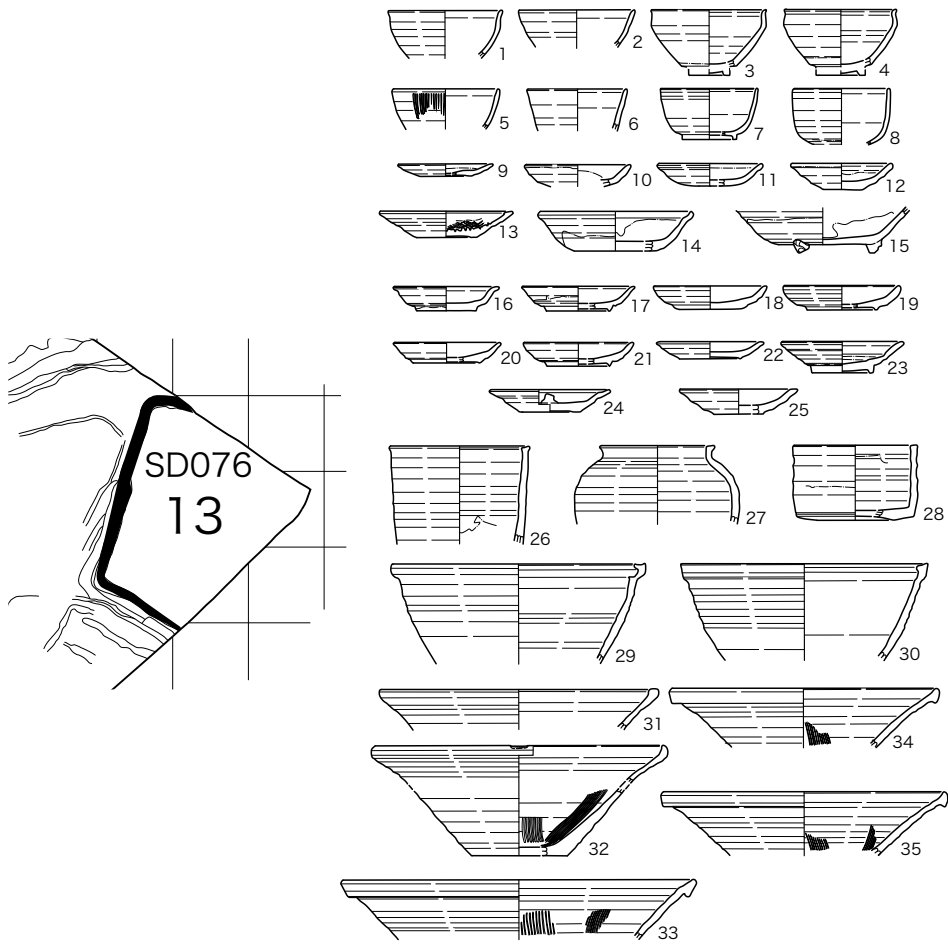


图 11 区画 13 SD076 出土遺物

集落全体の溝の出現期には溝は掘削されず、近世の4期の再編期に新たに溝が掘削され、屋敷地が形成される。4・5期を通じて連続的に遺物を出土するが、18世紀後半以後廃絶する。区画07・08を巡るSD036(図10)をあげる。4期大窯第4段階(1・2・6)、連房式登窯第1～4小期(3・5・8～11・13) 5期連房式登窯第5～8期(4・7・12・14・15)が出土している。18世紀前半および集落が全体が廃絶する後半の遺物も出土している。

**D類** 戦国時代から18世紀前半まで溝が連続して維持され、多少の量的変動があるものの溝内より各時期の遺物が出土する類型である。区画13の北・西・南側は集落発生期から終末期までほぼ同位置に溝を重複して掘削されていると推定される。例としてSD076(第11図)として認識された溝をあげる。1期古瀬戸後Ⅳ期(1・2・9・10・13～15・24～27・29～32) 2期大窯第1段階(5・11・12) 3期大窯第2・3段階(34・35) 4期連房登窯第1～4小期(3・4・6・16～22・28) 5期連房登窯第5～6小期(7・8・23・33)が出土している。集落の発生期からほぼ終末まで維持されている類型である。

屋敷地の溝のA～Dの類型は集落内で特徴的な位置に認められる(図5・図6)。A類は調査区南半の道Bの北西側全体と道Dの南側から北半部の集落中心部にかけて存在する。B類は集落の北辺部に認められる。C類は道Cの南東側、道Dの南側に認められる。D類は集落北半の中心部に集中する。D類の展開する部分は近世遺物が多く、集落の中心部に相当するものと想定される。

## 6 文献資料との対比

鴛鴨集落の地域には近世後半の文献資料が現存し、18世紀後半から明治初期までの村絵図が残されている。ここではもっとも古い宝暦14年(1764年)の村絵図と調査結果との比較検討を行う。

郷上遺跡の所在する矢作川の中流域では、近世18世紀後半において頻発する洪水を原因に集落が沖積低地から洪積台地上に移動する(註2)。

この絵図は18世紀中葉と考えられる時期の旧鴛鴨村と移動した新集落を中心に集落と耕作地および道、川、山林などの配置が記載されている(図12)。この村絵図は本論で設定した集落の変遷の5期の後半の時期に相当する。図には調査区の範囲と想定される屋敷地の区画を記載した。

調査区に関わる部分を概観する。建物と考えられる表記は調査区南半の道Cの南西側、道Dの南側の区画に集中する。道B・道Dを含む道によって囲まれる区域全体が一続きの屋敷地群になっており、屋敷地境界には林地の記載が認められる。C類とした区画04・07・08の部分がこれに相当する。また、区画09の北半部分にも建物の表記がある。この区域は近世に新たな区画溝が形成され、4期に区画の分割が認められる。また、区画14、20、21、23に家屋と屋敷地の表記がある。いずれも隣接する2棟の建物が表現されている。

調査区範囲の大部分は畑地に相当する。水田は部分的である。区画01・02・03・06は道Bと道E沿いの部分が水田であり、区画内部は畑地である。区画09は道B沿いと区画06との境界が水田である。区画09・10にまたがる屋敷地を除いて、区画10は道Bと道A沿いが水田となる。区画14は屋敷地であるが、道Aと道C沿いは水田である。区画11・12・13は中央が畑地であり、区画11・12の道B・D沿いと区画12・13の東側は水田である。区画14の道C沿いから区画15～17および18の南部は水田となる。区画18・19・22の道Cは水田であり、区画22と24の境界から北西方向に水田部分が細長くのびる。区画23・24以北から区画30まではほぼ全面畑地である。調査区北辺の区画31・32も畑地である。

その他、表記されている道A～Fは基本的に明治17年の地籍図の方向、形状にほぼ一致するが、これと相違する部分がある。例として地積図に記載されているが、宝暦村絵図では確認されない道が存在することがあげられる。区画22の中央で道Cと台地上の集落を結ぶ道Gは表記されていない。また、区画23の屋敷地の北側において、道Cとこれに平行する道を結ぶ道Hは表記されていない。これは地籍図



図 12 調査区と宝曆村絵図

の土地の形状などから本来的には存在すべき道であるが、村絵図に記載されていない。

## 7 村絵図と調査成果

調査によって明らかになった屋敷地の類別と宝曆村絵図との比較を行う。

郷上遺跡は全体として沖積微高地上に位置しており、近世後半においては基本的に畑地として利用されている。戦国時代から近世前半において旧鴛鴨村の集落が立地するのもこの範囲であり、集落範囲は周囲より標高が高く、畑地としての利用に向いていることが想定される。村絵図において旧屋敷地の道沿いに認められる水田表記の土地は、屋敷地の区画溝の掘り返しが頻繁に行われたことにより低地となり、水田として表記されているものと推定される。屋敷地

の A 類としたものについてみると、道沿いに区画溝の低地が基本的に残存している。D 類とした部分も基本的に同様であり、区画 17～19 に顕著に認められる。これは建物が移転して屋敷地としての利用が終わってから時間が経っていないためと推定される。これに対して、B 類として類別した 16 世紀段階で屋敷地としての利用が終了していたと考えられる区画 27～32 では低地部分は認められない。集落の周辺部として溝の掘り返しが相対的に短期間であり、頻繁にはなされなかった結果と考えられる。この時期には溝の低地部分は埋められ、畑地となっているものと推測される。C 類とした区画 04・07・08 部分は屋敷地であり、家屋が存在し、調査結果に対応している。A 類とした区画 09 のなかでも、近世に新しい区画溝を形成した部分には屋敷地があり、建物が存在している。



これも調査結果とほぼ一致するものである。

## 8 まとめ

郷上遺跡の戦国時代から近世にかけての屋敷地の変遷について概観する。

戦国時代初期 15 世紀中葉の 1 期において調査区の全範囲で区画溝が掘削され、基本的な土地区画割りに沿って屋敷地が明確になる。集落南部の区画 04・07・08 の部分に屋敷地は展開しない。2 期の 15 世紀末から 16 世紀初頭の時期は前時期の区画に沿って再掘削が行われる。区画溝の掘削の最盛期であり、遺構内からの遺物出土量も増大する。集落は 1 期の時期の全範囲が維持される。3 期の戦国時代後半、16 世紀前葉から後葉の時期に溝の再掘削が停滞する。部分的に溝が確認されず、この時期以降屋敷地が形成されない部分が出現する。集落の基本構成は変化しない。4 期の近世初期 16 世紀末から 17 世紀前半に集落の様相が変化する。区画溝の消滅と新たな部分での形成により屋敷地区画の割り替え、再編が行われる。集落北部は屋敷地の溝が確認されず、屋敷地が消滅する。それまで屋敷地として利用されず、宝暦村絵図において集落が記載されている区域の区画 04・07・08 に区画溝が出現し、新たな屋敷地が成立する。5 期の前半では、集落の中央の道沿いの屋敷地は維持される。後半は道 C の南東側の新集落部分のみ屋敷地が存続し、戦国期に形成された屋敷地の大部分が消滅する。

宝暦 14 年 (1764 年) の村絵図では、現在の鴛鴨集落の所在する台地に集落の建物が多数認められ、旧集落の大部分がここに移動したことが確認できる。旧集落は近世の 4 期に出現した屋敷地の建物を中心に記載されている。戦国時代初期に形成された部分の屋敷地は消滅しており、移動した建物はこの時期に形成された屋敷地のものと考えられる。天明 3 年 (1783 年) の村絵図には旧集落の建物は記載されていない。宝暦～明和年間に矢作川の洪水が連続し、流域の村落が高台に一齐に移動することが文書類に認められるが、これは村絵図の記載および今回の調査結果と一致する。宝暦村絵図は移動する過程の集落の状況を示していると推定される。

宝暦 14 年段階で戦国初期に成立した古い部分の屋敷地がすでに移動を完了しているのに対して、近世に新たに成立した屋敷地が集団的に残っている原因については、集落内部における集団の問題などが考えられる。また、集落移転の時期について文書と調査結果は一致するが、18 世紀代の井戸などの遺構の検出状況から戦国時代初期に成立した部分の屋敷地の移転は 18 世紀前半の早い時期から行われた可能性も考えられる。

以上、調査成果と鴛鴨集落に残された村絵図などとの関連で郷上遺跡の戦国時代から近世の集落の動向を見たが、今後は、矢作川流域の同様な状況下にある諸集落についても検討することが課題となる。

### 註

1) 瀬戸美濃窯産陶器類に関しては藤沢良祐氏の以下の文献の分類・編年によるものである。

藤沢良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要』V 瀬戸市歴史民俗資料館。

藤沢良祐 1987 「本業焼の研究 (1)」『研究紀要』VI 瀬戸市歴史民俗資料館。

藤沢良祐 1988 「本業焼の研究 (2)」『研究紀要』VII 瀬戸市歴史民俗資料館。

藤沢良祐 1989 「本業焼の研究 (3)」『研究紀要』VIII 瀬戸市歴史民俗資料館。

藤沢良祐 1991 「瀬戸古窯址群 II - 古瀬戸後期様式の編年」『研究紀要』X 瀬戸市歴史民俗資料館。

2) 以下の文献を参照した。

豊田市教育委員会 1981 『豊田市史 二 近世』。

豊田市教育委員会 1982 『豊田市史 年表』。

挙母市教育委員会 1956 『挙母市史 資料集』。

豊田市教育委員会 1968 『豊田の歴史年表』。

# 地籍図・史料から見た 中世の甚目寺町

● 加藤博紀

文献・伝承・地籍図などを利用して、円覚寺蔵富田荘絵図で東北部にあたる萱津宿を中心に甚目寺町の景観復元を行う。伝承によって、絵図で描かれる寺院をすべて確認することができた。また、甚目寺町周辺は、荘園・用水系統が錯綜する地域である。それは自然地形に規制されたものであり、史料では近世前期までしかさかのぼることはできない。しかし、中世の荘園（富田荘・海東荘）の史料と考古学的知見により、鎌倉・室町の再開発期に自然地形を利用して原型が形成された可能性が指摘できる。

## 1 はじめに

平成16年度の当センター『研究紀要第5号』において、「尾張国富田荘の考古学的研究」と題して、当センター中・近世部会の共同研究が発表された。当稿では、富田荘の十二ヶ里北部にあたる名古屋市中川区・海部郡大治町を、表採資料を利用した考古学的検討や愛知県公文書館に保管されている明治17年作成の「地籍字分全図」（以下「地籍図」とよぶ）を利用した歴史地理学的検討から検討した。

本稿では、さらに北部の海部郡甚目寺町を中心に検討していく。文献学の視点から甚目寺町内における富田荘と近隣荘園および萱津宿などを、歴史地理学の視点から甚目寺町及び東隣の新川町西部（註1）の地籍図を検討したうえで、過去の甚目寺町を中心とした景観復元を行いたい。

## 2 甚目寺町を中心とした景観復元

中・近世部会の共同研究の成果をふまえ、さらに北部に該当する甚目寺町及び新川町西部を地籍図から用いて検討したい。その地図が、地図1である。

甚目寺町及び新川町西部においては、3つの

微高地群を認めることができる。

### 微高地群 1

新居屋から石作、森にかけて地域。この微高地群の中には河川の跡と考えられる旧流路Aがある。

### 微高地群 2

西今宿から甚目寺、本郷、坂牧にかけての地域。この微高地群の中にも河川のあとと考えられる旧流路Bがある。中・近世部会の共同研究では、微高地群Gにつながる。

### 微高地群 3

上萱津から下萱津、及び須ヶ口西堀江、土器野新田にかけての地域。この微高地は、甚目寺町・新川町では五条川の自然堤防となっている。また、後述の微高地群4とつながる。ちょうど五条川と庄内川との合流点になる。中・近世部会の共同研究では、微高地群Aにつながる。

この微高地群3は、庄内川の自然堤防とつながっていることが新川町東部の地籍図から確認できる。庄内川と五条川の合流点であるからであろう。

### 微高地群 4

下小田井を中心とした地域。この微高地群は、庄内川の自然堤防となっており、微高地群3とつながる。

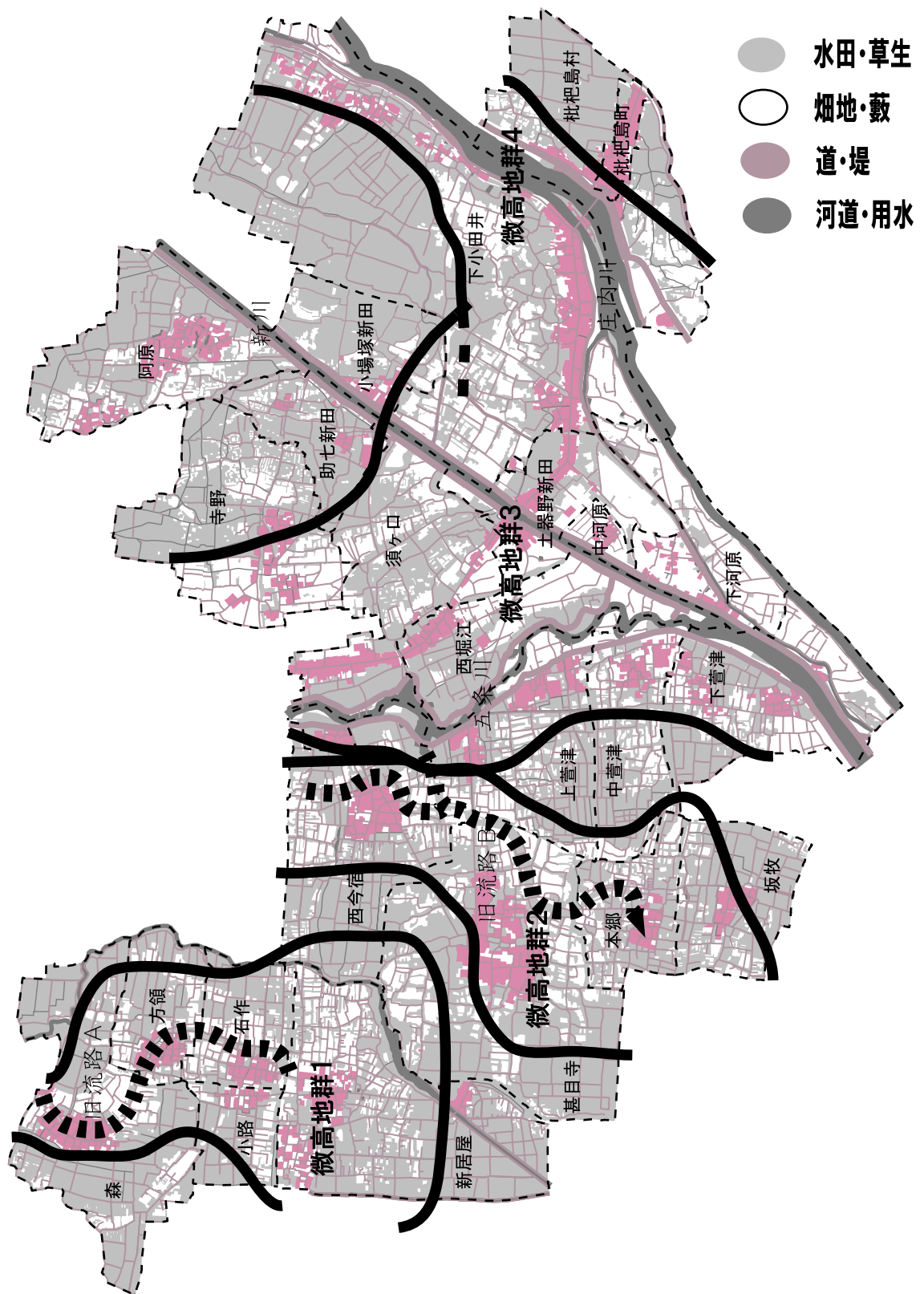


図1 甚目寺町・新川町（現清須市）付近の地籍図（1/1200の原図を接合の上、1/28に縮小）

### 3 文献に残る甚目寺町

#### (1) 中世の甚目寺町内の荘園

円覚寺領富田荘の荘域は、円覚寺蔵の絵図によると、一円所領としては十二ヶ里の北端（現在の地名では、名古屋市中区富田町新家北端の線）が北限であった。しかし、富田荘には街道沿いの馬嶋・北馬嶋・二俣、御厨河（庄内川）対岸の賀茂須賀などの飛地や「石丸」と称された散在所領があり、甚目寺町には萱津宿近辺の集落が所在した。北馬嶋が別相伝であり、これらの飛地・散在所領には円覚寺領ではあるが近衛家の領家職が及ばなかった地域があると推定される（註2）。萱津宿に関しても、尾張守護で萱津を守護所とした北条得宗家との関連が想像され、同様なことが想定される。

また、萱津宿内においても、円覚寺の支配権が及ぶ地区と及ばない地区があることが指摘されている。絵図では、萱津宿は現在の五条川にあたると思われる川に沿って4地区があり、上流から「円聖寺」「千手堂」「光明寺」「大御堂」の4寺を中心とする地区があったことがわかる。そのうち、「光明寺」には円覚寺の支配権が及ばなかったと推測されている（註3）。ちなみに、この「光明寺」は現在までも法灯をつなげており、時宗寺院として往時をしのばせている。

また、中世の甚目寺町には他にも荘園は所在した。海東荘と甚目寺荘である。なお、甚目寺荘はその荘名以外に明らかではない。

海東荘は、海東三箇荘ともいわれ上・中・下の三荘に分かれており、上荘の新屋郷、中荘の森大日前・石作社、七寺西・松野里・中之庄などの地名から、甚目寺町周辺から稲沢市南部にかけて荘域があったと比定されており、平頼盛が尾張守の時（12世紀）に成立した一円型荘園である。平野部の一円型荘園は、河川流域の不安定耕地の回復、荒廃公田の再開発の密接に結びついて形成された（註4）と推察されており、海東荘も同様な形成過程が想像される。また、この海東荘は、蓮華王院領とされ、領家職は、平頼盛・光盛父子を経て、上・中荘は15世紀

中葉まで久我家が相伝した。下荘は明らかではない。地頭職は、承久の乱以降、下野の御家人小山氏に充て行われ、建武政権下の久我家による領家・地頭職兼帯を経て、上荘松葉・新屋両郷地頭は平賀忠時が、中荘は京都の真如寺が地頭職を領有している。上荘大山寺郷は、観応の擾乱の勲功として、土岐氏一族と幕府と関連の深い禅寺が伝領した（註5）。ちなみに、この土岐氏は富田荘においても文和4年（1355）以降押領をしており、尾張守護土岐氏による荘園侵略の様子が2つの荘園からうかがえる。

なお、近隣には庄内川右岸上流に「於田江保」（国衙領）・「於田江荘」、さらに右岸上流には著名な「安食荘」（醍醐寺領）がある。五条川上流に「清須御厨」（伊勢神宮領）がある。

#### (2) 文献が語る中世の甚目寺町

萱津宿 中世における萱津宿は、京都と鎌倉を結ぶ鎌倉街道の主要な宿場であった。これは、『經覺私要鈔』の応仁2年（1468）末条の「自京都至鎌倉宿次第」に、京都より20番目の宿として記載されている。また、『東関紀行』の仁治3年（1242）8月半ばに、東関紀行の著者が京より鎌倉に下る途中、を経て熱田に泊まる記載がある。著者は、萱津東宿で「そこらの人萱津あつまりて、里もひゞく計にのゝしりあへり、今日は市の日になんありたるとぞいふなる」とにぎわう市の様子を伝えていることは有名である。ここで萱津の「東」宿とあることが注目される。

一方で、『海東記』の貞応2年（1223）に、海道記の作者が京より鎌倉へ下る途中に津島渡を経て三河国矢作宿へ行く途中に、4月7日に萱津宿に泊まっている。ちなみに、津島渡から萱津宿へ行く途中の農作業にいそむ光景は、往時の尾張の様子を語るものとして名高い。また、興福寺東院主光暁の日記である『東院毎日雑々記』の応永33年（1426）の条に、9月21日に津嶋天王社に奉物をした後、萱津に至った。ちなみに、途中で甚目寺を参拝したことが記されている。翌22日に熱田社の参詣後に萱津に戻って中島郡一宮へ泊まったことが記載されている。

以上から、中世の主要街道の宿として、地域



図2 萱津宿の円聖寺・千手堂・光明寺・大御堂の配置図

の定期市の場として、萱津宿が栄えている様子がわかる。

また、『北野社一切経奥書』に応永19年(1412)銘のある「中阿含経巻第五四」の奥書に「尾陽州新長谷寺 定光院」、同年銘の「大法炬陀羅尼経巻第一八」の奥書に「尾張国愛智郡萱津堀江定光院」とあり、現在の西堀江の長谷院に当たると思われる。

萱津の寺院 『甚目寺町史』に古老の伝承として、萱津の七ツ寺というものがあつたという。その七ツ寺とは、円聖寺・千手堂・光明寺・大御堂・妙勝寺・宝泉寺・正覚院(長福寺)のことであるという。あくまでも伝承ではあるが、富田荘絵図に記載される萱津宿の円聖寺・千手堂・光明寺・大御堂がすべてあることは興味深い。千手堂は、中萱津の小字大坊がその跡であろうと伝えられており、大正の初年に大坊の土取場から古銭や灰などの出土があつたとのことである。また、大御堂の跡は今の実成寺であると伝えられている。これは、妙勝寺開祖日妙が、元応元年(1319)に寺を弟子日長に譲って、大御堂跡に隠居したが、その寺が今の実成寺となっているからであるとしている(註6)。これらを図としたものが図2である。

円覚寺蔵富田荘絵図をみると、南から大御堂・光明寺・千手堂と連なるように描かれる様子と古老の伝承は一致する。また、大御堂から東へ二本の線—おそらく道だと思われる—が二つの河の合流点へ向かって延びているように描かれている。これを地籍図と比較すると、実成寺の位置と新川掘削以前の五条川・庄内川の合流点の関係と符合するように思われる。また、現在においても地籍図上でも、実成寺の前の道から五条川へ出ることができる。

中世の絵図と近代の地籍図を軽々に比較することは避けなければいけないが、古老の伝承をもとに復元すると、長い年月を超えた一致点が浮かび上がってくるようにおわれる。

### (3) 甚目寺町・新川町西部の用水

上村喜久子氏は、富田荘絵図研究において、近世前期の用水利用のあり方を中世の村落の結合関係からの反映として考察している(註7)。ならば、甚目寺町においても同様な考察に行ってみたい。

寛文12～13年(1672～73)成立の『寛文村々覚書』に記載された甚目寺町・新川町西部(西堀江村・須ヶ口村)内の旧村の用水系統を示したものが図3である。なお、甚目寺町内



図3 甚目寺町付近の用水系統

の用水は、五条川から上萱津から水を引く「萱津井懸り」と木曾川本流の水を葉栗郡宮田杵から引く「宮田井懸り」があった。

甚目寺町においては、用水利用の面から、石作・新居屋などの北西部と甚目寺・萱津などの南東部に分かれていたことがわかる。なお、これは、弘安5年(1282)でも石作郷が中島郡の一部であった記録(註8)があることから、古くからの郡の違いが反映しているとも考えられる。また、「萱津井懸り」の系統は、五条川右岸のみならず左岸にも広がっている。『寛文村々覚書』によると、西堀江村・須ヶ口村も「萱津井懸り」の用水系統に含まれている。また、土器野新田村の田作も「須加口村余り水懸ル」とあることから、同じ「萱津井懸り」といえる。現在須ヶ口と土器野新田には新川が流れているが、新川は天明4年(1784)に着手され天明7年(1787)に完成したものであり、寛文年間には新川は存在しなかった。だから、これは新川開削以前の様子を物語っている。ちなみに、西堀江・須ヶ口に東隣の下河原村は「稲葉地村余り水懸ル」とあり、水田は庄内川左岸の区域にあるので左岸から用水を供給されていた。

この「萱津定井」は、明暦元年(1655)に杵が設置されたとされる。しかし改修であった(註9)らしく、既設の水路を利用したことがうかがえる。用水系統から見ると、近世以前から甚目寺・萱津などの南東部と西堀江・須ヶ口などの新川町西部は密接な関係があったことが指摘できよう。

#### (4) 小結

文献から見た中世の甚目寺町は、おおまかに石作・新居屋などの北西部と甚目寺・萱津などの南東部の二つが古くから分かれていた様子を知られる。また一方で、文献や寺院、用水系統から萱津は五条川の対岸にある西堀江・須ヶ口との関連が指摘できる。

これらを地籍図の結果と比較すると、近世初期の用水系統と比較するならば、微高地群1は「宮田井懸り」の村々、微高地群3は「萱津井懸り」の村々と比定できよう。また、中世以前の荘園と比較するならば、微高地群1は一円型荘園である海東荘とのつながりが指摘で

きる。

さらに、富田荘は、前述の通り上村氏によって中世前期に古代の用水系統を利用して整備されたことが明らかにされているが、考古学的知見を援用すれば、五条川水系中・下流域における再開発は、古代末(11世紀末葉～12世紀)期と中世、鎌倉末期(13世紀末葉～14世紀)の2回に大きな動向が見出すことができる(註10)。また、海東荘が立地した森南遺跡において、13世紀中頃に出現した中世村落は古代的・伝統的な条理の規制に拘束されず再開発が行われている(註11)。また、阿弥陀時遺跡においても14世紀から15世紀初頭にかけての方形区画に基づく、「屋敷地」、「道」、墓地的な空間のいくつかがあ明らかにされている(註12)。これらの考古学的知見に対して、12世紀に立荘された海東荘は、中世、鎌倉末期における海東荘での開発の動向は明らかではない。しかし、中世・鎌倉末期に共同体としての村が形成されるとともに、再開発が実施されていったと思われる。そして、この時期で「宮田井懸り」の原型となる用水も掘削されたものと思われる。

## 4 まとめ

甚目寺町は、自然地形・旧郡割などにより、北西部と南東部の二つの歴史を有する。北西部は、海東荘によって中島郡とつながりを持ち、これが近世に入って「宮田定井」の用水系統に含まれることになる。南東部は、中世の萱津が五条川両岸に展開することから、近世においても「萱津定井」の用水系統でつながりを有し続けたと思われる。さらに、中世の荘園までさかのぼると、「宮田定井」の用水系統は海東荘との関連が指摘でき、甚目寺町北西部の自然地形は中世から近代まで大きくは変わらなかったことが想定されよう。想像をたくましくすれば、他の近隣荘園との関係も指摘できるかもしれない。

さて、今回の考察は、富田荘絵図北端に描かれた萱津をテーマと取り上げた。富田荘における萱津は散在所領であったことと甚目寺町周辺地域が中世の荘園・近世の用水系統における錯綜する狭間ともいべき地点であったこと

から、散漫な記述になってしまった。また、中世における甚目寺は、『一遍上人絵伝』に描かれているが、文献などで確認するところが少なかったため、本稿において甚目寺町の中心に位

置し長い伝統を有する古代以来の寺院・甚目寺は、考察の中心にできなかった。機会があれば、甚目寺を含めた考察に挑みたい。

#### 註

- 1) 旧新川町は、旧清洲町・旧西枇杷島町とともに平成 17 年 7 月 7 日に新清須市として合併した。本稿では、旧清洲町・旧西枇杷島町を扱わないことと煩雑なることを防ぐために、「旧」を添付せず表記する。
- 2) 上村喜久子 1990 「富田荘」(『講座日本荘園史 5』366 頁、吉川弘文館)。
- 3) 村岡幹生 「荘園・公領制下の人々の生活」『新修名古屋市史第二巻』205 頁。
- 4) 上村喜久子 「尾張国」『講座日本荘園史 5』、341 頁。
- 5) 上村喜久子 「尾張国」『講座日本荘園史 5』、353 頁。
- 6) 甚目寺町史編纂委員会 1975 『甚目寺町史』523 頁。
- 7) 上村喜久子 1986 「絵図にみる富田荘の開発と形成」『名古屋短期大学研究紀要』第 24 号。
- 8) 「山城浄金剛院領田島坪付注進状」の記載から (『山城醍醐寺文書』)。
- 9) 前掲書『甚目寺町史』148 頁。
- 10) 『愛知県埋蔵文化財センター 1987 『土田遺跡』(調査報告書第 2 集) 109 頁。
- 11) 甚目寺町教育委員会 1990 『森南遺跡発掘調査報告書』147 頁。
- 12) 愛知県埋蔵文化財センター 1987 『阿弥陀寺遺跡』(調査報告書第 11 集) 310 頁。

# 東海の結物製作の曙

—豊田市古城遺跡出土の事例から—

● 鈴木正貴

15世紀前葉に位置づけられる豊田市古城遺跡 SE01 の井戸側に利用されていた結物筒の資料紹介をして、15世紀後半以降の井戸側に利用されていた結物筒と比較・検討した。この結果、古城遺跡 SE01 の結物筒は15世紀後半以降のものと同製作技法が異なることが明らかとなり、結物が本格的に普及する以前の結物のあり方を知る貴重な資料であることを示した。

## 1 はじめに

本稿では、豊田市古城遺跡で発見された井戸 SE01 の井戸側構造物について資料紹介し、そこから木製結物製品の普及に関して若干の検討を加えるものである。

これまでの考古学的な木製結物製品に関しては、三浦純夫（三浦 1988）、鈴木康之（鈴木 1995）、石村真一（石村 1997）などの研究があり、これらの成果をもとに筆者は考古学的な資料から結物の歴史を概観したことがある（鈴木 2000a）。この考察では、日本における結物の様相を、結物Ⅰ期（結物導入期：11世紀後半～13世紀）、結物Ⅱ期（結物普及期：14世紀）、結物Ⅲ期（結物確立期：15世紀～16世紀）、結物Ⅳ期（結物展開期：17世紀以降）の4期に区分して、結物の普及のあり方を考究した。そして、結物Ⅱ期では、結物が井戸側に使用される事例は少なく、その少ない事例はヤリガンナや横挽き鋸など従来の道具を用いて製作されたとした。一方、結物Ⅲ期では、井戸側における結物の使用例が急増し、側板側面の加工に台鉋などの工具が導入されるなど、後に展開する結物生産技術が確立した段階と位置づけた。その後、鈴木康之は草戸千軒町遺跡出土事例を中心に13～14世紀の結桶受容の背景や技術者の問題などを論じた（鈴木康 2002）。

上記の研究の結果、結物Ⅱ期から結物Ⅲ期に至る過程で結物の製作技法と利用状況が大きく

変貌することが明らかになりつつある。実際には、結物Ⅲ期の始まりは15世紀半ば頃のことと筆者は考えているが、結物Ⅱ期の様相に不明な点が多いため、その年代など画期の様相を具体的に明らかにすることが困難な状態である。それは14世紀から15世紀中頃までの遺跡の様相を把握しにくく、結果としてその時期の木製遺物の資料が少ないことが最大の原因となっているためである。

このような状況は、東海地方においても同様に当てはまる。東海地方で15世紀中頃以前の結物の存否と、存在した場合のその形状と製作技法が問題として残っており、新資料の発見が待たれているところである。

## 2 古城遺跡事例の紹介

### (1) 遺跡の紹介

古城遺跡は、愛知県豊田市御立町2丁目60番地に所在する。豊田市街地東部の矢作川左岸に形成された沖積低地に立地し（図1）、低地から続く周辺の段丘上には縄文時代から近世に至るまでの遺跡が点在する。発掘調査の結果、遺跡は黄褐色粘土からなる南北に伸びる中州状の台地に存在することが明らかとなった。

古城遺跡は平成12年度に豊田市教育委員会によって5300㎡の発掘調査が行われた。その結果、古代から近世までの遺構や遺物が確認され、建物跡と土坑群が展開する集落遺跡である



ことが判明した。特に13世紀から15世紀の間の遺物が多数出土しており、この段階には掘立柱建物跡と井戸に加え、方形堅穴状遺構などの遺構が展開していた。倉庫や作業場などが想定される方形堅穴状遺構があることから職能民の存在が予測され、中世後期になると古城遺跡は川港に伴って新たな都市的な場として位置づけられるようになったと報告書で論じられている。

## (2) 結物出土遺構の紹介

ここで取り上げる古城遺跡 SE01 は調査区北西部で検出された井戸である(図2)。井戸の掘方は平面形が直径約2.2mの円形で、深さは約3.6mを測る。遺構検出面から約70cm下で一辺約91cmの方形縦板組の井戸側が1段残存し、その下位には直径約90cmの円形結物筒の井戸側が1段存在する。上位は方形縦板側横棧支柱式、下位は円形結物側式が組み合わさった井戸側構造と表現されよう(鈴木正2002)。

上位の方形縦板組では、横棧は4段残存し各段とも目違い柄組が施されている。支柱は三角柱材が用いられていた。縦板は残存する長さが141cm～185cm、幅が10cm～27cm、厚さが1.5cm～5.0cmに分布し、各辺とも4～5枚が使用されていた。縦板の内側には幅は5cm～11cmの添板も入れられていた。最下段の横棧底面から下位の井戸側である結物筒が設置され、結果として縦板と結物筒は約15cm重なっている状態である。結物筒の外側四方には扁平な川原石が数個重ねて配置され側板を支えていたという。底面には小砂利が敷き詰められており、これらは湧き水を浄化させる機能を果たしていた可能性が考えられよう。なお、結物筒を水溜部とする見方もできるが、ここでは上位と下位の構造物の規模があまり相違しないことなどから、結物筒も井戸側部の一部と理解しておきたい。

井戸構築材の樹種は、上位井戸側の縦板と添板および支柱はヒノキとネズコが用いられ、横

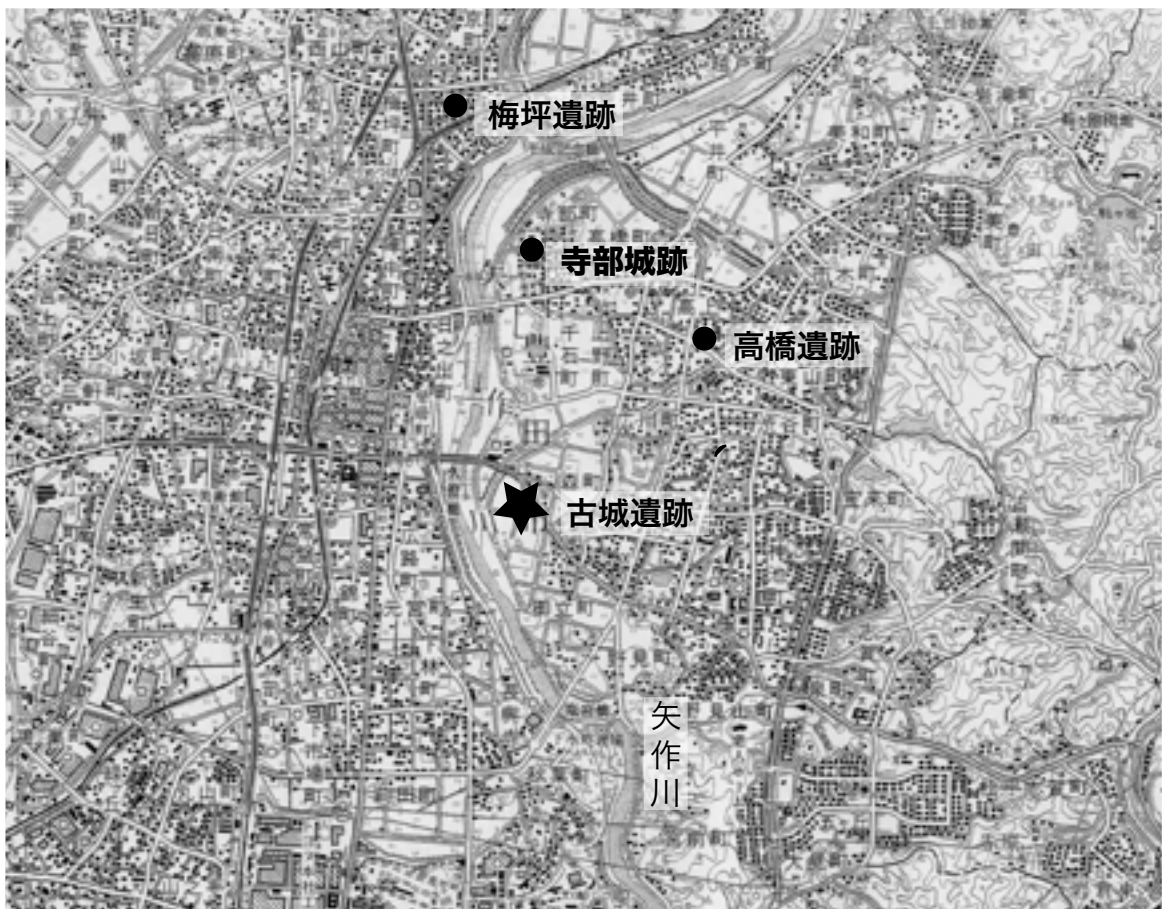


図1 遺跡位置図(国土地理院作成1:50000地図「豊田」を一部改変した)

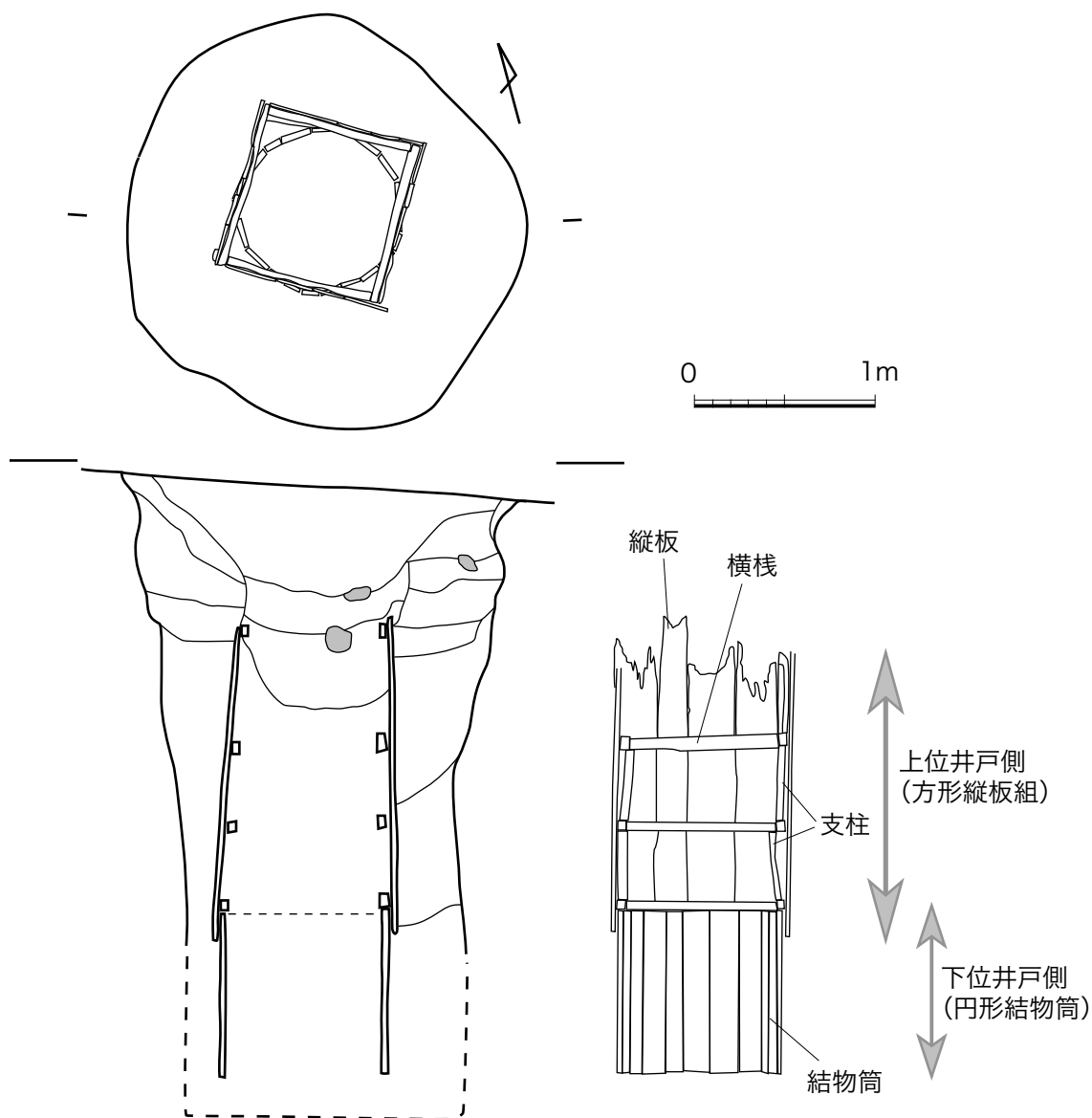


図2 古城遺跡 SE01 (山本編 2004 所収図を合成改変した)

棧はヒノキが主体を占め他にコウヤマキとマキ属が利用されていた。一方、下位井戸側の結物筒側板はヒノキとネズゴが用いられていた(植田 2004)。

この井戸 SE01 からは土師器皿 1265 点、山茶碗 481 点、古瀬戸製品 38 点などが出土した。尾張型山茶碗類は藤澤編年の第 9 型式まで、東濃型山茶碗類は脇ノ鳥窯式期まで、古瀬戸製品は中期後半から後期まで存在するという。大半の遺物が井戸を最終的に埋める際に一緒に埋められたという所見があり、報告書では 14 世紀後半～ 15 世紀後半に位置づけられていた。ま

た、鈴木とよ江は古城遺跡出土土師器皿を西三河の土師器皿編年の中に位置づける検討を行った結果、井戸 SE01 は 15 世紀前葉に属するのではないかと想定した(鈴木 2005)。

### (3) 結物の紹介

SE01 の井戸側下位に使用された結物筒は、検出段階でおおよそ直径約 90cm の円筒形である(図 3)。側板の長さは 88.5cm～90.0cm、幅は 10.0cm～17.5cm、厚さは 2.5cm～3.0cm であり、21 枚で構成されていたという。籠は 3 段残存していた。

今回、豊田市教育委員会のご好意によりこの結物筒を実見する機会を得た。SE01 出土木製井戸側の材は遺存状況が極めて良好であり、自然乾燥の状態 で保管されていた。井戸側下位の結物筒は 21 枚の側板で構成されているが、改めて各側板の法量を乾燥状態で計測すると、最大長 88.5cm ~ 90.0cm、最大幅 (≒下端幅) は 8.7cm ~ 17.6cm、最小幅 (≒上端幅) は 7.3cm ~ 17.0cm、最大厚は 2.4cm ~ 3.5cm を測る。一般に井戸側に使用される結物筒の側板は下端幅が上端幅より広いが、SE01 の場合は上端幅が下端幅より広いものが 5 枚存在しており、均一な仕上がりにはなっていないことが判明した。下端は長辺に対してわずかに斜めに切断されたものが多い。また、16 世紀以降の井戸側の最下段に用いられた結物筒は、下端の内側を浅く削ることにより縦断面形で尖らせた形状となるのが通例であるが、SE01 の場合は最下段の井戸側にも関わらず先端を尖らせてい

ない。

側板の製材技法は楔を用いて打ち割る割裂法が用いられたとみられ、表面の一部がヤリガンナなどの工具で削り整形されている。ヤリガンナなどによる切削痕が認められない部分では割裂法による破割りした際に生じる「ささくれ」が残存する状態のものが多い。材はところどころ節を持つものがあり、このためうまく製材できなかった部分が削られる場合もある。側板の外表面は、チョウナなどの工具による切削痕が部分的に残存する。破割りした材の状態にもよるが、概ね材の側面に近い部分を削り取る場合が多く、結果として外表面は曲面を形成している (図 4-1)。一方、内面も外表面と同様に、割裂法による製材の後にチョウナなどの工具による整形痕が部分的に残存する。ただし、材中央を削って結果として曲面を形成することはなく、側板内面は比較的平坦な面となっている (図 4-2)。この結果、側板の横断面は逆台形の上辺が弧状

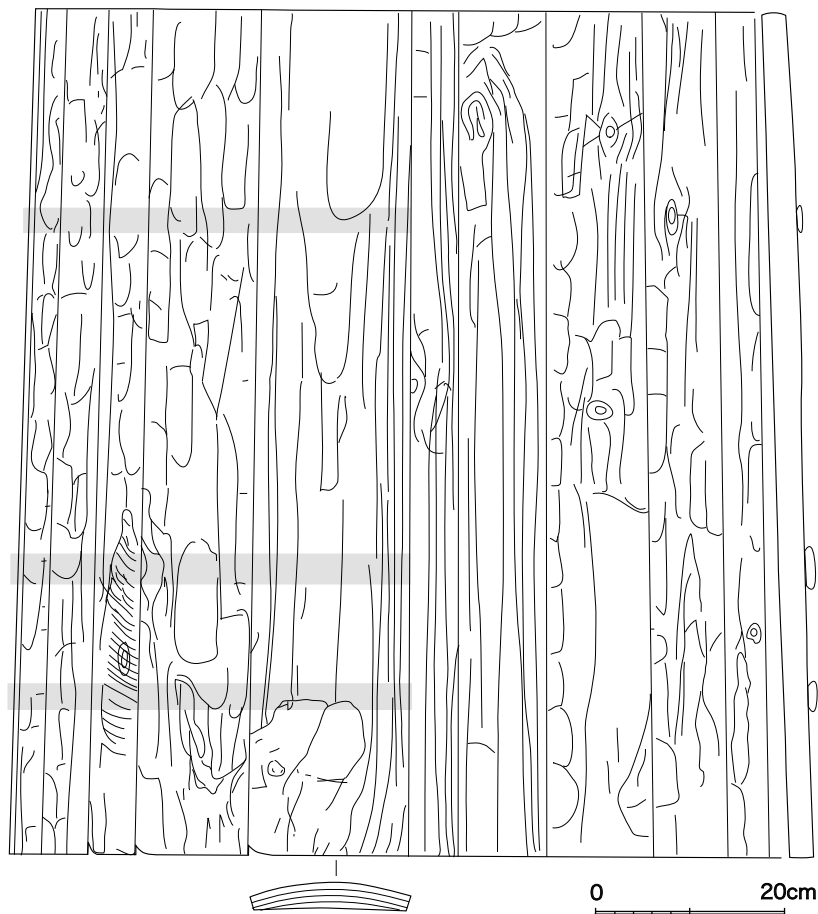


図 3 SE01 出土結物筒



図 4-1  
古城遺跡 SE01  
下位井戸側  
側板 No.2  
外面



図 4-2  
古城遺跡 SE01  
下位井戸側  
側板 No.2  
内面



図 4-3  
古城遺跡 SE01  
下位井戸側  
側板 No.2  
上端面



図 4-4  
朝日西遺跡  
58区 SE04  
上から2段目  
井戸側側板  
上面

に盛り上がった形状となっている（図4-3）。

側板側面は比較的平滑に仕上げられており、その調整技法を特定することは難しいがわずかな凹凸が認められることからおそらくヤリガンナ等の工具で削り整形されていると思われる。側面は、側板を結び合わせる際にスムーズに円筒形に組み合わさるように内側に向かって傾斜面が付けられていた。単純に板材を集め結び合わせたものではなく、結物の側板として意識して作られていると評価できる。

### 3 考察

井戸側に使用された結物筒（井戸結桶）について、筆者は以前に大きく4類に区分したことがある（鈴木2000b）。井戸結桶（結物筒）Ⅰ類は中国から輸入されたと推定される結物筒で、良好な資料を実見することができず詳細な調整痕などの実態は不明である。鈴木康之は宋から渡来した技術者によるものと評価しているものである（鈴木康2002）。井戸結桶（結物筒）Ⅱ類は割裂法によって製材され側板側面がヤリガンナで調整された結物筒である。井戸結桶（結物筒）Ⅲ類は割裂法によって製材され側板側面が台鉋状の工具で調整された結物筒である。井戸結桶（結物筒）Ⅳ類は縦挽き鋸によって製材され、側板側面が台鉋状の工具で調整された結物筒である。各類は結物の様相の時期区分とおおよそ対応しており、井戸結桶（結物筒）Ⅰ類は結物Ⅰ期、井戸結桶（結物筒）Ⅱ類は結物Ⅱ期、井戸結桶（結物筒）Ⅲ類は結物Ⅲ期以降、井戸結桶（結物筒）Ⅳ類は19世紀以降に認められるとした。

今回取り上げた古城遺跡 SE01 の結物筒は側板側面がヤリガンナで調整されたものと推定され、井戸結桶（結物筒）Ⅱ類に該当する。SE01 の年代は、井戸側内から出土した土器類の検討から15世紀前葉に属すると推定されており、結物Ⅲ期の始まりを15世紀半ば頃とすれば結物Ⅱ期の資料と位置づけられよう。

ところで、古城遺跡 SE01 の結物筒は結物としては異例な形状を呈していた。それは、側板内面を比較的平坦な面に作るため側板の横断面は逆台形の上辺が弧状に盛り上がった形状とな

っている点である。これは15世紀後葉以降の井戸側に使用された結物筒には見られない特徴である。例えば清須城下町の一部である朝日西遺跡で検出された58区 SE04 の事例と比較してみる（鈴木1988）。

58区 SE04 の井戸側に使用された結物筒の側板製材技法は楔を用いて打ち割る割裂法が用いられたと思われる。側板の外側は、割裂法による製材の後にチョウナなどの工具による切削痕が部分的に残存し外側は曲面を形成している点は古城遺跡 SE01 とあまり変わらない。一方、内側は、割裂法による製材の後にヤリガンナなどの工具で内側を抉るように削られている。この結果、側板の横断面は円弧状となっている（図4-4）。このようにみると、朝日西遺跡58区 SE04 は側板を結び合わせた際に内外面ともにスムーズに円筒形の曲面を形成するように意識して作られていたと評価できる。一方、古城遺跡 SE01 の場合は内側が多角柱状のままであるといえよう。

では、結物Ⅱ期以前（15世紀中頃以前）の他の井戸側に使用された結物筒はどのような形状であろうか。結物Ⅱ期以前の井戸に使用された結物筒が良好な形で残存し実見できる資料はあまり多くはない。筆者がこれまで実見できたのは三重県宮ノ腰遺跡例（水谷編1999）と福岡県大宰府遺跡例のみである。詳細な観察記録をここでは割愛するが、この両者とも側板内面を平坦に作り側板の横断面は逆台形の上辺が弧状に盛り上がった形状となっていたことを確認している。また、両者とも側板側面がヤリガンナで調整されていた。

このように、少ない事例をながらも井戸結桶（結物筒）Ⅱ類の特徴として、側板側面がヤリガンナで調整されたこと以外に、側板内面を平坦に作り側板の横断面は逆台形の上辺が弧状に盛り上がった形状となる特徴を加えてもよいと考えられる。ところで、このような特徴は何を意味しているのだろうか。それは、井戸結桶（結物筒）Ⅱ類は内側が結果として多角柱状であり正円形を呈しておらず、底板や蓋板がはめ込まれることを想定していないもの、すなわち水を漏らさない容器としては作られていない可能性が高いということである。実際に、井戸結

桶（結物筒）Ⅱ類は、筆者が実見した全ての事例において底板や蓋板の圧痕が認められない。当初から井戸側としての結物筒を意図して製作されたものであると評価できよう。そして、内面を円筒形に作り出そうとする意図の有無に、井戸結桶（結物筒）Ⅱ類と井戸結桶（結物筒）Ⅲ類の間、すなわち結物Ⅱ期とⅢ期の画期に技術的な断絶を見出すことができるのではないかと考えている。

## 4 まとめ

以上の検討の結果、古城遺跡 SE01 例は類例の少ない結物Ⅱ期以前の井戸結桶（結物筒）Ⅱ類の好事例として位置づけられ、井戸結桶（結物筒）Ⅱ類とⅢ類の相違点をより一層明確にす

ることもできた。そして、この井戸が15世紀前葉に属することからみて、これまで曖昧に評価してきた井戸結桶（結物筒）Ⅲ類の出現の画期（すなわち結物Ⅱ期とⅢ期の画期）を、15世紀中頃に限定していくことができる可能性が出てきた。この画期は、東海地方で見られる遺構や遺物の様々な面で認められる画期とほぼ同時期であり、井戸側構造の製作技法の面においても物質文化の大きな転換点に連動して変化した結果と評価できるかもしれない。

最後に、古城遺跡の資料紹介を許可いただいた豊田市教育委員会をはじめ、下記の多くの方々にご教示を賜りご便宜を図っていただいた。記して感謝します。

杉浦裕幸、鈴木とよ江、水谷豊、森泰通、山本ひろみ、横田賢次郎（敬称略）

### 引用・参考文献

- 石村真一 1997 『ものと人間の文化史 82 桶・樽』法政大学出版局。
- 植田弥生 2004 「古城遺跡出土井戸構築材の樹種同定」『古城遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 23 集。
- 鈴木正貴 1988 「清洲城下町遺跡出土の井戸桶に関する考察」『年報昭和 63 年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター。
- 鈴木正貴 2000a 「出土遺物からみた結物」『桶と樽 脇役の日本史』法政大学出版局。
- 鈴木正貴 2000b 「井戸桶と早桶」『桶と樽 脇役の日本史』法政大学出版局。
- 鈴木正貴 2002 「中世井戸についての若干の考察—愛知県下の事例を中心として—」『東海の中世集落を考える資料集』第 9 回東海考古学フォーラム。
- 鈴木とよ江 2005 「中世遺跡の空白期をめぐって—豊田市古城遺跡の再評価—」『三河考古第 18 号』。
- 鈴木康之 1995 「草戸千軒町遺跡出土の桶・樽について」『草戸千軒 No.229』。
- 鈴木康之 2002 「日本中世における桶・樽の展開—結物の出現と拡散を中心に—」『考古学研究』第 48 巻第 4 号。
- 三浦純夫 1988 「結桶の出現と普及」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズ刊行会。
- 水谷豊編 1999 『宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター。
- 山本ひろみ編 2004 『古城遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 23 集。



# 濃尾平野における 遺跡基盤層の $^{14}\text{C}$ 年代値

● 鬼頭 剛

濃尾平野に位置する遺跡の基盤層から採取された試料の放射性炭素年代値についてとりまとめた。暦年代較正值 (cal yrs BP) で約 5000 ~ 4000 年前代の値が散見され、試料全体では約 3000 ~ 2000 年前代が多かった。それらの数値年代と試料の標高から、濃尾平野全体では約 5000 ~ 4000 年前代の堆積深度は東部で浅く西部で深い、西方への傾斜がみられ、約 3000 ~ 2000 年前代を示す層準は平野の広範囲に確認された。年代測定については過去のデータとの比較のためにも、暦年代への変換が必要である。

## はじめに

近年、放射性炭素年代測定、とりわけ加速器質量分析法 (AMS 法) による測定が増加してきている。筆者は先の当センター研究紀要にて、遺構内から出土した土器資料に基づく年代値を報告した (鬼頭・赤塚 2005)。本稿では、濃尾平野に立地する遺跡の基盤層から得られた試料について、放射性炭素年代測定値をすでに報告したものや、報告書の刊行時までに測定結果が得られなかったものも含めて、濃尾平野上部完新統堆積物の年代値をまとめ、概観した。

## 放射性炭素年代資料

整理した資料は、筆者が実際に層序断面観察と記載を行なった濃尾平野に位置する愛知県下の遺跡で、北から順に田所遺跡 (一宮市田所)、大毛池田遺跡 (一宮市大毛)、大毛沖遺跡 (一宮市大毛)、門間沼遺跡 (葉栗郡木曾川町黒田)、西上免遺跡 (尾西市開明)、馬引横手遺跡 (一宮市大和町)、猫島遺跡 (一宮市千秋町)、三ツ井遺跡 (一宮市丹陽町)、権現山遺跡 (岩倉市北島町・野寄町)、下津北山遺跡 (稲沢市下津北山町)、志賀公園遺跡 (名古屋市中区中丸町・平手町)、一色青海遺跡 (稲沢市儀長町) の 12

遺跡である。放射性炭素年代測定に供した試料は、バックホーによる深掘で露出した層序断面から採取した試料 (一部にオールコア・ボーリングにより採取したものも含む) や、考古遺物が出土せず、人為的な影響を被っていない層序断面より採取した木片や有機質土壌試料の 124 点である。

## 放射性炭素年代測定方法

放射性炭素年代はガス比例計数管 (GPC) 法と加速器質量分析 (AMS) 法により測定を行なった。ガス比例計数管法の試料はアルカリ・酸処理を施して不純物を除去し、炭化処理をした後、リチウムと混合して反応管に入れ、真空ポンプで引きながら 800°C まで加熱して炭化リチウム (カーバイド) を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。測定はラドン崩壊のために約 1 ヶ月放置した後、精製したアセチレンを容量 400cc のガス比例計数管に充てんし、補正した  $^{14}\text{C}$  濃度を用いて  $^{14}\text{C}$  年代を算出した。 $^{14}\text{C}$  の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。加速器質量分析 (AMS) 法は石墨 (グラファイト) に調整後、測定を行なった。測定された  $^{14}\text{C}$  濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した  $^{14}\text{C}$  濃度を用いて  $^{14}\text{C}$  年代を算出した。 $^{14}\text{C}$  年代値の算出に

は、 $^{14}\text{C}$ の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。 $^{14}\text{C}$ 年代の暦年代への較正には CALIB4.3 を使用した。測定は、株式会社パレオ・ラボ (Code No. ; PLD) とパリーノ・サーヴェイ株式会社 (Code No. ; PAL)、パリーノ・サーヴェイ株式会社を通じて学習院大学放射性炭素年代測定室 (Code No. ; Gak)、ベータアナリティック社 (Code No. ; Beta) に依頼した。

### 遺跡基盤層の放射性炭素年代値

数値年代について、濃尾平野に位置する遺跡を北から順に表 1～表 10 にまとめた。なお、 $\delta^{13}\text{C}$ の値が算出されていなかったデータについては、 $\delta^{13}\text{C}$ の値が -25‰ に規格化されたとして、筆者が暦年代較正プログラムである CALIB4.3 により  $^{14}\text{C}$ 年代値を暦年代に変換した。このように変換した値には、筆者により変換が加えられたことを示すために数値の右側に \* 印をつけて区別した。また、試料の採取地点については最近の市町村合併に伴う名称変更は考慮せず、各報告書が刊行された際の市町村名をそのまま用いた。

古い数値年代では稲沢市儀長町・中島郡平和町の一色青海遺跡にて、標高 -24.72m のシルトと極細粒砂との互層から採取された木片が 9250、9215、9210、9200、9190、9170、9135 cal yrs BP (Beta-111841)、標高 -20.65m の砂質シルト層から得た貝殻片が 8575 cal yrs BP (Beta-11183)、標高 -21.40m の細粒砂と粘土との互層から得た木片が 8635 cal yrs BP (Beta-111840) と約 9000～8000 年前代の値がみられた。同じく一色青海遺跡にて標高 -12.10m の砂質シルト層から得た木片は 6295 cal yrs BP (Beta-111838)、標高 -9.70m の細～中粒砂中の貝殻片が 5660 cal yrs BP (Beta-111837) と約 6000～5000 年前代であった。これらは試料の標高がマイナスを示すことからわかるように、遺跡の発掘調査区内ではなく、オールコア・ボーリング資料から得られたものである。陸上で実際に観察・記載のできた層序より得られたものには、岩倉市北島町・野寄町の権現山遺跡で得られた試料がある。それらは遺跡の発掘調査区あるいは他

の機関により掘削された露頭より採取し、標高 2.40m の中粒～粗粒砂層中より得られた木片が 5435、5425、5320 cal yrs BP (Gak-19912)、同じく標高 2.40m の木片が 5580、5505、5490 cal yrs BP (PLD-19911) であった。標高 5.00m のシルト質中の炭化材で 4565、4560、4545、4540、4530 yrs BP (PLD-1589)、標高 5.50m の砂質シルト層中の炭化材で 4565、4252 cal yrs BP (PLD-1588)、標高 5.80m の砂質シルト層中の炭化物で 4435、4430、4420 cal yrs BP (PLD-1609)、標高 5.70m の砂質シルト層中の有機質土壌で 4090 cal yrs BP (PLD-1587) と約 4500～4000 年前代を示した。名古屋市北区の志賀公園遺跡では標高 3.40m の褐色腐植質粘土層の有機質土壌で 4860 cal yrs BP (Gak-20208)、一宮市千秋町の猫島遺跡では標高 7.10m の極粗粒砂層～採取した木片で 4225、4205、4175、4170、4155 cal yrs BP (PLD-929)、標高 5.84m のシルト質細粒砂層の木片が 4075、4035、3990 cal yrs BP (PLD-930) と約 4200～4000 年前代である。また、尾西市開明の西上免遺跡の標高 5.38m の細礫混じりの細粒砂層から得た木片が 4070、4045、3990 cal yrs BP (Gak-18839) の約 4000 年代前後の値を示した。いっぽう、新しい数値年代は一宮市大毛の大毛沖遺跡で多くみられ、標高 7.44m の粘土質シルト層から得た木片が 970 yrs BP (Gak-18852)、標高 7.50m の粘土質シルト層から得た木片が 1165、1115、1075 yrs BP (Gak-18856)、標高 8.70m の粘土質シルト層から得た木片が 1175 yrs BP (Gak-18850) を、標高 7.60m の粘土質シルト層から得た木片が 1175 yrs BP (Gak-18855) の数値年代を得た。

試料全体ではそのほとんどが細粒な粘土層から採取されたものであり、その数値は約 3000～2000 年前代が多かった。

### 濃尾平野沖積低地において確認される放射性炭素年代値

濃尾平野沖積低地に位置する 12 遺跡において、人為的な影響を被っていないと考えられる層序断面より採取した試料 124 点の数値年代











採取地点	遺跡名・調査区	標高 (m)	堆積物	試料の種類	<sup>14</sup> C年代 (yrs BP)	δ <sup>13</sup> C PDB (‰)	暦年代校正値 (1σ AD/BC)	暦年代校正値 (1σ cal yrs BP)	1σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	1σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No. (method)
名古屋市北区中丸町・平手町	志賀公園-98K	3.27	黒褐色腐植質粘土層	木片	1950±50	-30.6	AD 35,35.60 *	1915,1915,1890 *	BC 15-15(0.7%) *	1965-1965(0.7%) *	Gak-20307(GPC)
名古屋市北区中丸町・平手町	志賀公園-98K	3.63	褐色腐植質粘土層	有機質土壌	1360±70	-30.3	AD 660 *	1290 *	AD 1-85(82.3%) * AD 100-125(17.0%) * AD 620-635(9.8%) *	1950-1865(82.3%) * 1850-1825(17.0%) * 1330-1315(9.8%) *	Gak-20306(GPC)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-93Ab	0.05	シルト・泥り細粒砂層	炭化物	2110±60	-10.6	BC 160,130,120	2110,2080,2070	AD 635-720(74.7%) * AD 745-770(15.5%) * BC 325-325(0.8%) *	1315-1230(74.7%) * 1205-1180(15.5%) * 2275-2275(0.8%) *	Beta-111835(AMS)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-93Ab	-0.65	灰色～青灰色粘土層	木片	2190±60	-22.4	BC 345,320,225,225,205	2295,2270,2175,2170,2155	BC 200-45(99.2%) * BC 360-275(51.8%) *	2150-1995(99.2%) * 2310-2225(51.8%) *	Beta-111836(AMS)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-93Ab	-9.70	シルト・泥り細～中粒砂層	貝殻片	5320±50	+1.3	BC 3710	5660	BC 260-235(12.8%) * BC 235-195(24.3%) * BC 190-175(11.1%) *	2210-2185(12.8%) * 2185-2145(24.3%) * 2140-2125(11.1%) *	Beta-111837(AMS)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-93Ab	-12.10	砂質シルト層	木片	5510±100	-30.1	BC 4345	6295	BC 3770-3665(100%) *	5720-5615(100%) *	Beta-111838(AMS)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-93Ab	-20.65	砂質シルト層	貝殻片	8110±80	-2.1	BC 6625	8575	BC 4305-4250(25.1%) * BC 6730-6500(100%) *	6255-6195(25.1%) * 8680-8450(100%) *	Beta-111839(AMS)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-93Ab	-21.40	黄灰色細粒砂と褐色粘土の互層	木片	7880±70	-26.3	BC 6690	8635	BC 7025-7020(2.0%) *	8975-8970(2.0%) *	Beta-111840(AMS)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-93Ab	-24.72	褐色シルトと極細粒砂の互層	木片	8220±70	-28.2	BC 7300,7265,7260,7250,7245,7225,7185	9250,9215,9210,9200,9190,9170,9135	BC 7000-6990(1.7%) * BC 6980-6970(4.6%) * BC 6950-6935(4.3%) * BC 6905-6880(6.6%) * BC 6830-6640(78.8%) *	8950-8940(1.7%) * 8930-8920(4.6%) * 8895-8885(4.3%) * 8855-8830(6.6%) * 8775-8590(78.8%) *	Beta-111841(AMS)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-96B	-1.60	褐色腐植質粘土層	有機質土壌	3100±90	-	BC 1395,1325,1325 *	3340,3275,3275 *	BC 7445-7440(2.3%) * BC 7415-7415(1.5%) * BC 7330-7135(88.4%) * BC 7100-7080(7.8%) *	9395-9390(2.3%) * 9365-9360(1.5%) * 9280-9085(88.4%) * 9050-9030(7.8%) *	Gak-19716(GPC)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-96B	-0.65	紫灰色粘土層	有機質土壌	2870±70	-	BC 1015 *	2960 *	BC 1490-1480(4.2%) * BC 1455-1260(91.3%) * BC 1230-1220(4.5%) * BC 1205-1205(0.4%) *	3440-3430(4.2%) * 3400-3210(91.3%) * 3180-3165(4.5%) * 3155-3155(0.4%) *	Gak-19717(GPC)
									BC 1190-1180(2.4%) * BC 1150-1145(1.5%) * BC 1130-970(81.6%) * BC 960-925(14.2%) *	3135-3130(2.4%) * 3095-3095(1.5%) * 3080-2920(81.6%) * 2910-2875(14.2%) *	

表 9 遺跡基盤層の放射性炭素年代値 (9)

採取地点	遺跡名・調査区	標高 (m)	堆積物	試料の種類	<sup>14</sup> C年代 (yrs BP)	δ <sup>13</sup> C PDB (‰)	暦年代校正値 (1σ AD/BC)	暦年代校正値 (1σ cal yrs BP)	1σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	1σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No. (method)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-96B	-0.75	黒色粘土層	有機質土壌	3360±90	-	BC 1680,1670,1660,1650,1640 *	3630,3620,3610,3600,3590 *	BC 1740-1705(15.4%) *	3690-3655(15.4%) *	Gak-19718(GPC)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-96B	1.05	黒褐色粘土層	有機質土壌	1980±80	-	BC 25,45,45 *	1925,1905,1905 *	BC 1705-1595(54.1%) * BC 1595-1525(30.5%) * BC 90-80(3.2%) *	3650-3545(54.1%) * 3545-3475(30.5%) * 2035-2030(3.2%) *	Gak-19719(GPC)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-96B	0.55	黒色粘土および黄灰色粘土混在層	有機質土壌	2060±70	-	BC 50 *	2000 *	BC 55-AD 95(84.4%) * AD 95-125(12.4%) * BC 165-AD 5(98.6%) *	2005-1855(84.4%) * 1855-1825(12.4%) * 2115-1945(98.6%) *	Gak-19720(GPC)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-96C	0.51	黒色粘土層	有機質土壌	2710±80	-	BC 830 *	2780 *	AD 15-15(1.4%) * BC 970-960(3.2%) *	1935-1935(1.4%) * 2915-2910(3.2%) *	Gak-19681(GPC)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-96C	0.79	黒褐色粘土層	有機質土壌	2170±110	-	BC 200 *	2150 *	BC 925-800(96.8%) * BC 365-270(36.9%) *	2875-2750(96.8%) * 2315-2215(36.9%) *	Gak-19680(GPC)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-96C	0.93	黒褐色粘土層	有機質土壌	2090±70	-	BC 95 *	2045 *	BC 265-95(63.1%) * BC 200-185(5.7%) *	2210-2040(63.1%) * 2150-2135(5.7%) *	Gak-19679(GPC)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-96D	-0.70	黒褐色粘土層	有機質土壌	2020±90	-	BC 40,30,20,10,1 *	1985,1980,1970,1960,1950 *	BC 185-40(85.8%) * BC 30-20(4.1%) * BC 10-1(4.4%) *	2135-1985(85.8%) * 1980-1970(4.1%) * 1960-1950(4.4%) *	PLD-367(GPC)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-96D	-0.70	黒褐色粘土層	有機質土壌	2130±90	-	BC 170 *	2120 *	BC 120-AD 75(90.6%) * BC 350-295(22.2%) *	2065-1875(90.6%) * 2300-2245(22.2%) *	PLD-368(GPC)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-96D	-0.70	黒褐色粘土層	有機質土壌	1790±90	-	AD 240 *	1710 *	BC 230-220(4.5%) * BC 210-45(73.3%) * AD 130-265(64.8%) *	2180-2165(4.5%) * 2160-1995(73.3%) * 1820-1685(64.8%) *	PLD-369(GPC)
稲沢市儀長町・中島郡平和町須ヶ谷	一色青海-96D	-0.70	黒褐色粘土層	有機質土壌	2260±90	-	BC 375,265,265 *	2325,2215,2215 *	AD 265-340(34.5%) * AD 375-375(0.7%) * BC 400-200(100%) *	1685-1610(34.5%) * 1575-1575(0.7%) * 2850-2150(100%) *	PLD-370(GPC)

表 10 遺跡基盤層の放射性炭素年代値 (10)

をとりまとめ、概観した。その結果、古い数値年代では稲沢市儀長町・中島郡平和町の一色青海遺跡で約9000～8000年前代を示した。これは遺跡の発掘調査区からではなく、オールコア・ボーリング資料より得られたものであった。実際に層序観察を行なえた遺跡から採取したものは岩倉市北島町・野寄町の権現山遺跡、名古屋市北区の志賀公園遺跡、一宮市千秋町の猫島遺跡、尾西市開明の西上免遺跡において、約5000～4000年前代の年代値が得られた。ところで鬼頭・小野(2004)は、岐阜県までを含めた濃尾平野沖積低地面においてハンドボーリングを実施した。それらの放射性炭素年代測定の結果では、岐阜県本巣郡穂積町(現：瑞穂市)只越の泥炭質砂層の標高2.2mより得られた有機物が4970 cal yrs BP (PLD-979)、同穂積町花塚の標高2.6mのピートは4420 cal yrs BP (PLD-973)と約5000～4000年前代の数値年代を示した。また、岐阜県大垣市横曽根町の標高-2.7mのピートは3885、3875 cal yrs BP (PLD-1058)、岐阜県大垣市横曽根町の標高-4.0mの植物遺体は3975、3940、3930 cal yrs BP (PLD-977)と約4000年前よりも若干新しい値であった。以上のように、濃尾平野西部では約3500年前よりも古い年代値が標高約2.5m前後や標高0mよりも低い層準から得られた。いっぽう、濃尾平野東部～中央部に位置する遺跡では、約5000～4000年前代の年代値を示す層準が岩倉市の権現山遺跡で標高2.40～5.70m、名古屋市北区の志賀公園遺跡で標高3.40m、一宮市千秋町の猫島遺跡で標高5.84～7.10m、尾西市開明の西上免遺跡で標高5.38mに確認できた。先に鬼頭・小野(2004)は完新統上部堆積物の堆積深度は東で浅く西で深い、全体に西へ傾斜した地層であることを指摘したが、今回筆写が提示した資料からも同様の結果が導かれ、鬼頭・小野(2004)を支持する結果であった。

また、試料全体ではそのほとんどが細粒な粘土層から採取されたものであり、その数値は約3000～2000年前代に集中した。濃尾平野沖積低地の広範囲で約3000～2000年前代の数値年代が確認できる結果と、今回取りまとめた年代値が人為的な影響のない遺跡基盤層から採

取された試料であることから、人の生業活動に必要な土地の形成がその期間に急速に進んだことがわかる。

### 異なる分析法の値が混在する現状

原子核物理学の分野で主流をなす加速器質量分析法(AMS法)は放射性核種を直接測定する方法であり(Muller1977)、炭素の同位体そのものの量比を測定できる。そのため、AMS法では数mmgというわずかな試料での測定ができるようになり、土器資料そのものの年代を決定できるようになってきた(今村1999、2003)。また、西暦2000年代になって、AMS法が商業ベースで比較的容易に依頼できるようになった状況がある。さらに、同位体分別効果を考慮した暦年代較正值に変換できるようになったことも、考古学において需要が多くなってきた原因のひとつであろう。AMS法による数値年代の測定は今後ますます増えていくものと予想される。いっぽう、AMS法がひろく使われるようになる前には、放射性炭素年代測定といえばガス比例計数管法か液体シンチレーション法が主流であった。理工学が専門でない方のために解説を加えれば、ガス比例計数管法とは $^{14}\text{C}$ を含む二酸化炭素( $\text{CO}_2$ )やアセチレン( $\text{C}_2\text{H}_2$ )、メタン( $\text{CH}_4$ )などの充填ガスを精製・合成し、比例計数管を用いてエネルギーの低いベータ線を測定する方法である。また、液体シンチレーション法とはベンゼン( $\text{C}_6\text{H}_6$ )などの有機炭素に蛍光物質を溶かして、液体シンチレーション・カウンターを用いて測定する方法である。ちなみに、シンチレーション(scintillation)とは放射線が蛍光体に衝突して閃光を発生する現象であり、その現象を利用して放射線の定量的測定を行なう装置をシンチレーション・カウンターあるいはシンチレーション計数管という。AMS法が今ほど普及していなかった頃のそれらの年代値は、放射性炭素年代値のみが示され、暦年代較正が施されていない。そのため、現在われわれが目にする論文や報告書などの放射性炭素年代測定値には、AMS法により暦年代補正が施されたものとそれ以外の値が混在しており、とくに過去のデータとの比

較や引用をする際には注意を要する。今後ますます増えていくものと予想される AMS 法による数値年代の測定値に対し、このままでは過去において報告された貴重なデータが無視される可能性がある。そのような状況が起きないように、過去のデータの有効利用のためにも、今回のような従来の値の暦年代への変換が必要である。

#### 謝辞

本論を作成するにあたり、各遺跡における放射性炭素年代の測定では株式会社パレオ・ラボの山形秀樹氏、パリノ・サーヴェイ株式会社の

辻本裕也氏にお世話になった。愛知県埋蔵文化財センター調査研究員の方々には現地での試料採取の際にお世話になった。図面の作成では研究補助員の山口典子氏、数値年代の取りまとめ作業では元整理補助員の服部恵子氏、整理補助員の服部久美子氏に、数値の入力作業では村上志穂子氏にお手伝いいただいた。以上の方々に記してお礼申し上げる。

#### 文献

今村峯雄 1999 「高精度<sup>14</sup>C年代測定と考古学・方法と課題・高精度年代決定法とその応用—第四紀を中心として—」『月刊 地球』号外 No. 26、23～31頁。

今村峯雄 2003 「縄文・弥生土器の AMS<sup>14</sup>C年代と暦年校正による編年の研究」『5回 考古科学シンポジウム発表要旨』考古科学シンポジウム世話人会、55～60頁。

鬼頭 剛・小野映介 2004 「濃尾平野中央部、上中・西屋敷遺跡における堆積環境」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第120集「上中・西屋敷遺跡」』愛知県埋蔵文化財センター』61～70頁。

鬼頭 剛・赤塚次郎 2005 「AMS<sup>14</sup>C年代と考古編年」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』6号、1～11頁。

Muller, R. A. 1977 Radioisotope dating with a cyclotron, Science, 196, 489-494.

# 弥生時代および古墳時代の ガラス玉の化学組成

● 堀木真美子

朝日遺跡出土のガラス玉 38 点の蛍光 X 線分析を実施。弥生時代後期と古墳時代後期の間には、ガラス玉の化学組成に大きな変化が認められた。弥生時代には  $K_2O-SiO_2$  系で Cu による青色の発色を施したものと、Co による発色の 2 種類が存在した。烏帽子遺跡および荒山古墳の試料にみられるように、古墳時代後期の試料では  $Na_2O-CaO-Al_2O_3-CaO-SiO_2$  系のガラスが主流となっていたことが確認された。

## 1 はじめに

平成 15 年度夏に愛知県埋蔵文化財センターに蛍光 X 線分析装置（堀場製作所製 XGT-500XII）が導入された。この装置は大気中で測定を行うため、非破壊による分析が可能であること、ステージの大きさが 10cm と大きく試料室も大きいことから、文化財の測定に適していると導入されたものである。この装置のおおきな特徴として X 線の照射径を  $10\mu m$  もしくは  $100\mu m$  の 2 つより選択することができ、照射位置を CCD カメラの画像で任意に設定できることがあげられる。この装置が導入されて以来、名古屋城三の丸遺跡出土の漆喰試料（2005）、荒山古墳出土耳環およびガラス玉（2004）、烏帽子遺跡出土のガラス玉（2005）などの成果が公表された。

当センターの蛍光 X 線分析装置は大気中で測定を行うことから、従来報告されてきた蛍光 X 線分析の結果とは比較することはできない。これは大気中の元素の影響を受けるためである。ただし、ガラスの標準試料を用いて分析結果のバラツキを検討した結果、測定試料の条件を整えることにより、ある程度安定した結果が得られることが確認された。そこで現在、同装置による比較を行うために分析結果の蓄積を進めている。

## 2 分析試料および分析方法

今回分析を行った試料は、朝日遺跡より出土した弥生時代後期のガラス玉 38 点である（表 1）。

試料の径および厚さをノギスを用いて計測した後、試料の一部を # 3000 のダイヤモンドペーストを用いて研磨し平滑な面を作成した。その後、超音波洗浄機を用いて洗浄し、蒸留水による洗浄を行った。分析装置は（株）堀場製作所製のエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 XGT-5000XII を用いた。定量分析はスタンダードレスによるファンダメンタルパラメータ法（以下 FP 法）によって行い、酸化物の合計が 100% になるように規格化した。測定条件は、励起電圧：30kV、計測時間：300s、X 線管球：Rh、測定雰囲気：大気中、X 線照射径： $100\mu m$  である。各分析試料につき、測定箇所を 20 カ所を設定した。計測値は、測定箇所ごとに算出された定量値を平均化したものを用いた。

## 3 結果

検出された元素は、Si（ケイ素）、Na（ナトリウム）、Mg（マグネシウム）、Al（アルミニウム）、P（リン）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Ti（チタン）、Mn（マンガン）、Fe（鉄）、



表 1 分析試料一覧

試料番号	調査区	グリッド	遺構番号		色調	小口長径	厚さ
1	01Aa	VI18e	SD03	001	水	4.85	3.55
2	01Da	VIIIH3q	SB11		水	2.35	2.55
3	99Ab		SB01		水	4.15	3.00
4	99Ab		SB01		水	3.60	2.65
5	99Ab		SB01		紺	3.00	2.45
6	99Ab		SB02		水	4.80	5.00
7	99Ab		SB02		水	2.75	1.80
8	99Ab		SB02		水	3.70	2.90
9	99Ab		SB02		水	2.40	1.10
10	99Ab		SB02		水	3.95	2.45
11	99Ab		SB02		水	3.65	2.70
12	99Ab		SB06		水	3.95	2.20
13	99Ab		SB06		水	3.10	3.45
14	99Ab		SB06		水	2.60	1.75
15	99Ab		SB06		水	2.80	1.90
16	99Ab		SB06		水	3.30	2.25
17	99Ab		SB06		水	4.05	2.05
18	99Ab		SB12		水	4.45	3.05
19	99Ab		SK01		水	3.40	2.35
20	99Ac		SB02	水	-	1.50	
21	99Ac		SB02	水	3.90	1.85	
22	99Ac		SB02	紺	4.30	3.40	
23	99Ac		SB02	水	3.25	1.80	
24	99Ac		SB02	紺	2.85	2.75	
25	99Ac		SB02	水	4.00	2.95	
26	99Ac		SB02	紺	4.75	3.05	
27	99Ac		SB04	水	2.90	2.65	
28	99Ac		SB07	水	2.80	2.20	
29	99Ac		SZ01	10	水	4.00	2.15
30	99Ab		SB01		紺	4.40	3.80
31	02Cf	VIIIJ15I	SK01	003	水	3.40	2.10
32	02Cf	VIIIJ15I	SK01		水	3.00	1.55
33	02Cf	VIIIJ15I	SK01		水	3.00	2.00
34	02Cf	VIIIJ15I	SK01		水	4.20	3.00
35	02Cf	VIIIJ15I	SK01		水	3.35	2.40
36	02Cf	VIIIJ15I	SK01		水	3.25	1.85

単位 (mm)

Co (コバルト)、Cu (銅)、Pb (鉛) などである。分析値は、Si、Na、Mg、Al、P、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Co、Cu、Pb の検出ピーク (主に K  $\alpha$  1) をもとに FP 法により算出した。これらの元素は酸化物 (%単位) で示した。

## 4 考察

### a. 分析値について

朝日遺跡出土ガラス玉の 38 点の分析結果を表 2 に示す。ここで示されている分析値は 1 試料中の 20 点の測定箇所から得られた値を平均したものである。今回の分析試料の同 1 個

体内での分析値の一例を表 3 に示す。この表の NaO、MgO、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> の値をみると、標準偏差の値が平均値より大きい等、算出された平均値の信頼性が低いことがわかる。これは使用した分析機器が大気中で測定を行っているために、軽い元素においてはある含有量以上でなければ、安定した結果が得られないためと考えられる。表 4 に烏帽子遺跡出土のガラス玉を同一条件で測定した結果を示す。表 4 においては、測定できる最も軽い元素の Na の標準偏差は平均値の約 6% と小さくなることが確認されている。このような特性を考慮しながら以下に朝日遺跡の試料についての考察を行う。

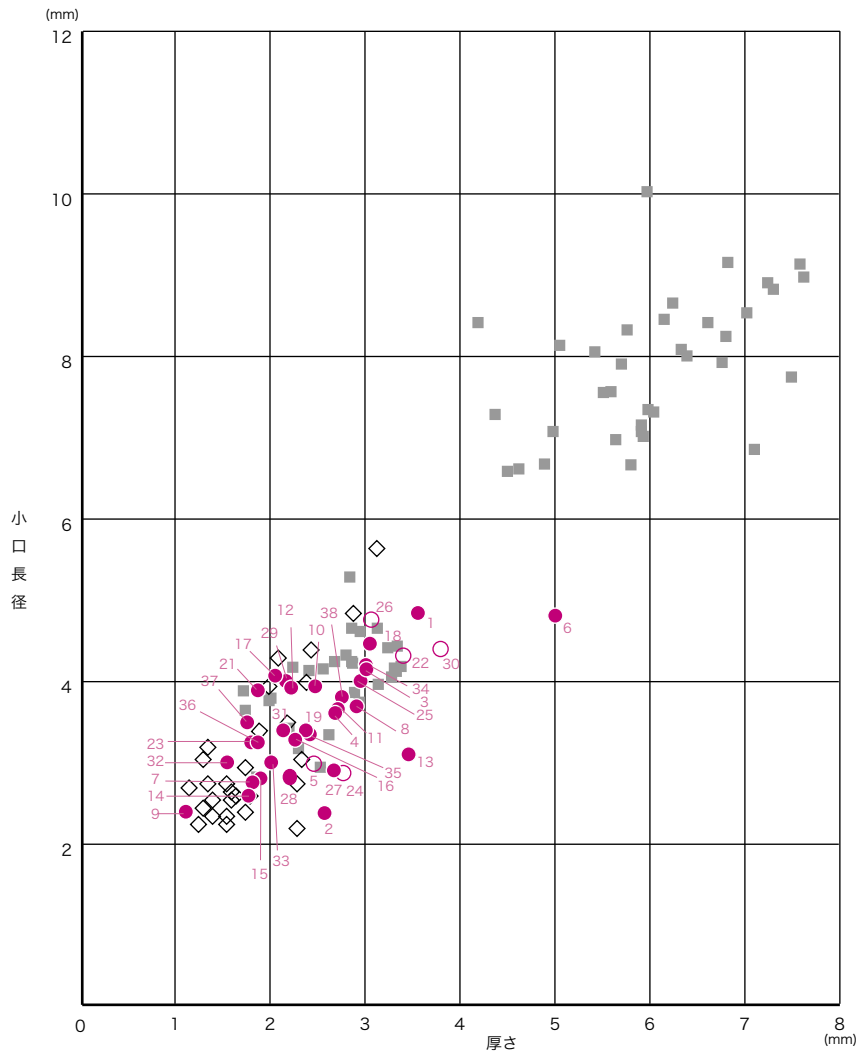


図1 分析試料の形状

朝日遺跡出土（弥生時代後期） ●：水色 ○：紺色  
 烏帽子遺跡出土（弥生終末～古墳前半） ◇  
 荒山古墳出土（6C末～7C前半） ■

### b. 朝日遺跡出土ガラスについて

はじめに今回分析を行ったガラス玉の形状を見ると、表1・図1のようになる。荒山古墳の小さい粒の分布域にほぼ重なる。烏帽子遺跡のものよりはやや大型となる。色調による大きさに違いは見られなかった。

蛍光X線分析の結果から  $\text{Al}_2\text{O}_3$ 、 $\text{CaO}$ 、 $\text{MnO}$ 、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ 、 $\text{CoO}$ 、 $\text{CuO}$ 、 $\text{PbO}$  の値に大きな差が見られた。  $\text{MgO}$ 、 $\text{Al}_2\text{O}_3$  の平均値の信頼性が低いことは前述したが、 $\text{Al}_2\text{O}_3$  の場合、3%をこえる試料では標準偏差が測定値の10%程度と安定していることから、 $\text{Al}_2\text{O}_3$  も優位な違

いを示す元素とした。

これらの測定値の違いから、2つのグループに分けられる。それぞれのグループに属するガラス玉の色調を比べると、紺色を呈するものに  $\text{CaO}$ 、 $\text{MnO}$ 、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$ 、 $\text{CoO}$  が多く、その他の水色を呈するものでは  $\text{CuO}$ 、 $\text{PbO}$ 、 $\text{Al}_2\text{O}_3$  が多く含まれていた。特に  $\text{CoO}$  では、水色のガラス玉では検出されていないが、紺色を呈するものでは0.1%程度の含有量が認められる。この  $\text{Co}$  をふくむ紺色のガラス玉では、 $\text{MnO}$  が2%程度、 $\text{Fe}_2\text{O}_3$  も2%程度含まれていた。 $\text{CaO}$  は、水色ガラスで1%程度だったものが、紺色のガラスで1.5%程度となる。 $\text{Co}$  の含有



表 4 同一個体内での測定値のばらつき (烏帽子遺跡)

烏帽子遺跡 ガラス玉No.19		Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CoO	CuO	PbO	total
1		22.63	4.49	1.85	64.37	1.31	3.65	0.14	0.15	1.13	0.04	0.12	0.12	100.00
2		27.23	4.48	2.18	59.85	1.30	3.44	0.13	0.13	1.02	0.05	0.09	0.10	100.00
3		23.72	4.76	2.37	62.50	1.42	3.66	0.13	0.15	1.05	0.04	0.10	0.12	100.02
4		27.40	4.38	1.85	60.17	1.26	3.43	0.13	0.14	1.00	0.04	0.10	0.11	100.01
5		24.81	5.15	1.74	61.88	1.31	3.52	0.14	0.14	1.05	0.04	0.10	0.12	100.00
6		26.56	5.18	2.09	59.93	1.26	3.46	0.14	0.15	0.99	0.04	0.10	0.10	100.00
7		25.46	5.02	1.79	61.45	1.13	3.58	0.15	0.15	1.02	0.04	0.10	0.12	100.01
8		25.39	4.74	2.50	60.79	1.31	3.63	0.14	0.17	1.05	0.04	0.10	0.12	99.98
9		24.35	5.11	1.84	62.03	1.43	3.67	0.08	0.16	1.06	0.04	0.12	0.13	100.02
10		23.48	3.90	2.62	63.24	1.44	3.62	0.15	0.18	1.08	0.06	0.11	0.12	100.00
11		24.73	4.83	2.10	61.86	1.31	3.49	0.13	0.15	1.10	0.06	0.10	0.12	99.98
12		25.17	4.23	2.41	61.61	1.32	3.64	0.12	0.16	1.10	0.04	0.10	0.11	100.01
13		25.85	4.15	1.99	61.70	1.27	3.46	0.14	0.15	1.03	0.05	0.10	0.12	100.01
14		27.51	4.74	2.06	59.72	1.26	3.22	0.13	0.13	0.97	0.06	0.09	0.10	99.99
15		24.42	4.72	2.06	62.49	1.24	3.50	0.13	0.14	1.05	0.04	0.11	0.11	100.01
16		24.95	3.72	2.60	62.34	1.24	3.52	0.14	0.16	1.06	0.06	0.10	0.11	100.00
17		23.48	4.07	2.26	63.26	1.36	3.87	0.13	0.16	1.09	0.06	0.10	0.14	99.98
18		25.21	3.89	2.29	62.06	1.35	3.54	0.14	0.14	1.11	0.04	0.11	0.12	100.00
19		25.52	4.60	2.02	61.49	1.24	3.53	0.12	0.16	1.03	0.06	0.13	0.12	100.02
20		23.24	4.58	2.26	63.50	1.30	3.56	0.14	0.13	1.04	0.03	0.10	0.12	100.00
平均		25.06	4.54	2.14	61.81	1.30	3.55	0.13	0.15	1.05	0.05	0.10	0.12	
偏差		1.39	0.43	0.27	1.27	0.07	0.13	0.01	0.01	0.04	0.01	0.01	0.01	

によって Fe、Mn、Ca が増加するのはコバルトを含む鉱物に由来する可能性が考えられる。

水色を呈する試料において特徴的に含まれる元素として K<sub>2</sub>O、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、CuO、PbO が挙げられる。このうち CuO については、古墳時代のものを含めても 1.4% とかなりの含有量を示している。

### c. 古墳時代のガラス玉との比較

筆者は同一の分析装置および同一の分析方法を用いて古墳時代のガラス玉の測定を実施した(堀木 2004・2005)。これらの結果と今回の分析結果の比較検討を行う。いずれの分析においても、ある程度まとまりのある化学組成が示されている。ここではそれぞれのまとまりごとの平均値を算出し、比較検討を行う。表 5 に朝日遺跡、烏帽子遺跡、荒山古墳出土のガラス玉のグループごとの平均値を掲載した。他のグ

ループと比較し、値の大きいものに編みをかけてある。またそれぞれのグループに含まれる試料の点数も併記した。

この表より、朝日遺跡の少数であった紺色の試料 (5/38) において MnO や Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> が、他の水色の試料よりも含有量が多いとしたが、古墳時代のガラス玉と比較しても、その値が大きいことがわかる。

肥塚 (1995) によると K<sub>2</sub>O-SiO<sub>2</sub> 系のガラスの CoO を含有する試料には、1% 前後の MnO および Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> が伴っており、その供給源はコバルト鉱石もしくは鉱石に伴う不純物であろうとされている。そこで、これまで測定を行った試料のうち、CoO を含有するものを選び、MnO、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> のグラフを作成した(図 2)。

このグラフのうち、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> および MnO がともに 1.5% をこえる試料は朝日遺跡の

表 5 各時代のガラス玉の化学組成

	Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CoO	CuO	PbO	試料数
朝日遺跡	5.4	0.1	3.9	75.7	11.5	0.7	0.2	0.0	0.6	0.0	1.4	0.5	33/38
	6.8	0.6	1.2	74.0	11.4	1.6	0.3	2.0	1.9	0.1	0.0	0.0	5/38
烏帽子遺跡	22.6	3.1	2.4	64.9	1.2	3.9	0.2	0.1	1.2	0.0	0.1	0.1	18/28
	20.4	0.7	7.7	64.9	1.7	1.9	0.5	0.1	1.1	0.0	0.6	0.3	8/28
古墳時代前期	2.4	0.5	2.1	82.5	8.2	1.2	0.2	1.3	1.6	0.0	0.0	0.0	2/28
荒山古墳	17.7	3.0	4.4	67.8	1.4	4.1	0.1	0.1	1.0	0.0	0.1	0.1	48/68
	19.4	0.2	7.9	67.2	1.2	2.2	0.4	0.1	0.9	0.0	0.4	0.1	10/68
	0.6	0.3	2.9	82.6	10.3	1.0	0.2	1.0	0.8	0.0	0.0	0.0	3/68

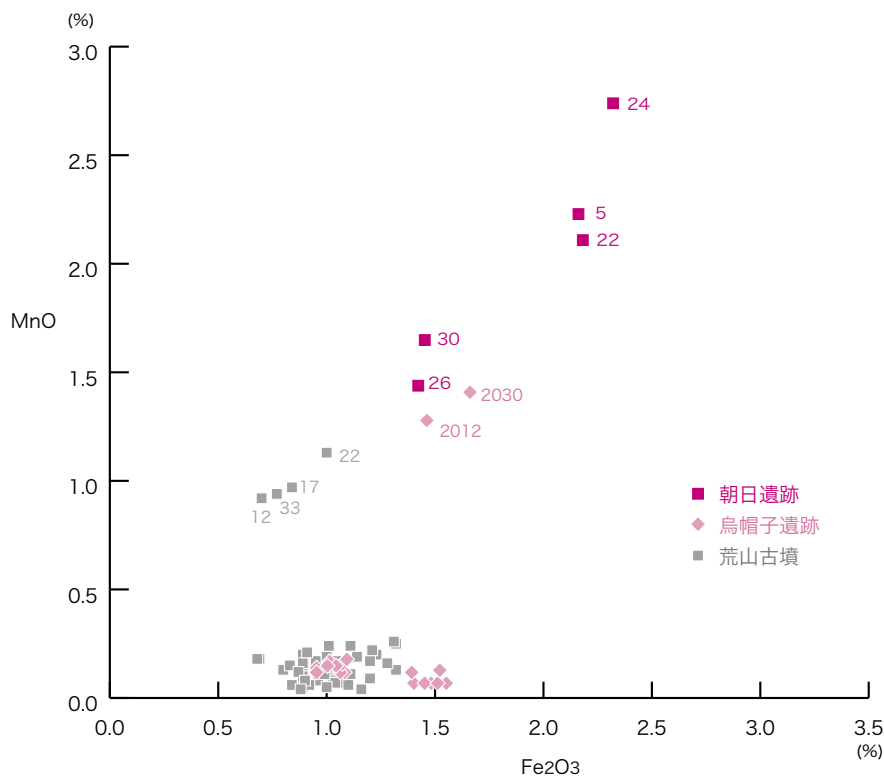


図2 MnO/Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>(Coを検出した試料のみ)

5 試料である。Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> が 1.5% および MnO が 1.5% 付近の 2 試料は烏帽子遺跡（試料番号 2030, 2012）のものである。Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> と MnO がともに 1% 付近に集中する試料は荒山古墳（試料番号 12, 33, 17, 22）の試料である。このうち 33 は Na<sub>2</sub>O を 16% 含んでおり、他の試料が K<sub>2</sub>O を 10% 程度含んでいることと大きく異なっている。MnO が 0.3% 未満の試料は、いずれも烏帽子遺跡および荒山古墳の試料で、Na<sub>2</sub>O が 20% 程度含まれるものである。荒山古墳のものは Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> が 0.6 – 1.4% のあたりに集中しているが、烏帽子遺跡のものは Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> が 1% 付近と 1.5% 付近にまとまりが見られた。この図は CoO が含まれている試料の値から作成したものであるが、Na<sub>2</sub>O が多く含まれるものと K<sub>2</sub>O が多く含まれるもので MnO、Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub> の含有量が異なることが確認できた。

## 5 まとめ

今回提示した分析結果は、あくまでも当センターが所蔵している XGT-5000XII で測定した

結果であり、広く一般に用いられている分析結果と対等の比較検討はできないものである。が、主たる成分の種類を特定することは可能である。その観点においてこれまで分析を実施したガラス玉についてガラスの種類を判定するならば、以下の通りとなる。

- ・朝日遺跡（弥生時代後期）  
：K<sub>2</sub>O-SiO<sub>2</sub> 系ガラス
- ・烏帽子遺跡（5 世紀頃）  
：Na<sub>2</sub>O-CaO-SiO<sub>2</sub> 系ガラス  
：Na<sub>2</sub>O-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-CaO-SiO<sub>2</sub> 系ガラス  
：K<sub>2</sub>O-SiO<sub>2</sub> 系ガラス
- ・荒山古墳（6～7 世紀頃）  
：Na<sub>2</sub>O-CaO-SiO<sub>2</sub> 系ガラス  
：Na<sub>2</sub>O-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-CaO-SiO<sub>2</sub> 系ガラス  
：K<sub>2</sub>O-SiO<sub>2</sub> 系ガラス

朝日遺跡の K<sub>2</sub>O-SiO<sub>2</sub> 系ガラスにおいては、38 点中 33 点が Co を含有しない水色のガラスであった。また烏帽子遺跡や荒山古墳のように 5 世紀以降の遺跡ではガラス玉の種類や化

学組成に大きな変化が見られないのに対し、弥生時代後期の朝日遺跡との間には、ガラス玉の種類にも化学組成にも大きな変化が認められた。これまでの愛知県内のガラス玉の測定結果としては一宮市八王子遺跡があげられる（小村2002）。八王子遺跡から出土したガラス玉は、弥生時代の住居跡内から出土したものである。分析方法は非破壊による蛍光X線分析でK<sub>2</sub>Oが33.46%と含まれていることから、K<sub>2</sub>O-SiO<sub>2</sub>系のガラスと判断されていた。またCuOも1.6%と多く含まれている。このことから、八王子遺跡出土のガラス玉は朝日遺跡で出土しているCuを多く含むK<sub>2</sub>O-SiO<sub>2</sub>系のガラスと

よく似ていると推測される。

つまり、愛知県内においては弥生時代後期の頃に広く流通していたガラスはK<sub>2</sub>O-SiO<sub>2</sub>系のガラスであり、多くがCuを多く含んでいるものであったと推測される。これが古墳時代に入るとNa<sub>2</sub>O-CaO-SiO<sub>2</sub>系ガラスやNa<sub>2</sub>O-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-CaO-SiO<sub>2</sub>系ガラスが主流を占めるようになる。ただしCoOを含んでいるK<sub>2</sub>O-Si<sub>2</sub>O系のガラスは数点であるが存在しているようである。

今後は、弥生時代後期から古墳時代への時代の変化と、ガラス玉の化学組成の変化の関連を明らかにしていきたい。

#### 参考文献

小村美代子 2003「烏帽子遺跡の土坑出土ガラス小玉 ガラス製勾玉の成分分析」『烏帽子遺跡II』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第117集）愛知県埋蔵文化財センター、53～54頁。

小村美代子 2002「八王子遺跡出土ガラス玉の成分分析」『八王子遺跡 報告編』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集）愛知県埋蔵文化財センター、197～200頁。

肥塚隆保 1995「古代珪酸塩ガラスの研究」『文化財論叢1』奈良国立文化財研究所、929～96頁。